

野田市岩名第14遺跡

—住宅宅地関連公共施設等整備促進事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—

1 9 9 4

千葉県土木部

財團法人 千葉県文化財センター

の だ し いわ な だい い せき 野田市岩名第14遺跡

—住宅宅地関連公共施設等整備促進事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—

1 9 9 4

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

本文目次

序文	
凡例	
序章	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 遺跡の位置と環境	1
第1章 調査の概要	6
第1節 層序	6
第2節 調査の方法	8
第2章 検出された遺構と遺物	11
第1節 先土器時代	11
1. 第1文化層	14
2. 第2文化層	21
3. 第3文化層	31
4. 第4文化層	38
5. 第5文化層	42
6. ブロック外出土遺物	45
第2節 繩文時代	47
1. 住居跡とその出土遺物	47
2. 土坑とその出土遺物	73
3. 炉穴とその出土遺物	97
4. 154号炉穴関連石器製作跡とその出土遺物	107
5. グリッド出土遺物	115
6. 自然遺物	143
第3節 古墳時代	149
1. 住居跡とその出土遺物	149
第4節 平安時代	160
1. 壺穴状遺構とその出土遺物	160
第5節 中世	165
1. 壺穴状遺構とその出土遺物	165
2. 土坑とその出土遺物	168

3. 溝状造構とその出土遺物	175
4. 掘立柱建物跡	179
5. その他の遺物	180
第3章 調査の成果	181
第1節 先土器時代	181
1. 岩名第14遺跡における先土器時代文化層について	(落合) 181
第2節 繩文時代	189
1. 早期の遺構	(岡田) 189
2. 岩名第14遺跡出土の条痕文系土器群	(岡田) 190
3. 154号炉穴関連石器製作跡についての一考察	(落合) 196
第3節 古墳時代	200
1. 岩名第14遺跡出土の鬼高式土器	(岡田) 200
第4節 平安時代	203
1. 壁穴状造構出土の古代末期土器	(岡田) 203

表 目 次

第1表 第1ブロック石器組成表	15
第2表 第1ブロック石器観察表	16
第3表 第2ブロック石器組成表	17
第4表 第2ブロック石器観察表	19
第5表 第3ブロック石器組成表	20
第6表 第3ブロック石器観察表	21
第7表 第4ブロック石器組成表	23
第8表 第4ブロック石器観察表	25
第9表 第5ブロック石器組成表	26
第10表 第5ブロック石器観察表	31
第11表 第6ブロック石器組成表	33
第12表 第6ブロック石器観察表	38
第13表 第7ブロック石器組成表	39
第14表 第7ブロック石器観察表	40
第15表 第8ブロック石器組成表	41
第16表 第8ブロック石器観察表	41

第17表	第9ブロック石器組成表	43
第18表	第9ブロック石器觀察表	45
第19表	ブロック外出土石器觀察表	47
第20表	001号住居跡出土石器表	50
第21表	002A号住居跡出土石器表	57
第22表	002B号住居跡出土石器表	61
第23表	002C号住居跡出土石器表	66
第24表	003号住居跡出土石器表	69
第25表	006号住居跡出土石器表	73
第26表	土坑出土石器表	96
第27表	130号炉穴出土石器表	107
第28表	石器製作跡出土石器組成表	109
第29表	石器製作跡出土石器表	114
第30表	グリッド出土石器表(1)	142
第31表	グリッド出土石器表(2)	143
第32表	岩名第14遺跡出土貝類一覧	144
第33表	124号土坑出土貝類同定結果	145
第34表	116号炉穴出土貝類同定結果	145
第35表	119号炉穴出土貝類同定結果	146
第36表	130号炉穴出土貝類同定結果	146
第37表	311号溝出土貝類同定結果	146
第38表	岩名第14遺跡出土貝類同定結果	149

挿 図 目 次

序 章

第6図 岩名第14遺跡構造配置図

第1図 遺跡位置図

第2図 岩名第14遺跡周辺地形図

第1章

第3図 土層柱状図

第4図 確認調査トレンチ配置図

第5図 グリッド分割図

第2章

第7図 先土器時代ブロック分布図

第8図 第1ブロック遺物分布図

第9図 第1ブロック出土石器

第10図 第2ブロック遺物分布図

第11図 第2ブロック出土石器

- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 第12図 第3ブロック遺物分布図 | 第45図 002B号住居跡出土石器(1) |
| 第13図 第3ブロック出土石器 | 第46図 002B号住居跡出土石器(2) |
| 第14図 第4ブロック遺物分布図 | 第47図 002C号住居跡実測図 |
| 第15図 第4ブロック出土石器 | 第48図 002C号住居跡出土土器(1) |
| 第16図 第5ブロック遺物分布図 | 第49図 002C号住居跡出土土器(2) |
| 第17図 第5ブロック出土石器(1) | 第50図 002C号住居跡出土石器 |
| 第18図 第5ブロック出土石器(2) | 第51図 003号住居跡実測図 |
| 第19図 第5ブロック出土石器(3) | 第52図 003号住居跡出土土器 |
| 第20図 第5ブロック出土石器(4) | 第53図 003号住居跡出土石器 |
| 第21図 第6ブロック遺物分布図 | 第54図 004号住居跡実測図 |
| 第22図 第6ブロック出土石器(1) | 第55図 004号住居跡出土土器 |
| 第23図 第6ブロック出土石器(2) | 第56図 006号住居跡実測図 |
| 第24図 第6ブロック出土石器(3) | 第57図 006号住居跡出土土器 |
| 第25図 第6ブロック出土石器(4) | 第58図 006号住居跡出土石器 |
| 第26図 第7ブロック遺物分布図 | 第59図 土坑実測図(1) |
| 第27図 第7ブロック出土石器 | 第60図 土坑実測図(2) |
| 第28図 第8ブロック遺物分布図 | 第61図 土坑実測図(3) |
| 第29図 第8ブロック出土石器 | 第62図 土坑実測図(4) |
| 第30図 第9ブロック遺物分布図 | 第63図 土坑実測図(5) |
| 第31図 第9ブロック出土石器 | 第64図 土坑実測図(6) |
| 第32図 ブロック外出土石器(1) | 第65図 土坑実測図(7) |
| 第33図 ブロック外出土石器(2) | 第66図 土坑出土土器(1) |
| 第34図 001号住居跡実測図 | 第67図 土坑出土土器(2) |
| 第35図 001号住居跡出土土器 | 第68図 土坑出土土器(3) |
| 第36図 001号住居跡出土石器 | 第69図 土坑出土土器(4) |
| 第37図 002号住居跡配置図・土器分布図 | 第70図 土坑出土土器(5) |
| 第38図 002A号住居跡実測図 | 第71図 土坑出土土器(6) |
| 第39図 002A号住居跡出土土器(1) | 第72図 土坑出土土器(7) |
| 第40図 002A号住居跡出土土器(2) | 第73図 土坑出土土器(8) |
| 第41図 002A号住居跡出土土器(3) | 第74図 土坑出土石器 |
| 第42図 002A号住居跡出土石器 | 第75図 炉穴実測図(1) |
| 第43図 002B号住居跡実測図 | 第76図 炉穴実測図(2) |
| 第44図 002B号住居跡出土土器 | 第77図 炉穴実測図(3) |

第78図 炉穴実測図(4)	第110図 501号住居跡出土遺物(1)
第79図 154号炉穴実測図	第111図 501号住居跡出土遺物(2)
第80図 炉穴出土土器(1)	第112図 502号住居跡・出土遺物実測図
第81図 炉穴出土土器(2)	第113図 503号住居跡実測図
第82図 130号炉穴出土石器	第114図 503号住居跡出土土器接合図
第83図 石器製作跡遺物分布図	第115図 503号住居跡出土遺物(1)
第84図 石器製作跡出土石器(1)	第116図 503号住居跡出土遺物(2)
第85図 石器製作跡出土石器(2)	第117図 503号住居跡出土遺物(3)
第86図 石器製作跡出土石器(3)	第118図 405A・B号竪穴状遺構実測図
第87図 石器製作跡出土石器(4)	第119図 405A号竪穴状遺構出土遺物(1)
第88図 グリッド出土土器(1)	第120図 405A号竪穴状遺構出土遺物(2)
第89図 グリッド出土土器(2)	第121図 405B号竪穴状遺構出土遺物
第90図 グリッド出土土器(3)	第122図 竪穴状遺構実測図(1)
第91図 グリッド出土土器(4)	第123図 竪穴状遺構実測図(2)
第92図 グリッド出土土器(5)	第124図 竪穴状遺構出土遺物
第93図 グリッド出土土器(6)	第125図 土坑実測図(1)
第94図 グリッド出土土器(7)	第126図 土坑実測図(2)
第95図 グリッド出土土器(8)	第127図 土坑実測図(3)
第96図 グリッド出土土器(9)	第128図 407号土坑出土鉄製品
第97図 グリッド出土土器(10)	第129図 410号土坑出土遺物
第98図 グリッド出土土製品	第130図 溝状遺構(A群)実測図
第99図 グリッド出土石器(1)	第131図 溝状遺構(B群)実測図
第100図 グリッド出土石器(2)	第132図 溝状遺構(C群)実測図
第101図 グリッド出土石器(3)	第133図 溝状遺構出土遺物
第102図 グリッド出土石器(4)	第134図 捨立柱建物跡実測図
第103図 グリッド出土石器(5)	第135図 その他の遺物
第104図 グリッド出土石器(6)	
第105図 グリッド出土石器(7)	第3章
第106図 遺構別マガキ殻長計測値頻度グラフ	第136図 先土器時代石器組成図(1)
第107図 ハイガイ・シオフキ殻長計測値頻度 グラフ	第137図 先土器時代石器組成図(2)
第108図 501号住居跡実測図	第138図 先土器時代石器組成図(3)
第109図 501号住居跡出土土器接合図	第139図 縄文土器分布図(1)
	第140図 縄文土器分布図(2)

第141図 繩文土器分布図(3)	第144図 石器製作過程模式図
第142図 112号土坑出土の一括資料	第145図 当遺跡出土の鬼高式土器
第143図 土坑出土条痕文土器	第146図 古代末期の土器

図 版 目 次

図版 1 航空写真	図版13 1. 130号炉穴貝層出土状況
図版 2 1. 遺跡遠景	2. 同 全景
2. 調査前近景	3. 154号炉穴全景
図版 3 1. 第6ブロック石器出土状況	図版14 1. 205号炉穴全景
2. C2-32区土層断面	2. 206号炉穴全景
3. C2-34区土層断面	3. 207号炉穴全景
図版 4 1. 第5・第8ブロック北壁土層断面	図版15 1. 209号炉穴全景
2. 第5ブロック石器出土状況	2. 210号炉穴全景
3. 第1ブロック石器出土状況	3. 211号炉穴全景
図版 5 1. 第2ブロック南壁土層断面	図版16 1. 212号炉穴全景
2. 第2ブロック石器出土状況	2. 213号炉穴全景
3. 第9ブロック石器出土状況	3. 214号炉穴全景
図版 6 1. 第3ブロック石器出土状況	図版17 1. 501号住居跡カマド
2. 標準土層(C4-31区)	2. 501号住居跡全景
3. 先土器調査風景	3. 502号住居跡全景
図版 7 1. 001号住居跡全景	図版18 1. 503号住居跡遺物出土状況
2. 002号住居跡調査風景	2. 同 貯藏穴内遺物出土状況
3. 002・003号住居跡近景	3. 503号住居跡全景
図版 8 1. 004号住居跡全景	図版19 1. 405A号竪穴状遺構遺物出土状況
2. 006号住居跡全景	2. 405A・B号竪穴状遺構全景
3. C2-34・44区付近石器出土状況	図版20 1. 401号竪穴状遺構全景
図版 9 土坑検出状況(1)	2. 402号竪穴状遺構全景
図版10 土坑検出状況(2)	3. 403号竪穴状遺構全景
図版11 土坑検出状況(3)	図版21 1. 404号竪穴状遺構全景
図版12 1. 116号炉穴遺物出土状況	2. 406号土坑馬骨出土状況
2. 119号炉穴・118号土坑	3. 409号土坑全景
3. 119号炉穴全景	図版22 1. 411号・412号土坑全景

	2. 413号土坑馬齒出土状況	図版34 1. 112号土坑出土土器(3)
	3. 413号土坑全景	2. 124号土坑出土土器(1)
図版23	1. 148号・149号土坑全景	3. 124号土坑出土土器(2)
	2. 311号溝遺物出土状況	4. 116号炉穴出土土器
	3. 挖立柱建物跡と310号溝	図版35 1. グリッド出土土器(1)
図版24	1. 第1ブロック出土石器	2. グリッド出土土器(2)
	2. 第2ブロック出土石器	図版36 1. グリッド出土土器(3)
	3. 第3ブロック出土石器	2. グリッド出土土器(4)
	4. 第4ブロック出土石器	図版37 1. グリッド出土土器(5)
図版25	第5ブロック出土石器	2. グリッド出土土器(6)
図版26	第6ブロック出土石器	図版38 1. グリッド出土土器(7)
図版27	1. 第7ブロック出土石器	2. グリッド出土土器(8)
	2. 第8ブロック出土石器	図版39 1. グリッド出土土器(9)
	3. 第9ブロック出土石器	2. グリッド出土土器(10)
	4. ブロック外出土石器	図版40 1. グリッド出土土器(11)
図版28	1. 001号住居跡出土土器	2. グリッド出土土器(12)
	2. 002A号住居跡出土土器(1)	図版41 1. グリッド出土土器(13)
図版29	1. 002A号住居跡出土土器(2)	2. グリッド出土土器(14)
	2. 002A号住居跡出土土器(3)	図版42 繩文時代遺構出土石器
図版30	1. 002A号住居跡出土土器(4)	図版43 石器製作跡出土石器
	2. 002B号住居跡出土土器	図版44 繩文時代グリッド出土石器(1)
図版31	1. 002C号住居跡出土土器(1)	図版45 繩文時代グリッド出土石器(2)
	2. 002C号住居跡出土土器(2)	図版46 繩文時代グリッド出土石器(3)
図版32	1. 003号住居跡出土土器(1)	図版47 古墳時代住居跡出土土器(1)
	2. 003号住居跡出土土器(2)	図版48 古墳時代住居跡出土土器(2)
	3. 006号住居跡出土土器	図版49 古墳時代住居跡出土土器(3)
図版33	1. 004号住居跡出土土器	図版50 405A号竪穴状遺構出土土器(1)
	2. 112号土坑出土土器(1)	図版51 1. 405A号竪穴状遺構出土土器(2)
	3. 112号土坑出土土器(2)	2. 405B号竪穴状遺構出土土器

序 文

千葉県の西北部に位置する野田市は、東、西、南の三方をそれぞれ利根川、江戸川、利根運河に抱かれて、古くからその水運を利用した産業や商業などの発展にはめざましいものがありました。現在では東京近郊のベッドタウンとしての役割も果たし、産業、自然、交通などのバランスのとれた地域となっております。

近年、ますます首都圏の住宅需要が伸び続け、ここに報告いたします岩名地区においても、住宅地としての整備が図られつつあります。そこで、これに伴う関連事業として、産生川を改修し、新たに住宅地からの排水路と排水機場を建設することが、建設省と千葉県土木部により計画されました。

千葉県教育委員会では、事業地内における埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県土木部都市河川課と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講じることで、協議が整いました。

発掘調査は、千葉県教育委員会の指導のもとに、財團法人千葉県文化財センターが実施することになり、平成4年7月1日から11月30日まで行い、その後整理作業を平成5年4月1日から12月まで実施してまいりました。

調査の結果、縄文時代早期の竪穴住居跡、炉穴などをはじめ、先土器時代の石器群、古墳時代後期の竪穴住居跡とともに、多くの土器、石器などが検出されました。これらは、この地域における当時の生活や環境を知るうえで、貴重な資料となるものです。

このたび、それらの調査成果をまとめて、報告書として刊行することになりました。本書が学術資料としてはもとより、多くの方々が郷土の歴史に対する理解を深める資料として、広く活用されることを願っております。

最後に、発掘調査から本書の刊行にいたるまで、いろいろご指導をいただいた千葉県教育庁生涯学習部文化課をはじめ、千葉県土木部東葛飾事務所野田支所都市河川課、野田市教育委員会、地元関係諸機関のご協力に厚くお礼を申し上げるとともに、調査に協力された調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成6年3月

財團法人 千葉県文化財センター
理事長 奥山 浩

凡　　例

1. 本書は、千葉県土木部により計画された住宅宅地関連公共施設等整備促進事業地内に所在する岩名第14遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本事業は、住宅宅地関連整備促進事業における排水路、及び排水機場の建設に伴う事前調査として、千葉県土木部の委託を受けた財団法人千葉県文化財センターが、千葉県教育委員会の指導のもとに実施したものである。
3. 本書に収載された岩名第14遺跡は、野田市岩名地先273-1他に所在する。調査に使用した遺跡コードは、208-001である。
4. 発掘調査（平成4年7月1日～平成4年11月30日）は、調査部長 天野努、部長補佐 佐久間豊、班長 田坂浩の指導のもとに主任技師 岡田光広が担当した。
5. 整理作業（平成5年4月1日～平成5年12月28日）は、調査研究部長 高木博彦、印西調査事務所長 田坂浩の指導のもとに主任技師 岡田光広が担当したが、先土器時代と縄文時代石器実測等については技師 落合章雄の協力を得た。
6. 本書の執筆は、第1章第1節と先土器時代・縄文時代の石器類を落合が担当し、それ以外の執筆及び編集は岡田が行った。
7. 第1図は、国土地理院発行の2万5千分の1「野田市」を使用した。
8. 図版1に使用した航空写真は、京葉測量株式会社の撮影によるものである。
9. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、千葉県土木部都市河川課、同東葛飾土木事務所野田支所、野田市教育委員会の諸機関、関係諸氏から多くのご指導、助言を得ることができた。

序 章

第1節 調査に至る経緯

建設省と千葉県土木部都市河川課は、住宅宅地関連公共施設等整備促進事業として、野田市岩名地先に排水機場と排水路の建設を計画した。これに伴い、平成4年4月14日付で事業地内における埋蔵文化財の有無、及びその取扱いについての照会が千葉県教育委員会に提出された。これに対し、千葉県教育委員会は現地踏査を行ったところ、遺跡の所在が確認されたために、平成4年5月12日付で千葉県土木部（東葛飾土木事務所長）宛に発掘調査の必要ありの回答を出した。統いて両者の間で慎重な協議が重ねられた結果、事業地内に所在する埋蔵文化財については、やむをえず記録保存の措置が取られることになり、発掘調査機関として財団法人千葉県文化財センターが指定を受けた。これに基づき、千葉県土木部と財団法人千葉県文化財センターは、委託契約を締結し、平成4年7月1日から発掘調査を実施することになった。

第2節 調査の経過

野田市岩名第14遺跡の発掘調査は、対象面積6,800m²のうち、上層680m²の確認調査から実施した。その結果、対象地内のほぼ全域に遺構・遺物を検出したため、下層の確認調査は上層本調査の終了後に行うこととした。

上層の確認調査の結果、調査区の北側では縄文時代早期を主体とする遺物包含層や、竪穴住居跡等の存在が認められ、縄文時代の遺構・遺物の分布はさらに北側調査区外に広がるものと予測された。調査区の最南端では、古墳時代の竪穴住居跡3軒を検出した。本遺跡の所在する台地の最南端には岩名洞窟の名で知られる岩名古墳が所在することから、古墳時代集落は縄文時代集落とは反対側の、南側調査区外に展開するものと予測された。

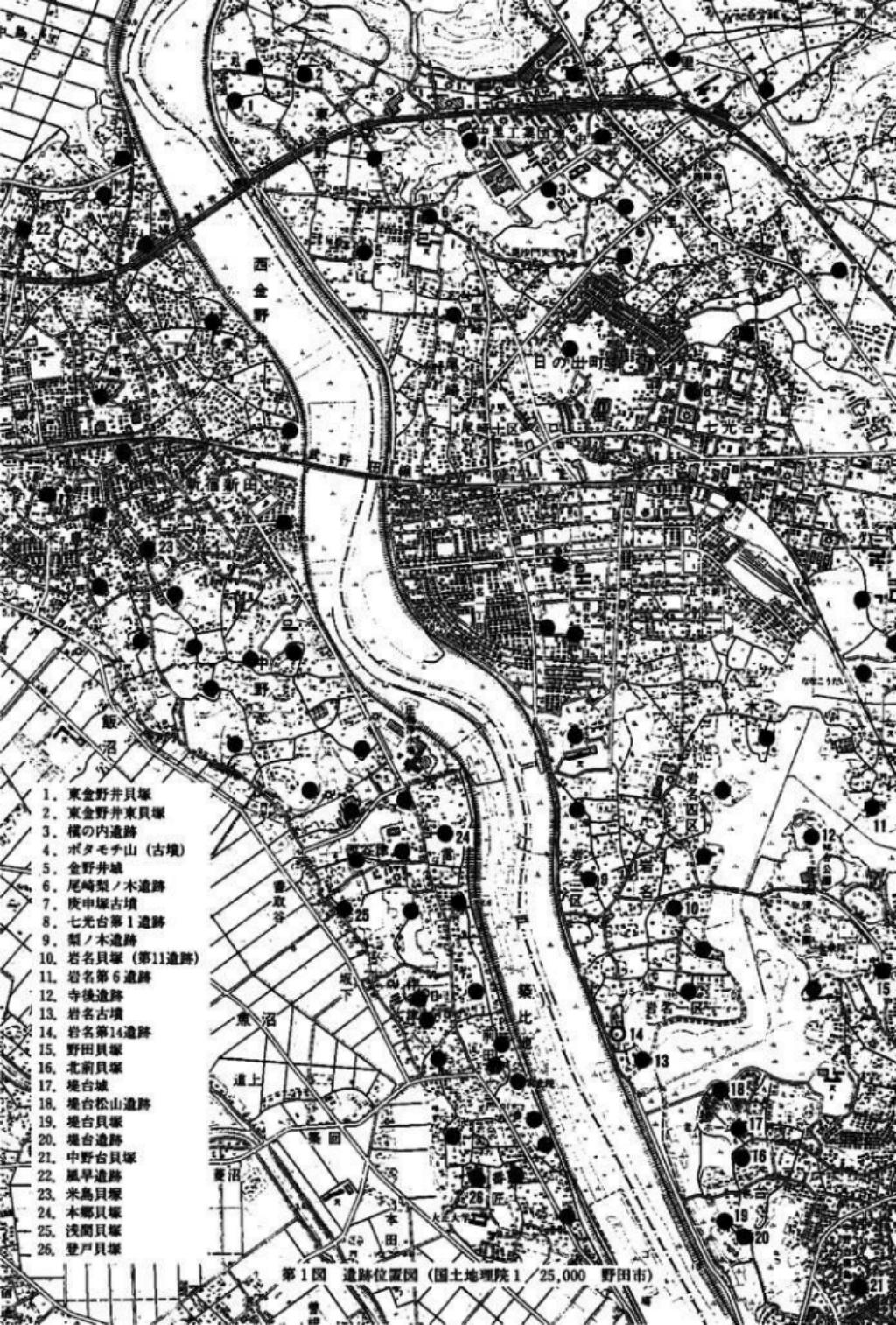
統いて、本調査は酷暑の中、7月中旬から開始した。北側で検出された遺構から順に調査し、終了したところから遺構の再確認を兼ねて、包含層調査を併せて実施した。調査は、地点を南に移しながら進めたが、上層の本調査が全て終了したのは、調査期間の終わりが近い11月中旬であった。この間、下層の確認調査及び、本調査についても、上層本調査の終了した部分から併行して実施しており、IV層からVI層を主体に先土器時代の石器群を検出することができた。

以上のような経過を辿り、全ての調査は11月30日をもって終了した。本調査の面積は、上層5,000m²、下層304m²である。

第3節 岩名第14遺跡の位置と環境（第1図、第2図）

岩名第14遺跡は野田市岩名地先273-1他に所在する。

千葉県の西北部に位置する野田市は、北に接する関宿町との境を除いて、三方を利根川、江



1. 東金野井貝塚
2. 東金野井東貝塚
3. 横の内道跡
4. ポタモチ山 (古墳)
5. 金野井城
6. 尾崎梨ノ木道跡
7. 废申塚古墳
8. 七光台第1道跡
9. 梶ノ木道跡
10. 岩名貝塚 (第11道跡)
11. 岩名第6道跡
12. 寺後道跡
13. 岩名古墳
14. 岩名第14道跡
15. 野田貝塚
16. 北前貝塚
17. 堤台城
18. 堤台松山道跡
19. 堤台貝塚
20. 堤台道跡
21. 中野古貝塚
22. 風早道跡
23. 米島貝塚
24. 本郷貝塚
25. 浅間貝塚
26. 登戸貝塚

第1図 道跡位置図(国土地理院1/25,000 野田市)



第2図 岩名第14通路周辺地形図

戸川、利根運河などの河川に囲まれている。現在の江戸川は、江戸幕府による利根川東遷事業により、野田市付近の下総台地を一部開削しており、人為的な流路の変更があったことはよく知られているところである。この利根川東遷事業前の江戸川の流路は、現在も地図上にみられる中川低地上の古利根川であり、さらに繩文海進以前は大宮台地の西側に面する荒川低地上を流れて東京湾に注いでいたものと考えられている。(注1)このため、当遺跡の主体時期となる先土器時代並びに繩文時代早期と、古墳時代以降とではそれ同一の環境下にあったとはいえないかもしれないが、いずれにしても当遺跡は、江戸川(旧利根川)本流に近い支谷に面した位置に存在する。

岩名第14遺跡付近を流れる現在の江戸川は、まさしく江戸時代に開削されたもので、後の水防事業により築かれた堤防にも接しているため、遺跡の西側の旧地形は、地図上からは判読しがたくなっている。周辺の地形を概観すると、当遺跡は現在の埼玉県北葛飾郡松伏町金杉付近から北上して、東武鉄道野田線の七光台駅付近に至る比較的大きな支谷に面している。さらにこの支谷は複雑に台地を開析している。当遺跡西側の江戸川堤防との間にわずかに残る谷は、江戸川の対岸に位置する松伏町前田の栄光院付近まで延びていると考えられることから、当遺跡の存在する台地は、前述の支谷に向かって南側に突出した半島状のものであるとの判断がなされる。

岩名古墳は、この半島状台地の先端に位置し、通称的には岩名洞窟の名で呼ばれている。石室が古くから開口しており、岩穴のようであったことから、それが岩名の地名の由来であるという話も聞いている。さらに、周辺には遺跡名の番号数からもわかるように、数多くの遺跡が存在している。岩名第14遺跡をはじめ、岩名遺跡群として繩文早期から後期に至る包蔵地、及び貝塚も多い。また、古墳時代の土師器の散布がみられる遺跡も多い。

当遺跡の北800mに、繩文時代早期から後期にいたる土器を包蔵する岩名貝塚がある。岩名貝塚の支谷を挟んだ対岸は清水公園であるが、ここには繩文時代後期を主体とする馬蹄形貝塚である野田貝塚が存在する。そこから南に少し下り、繩文時代前期の竪穴住居跡が検出された北前貝塚と、平安時代の土師器の散布がみられる堤台松山遺跡が存在する。堤台松山遺跡は、当遺跡とは支谷を挟んで対岸の位置にあり、当遺跡で唯一検出された平安時代遺構との関連を考える上で重要である。当遺跡の北東300mほどの位置には、広い範囲で繩文土器、土師器の散布がみられる岩名第13遺跡が存在する。岩名遺跡群については、まだ未調査の遺跡が多く残されており、今後調査の機会が増えれば、この付近の歴史的・自然的環境が明らかにされていくものと思われる。

次に視野を広げて、中川低地上に面する台地上にある遺跡を金野井付近から順にみていくことにする。国道16号線の、埼玉県との境となる金野井大橋付近には、東金野井貝塚が存在する。当貝塚は繩文時代前期から晩期に至る土器の散布がみられる馬蹄形貝塚である。学史的にも古

くから知られた貝塚であるが、最近では平成5年10月に当千葉県文化財センターによって、確認調査が実施されている。東金野井貝塚から東に少し入ると、縄文前期の集落で、貝層も認められた楕の内遺跡がある。また、埼玉県側では庄和町に、いずれも縄文前期を主体時期とするものであるが、風早遺跡、米島貝塚が著名な遺跡として存在する。

古墳時代以降では、概して県北の関宿町、野田市域では古墳時代前期に属するものの方が多く知られ、関宿町では飯塚貝塚、野田市では三ツ堀遺跡、堤台遺跡、桜台遺跡などから堅穴住居跡等が検出されている。古墳時代後期になると、江戸川をさらに下った地域で遺跡数が増加する傾向がみられ、流山市の上貝塚遺跡群、三輪野山遺跡群、加地区遺跡群などがある。特に三輪野山第II遺跡では、鬼高峰期を主体として奈良時代にかけての堅穴住居跡が50軒以上検出され、注目できる。これらの資料は、奈良時代以降のものも多く検出された加地区遺跡群と比較・検討を行うことで、この地域にこれまで比較的希薄であった7世紀中葉から奈良時代にかけての集落・土器の基礎資料として、重要な価値を持つものと期待される。

最後に、岩名第14遺跡の所在する台地について、環境をもう少し詳しく記すことにしたい。前述したように、当遺跡は半島状に突出する平坦な台地上に位置するものである。調査前の現状は、畠地及び荒れ地であった。調査区の東側は谷部との比高差約5mを測り、斜面はかなり急である。調査区の南側で、岩名古墳との間の区域は現在鬱蒼とした草木が生い茂り、足を踏み入れられないような状況であるが、土地の人の話によれば、明治時代の頃まで寺が存在していたという。調査区から岩名古墳へ、台地東側の縁沿いに通る小道の脇には、かつては人の手で育てられた草木等がみられ、わずかに当時を偲ばせるものがある。

以上述べてきたように、岩名遺跡群には多くの遺跡が存在するが、未調査のものの方が多く、現段階ではそれぞれを有機的に結びつけることはできない。岩名第14遺跡の調査が、これら遺跡群の性格の一部を明らかにし、今後のこの地域における歴史的諸様相を明らかにするための一助となれば幸いである。

(注1) 菊池謙男「先史時代の利根川水系とその変遷」『アーバンクボタ19(特集利根川)』
久保田鉄工株式会社 1981

参考文献

- (財) 千葉県文化財センター 『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)－東葛飾・印旛地区－』 1985
(財) 千葉県文化財センター 『房総考古学ライブラリー5 古墳時代(1)』 1990
(財) 千葉県文化財センター 『房総考古学ライブラリー6 古墳時代(2)』 1992
文化庁 『全国遺跡地図 埼玉県』 1977

第1章 調査の概要

第1節 層序(第3図)

岩名第14遺跡の所在する台地は、利根川、江戸川(旧利根川)、利根運河に囲まれた低位段丘であり、標高は14m前後を測る。このため、下総台地のなかでも火山灰の供給源に近い地域ではあるが、ローム層の堆積は決して良好とはいえない。

下総台地における立川ローム層の分層は、武藏野台地の立川ローム層に対比し、現在のものに至っている。しかし、ローム層を形成する要因となる火山灰の供給源から距離をおくため、相模野台地はもとより、武藏野台地のような良好な堆積状況ではなく、また、同じ下総台地のなかでも地域によりその差は大きい。よって現時点では、ある程度立川ローム層の分層が確立してはいるが、いまだに武藏野台地との比較や、下総台地のなかでの遠隔地域相互の対比には検討を要する点が多い。特に、鍵層となるATバミスを含む層から上部の層序区分、そして第2黒色帯についてはまさにそのとおりである。

先述したように、火山灰の供給源から離れる下総台地では、火山灰の堆積が薄いため、ATバミスを含む層より上部では、Ⅲ層とされる堆積した火山灰がソフト化した層、いわば自然の擾乱層により、分層がひじょうに困難である。ソフトローム層の厚さは武藏野台地と比較しても大きな差はなく、ソフトローム層が以下の層に及ぼす影響の度合いはほとんど変わらないことがわかる。よって、ソフトローム層中に第1黒色帯および第2黒色帯の上部に位置する層を取り込まれているといえる。そのためか、下総台地では、IV層より上部の、異なる文化層に属する複数のブロックが同一平面上に位置していた場合、垂直分布をみた限りでは、土層柱状図のソフトローム層中に、すべてその分布が集中してしまうことになる。このため、石材が全く異なるなどの大きな違いがない限り、ナイフ形石器、槍先形尖頭器、細石刃が共伴しているように受け取られてしまう危険性が多分にある。

第2黒色帯とされるVII層からIX層にかけては、通常VII層と呼ばれる橙褐色の間層により、上部と下部に分層が可能である。また第2黒色帯であるIX層中にさらに間層が確認され、第2黒色帯下部をIXa, IXb, IXcの3層に分層するという統一見解がなされつつあるが、岩名第14遺跡のように低位段丘に所在する遺跡では、直視的観察により第2黒色帯下部を3層に分層することは不可能に近い。このことは火山灰の供給源に近く、火山灰の堆積の厚い武藏野台地でも同様である。そこで、直視的な土層観察を行う以上に土層中の鉱物分析、また検出例の増加している資料の対比により、さらに検討する必要がある。

ひとまずこれらの問題は検討課題とし、岩名第14遺跡の層序区分、および各層について説明したい。

第3図の土層柱状図は、岩名第14遺跡調査範囲の中では、最も堆積状況の良好な土層柱状図



第3図 土層柱状図

である。各層の特徴を次に記す。

III 層：ソフトローム層，膨軟化が著しく，クラックの最深部はVII層にまで達する。

V 層：第1黒色帯に相当する。ソフトローム層のクラックの間に部分的に観察できる。黒色スコリア，赤色スコリアを含み堅致である。直視的観察では黒みを帯びるため分層したが，下位の層よりも色調が暗い程度であり，第2黒色帯のような明確な暗さはない。

VI 層：明るい黄褐色を呈する。この層全体にATバミスが拡散して混入しているが，土層面精査時の感触は明瞭でなく，むしろある程度乾燥した状態で観察するほうが判断しやすい。

VII 層：第2黒色帯上部に相当する。色調は明確な黒色でなく，VI層から徐々に暗さを増す程度であり，黒色帯というよりはむしろ漸移層的な感がある。直径1mmほどの黒色スコリア，赤色スコリアが微量に混在する。

IX 層：第2黒色帯下部に相当する。岩名第14遺跡ではVII層が確認できず，また，IX層も分層不可能である。VII層より暗さを増し，3mmほどの黒色スコリア，赤色スコリアを多く含み堅致である。

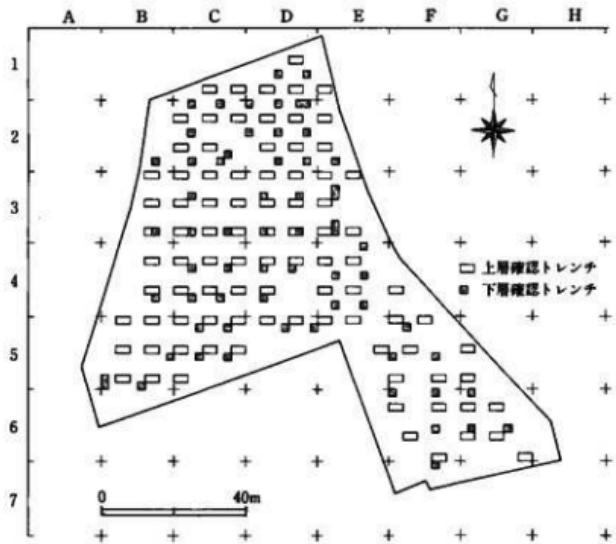
X 層：黄褐色土層。スコリアの量が極端に少なくなり，スコリアの大きさも1mmほどと小さくなる。堅致ではあるが，上部の第2黒色帯よりやや劣る感がある。

第2節 調査の方法（第4図，第5図）

発掘調査は，調査対象区域にあった用地測量中心杭を基準にして，公共座標から20×20mの大グリッドを設定して実施した。大グリッドの呼称は西からA，B，C……，北から1，2，3……とし，大グリッド内をさらに25分割して4×4mの小グリッドを設定した。小グリッドの呼称は第5図に示すとおりである。

確認調査は，調査対象面積の10%にあたる680m²を発掘した。確認調査の結果，調査区北部からは縄文時代早期の条痕文系土器片を主体に，同時期あるいは縄文時代前期の竪穴住居跡をはじめとして，炉穴，土坑，中世以降の溝状遺構，竪穴状遺構等を検出した。また，調査区南部からは古墳時代後期の竪穴住居跡，平安時代末期の竪穴状遺構，中世以降の土坑群，溝状遺構等を検出した。調査は引き続き本調査に移行するが，本調査面積は，確認調査対象地域の7割強にあたる5,000m²である。なお，下層の確認調査については，上層における遺構・遺物の分布が密度的に濃淡はあるものの，ほぼ全域に及んでいるため，上層本調査の終了後に実施している。下層確認調査は，2×2mの発掘区を設定し，立川ローム第2黒色帯下部まで人力で掘り下げた。

本調査は，重機により表土を除去した後，遺構確認面を精査し，輪郭が明らかになった遺構から順次着手した。この際，遺構に伴わずに検出された土器片等については，小グリッド毎に



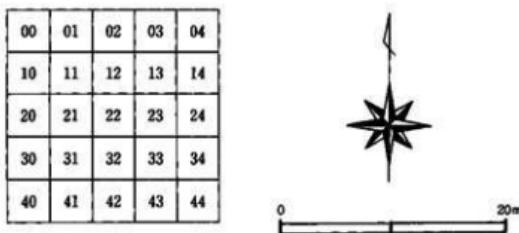
第4図 確認調査トレンチ配置図

取り上げた。石器等でまとまりのあるものは、遺物点の実測を行い取り上げた。

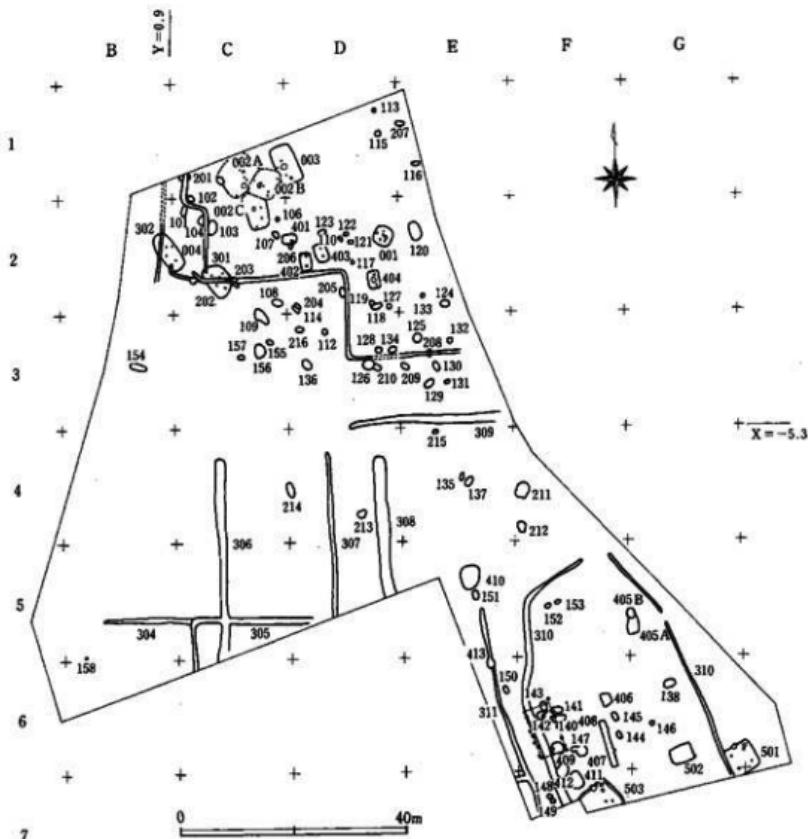
遺構の調査は、落ち込みを確認した時点で、遺物の出土位置を実測しながら掘り下げた。特に、落ち込みと多量の土器片等がみられたものの、壁の立ち上がりや床面等がそれほど明瞭でなかった縄文時代早期の竪穴群（002号・003号付近）では、この遺物分布図が、後にその遺構範囲を確定する貴重な手がかりとなった。

また、遺構番号は、遺構確認時点での性格毎に00番台を縄文時代竪穴住居跡、100番台を縄文時代土坑、200番台を炉穴、300番台を溝状遺構、400番台を中世以降の土坑ないし竪穴状遺構、500番台を古墳時代竪穴住居跡とした。しかし、表面に焼土がみられず縄文時代土坑として調査を開始したものの、貝層の下部から焼土を検出したものもあって、必ずしも性格通りの遺構番号が付けられたわけではない。これらは、報告書記載の際には各遺構の性格毎に分類したが、遺構番号は原則として調査時のものをそのまま使用している。

土坑、あるいは炉穴中から検出された貝層の調査は、まず、平面的な範囲を把握した後、まとまりのあるものについてはコラムサンプルを採取するため、貝層の断面をみながら掘り進めた。コラムサンプルの一単位の容量は $30 \times 30 \times 5\text{ cm}$ である。また、あまりまとまりのみられない貝層については、認められた貝層のすべてを持ち帰ることにした。



第5図 グリッド分割図



第6図 岩名第14遺跡遺構配置図

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 先土器時代

岩名第14遺跡の調査では、合計9地点の先土器時代石器集中地点を検出することができた。これらは単独で存在するもののほかに、同一石材を使用していると思われるものなど、ブロック相互にまとまりをみいだせるものも含まれ、VII層からIV層にかけて5つの文化層に分かれることが判明した。

ここでは検出した9ブロックのうち、時期の最も古いVII層に属するブロックを第1ブロックとし、それを基準にそれぞれの文化層に属するブロックについて便宜的に番号付けを行い、事實記載を書き加えたい。

各文化層に属するブロック、および層序は次のとおりである。

第1文化層 (VII層)

第1ブロック (D2グリッド), 第2ブロック (E3グリッド), 第3ブロック (D5グリッド)

第2文化層 (VI~VII層)

第4ブロック (B6グリッド), 第5ブロック (D2グリッド)

第3文化層 (V層)

第6ブロック (C2グリッド)

第4文化層 (IV層下部)

第7ブロック (D1・D2グリッド), 第8ブロック (E2グリッド)

第5文化層 (IV層上部)

第9ブロック (E3グリッド)

各ブロックの分布状況は、半島状の台地を横切るような調査区の北側に集中している。他に調査区南側に第4ブロック、東側に第2、第9、第3ブロックが集中区とは間隔をおいて位置するが、地形図に各ブロックの分布を投影すると、集中区とほぼ同じ等高線上にあることがわかる。

各ブロックを構成する石器の石材は多様であり、同一名の石材についても石質の異なるものがみ受けられる。以下に各ブロックを構成する石材の特徴を記述するが、これは科学的な分析によるものではなく、肉眼での観察のみによるものであることを付記しておく。

また、異なる文化層に属するブロックで、石材に同一名のものが使われているが、これは同一母岩であることを意味するのではなく、肉眼による石材の同定では石質の違いを明確にすることが困難なため、やむを得ず同一名の石材としたものである。

チャート：色調は青灰色もしくは灰白色であり、灰白色のものは青い節理が縦横に混在して見える。岩名第14遺跡の石材のなかでは数量的には少ない。

頁 岩 A：色調はこげ茶色を呈し、原石面は黄土色である。原石面に近い部位は表面に近くなるにつれて色調が薄くなり、断面は縞模様となる。剥離面表面のきめは細かいが光沢はない。質感よりも持った感じが重く感じられる。

頁 岩 B：色調は黄土色を呈し、原石面はやや赤みがかかる。頁岩Aと同様に原石面に近い部位の断面は縞模様となる。剥離面表面のきめは細かく、ごくまれに夾雜物が混在している。

珪質頁岩A：色調は乳白色で部分的に青灰色の節理がみられる。原石面もほぼ同様の色調である。原石面には無数の小さな孔があり、骨の断面を思わせる。剥離面は光沢があり、きめが細かい。夾雜物はほとんど含まない。

珪質頁岩B：色調は乳白色で、珪質頁岩Aのように青灰色の節理はみられない。岩名第14遺跡で出土した石器の石材では点数的に極めて少ない。微細な夾雜物を無数に含む。

黒曜石 A：色調は黒色であるが、透明度が高い。原石面付近はやや白色を帯びる。原石面の様子は無数の微細なひびがみられる。ごくまれに直径1mmほどの球形の夾雜物を含む。岩名第14遺跡第1文化層に属するブロックから出土する石材である。

黒曜石 B：色調は黒色を呈し、部分的に縞状に赤茶色を帯びる。北海道を原産とするいわゆる十勝石に酷似する。ごくまれに1mmほどの夾雜物を含む。剥離面はなめらかで光沢があり、原石面は無数の微細なひびがみられる。

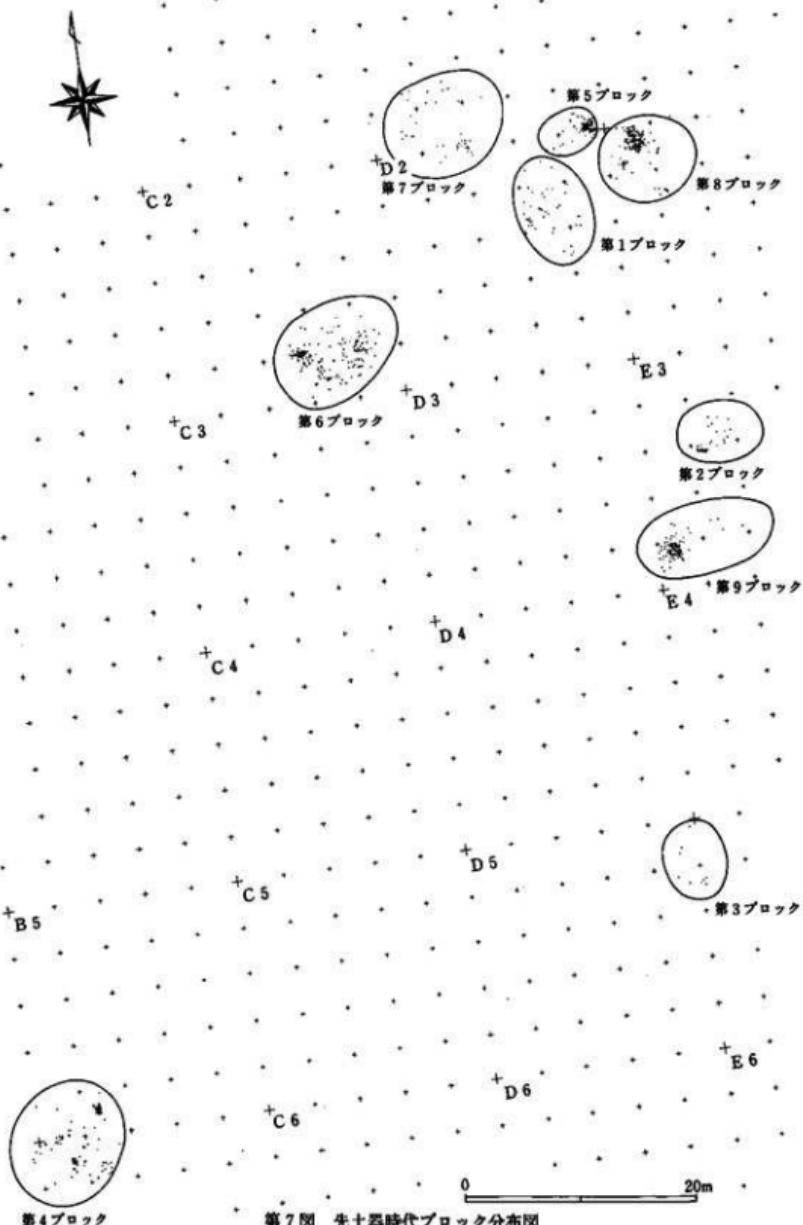
凝灰岩：色調は青灰色を呈する。水和層が発達し、水洗の際に器表面が溶けるほどである。きめは細かく、夾雜物はほとんど含まないが、光沢はない。

安山岩：下総台地先土器時代ブロックからは普遍的に出土する石質であるが、岩名第14遺跡では点数的に少ない。色調は、剥離面および原石面は黄土色を呈し、欠損面は黒色を呈する。水和層が発達しているためか、きめは細かいが剥離面には光沢がない。質感に反し持った感じが重い。

チャート礫：岩名第14遺跡で出土するチャート礫は、ほとんどが被熱しており、被熱により分解したためか、いずれも小破片であり、原石のままの形状を留めるものは少ない。色調は被熱しているため赤茶色を呈するが、おそらく青灰色で青い節理が縦横に混入するものと思われる。

砂岩礫：石材を構成する粒子は細かく、粒子の大きさも均一である。色調は大半が被熱しているため、原石面は赤みを帯びる。

安山岩礫：被熱しているものが多く、色調は赤みを帯びるもの、灰色を呈するもの、黒みがかった灰色を呈するものなどさまざまである。粒子が細かく均一なものも含ま



第7図 先土器時代ブロック分布図

れるが、大半は白色の斑点状の夾雜物を含む。

石英斑岩礫：ほとんどが被熱し、原石面は赤茶色を呈する。原石面のきめは細かく、被熱しても光沢を失わない。混入する石英粒の大きさ、量に差があるが、それを除く他の特徴は同じである。

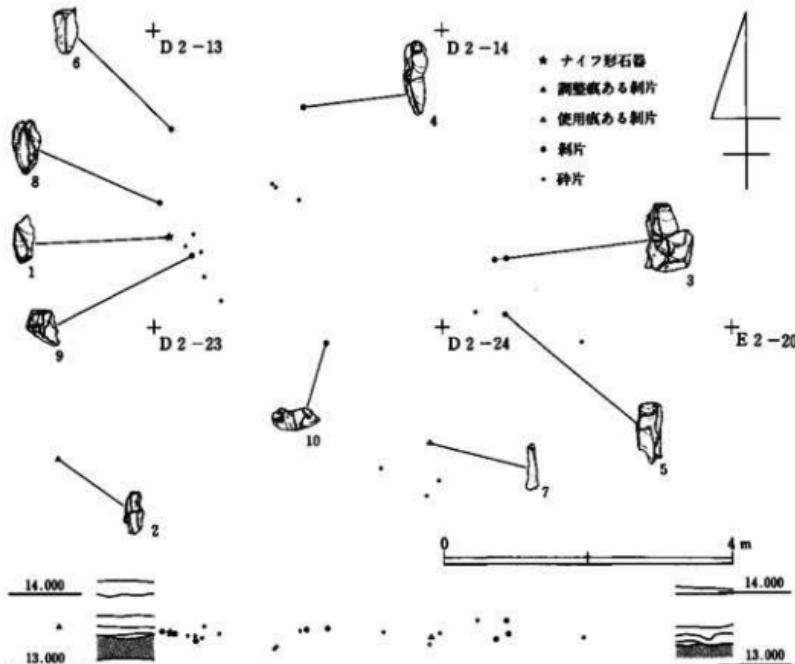
1. 第1文化層

第2黒色帶上部に属する文化層で、3か所のブロックを検出した。この3ブロックはそれぞれ平面的に空間をおき所在するが、ほぼ14mの等高線に沿うような分布をみる。

各ブロックから出土した定型的な石器はナイフ形石器があげられ、他に調整痕の認められる剝片、使用痕の認められる剝片が出土しているが、定型的な石器はナイフ形石器のみである。石器の石材は、透明度の高い黒曜石が大半を占め、その他には頁岩が若干混在する程度である。

第1ブロック（第8図、図版4-3）

長径6m、短径4mの橢円形状に石器が分布する。石器分布の密度は薄く、分布範囲の大きさに比較すると、散漫な分布状況である。



第8図 第1ブロック遺物分布図

石器が出土している層はVII層からIX層にかけてであるが、垂直分布より察すると、VII層に所属するブロックであることがわかる。

定型的な石器としてはナイフ形石器があげられるが、他の機種は含まれず、調整痕の認められる剝片、使用痕の認められる剝片がみられる他は、すべて剝片、碎片である。石器の表面にみられる剝片剝離時の剝離痕は、ほぼ同一方向から打撃を加えられているため、単一、あるいは同一方向に打面を設定し、剝片剝離を行う、いわゆる石刀技法に基づく素材剝片の作出が行われていたことがわかる。

使用される石材は、透明度の高い黒曜石が大半を占め、他には若干の頁岩等を含む。

第1表 第1ブロック石器組成表

石種	ナイフ形石器	尖頭器	石錐	板器	削器	ビット エスター	R- フレイク	U- フレイク	石井	剝片	碎片	鉢片	石核	敲石	磨片	計
黒曜石B	1						1	1		7	16					26
計	1						1	1		7	16					100
	3.8						3.8	3.8		27.0	61.6					100%

出土遺物（第9図、第1表、第2表、図版24-1）

1は、単一打面から連続的に作出された剝片の、打面付近から片側縁に調整が施されたナイフ形石器である。石器の基部に残る原石面から、素材剝片が作出された母岩の大きさはこぶし大ほどと考えられる。器厚は薄く、調整の施されない側縁部の断面はシャープである。

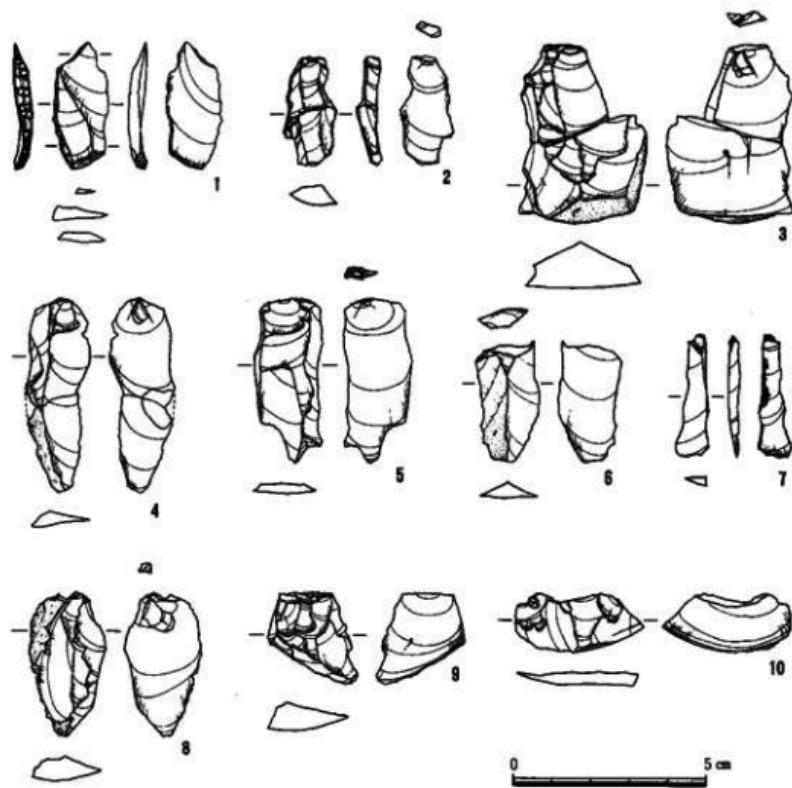
2は、剝片の片側縁に微細な調整が施された剝片である。剝片の形状、調整の状況から考えると、定型的な剝片を作出する目的ではなく、調整を施す部位を刃部として活用する、削器的な石器であるといえる。表面に残る剝片剝離時の剝離痕は、ほぼ同一方向からの剝離であるが、側縁部にみられる剝離痕に、一部剝離方向の異なるものもみられる。剝片剝離工程の初期の段階に作出された剝片、あるいは打面整形が行われた直後に作出された剝片であることがわかる。

3の剝片の末端部には原石面がみられ、また表面の剝離痕は、新しいものは同一打面から打撃が加えられているが、古い段階のものは打点の方向が別である。剝片の器厚も第1ブロックから出土している他の剝片に比べると厚いため、剝片剝離工程の初期の段階に、石核整形を目的として作出された剝片であることがわかる。

4～6は、単一打面から連続的に作出された剝片で、定型的な石器の素材剝片と考えられる。1のナイフ形石器と同様の、石器の素材剝片となり得る剝片である。

7は、剝片を同一打面から連続的に作出する際に弾けたもので、偶発的にできたものである。裏面には側縁を作用部位とした結果の使用痕がみられる。

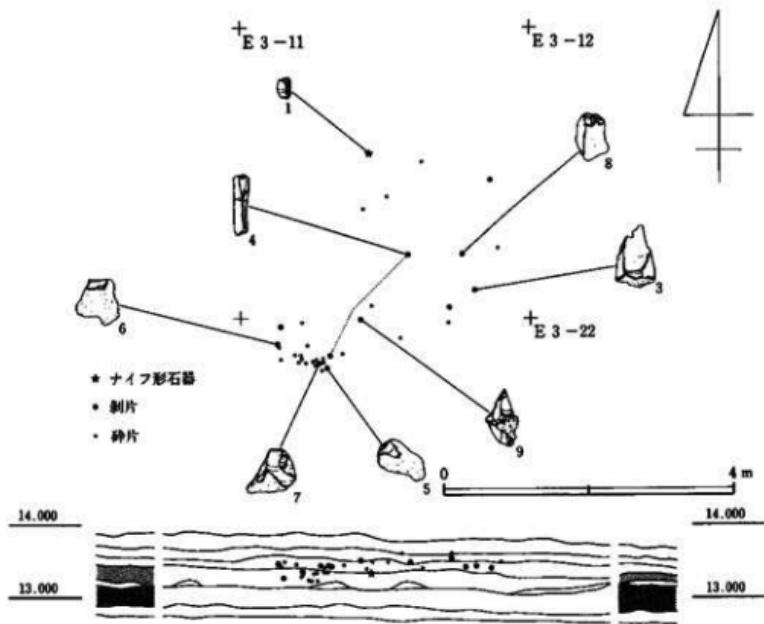
8～10は、石核整形を目的として作出された剝片である。10は、剝片末端部がヒンジフラクチュアぎみになり、表面の剝離痕の剝離方向も一定でないため、打面再生剝片とも考えられる。



第9図 第1ブロック出土石器

第2表 第1ブロック石器観察表

序 番 号	遺物番号	種 類	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
9図1	D2-13, 22	ナイフ形石器	黑曜石 B	3.3	1.48	0.35	1.77	原石面残る。片側縁に調節。
2	D2-22, 9	調節板ある剝片	黑曜石 B	2.84	1.5	0.6	2.05	両側縁に調節。
3	D2-14, 5	剝 片	黑曜石 B	5.4	3.18	1.17	13.01	原石面残る。
	D2-14, 6							
4	D2-13, 18	剝 片	黑曜石 B	4.7	2.6	0.37	2.47	原石面残る。
5	D2-14, 7	剝 片	黑曜石 B	4.2	1.85	0.4	2.39	
6	D2-13, 20	剝 片	黑曜石 B	3.1	1.5	0.5	2.15	打面側欠損。
7	D2-23, 7	使用板ある剝片	黑曜石 B	3.1	0.85	0.3	0.47	片側縁に使用板。
8	D2-13, 21	剝 片	黑曜石 B	3.65	2.0	0.8	3.71	原石面残る。
9	D2-13, 28	剝 片	黑曜石 B	2.4	2.25	0.7	2.70	
10	D2-23, 5	剝 片	黑曜石 B	1.6	3.35	0.37	1.80	打面側欠損。



第10図 第2ブロック遺物分布図

第2ブロック（第10図、図版5-1, 2）

長径4mの楕円形状に石器が分布する。分布密度は散漫であるが、ブロック南側には分布の中でも密度の高い箇所がみられる。

石器が出土する層は、垂直分布をみる限りではVII層の上部にあたるが、第1ブロックと同様VII層に属すると考えられる。また、平面分布で密度の高い南側の一群は、若干垂直分布で沈む感がある。

出土した石器は、小型のナイフ形石器1点が定型的な石器としてあげられる他は、調整痕の認められる刮片、および刮片、碎片である。石器の石材は透明度の高い黒曜石で占められる。

第3表 第2ブロック石器組成表

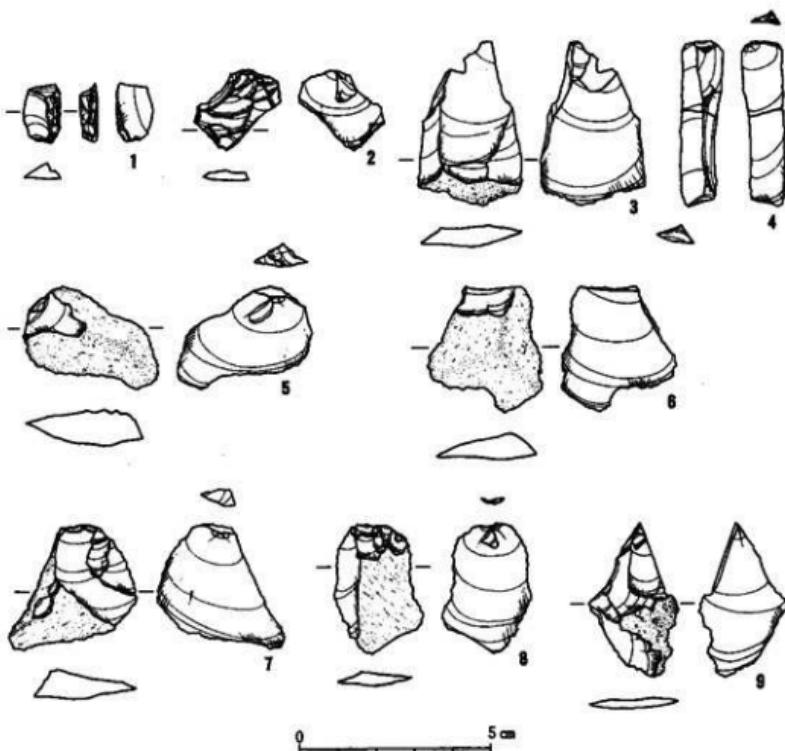
石 材	ナイフ 形石器	尖端器	石 鋸	刮 片	■	ビヌス エスキュー	R- フレイク	U- フレイク	石 破	刮 片	碎 片	石 横	顎 石	縫 片	計
黒曜石B	1						1			10	28				40
															100
計	1						1			10	28				40
	2.5						2.5			25.0	70.0				100%

出土遺物（第11図、第3表、第4表、図版24-2）

1は、不定形の小型の剥片を素材としたナイフ形石器である。素材剥片の打面側に調整を加えて製品としている。

2は、不定形の剥片の打面部、および末端部に微細な調整が加えられている。表面にみられる剥離は一定方向からのものであるが、細かい剥離が多く、石核整形時の剥片かあるいは打面再生時の剥片のいずれかであろう。

3～9は、黒曜石製の剥片である。3および4を観察するかぎりでは、縦長の素材剥片を作出することを目的としたと思われる。5から9は原石面を多く残しているため、縦長剥片の作出の意図を明確に表すことはできないが、剥片剥離工程の初期の段階に作出された剥片であるため、石核整形剥片と考えられる。



第11図 第2ブロック出土石器

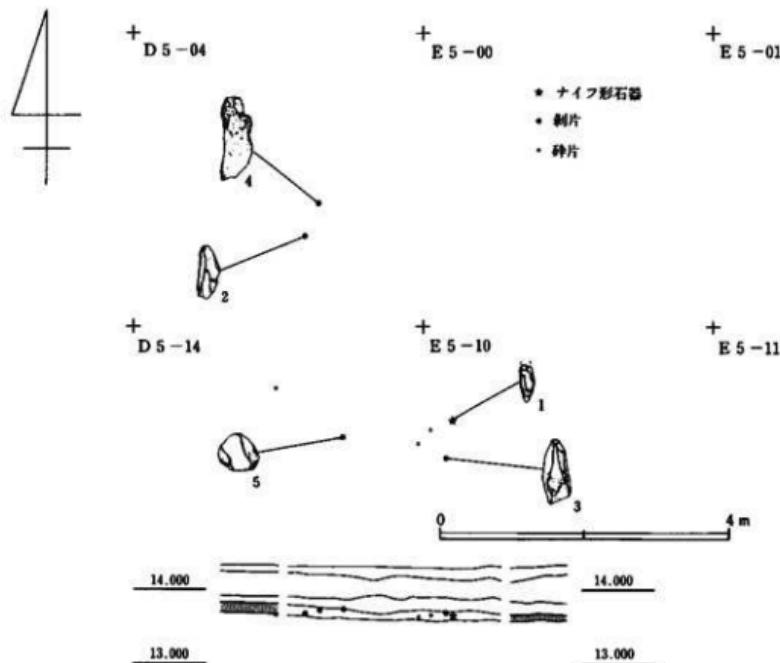
第4表 第2ブロック石器観察表

特徴 番号	遺物番号	形 番	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
11回1	E3-11, 3	ナイフ形石器	黒曜石 B	1.46	1.02	0.48	0.64	片側縁に凹面。
2	E3-11, 1	調整痕ある剣片	黒曜石 B	1.8	2.4	0.53	1.58	打面、末端部に調整痕。
3	E3-11, 9	剣 片	黒曜石 B	4.2	2.8	0.66	5.40	原石面残る。
4	E3-21, 11	剣 片	黒曜石 B	4.2	1.1	0.55	1.43	
	E3-11, 10							
5	E3-21, 8	剣 片	黒曜石 B	3.46	2.8	0.91	5.72	原石面残る。
6	E3-21, 4	剣 片	黒曜石 B	3.15	3.1	0.7	4.87	打面側欠損。原石面残る。
7	E3-21, 7	剣 片	黒曜石 B	3.04	3.4	1.04	6.34	原石面残る。
8	E3-11, 6	剣 片	黒曜石 B	3.3	2.4	0.4	2.12	原石面残る。
9	E3-11, 11	剣 片	黒曜石 B	4.0	2.3	0.4	1.76	原石面残る。

第3ブロック (第12図、図版6-1)

直径4mの範囲に石器が分布する。分布というよりも点在すると表現したほうが妥当かもしれない。

ブロックの所属する層序はVII層であり、第1、第2ブロックと同様である。各石器の高低差はほとんどみられず、極めて出土層が限定される。



第12図 第3ブロック遺物分布図

第5表 第3ブロック石器組成表

石種 石片	ナイフ 形石器	尖頭器	石錐	刮削器	磨耗器	ピース ススキール	U- フレイク	石斧削片	剝片	碎片	石核	砾石	擦片	計
黒曜石B	1								3	3	1			7
														87.5
頁岩A									1					1
														12.5
計	1 12.5								4 50.0	3 37.5				8 100%

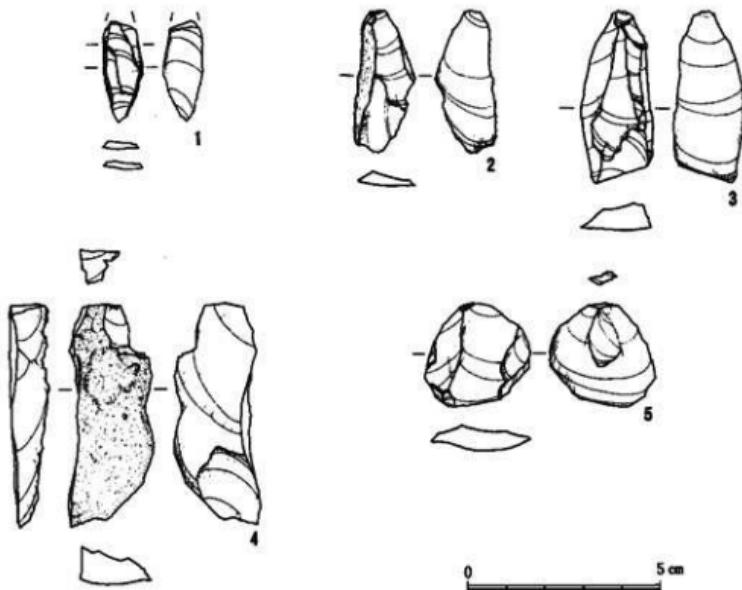
定型的な石器はナイフ形石器1点がみられ、他は剝片、碎片である。石器の石材は第1ブロック、第2ブロック同様黒曜石が大半を占め、頁岩製の剝片が1点混在するのみである。

剝片剝離技術は縦長剝片の作出を目的とした、单一あるいは同一方向に打面を設定し、連続的に剝片を作出する技術であるといえ、この点では第1、第2ブロックと全く同様である。

出土遺物（第13図、第5表、第6表、図版24-3）

1は、同一打面から連続的に作出された縦長剝片の打面側を除去し、片側縁に微細な調整を施したナイフ形石器である。先端部が欠損しているが、剝片の末端部が製品の先端部にあたる。黒曜石製である。

2、3は、单一あるいは同一方向から連続的に作出された剝片である。2の剝片の表面には



第13図 第3ブロック出土石器

原石面がみられ、また打面の方向が異なる剝離面がみられる事から、剝片剝離工程の比較的初期の段階に作出された剝片であろう。3の表面にみられる剝離痕はほとんどが同一方向であるが、部分的に打面の位置が180°異なる剝離痕もみられる。両者とも定型的な石器の素材となり得る剝片である。

4は、頁岩製の剝片で、表面のほとんどは原石面で占められている。第3ブロックにおいて、この頁岩製の剝片の剝片剝離の痕跡は認められず、剝片単体の搬入と考えられる。

5は、黒曜石製の剝片である。剝片の形状、表面にみられる剝離の方向、また主要剝離面の末端部がヒンジフラクチャとなるため、打面再生剝片の可能性が強い。

第6表 第3ブロック石器観察表

標 記 番 号	遺物番号	器種	石質	計測値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
13回1	E5-10. 3	ナイフ形石器	黒曜石 B	2.6	1.05	0.2	0.54	先端部欠。周側縁に調理。
2	D5-04. 6	剝 片	黒曜石 B	3.65	1.7	0.38	0.47	原石面残る。
3	E5-10. 4	剝 片	黒曜石 B	4.34	1.9	0.69	4.96	
4	D5-04. 5	剝 片	頁岩 A	5.6	2.3	1.0	13.23	原石面残る。
5	D5-14. 2	剝 片	黒曜石 B	2.63	2.8	0.63	4.20	

2. 第2文化層

第2黑色帯より上部、ATバミスを含むVI層に属する文化層であり、岩名第14遺跡では第4、第5ブロックの2か所がこの文化層に属する。

両ブロックから出土した定型的な石器はナイフ形石器があげられるが、その他には示準となるような定型的な石器はみられない。ブロックを構成する石器の石材は両ブロックとも異なり、また剝片剝離技術も異なる。よって出土層位の点からは両ブロックとも同じと考えられるが、ブロックが形成された時期、あるいはブロックを形成する要因である集団の違いが指摘される。

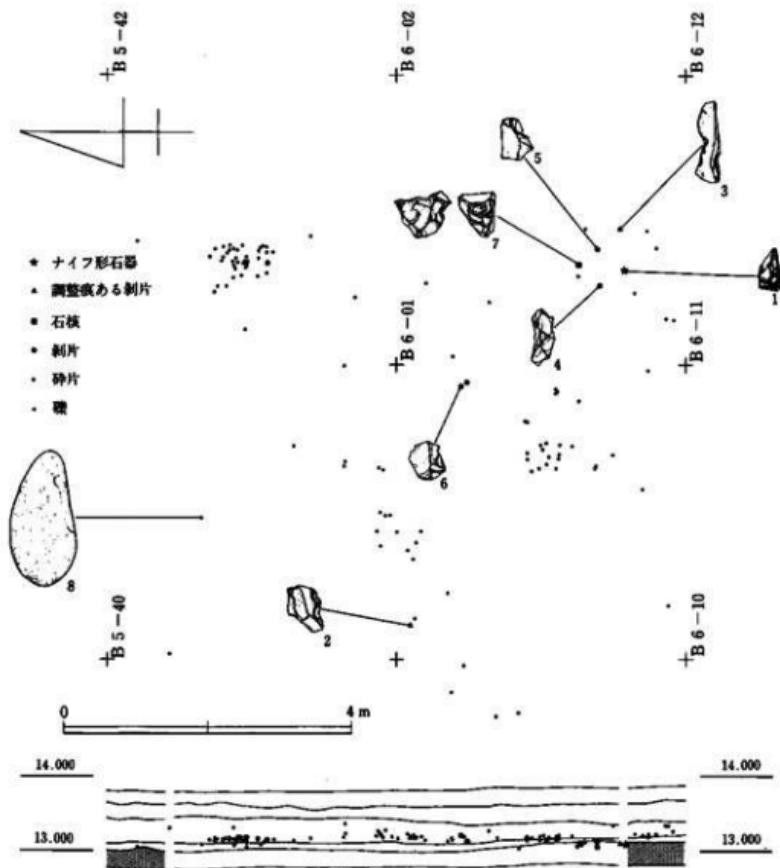
第4ブロック（第14回）

調査区の南側に位置し、その他のブロックが、調査区の北側に集中する傾向があるのに対し、第4ブロックだけが隔たりをみせている。

石器の出土する層序はVI層であり、垂直分布は地形の傾斜に沿うように北から南に向かって緩やかに標高が下がっている感がある。

遺物の分布状況は、直径9mの円形状の範囲に取まり、その範囲の中でも部分的に小範囲の分布が認められる。

第4ブロックを構成する石器の機種は、ナイフ形石器、削器が定型的な石器としてあげられ、その他には剝片、碎片、石核などが含まれている。また礫群を伴う。礫群はそのほとんどが被磨し、そのためか破片となるものが大半を占める。原形を留める礫も少なからず含まれるが、



第14図 第4ブロック遺物分布図

大きなものでもこぶし大である。

石器の石材は、定型的な石器は頁岩であるが、ブロックを構成する石器の石材のほとんどは珪質頁岩であり、この珪質頁岩に関しては、剥片、碎片、石核がみられることから、第4ブロック内でこの石材の母岩を活用した、剥片削離作業が行われていたことが明らかである。

出土遺物（第15図、第7表、第8表、図版24-4）

1は、頁岩製のナイフ形石器である。部厚な剥片を素材とし、調整はその片側縁にのみ施されている。剥片作出時の形状をほぼそのまま留めている。表面にみられる剥離痕は多方向からであり、特に素材剥片の形状を統一させようとする意図は感じられない。また、剥片削離時の

打面を残し、打面付近には剝片剝離作業時の頭部調整痕が顕著にみられる。

2は珪質頁岩製、3は頁岩製の削器である。2は剝片の片側縁に粗い刃部作出の調整を施し製品としている。表面には原石面が残り、また同一方向からの剝片剝離時の剝離痕がみられる。これらの剝離痕は、裏面の主要剝離面と180°方向が異なるため、同一方向から連続的に剝片を作出した後に打面を換え、作出された剝片を素材としていることがわかる。3は表面に原石面を残し、両側縁の末端部付近に刃部作出の調整を施すものである。剝片剝離工程の比較的初期の段階に作出された剝片を素材としている。

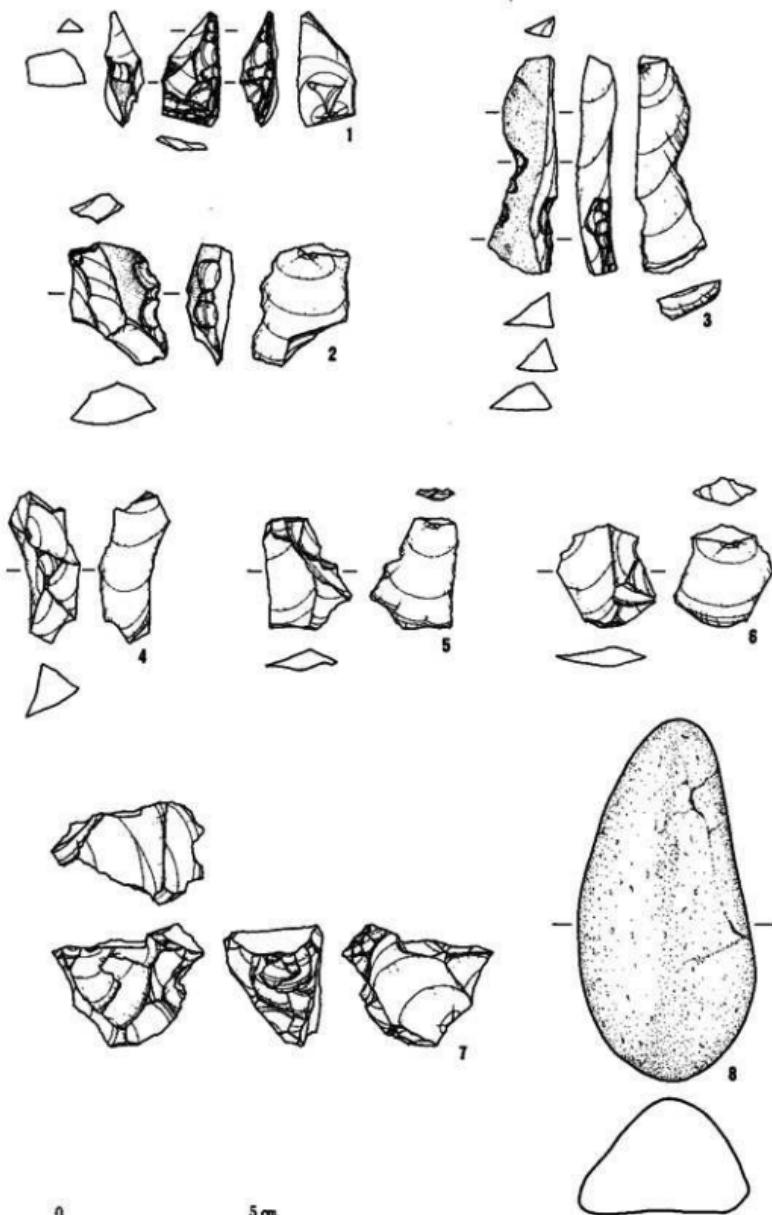
4～6は珪質頁岩製の剝片である。4の剝片の断面形状は正三角形を呈し、表面の稜から剝片が作出された痕跡が認められる。おそらく石核の稜を除去するための石核整形剝片であろう。5、6の剝片の表面にみられる剝離痕の方向は一定ではなく、剝片剝離作業の際に頻繁に打面を転移していたことが窺われる。

7は珪質頁岩製の石核である。上面が最終打面となるが、裏面にみられる剝離痕の打面の方向は45°方向が異なるため、剝片剝離作業のなかで幾度か打面の位置を変え、剝片を作出していったことがわかる。第4ブロックで出土している珪質頁岩製の石器はすべて同一母岩であり、この石核が珪質頁岩の剝片剝離工程の最終段階のものといえる。

8は、安山岩製の砾である。被熱しており表面は赤色を呈する。敲打痕等は特にみられない。

第7表 第4ブロック石器組成表

石種	ナイフ 形石器	尖頭器	石 核	刮 削 器	研 磨 器	ビエス エスキーズ	R- フレイク	U- フレイク	石 斧	削 片	剝 片	石 核	破 石	砾 片	計
黑曜石B										1	2				3
															2.6
頁岩A										1	1				2
															1.7
珪質頁岩A						1				3	5	1			10
															8.6
珪質頁岩B	1					1					1				3
															2.6
チャート														37	37
															31.9
砂岩														24	24
															20.7
安山岩														34	34
															29.3
実成器														2	2
															1.7
闇灰岩														1	1
															0.9
計	1					2				5	9	1		96	116
	0.9					1.7				4.3	7.7	0.9		84.5	100%



第15図 第4ブロック出土石器

第4表 第4ブロック石器調査表

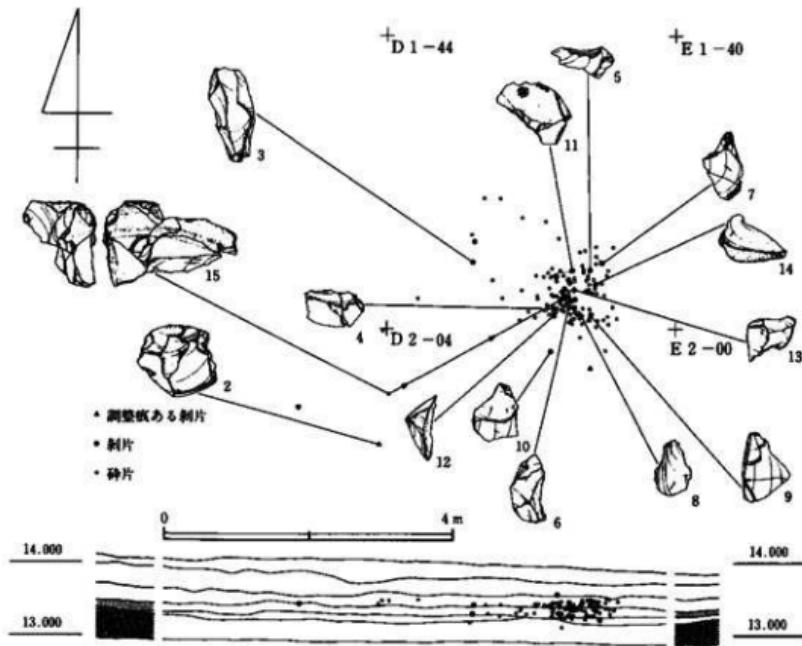
序 番 号	遺物番号	種 類	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(㌘)	
15個1	B6-01, 12	ナイフ形石器	珪質頁岩B	3.0	1.55	0.90	3.64	原石面丸る。片側縁に調整。
2	B6-00, 2	調整痕ある剝片	珪質頁岩A	3.15	2.4	1.13	7.67	原石面丸る。片側縁に調整。
3	B6-01, 13	調整痕ある剝片	珪質頁岩B	5.65	2.1	0.91	8.06	原石面丸る。両側縁に調整。
4	B6-01, 19	剝 片	珪質頁岩A	3.8	2.0	1.0	5.05	
5	B6-01, 9	剝 片	珪質頁岩A	2.83	2.35	0.58	3.19	
6	B6-00, 29	剝 片	珪質頁岩A	2.6	2.6	0.51	3.02	
7	B6-01, 7	石 核	珪質頁岩A	3.1	3.88	2.47	20.91	
8	B5-40, 4	礫	安山岩	9.25	4.6	2.92	141.04	被熱。

第5ブロック (第16図、図版4-2)

長径4mの橢円形状に石器が分布する。ブロック東側に2mほどの範囲で特に分布密度の濃い箇所がみられる。

石器の出土する層位はVI層からVII層に及ぶが、垂直分布をみると限りでは、特にVI層に集中する傾向がみられ、VI層に所属するブロックであることがわかる。

出土した石器のうち、定型的な石器はナイフ形石器1点のみである。他には剝片、碎片ではなく石器組成が占められ、調整痕、あるいは使用痕の認められる剝片など数点出土するのみである。



第16図 第5ブロック遺物分布図

る。剥片類には折断されるものがみられ、素材剥片の形を整えるためにさらに折断により加工していることが窺われる。また、接合資料が確認されているが、石核と断定できるものはなく、剥片剥離により作出した大型の剥片からさらに剥片の作出を行う、剥片利用石核がみられる。後の石器の事実記載でも述べるが、この点が第5ブロックの石器製作技術としてあげができる。

石器の石材は黒曜石で占められ、使用される黒曜石は黒色で、部分的に茶色の縞模様がみられるものである。北海道で採集できる十勝石に酷似するが、むろん第5ブロックを形成する石器の石材の原産地が北海道である可能性は無きに等しい。

第9表 第5ブロック石器組成表

石材	ナイフ形石器	尖頭器	石錐	刮削器	剝離器	ビスマスエスキュー	R-フレイク	U-フレイク	石井	削片	剥片	砂片	石核	巣石	磨片	計
黒曜石 A	---	---	---	---	---	---	---	---	---	23	90	---	---	---	---	113
																89.7
黒曜石 B	1	---	---	---	---	1	---	---	4	7	---	---	---	---	13	10.3
計	1	---	---	---	---	1	---	---	27	97	---	---	---	---	126	100%
	0.8	---	---	---	---	0.8	---	---	21.4	77.0	---	---	---	---	---	---

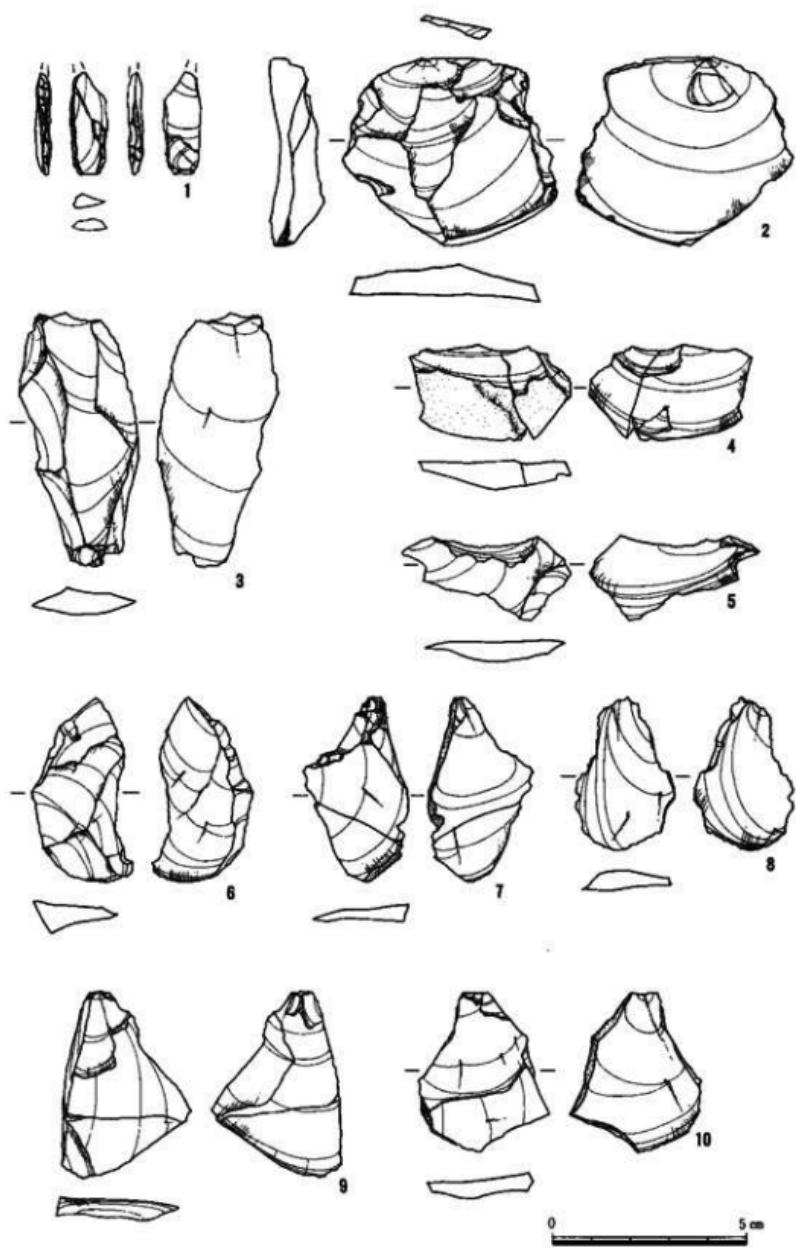
出土遺物（第17図～第20図、第9表、第10表、図版25）

1は、黒曜石製のナイフ形石器である。第5ブロックで出土した剥片の形状と比較すると小型であるが、素材剥片を折断し、剥片の側縁あるいは末端部の部分を素材としたためと思われる。調整は折断面である片側の全側縁、及びもう一方の側縁の一部に施され、調整の方向は表面、裏面の両側から行われている。先端部が一部欠損する。

2は、大型の剥片の末端部を作用部とした、使用痕の認められる剥片である。表面にみられる剥離痕は同一方向からのものであり、同一の打面から連続的に剥ぎ取られた剥片の一つであることがわかる。3は、黒曜石製の剥片である。表面の左側縁にみられる剥離痕はこの剥片の打面の位置と90°異なり、またこの剥離痕が比較的新しいため、打面を転移した後の最初の剥片であることが窺える。2、3の剥片は上記のように、明確な剥片剥離工程がつかめ、かつ石質も第5ブロックの大半を占める十勝石とは異なり、透明度の高い黒曜石であるため、剥片単体の搬入品である可能性が強い。

4～10は、石器の素材となり得る剥片である。これらの中には7、9のように剥片を折断し、素材剥片をさらに石器の完成時の形状に近づけようとするものがみ受けられる。剥片の厚みは概して薄いが、明確な打面はなく、表面にみられる剥片剥離時の剥離痕も1回の剥離が多く、主要剥離面との見分けが困難なものが多い。これは先述したとおり大型の剥片を石核に転用し、それより剥片を作出したためである。このことは11の剥片利用石核で確認することができる。

12～14は、剥片利用石核となりうる剥片である。大きさは石器の素材となる剥片とさほど変

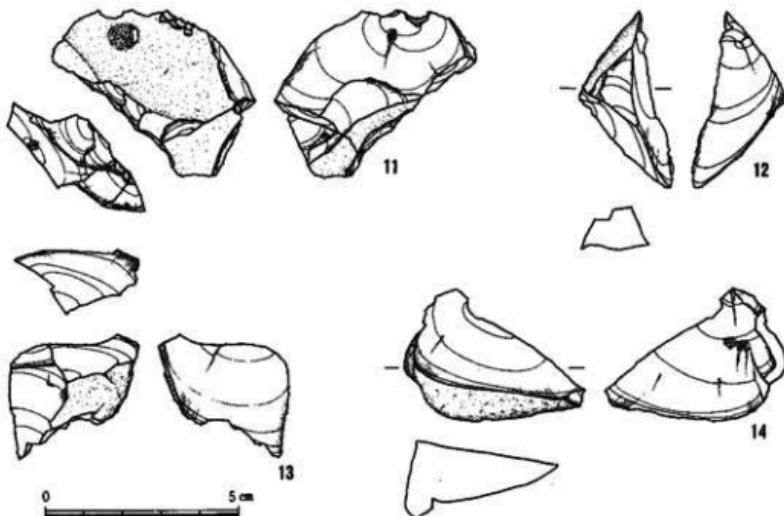


第17図 第5ブロック出土石器(1)

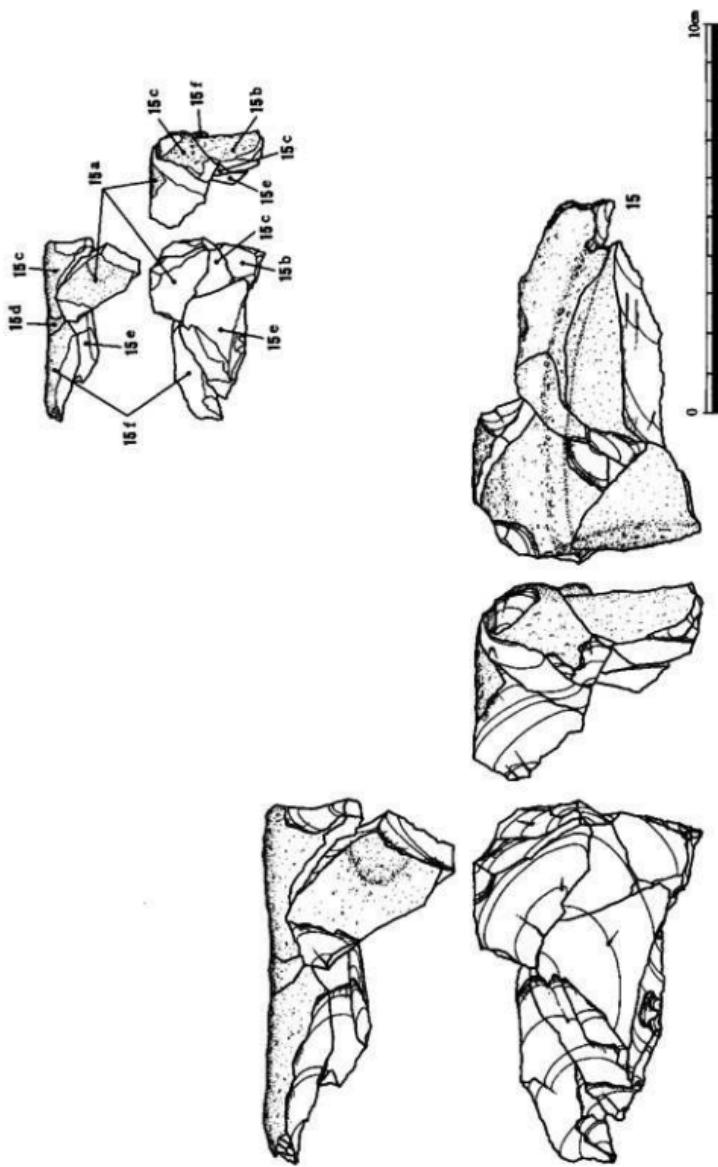
わらないが厚みがあり、特に13は剥片の打面部付近に剥離を施し、剥片を作出した痕跡がみられる。剥片を作出するための打面の設定を行ったとも考えられるが、第5ブロックで出土している剥片をみると、明確な打面がなく、よって剥片剥離工程のなかで打面を設定し剥片剥離を行っている形跡がみられないため、前者のほうが可能性が強いといえる。

15は、黒曜石製の接合資料である。先ほどから第5ブロックにおける剥片剥離技術について触れているが、このことは、この接合資料でさらに明確なものとなろう。

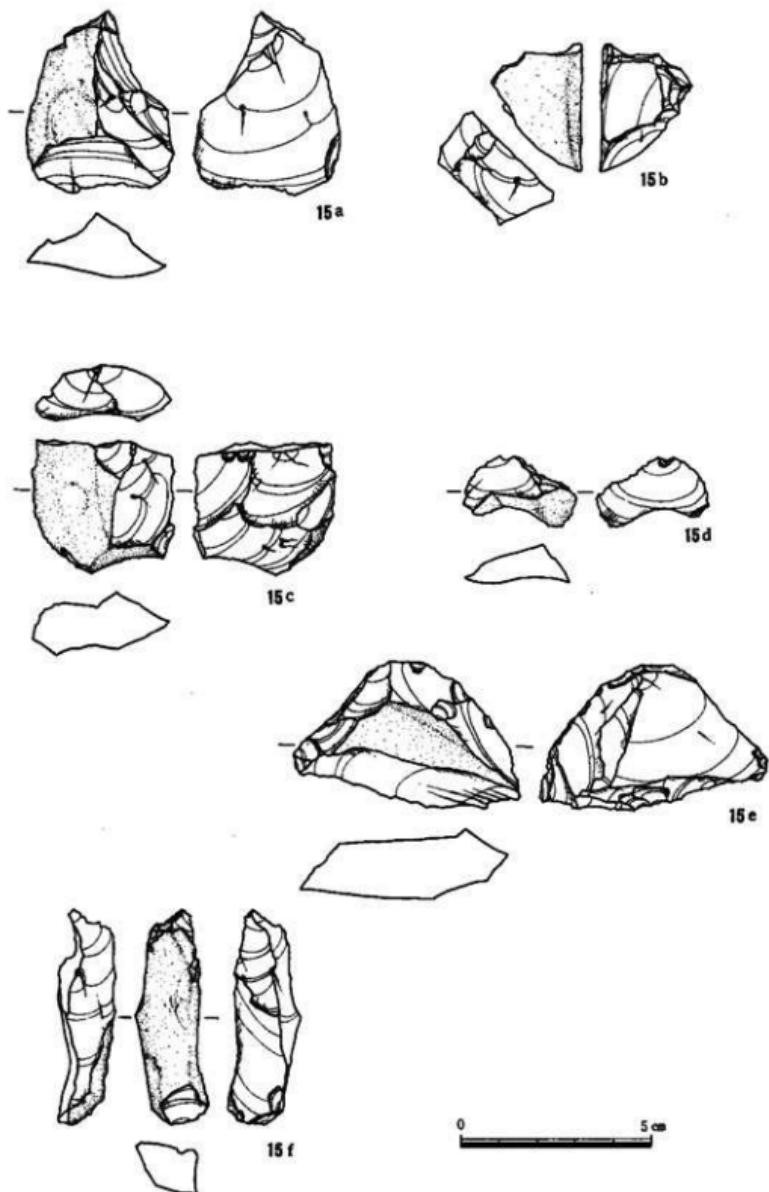
この接合資料は、まず原石面に打撃を加え、大型の剥片を作出することに始まり、次にこの2つの大型の剥片それぞれについて剥片の作出を行っている。剥片利用石核より剥片を作出する際も、bは剥片利用石核の主要剥離面を、dは主要剥離面及び原石面から剥片を作出している。この間、剥片作出のための打面再生、打面調整は全く行われていない。また、cの剥片利用石核からさらに、eの剥片利用石核を作出し、これより剥片を作出している形跡もみられる。上記のことから第5ブロックにおける剥片剥離技術は、母岩から剥片利用石核を得ることで始まり、この工程を繰り返しながら石器の素材剥片を作出している、いわば明確な石核を持たず、剥片そのものが石核になり得るものといえる。



第18図 第5ブロック出土石器(2)



第19図 第5ブロック出土石器(3)



第20図 第5ブロック出土石器(4)

第10表 第5ブロック石器観察表

標 本 番 号	遺 物 番 号	種 類	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
17回1	D2-03, 8	ナイフ形石器	黒 増 石 B	2.66	1.0	0.4	1.21	原石面残る。片側面に調整。
2	D2-03, 10	圓錐状ある剝片	黒 增 石 B	4.9	5.6	0.82	21.66	原石面残る。片側面に調整。
3	D1-44, 36	剝 片	黒 增 石 B	6.6	2.9	1.15	15.86	原石面残る。両側面に調整。
4	D1-44, 62	剝 片	黒 增 石 A	4.2	2.5	0.82	7.55	
5	D1-44, 48	剝 片	黒 增 石 A	2.1	4.45	0.59	3.51	
6	D1-44, 51	剝 片	黒 增 石 A	3.8	4.04	0.8	6.81	
7	D1-44, 93	剝 片	黒 增 石 A	4.76	2.8	0.64	1.41	
	D1-44, 44							
8	D1-44, 40	剝 片	黒 增 石 A	2.1	4.45	0.59	3.51	
9	D1-44, 8	剝 片	黒 增 石 A	4.8	3.45	0.65	14.26	
10	D2-04, 7	剝 片	黒 增 石 A	4.1	3.4	0.7	7.28	
18回11	D1-44, 74	剝片利用石板	黒 增 石 A	4.3	5.24	1.75	27.47	
	D1-44, 88							
12	D1-44, 106	剝 片	黒 增 石 A	3.6	3.45	2.0	10.93	
13	D1-44, 28	剝 片	黒 增 石 A	2.8	3.56	1.52	9.88	
14	D1-44, 39	剝 片	黒 增 石 A	3.8	4.4	2.32	21.52	
19回15	総 合 剝 片		黒 增 石 A					
20回a	D1-44, 56	剝 片		3.9	4.7	2.2	29.31	原石面残る。
b	D1-44, 99	剝 片		2.6	3.3	1.63	14.25	原石面残る。
c	D1-44, 20	剝 片		3.4	3.85	1.91	27.19	原石面残る。
d	D2-04, 6	剝 片		1.9	3.0	0.94	2.87	原石面残る。
e	D1-44, 19	剝片利用石板		4.0	5.9	1.92	36.18	原石面残る。
f	D1-44, 21	剝 片		5.5	2.06	1.54	13.75	原石面残る。

3. 第3文化層

岩名第14遺跡の調査で検出した第3文化層に属するブロックは、第6ブロックの1地点のみである。

第3文化層は第1黒色帶のV層に属する文化層である。定型的な石器はナイフ形石器があげられ、他にこの文化層の示準石器ともいえる角錐状石器が出土している。また疊群を伴う。

石器の石材は頁岩が使用されるが、疊群については安山岩、チャート、石英斑岩が使用されている。

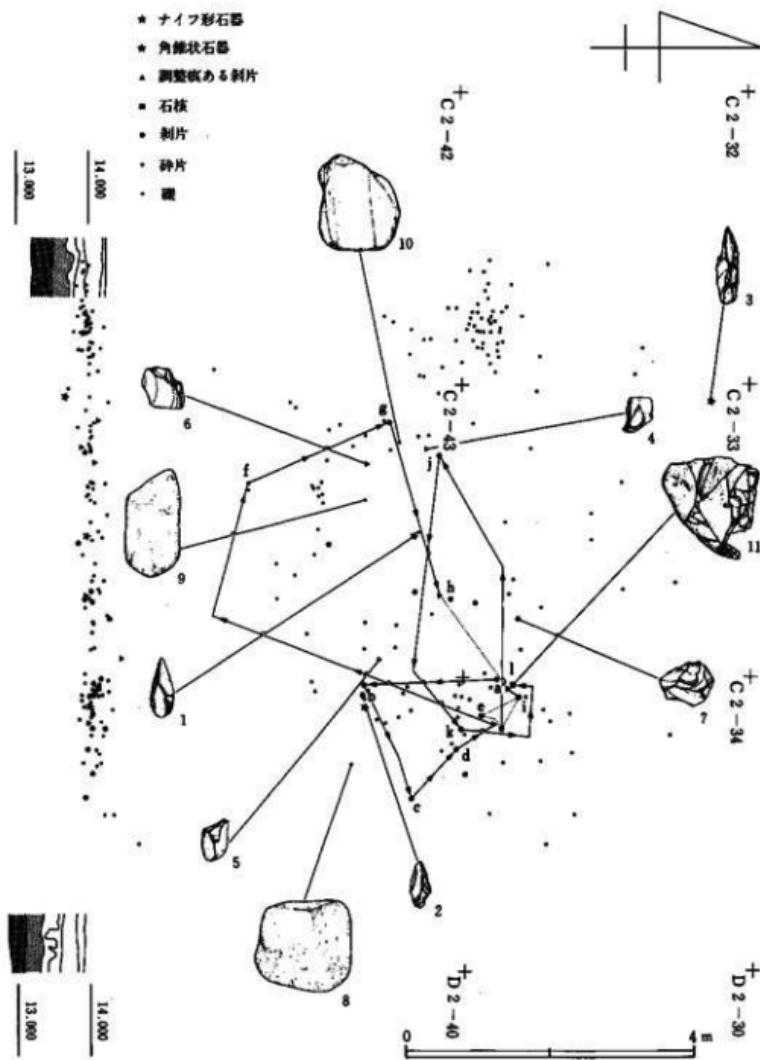
第6ブロック（第21図、図版3-1）

長径8m、短径6mの横円形状の範囲に石器が分布している。範囲内には石器の集中範囲と疊群の集中範囲がみられるが、双方が混在している地点もあり、第6ブロックの分布範囲としては大きく括れる。

石器の出土層位は、ソフトローム層であるIII層の下部から上の、黒色土とローム層の漸移層にまで及び、中には黒色土層に及ぶものもみられる。分布の比高差は50cmを測るが、黒色土層から出土する石器は、おそらく耕作により黒色土層中に取り込まれたものと思われる。

定型的な石器はナイフ形石器、角錐状石器があげられ、他は調整痕の認められる剝片、使用

痕の認められる剝片が確認されている。石器の石材は頁岩がほとんどであり、頁岩製の接合資料が確認された。この接合資料の石質の石器がほとんどであり、同一の石材の剝片剝離により形成されたブロックであるといえる。ナイフ形石器、角錐状石器に使用される石材はこの頁岩とは異なり、よって定型的な石器は完成品のまま第6ブロックに持ち込まれたもの、搬入品と



第21図 第6ブロック遺物分布図

第11表 第8ブロック石器組成表

母岩 石材	ナイフ 形石器	尖端部 角錐状 石器	縦 槽	削 片	ビエス エスキース	R- フレイク	U- フレイク	石 斧	剝 片	剝 片	石 核	敲 石	礫 片	計
鳥居石 B									1					1
頁岩 A	2				5				15	26	1			69
														39.4
頁岩 B		1							1	2				4
														2.5
板状岩									1					1
														0.6
チャート														57
														57
安山岩														23
														23
砂岩														14.3
完成品														2
														2
石英斑岩														3
														3
計	2	1			5				15	30	1			161
	1.2	0.6			3.1				10.0	18.7	0.6			65.8
														100%

考えられる。

礫群は安山岩、砂岩、チャート、石英斑岩等の5cm内外の不定形の礫により構成され、そのほとんどが被熟し、その結果として破碎礫となっている。

出土遺物（第22図～第25図、第11表、第12表、図版26）

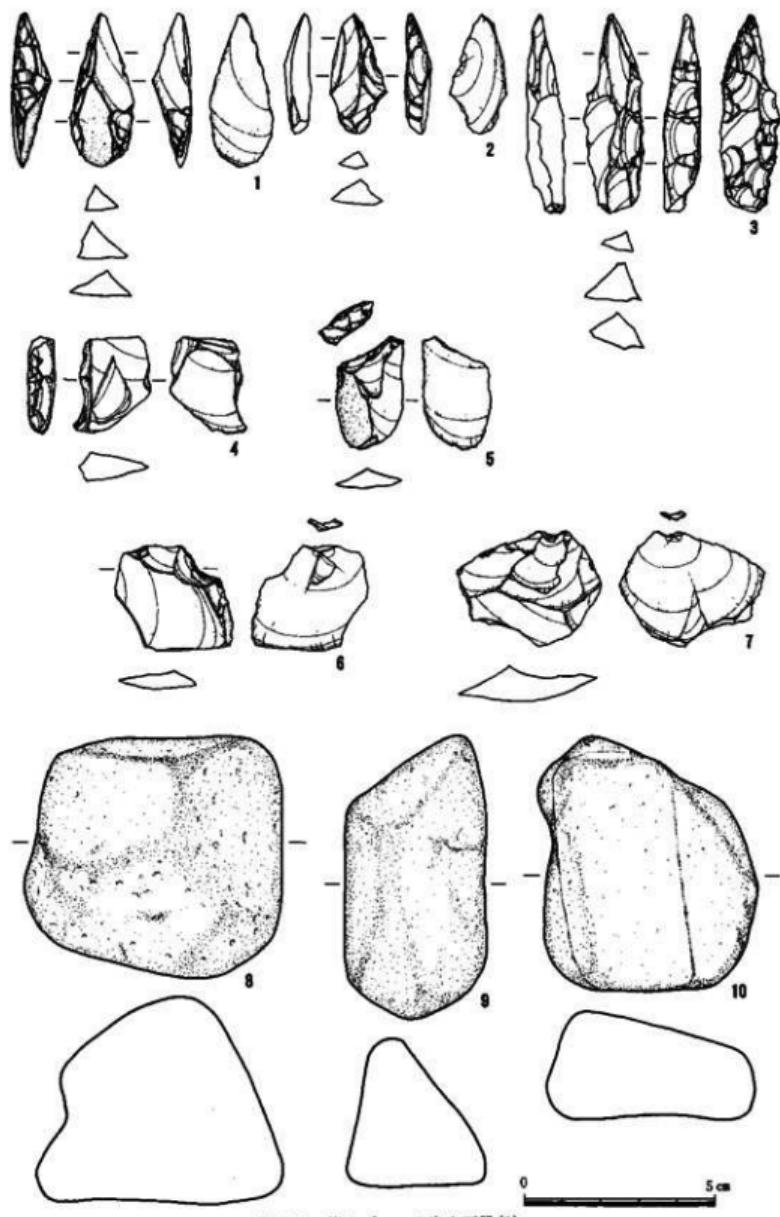
1、2は、頁岩製のナイフ形石器である。共に2側縁への調整が施されている。1のナイフ形石器は素材剝片の打面側を折断、除去し、折断面に調整を施す。表面には原石面が残る。2のナイフ形石器は素材剝片を折断せずに、打面に調整を施し製品としている。

3は角錐状石器である。縦長剝片を素材とし、主要剝離面、及び片側縁に主要剝離面からの調整を施す。先端部には彫刻刀形石器にみられるような錐状剝離がみられるが、調整によるものなのか、あるいは使用による欠損なのかは明確ではない。

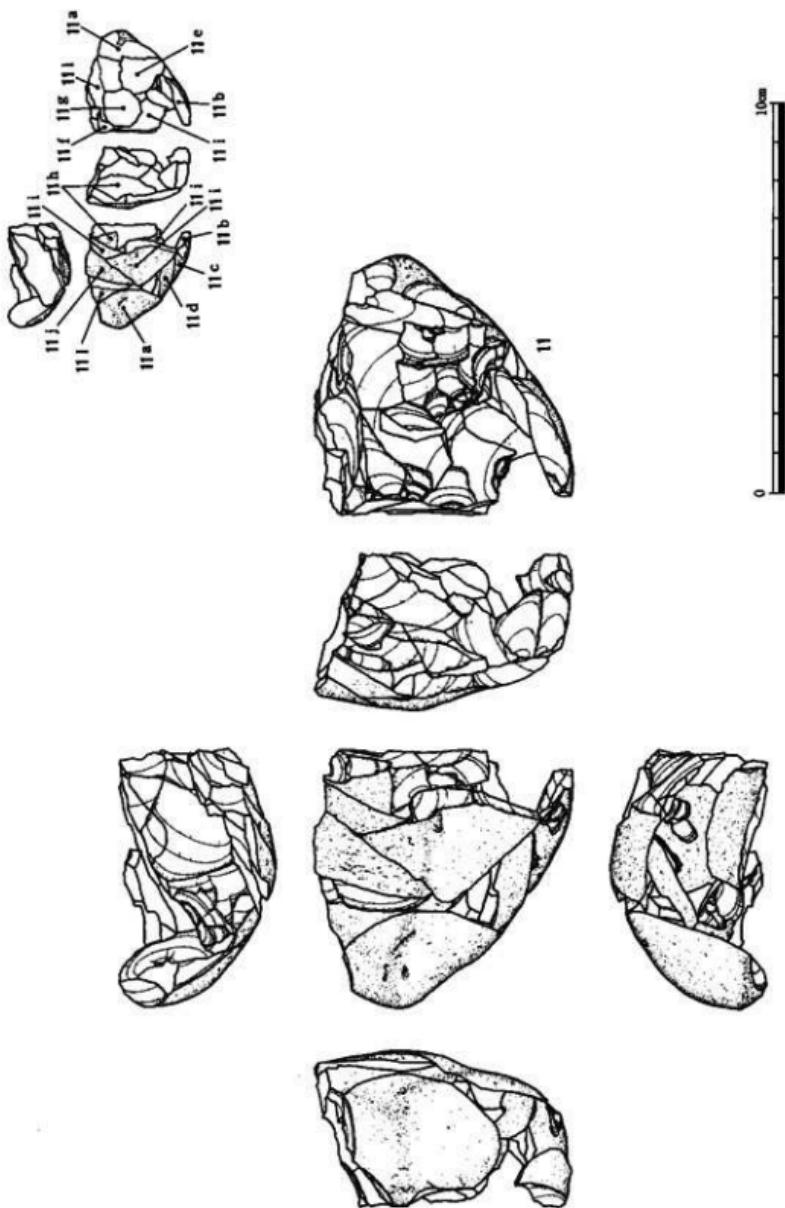
4～6は、調整痕の認められる剝片である。調整の部位には統一性がみられず、素材剝片の打面側を折断除去、片側縁に調整が施されるもの(4)、素材剝片の打面側を折断除去、折断面に調整の施されるもの(5)、折断を行わずに片側縁に調整が施されるもの(6)とさまざまである。これらは同一母岩より作出されたものと思われ、11の接合資料と同一である。

7は、やはり接合資料と同一母岩と考えられる、使用痕の認められる剝片である。使用痕は微細なものであるが、わずかに残る打面付近に特に顕著に認められる。

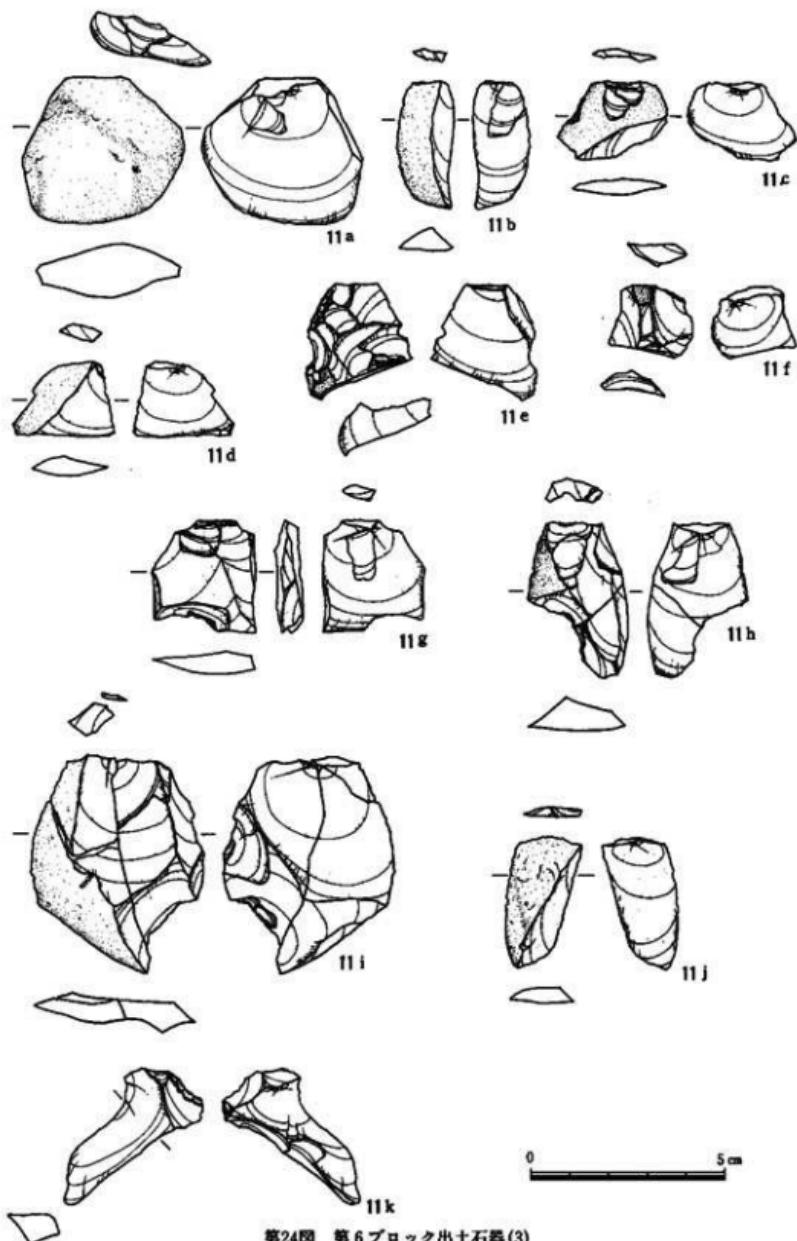
8～10は礫である。8、9は石英斑岩、10は砂岩製であり、一様に被熟している。特に敲打痕等は確認できない。



第22図 第6ブロック出土石器(1)



第23図 第6ブロック出土石器(2)



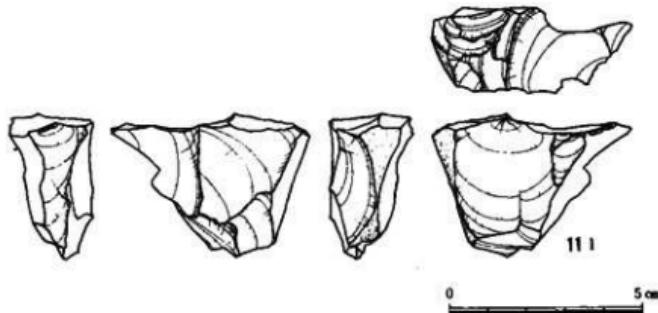
第24図 第6ブロック出土石器(3)

第6ブロックに伴う砾群の砾のうち、ほぼ原形を留めるのはこの図示したもののみで、他はいずれも破碎砾である。これらの接合を試みだが、接合するものはごく少數であり、ほとんどの砾が破碎の状態で完結している。砾そのものの個体数はかなりの数に及ぶものと思われる。

11は、頁岩製の接合資料である。母岩の大きさは20cm内外と思われ、母岩を半碎するように分割し、それぞれについて剥片剥離を行っているものと考えられる。以下、剥片剥離工程を現時点では接合している状態で段階的に復元してみたいと思う。

剥片剥離は実測図上面にみられる面を打面とし、aの剥片を作出することから始まる。それ以前にも実測図右側縁からの剥片剥離が行われているが、この剥片剥離工程での段階の剥片は接合していないため、あくまでも接合状態における剥片剥離工程での始まりという意味である。aの剥片作出後、石核整形が原石面を除去するかのように行われ、b・c・dの剥片が作出されるが、剥離の打点の方向はaの剥片が作出された打面からではなく、aの剥片が作出される以前の剥片剥離工程の打面から行われている。石核整形が行われた後、同一の打面から数回の剥片剥離が行われているが、この工程により作出された剥片は接合せず、わずかにeの表面にみられる剥離痕からわかるのみである。この後、d・c・dの石核整形剥片が作出された打面よりe・f・gの剥片が作出される。ここで打面を転移し、剥片剥離工程の最終段階の剥片が作出されるが、打面を転移するのみで、打面再生は行われていない。また、iについては主要剥離面側にそれ以前の剥片剥離工程の段階に作出された剥片の剥離痕が残り、この剥片自体も厚みがあることから、あるいは石核整形剥片である可能性もある。これらの剥片剥離が行われた結果として1の石核が残った。

上記のように頁岩製の剥片剥離工程は、石核整形を施しながら段階的に剥片剥離が行われ、確認できるものでも5回の打面転移が認められる。また特徴づけられるのは、5回の打面転移の間にも明確な打面再生は認められず、石核整形剥片、素材剥片を作出した後に残る主要剥離面のネガティブ面を打面として剥片剥離を行っていることである。



第25図 第6ブロック出土石器(4)

第12表 第8ブロック石器調査表

標 回 番 号	造 物 番 号	器 形	石 質	計 量 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
22回1	C2-43, 41	ナイフ形石器	頁 石 A	4.01	1.8	0.96	4.50	原石面残る。両側面に調整。
2	C2-44, 74	ナイフ形石器	頁 石 A	3.1	1.5	0.7	2.61	両側面に調整。
3	C2-33, 33	角錐状石器	頁 石 B	5.2	1.7	0.98	7.36	
4	C2-43, 33	調整痕ある剝片	頁 石 A	2.0	2.6	0.77	3.39	打削除去。片側面に調整。
5	C2-43, 5	調整痕ある剝片	頁 石 A	2.3	2.7	0.55	3.01	原石面残る。打削側に調整。
6	C2-33, 21	調整痕ある剝片	頁 石 A	2.7	3.1	0.66	5.08	片側面に調整。
7	C2-33, 19	剝片	頁 石 B	3.0	3.8	0.96	9.42	
8	C2-44, 67	器	石英 斧 砂岩	6.3	6.8	5.3	311.30	破壊。
9	C2-43, 14	器	石英 斧 砂岩	7.4	3.8	3.8	120.29	破壊。
10	C2-43, 25	器	砂岩	6.6	5.63	2.8	182.62	破壊。
23回11	総 合 資 料	頁 石 A						
a	C2-34, 116	剝片		3.5	4.2	1.4	21.26	原石面残る。
b	C2-44, 65	剝片		3.3	1.6	0.6	2.57	原石面残る。
c	C2-44, 85	剝片		2.0	2.82	0.51	2.75	原石面残る。
d	C2-44, 82	剝片		2.0	2.6	0.51	2.56	原石面残る。
e	C2-34, 131	剝片		2.9	2.8	1.1	6.03	一部に原石面残る。
f	C2-43, 39	剝片		1.8	2.15	0.66	2.22	一部に原石面残る。
g	C2-43, 26	調整痕ある剝片		2.8	2.7	0.7	6.25	
h	C2-43, 43 C2-34, 128	調整痕ある剝片		3.92	2.6	0.68	6.96	原石面残る。
i	C2-34, 118 C2-34, 130 C2-34, 115	剝片		5.57	4.44	1.3	28.12	原石面残る。
j	C2-43, 34	剝片		3.4	1.8	0.51	2.94	原石面残る。
k	C2-44, 71	剝片		3.6	3.3	0.95	5.09	
25回1	C2-34, 117	石 板		3.7	5.1	2.3	31.71	原石面残る。

4. 第4文化層

ソフトローム層であるIII層の下部から石器が出土する。立川ローム層IV層下部に属する文化層である。岩名第14遺跡では第7・第8ブロックの2ブロックがこの文化層に属する。

両ブロックは遺跡調査区の北側、台地緩斜面部に位置し、両ブロックの距離は8mほどの隔たりがある。

定型的な石器は第8ブロックでナイフ形石器が出土しているが、第7ブロックでは検出されず、双方の石器形態による比較はできないが、同一層に属するため敢えて同じ文化層に属するブロックとした。使用される石材は共に黒曜石であり、礫群を伴う。

第7ブロック（第26図）

長径5mの範囲に梢円形状に石器が分布する。分布密度は散漫であり、しかも台地緩斜面部に向かい遺物が流れ出したような感がある。垂直分布は、ほとんど遺物の比高差ではなく、極めて平面的に遺物が出土しているといえる。

出土した石器はそのほとんどが黒曜石製の碎片であり、図示可能なものは1の同じく黒曜石製の調整痕の認められる剝片1点のみである。

第13表 第7ブロック石器組成表

基盤 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	石 鏃	撲 器	削 器	ビエス スミス	R- フレイク	U- フレイク	石 斧	削 片	剥 片	神 片	石 核	敲 石	標 片	計
風磨石 A										1					1	1
																3.7
風磨石 B										1	21				22	81.5
												1			1	1
頁岩 A												1				3.7
																3.7
安山岩														1	1	1
																3.7
砂岩												1			1	1
																3.7
計										1	24			2	27	
											3.7	88.9		7.4	100%	



+ D 1-31

+ D 1-32

+ D 1-33



+ D 1-41

+ D 1-42

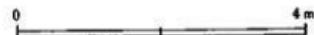
+ D 1-43

- 制片
- 破片
- 磨

+ D 2-01

+ D 2-02

+ D 2-03



14.000

14.000

13.000

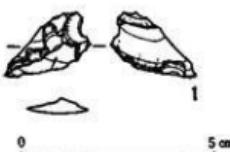
13.000

第26図 第7ブロック遺物分布図

出土遺物（第27図、第13表、第14表、図版27-1）

1は、黒曜石製の調整痕の認められる剝片である。

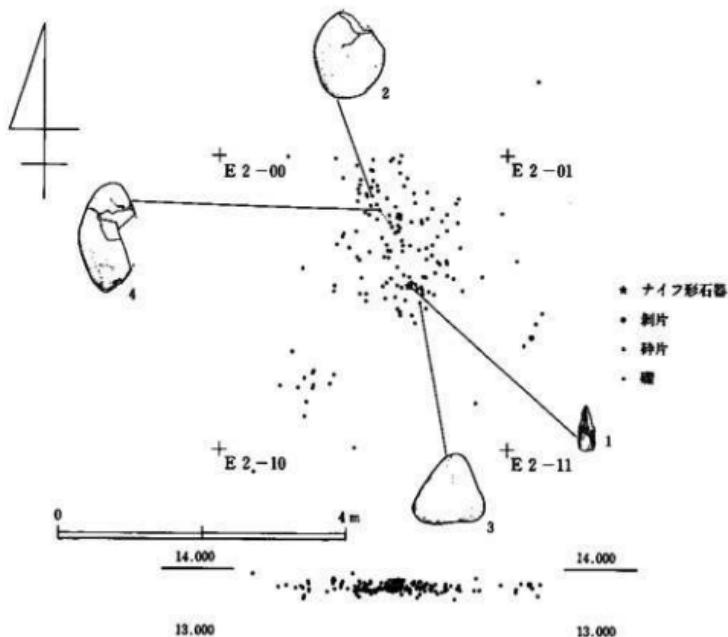
剝片が作出された剝片剝離技術は復元できないが、剝片の打面に調整を加え打面を除去している。また表面の剝片剝離時に形成された稜には粗い調整がみられる。剝片が小型なため、あるいは石器製作時の調整剝片とも考えられるが、打面をわざわざ調整により除去していること、表面の後の調整が剝片作出後に施されることがなどからその可能性は低いと思われる。



第27図 第7ブロック出土石器

第14表 第7ブロック石器観察表

序 番 号	遺物番号	種類	石質	計測値			備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	
27-1	D1-36, 6	調整痕ある剝片	黒曜石B	1.4	2.3	0.33	0.96



第28図 第8ブロック遺物分布図

第8ブロック（第28図、図版4-1）

直径4mの円形状に石器が分布する。石器の分布密度は濃いが、石器組成の大半は破碎砾である。

石器の出土する層はIII層で、その垂直分布の比高差は30cmほどである。第7ブロックと同様、IV層下部に属するブロックである。

定型的な石器は黒曜石製のナイフ形石器1点のみで、他にはやはり黒曜石製の剝片1点、碎片3点が出土する。よって第8ブロックを構成する石器のほとんどは破碎砾といえる。

第15表 第8ブロック石器組成表

石 材	ナイフ 形石器	尖頭器	石 磨	刮 刮	削 削	ビス エスキース	R- フレイク	U- フレイク	石 井	削 片	剝 片	碎 片	石 槌	敲 石	擦 片	計
黒曜石 B	1										1					2
真 石 B											1					1.3
真 石												1				1
																0.7
チ ャ ト											2					2
チ ャ ト													83	83		1.3
チ ャ ト																54.6
砂 岩													26	26		26
																17.1
安 山 岩													35	35		35
																23.0
黑 曜 石													3	3		3
																2.0
計	1										1	3			147	152
	0.7										0.7	2.0			96.6	100%

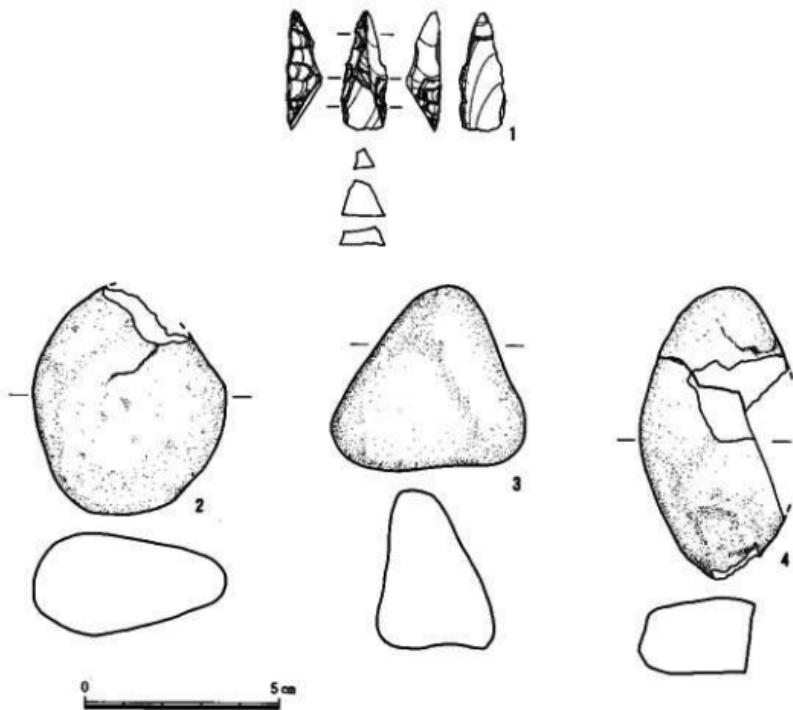
出土遺物（第29図、第15表、第16表、図版27-2）

1は、黒曜石製のナイフ形石器である。部厚な剝片を素材とし、剝片の打面を除去するよう調整を施し製品としている。また、剝片の末端部にも一部調整が施され、無調整部位は素材剝片の片側縁及びもう一方の打面部に近い側縁部である。

2～4は砾である。2は安山岩、3は砂岩、4は石英斑岩で、一様に被熱している。

第16表 第8ブロック石器観察表

調査 番号	遺物番号	目 標	石 質	計測値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
29B1	E2-00, 81	ナイフ形石器	黒曜石 B	3.1	1.23	0.89	2.45	両側縁に調整。
2	E2-00, 134	砾	安 山 岩	5.72	4.8	2.6	87.91	被熱。
3	E2-00, 29	砾	砂 岩	4.7	5.01	4.0	95.83	被熱。
4	E2-00, 86- E2-00, 90	砾	安 山 岩	7.4	3.8	1.92	72.75	被熱。



第29図 第8ブロック出土石器

5. 第5文化層

立川ローム層IV層上部に属する文化層である。岩名第14遺跡では第9ブロックの1地点がこの文化層に属する。

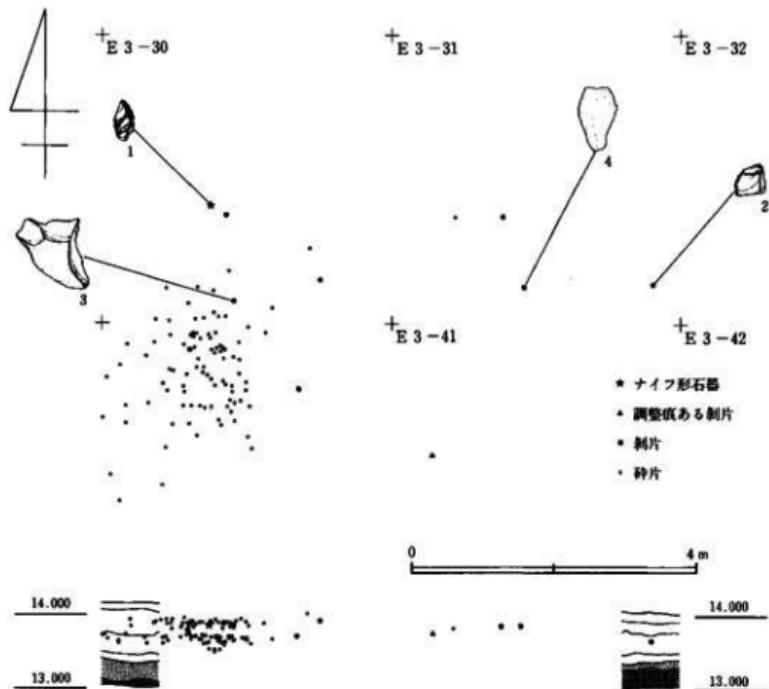
定型的な石器はナイフ形石器があげられるが、このブロックから出土した定型的な石器はナイフ形石器のみであり、よって岩名第14遺跡における第5文化層の石器組成を明確にあげることは困難である。

使用される石材は黒曜石、凝灰岩等である。

第9ブロック（第30図、図版5-3）

長径8mの橢円形状に石器が分布するが、ブロックの東側は分布密度が極めて薄く、ブロックを構成する主体は分布範囲の西側の直径3mの範囲と考えられる。

石器の出土する層位はソフトローム層上部であり、遺物の垂直分布にかなりの高低差がある



第30図 第9ブロック遺物分布図

第17表 第9ブロック石器組成表

石種	ナイフ 形石器	尖端器	石 斧	器 形	削 器	ビス スルターグ	R- フレイク	U- フレイク	石 斧	削 片	剝 片	石 核	敲 石	碎 片	計
島壁石A												1			1
															1.0
島壁石B						1				4	90				95
															92.2
凝灰岩	1								1	3	2				7
															6.8
計	1					1			1	7	93				100
	1.0					1.0			1.0	6.7	90.3				100%

が、IV層上部に位置するものと思われる。

ブロックを構成する石器の機種は、ナイフ形石器、調整痕の認められる剝片、剝片、碎片であるが、定型的な石器はナイフ形石器の1点のみで、ほとんどが碎片である。

石器に使用される石質は、黒曜石がその大半を占める。他には凝灰岩が含まれるが、凝灰岩

は点数的に少数であり、また剥片剥離の行われた形跡のみられないことから、凝灰岩製の石器は搬入品と考えられる。

出土遺物（第31図、第17表、第18表、図版27-3）

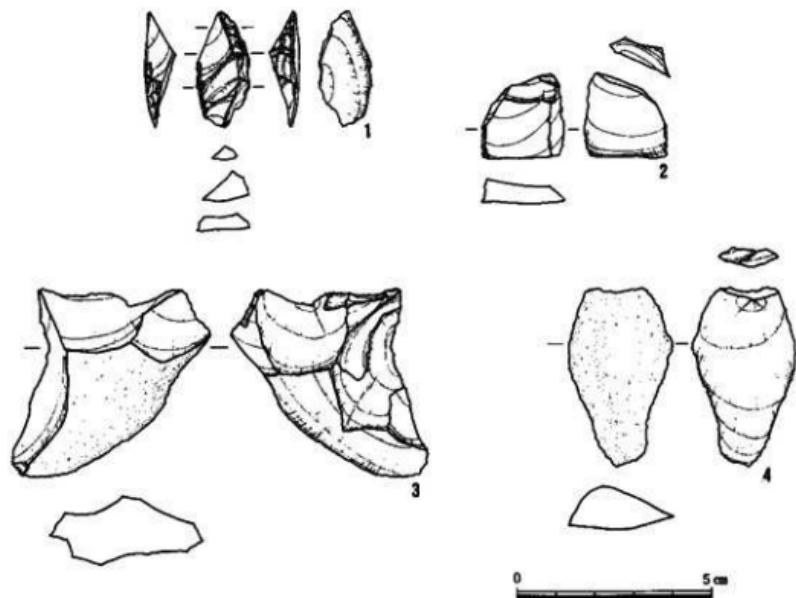
1は、凝灰岩製のナイフ形石器である。横長の部厚な剥片を素材とし、剥片の打面を除去するような調整が施される。また、剥片末端部の一部にも微細な調整が施される。

2は、黒曜石製の調整痕の認められる剥片である。剥片の打面側を切断、除去し、微細な調整が2回ほど施されるが、刃部作出のための調整ではなく、石器製作を目的とした調整であると考えられる。しかし、どのような形態の石器を製作しようとしたのかはわからない。

3は、凝灰岩製の剥片利用石核である。大型の剥片が作出された時の打面を、さらに剥片剥離の打面とし、そこから剥片を作出している。

4は、凝灰岩製の剥片である。表面は原石面で占められ、剥片剥離工程の初期の段階の剥片であることがわかる。打面が残存し、打面にみられる剥離痕から、剥片剥離の際に打面調整が行われていたことが確認できる。

上記のナイフ形石器を含めた凝灰岩製の石器は、点数的に少数であり、また第9ブロックでは凝灰岩製の剥片、碎片、石核などはみられない。このことから凝灰岩製の石器は第9ブロック内で剥片剥離により作出されたものではなく、他の場所で作出され、第9ブロックに搬入さ



第31図 第9ブロック出土石器

れたものと考えられる。黒曜石製の石器については、その組成の大半が碎片であり、このブロック内で剥片剥離が行われた形跡はみられない。むしろ石器製作のための調整碎片がほとんどであることから、素材剥片の剥片剥離作業により形成されたブロックではなく、石器調整の結果形成されたブロックといえる。

第18表 第9ブロック石器調査表

標 識 番 号	遺物番号	器種	石質	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
31回1	E3-30, 8	ナイフ形石器	凝灰岩	2.82	1.4	0.81	2.33	両側縁に調整。
2	E3-31, 5	調整痕ある剥片	黒曜石	B	2.15	2.2	0.73	打面欠。
3	E3-30, 13	剥片利用石核	凝灰岩	4.3	6.2	1.68	30.07	原石面残る。
4	E3-31, 4	剥片	凝灰岩	4.5	2.7	1.05	12.69	原石面残る。

6. ブロック外出土遺物（第32図、第33図、第19表、図版27-4）

岩名第14遺跡からは上記のブロックの他に、単独で検出した石器が多い。各文化層に帰属させるには比較要素があまりにも少ないと、ここではここの石器の説明を記述するに留めたい。

1は、黒曜石製の槍先形尖頭器である。先端部が欠損している。素材剥片の打面を残し、調整は表面、裏面の両面に施されるが部分的であり、無調整の部位もかなりみ受けられる。調整は面的にていねいに施されている。

2は、凝灰岩製の槍先形尖頭器である。基部が欠損している。横長剥片のほぼ全周に調整がみられるが面的な調整ではなく、主要剥離面、剥片作出時の剥離痕が残る。

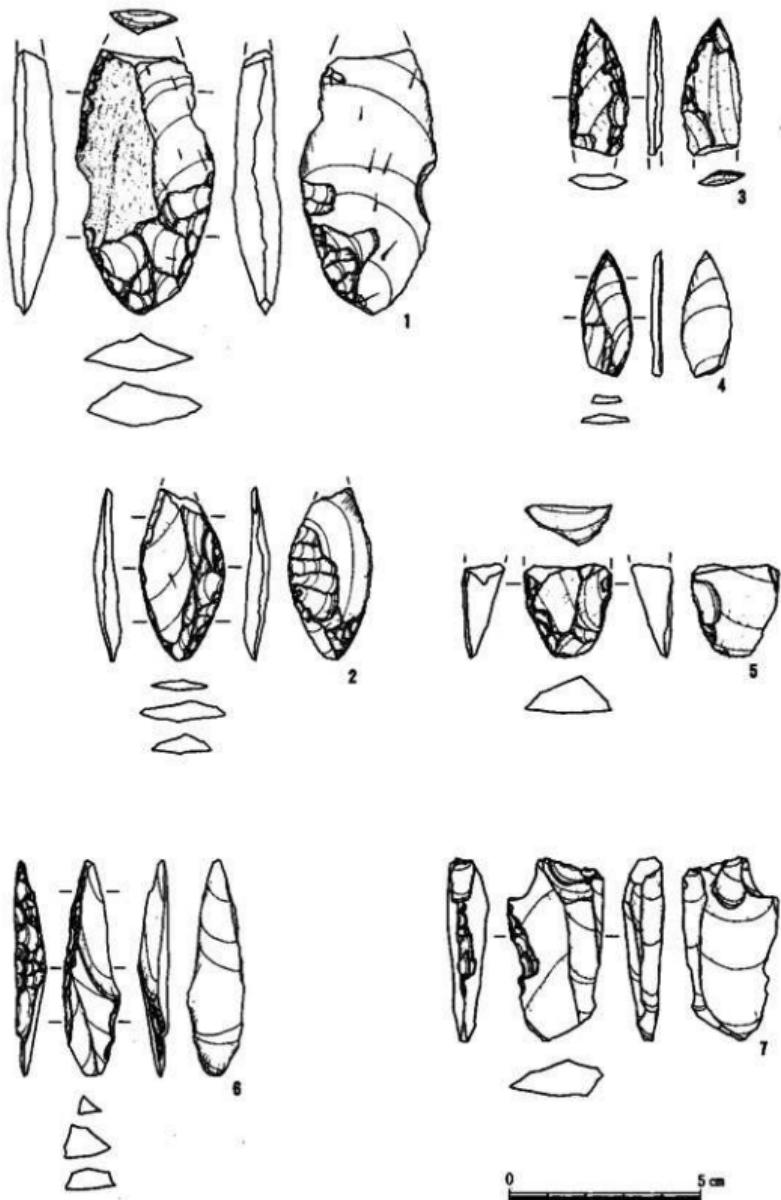
3は、黒曜石製の槍先形尖頭器である。器厚の薄い綫長剥片を素材とし、調整は主要剥離面側から表面に向かい、急角度の剥離により行っている。調整部位はほぼ全周にわたる。

4は、黒曜石製の槍先形尖頭器である。先端部が欠損している。横長剥片を素材とし、調整は打面を除去するように、打面部の表裏面に集中して施されている。

5は、凝灰岩製の槍先形尖頭器である。基部のみの残存である。素材剥片の打面側が先端部にあたる。調整はほぼ全周にわたって施されるものと思われる。他の槍先形尖頭器と比較すると、かなり部厚な製品である。

6は、頁岩製のナイフ形石器で、色調は白色を呈する。石刃技法により作出された剥片を素材としているかは断定できないが、表面に残る剥片剥離時の剥離痕は打面の方向がすべて同一であり、かつ主要剥離面の打点の方向と一致しているため、その可能性は強い。調整は片側縁のほぼ全周と、対になる側縁の一部に施される。第2黑色帯上部に属する文化層に所属する石器と考えられる。

7は、頁岩製の彫刻刀形石器である。素材剥片の打面から両側縁に向かって楕状剥離が施される。片側の楕状剥離はすぐに止まっているが、もう一方のそれは素材剥片の末端部にまで及

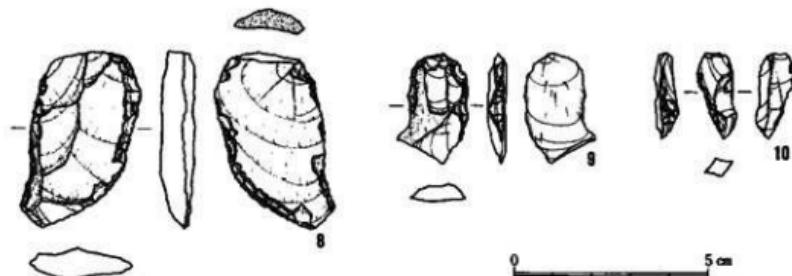


第32図 ブロック出土石器(1)

よ。また、片側縁には主要剥離面側から調整が施される。石器整形のための調整ではなく、刃部作出のための調整と思われる。

8は、安山岩製の削器である。素材剝片の打面は母岩の原石面である。調整は打面を除くほぼ全周にわたり施されるが、微細な調整のわりにはていねいさは感じられない。

9, 10は、黒曜石製の調整痕の認められる剝片である。9は素材剝片の打面及びその周辺に調整が施される。調整の目的は石器整形と思われるが、目的とする機種を特定するには難がある。10は片側縁に微細な調整が施されるが、むろんこの状態で機能する石器とは考えられない。むしろ石器製作時の調整剝片と考えられる。



第33図 ブロック外出土石器(2)

第19表 ブロック外出土石器鑑定表

辨別番号	遺物番号	種類	石質	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
32図1	F4-31, 1	槍先形尖頭器	風 嘴 石	6.97	3.65	1.2	24.36	原石面残る。
2	G5-44, 1	槍先形尖頭器	風 嘴 石	4.4	2.21	0.51	4.48	
3	F8-21, 1	槍先形尖頭器	質 岩	3.6	1.57	0.39	2.41	
4	D1-22, 4	槍先形尖頭器	質 物	3.2	1.32	0.32	1.29	
5	303, 1	槍先形尖頭器	質 岩	2.4	2.3	1.03	4.77	
6	F5-01, 2	ナイフ形石器	珪 質 岩	5.53	1.5	0.76	4.56	
7	503, 148	鉈形石器	質 岩	4.7	2.51	1.08	16.73	
32図8	311, 3	削	安 山 岩	4.4	3.3	0.8	11.88	原石面を打面とする。
9	F4-21, 2	削	風 嘴 石	2.8	1.8	0.52	2.31	原石面残る。
10	E3-42, 1	調整痕ある剝片	風 嘘 石	2.2	0.9	0.6	1.08	片側縁に調整痕。

第2節 繩文時代

1. 壺穴住居跡とその出土遺物

当遺跡からは、7軒の繩文時代に属する壺穴住居跡が検出されている。中には、002A～C号住居跡のように検出された土器片等は多かったが、それぞれの掘り込みが明確ではなく、さらに重複関係を有していると考えられるため、一軒一軒について適切な記録を留められなかったものもある。002号住居跡に関しては、土器片及び石器片の分布状況から推定した範囲を図示し

たが、ピット等の配置に関しては、まだまだ検討の余地があると思われる。

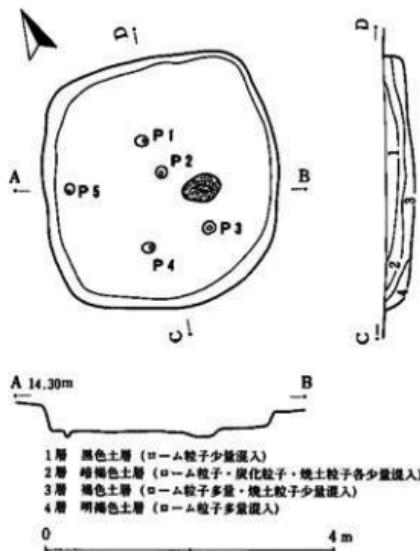
001号住居跡（第34図、図版7-1）

造構 調査区の北半で台地東側の縁に近いD2-14区に位置する。形状は方形に近く、 3.4×3.3 mの規模を有する。確認面からの掘り込みの深さは、西側で約40cm、東側で約20cmを測り、壁は、やや傾斜して掘り込まれる。床面中央付近は周囲よりわずかに低く、固く締まった状況を呈するが、周辺は凹凸があり軟質である。炉は住居中央よりやや東に寄った位置にあり、床面をわずかに掘り込んだ地床炉である。炉内は焼土粒子を多量に含む暗赤褐色土の単一層で、炉の東壁を主体に、よく熱を受けた状況であった。床面には、中央付近を主体に、小ピットが存在する。ピットの深度は、最も中央よりに位置するP1、P2がそれぞれ約30cm、P3が5cm、P4、P5がいずれも10~15cmである。遺物は、破片での出土がほとんどである。散の上では条痕文系土器片が浮島式系土器片を凌駕したが、浮島式系土器片の中には遺存状態の良好なものが多く、住居に明瞭な炉跡を伴っていることから、本跡は浮島式期に属すると思われる。

出土遺物

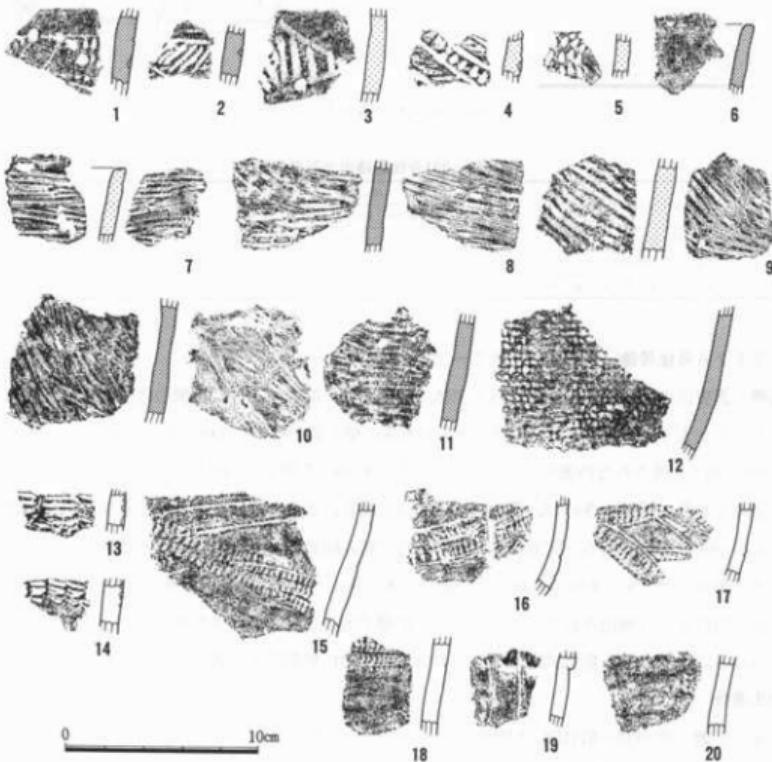
a. 土器（第35図、図版28-1）

覆土中から約150点の縄文土器が出土している。条痕のみが施される縄文時代早期後半の土器片が多く混入し、量的にはむしろ浮島式系土器より多い。1~5は、鵜ヶ島台式土器である。



第34図 001号住居跡実測図

5を除いて、直線的な沈線により主文様が描かれ、幾何学文の構成をとるものであろう。5は刺突文を主文様とするもので、おそらく刺突文を連続的に施し、曲線的な幾何学文を表出するものであろう。6は表裏無文の口縁部片で、口唇上は平坦である。7～10は表裏面に条痕のみ施されるものである。施される条痕は、7の表裏面、8、9の裏面が比較的深い。11は表面のみに浅い条痕が認められる。裏面はナデ状に整形される。12はR L繩文の施される黒浜式土器である。13、14は竹管状工具により深い短沈線を連続して施している。諸磯式土器と思われる。15～18は貝殻復縁を連続的に施した後、細く鋭利な沈線を加えているものである。胎土中には砂粒を多く含んでいる。興津式土器である。19は輪積痕上に、縦位の沈線が重ねて施されており、やはり興津式の中に含まれよう。20は外反する器形の無文土器である。浮島式土器の底部付近と思われる。



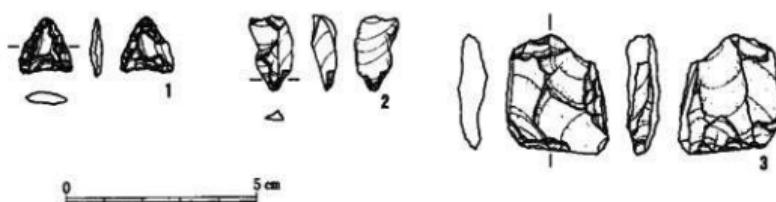
第35図 001号住居跡出土土器

b. 石器 (第36図、第20表、図版42)

1は、チャート製の石鏃である。素材剝片の打面側を折断除去し、全周から調整を加え製品としている。平面形状は正三角形に近い形状となる。

2は、黒曜石製の調整痕の認められる剝片である。素材剝片の打面を除去し、末端部に微細な調整を施している。

3は、安山岩製の楔形石器である。素材剝片の形状はわからないが、素材剝片の両端から調整を加え形状を変え、さらに細かい調整により刃部の作出を行っている。



第36図 001号住居跡出土石器

第20表 001号住居跡出土石器表

件 号	遺 物 番 号	材 質	石 質	計 面 積				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
36図1	001, 141	石	チャート	1.4	1.3	0.28	0.55	
2	001, 178	調整痕ある剝片	黒曜石	1.9	1.2	0.6	0.97	打削、末端部に調整痕。
3	001, 146	楔形石器	安山岩	3.2	2.6	0.8	9.32	

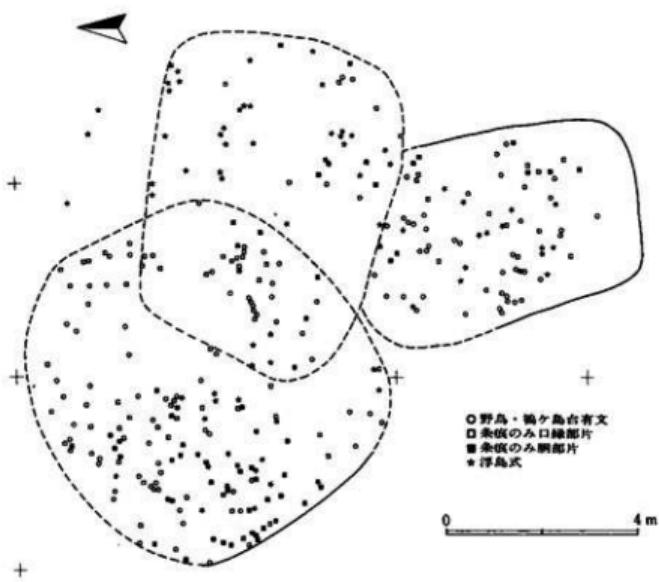
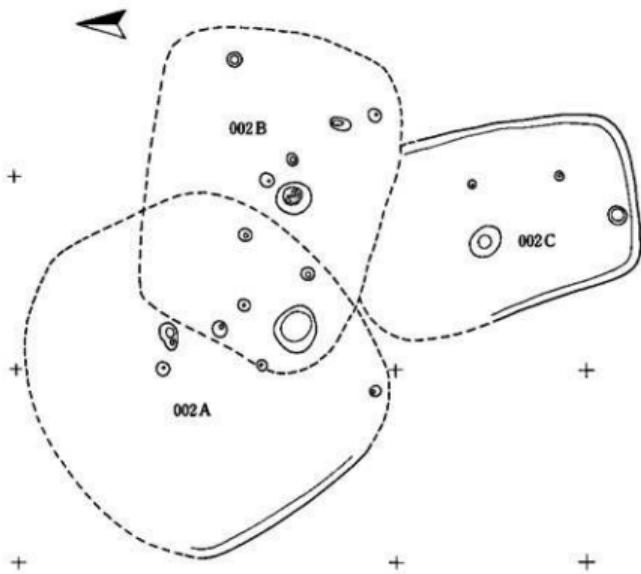
002A号住居跡 (第38図、図版7-2, 3)

遺構 調査区の北部C 1-30区付近を主体に位置する。前述のように遺構の外形線は推定によるところが大きく、南西壁と北東壁の一部が本来の壁と思われる。規模はやはり推定で、7.0×6.8mを測り、残された西壁からその立ち上がりは約30cmを測る。本跡内からは7か所にピットを認めており、径は小さいが、深さは15~20cmを測る。また、南東壁付近に位置するやや大きなものが深さ30cmを測る。床面は平坦だが、特に踏み締められた様子はない。遺物は、鶴ヶ島台式土器片をはじめ、条痕のみ施される破片が多く検出されている。土器片の垂直分布からは、住居中央付近では検出されたレベルが高く、壁際で出土したものの方が床面に近い位置で多くみられる。本跡は鶴ヶ島台式期を中心においた縄文時代早期後半に属すると思われる。

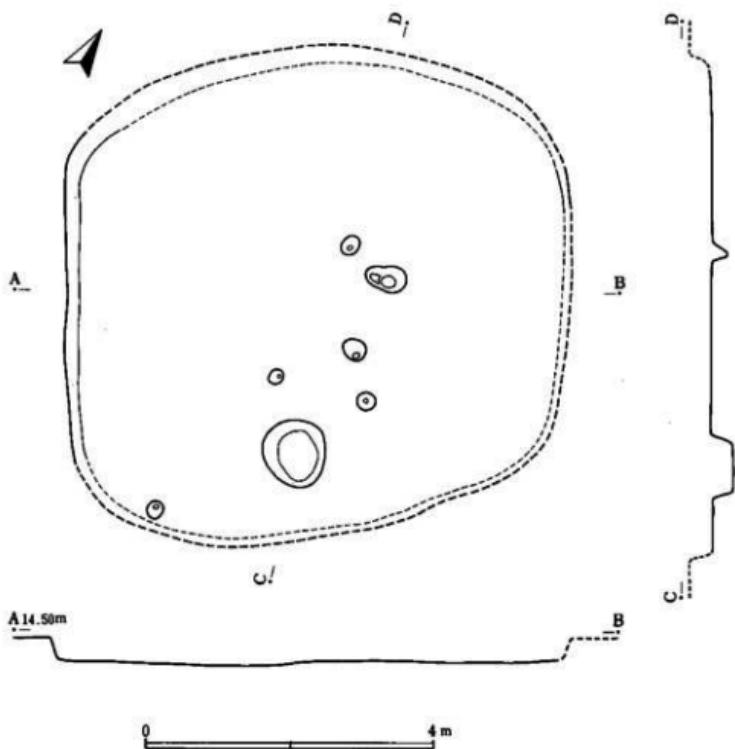
出土遺物

a. 土器 (第39図~第41図、図版28-2~図版30-1)

覆土中から約750点の土器片が出土している。条痕のみ施されるものが全体の7割以上を占めている他、胎土中に鐵錐を含む無文の土器片も2割近く出土している。野島式、鶴ヶ島台式の

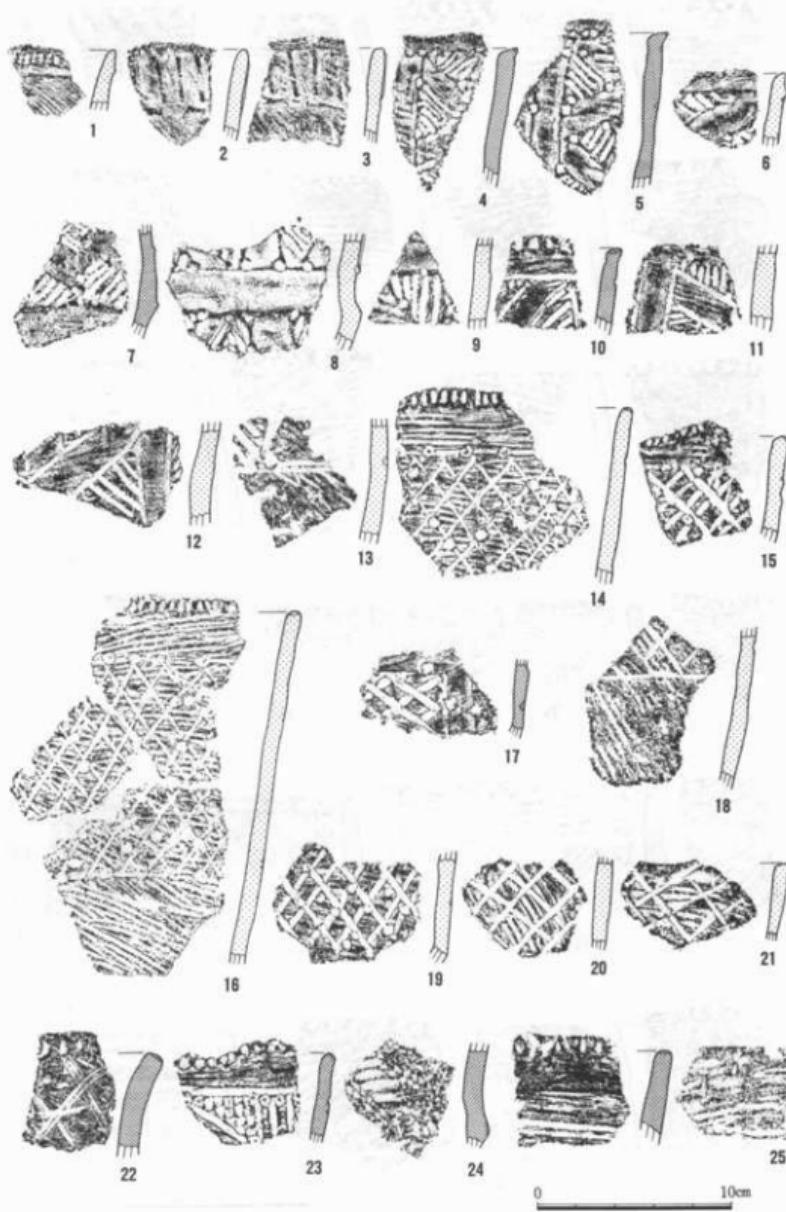


第37図 002号住居跡配置図・土器分布図

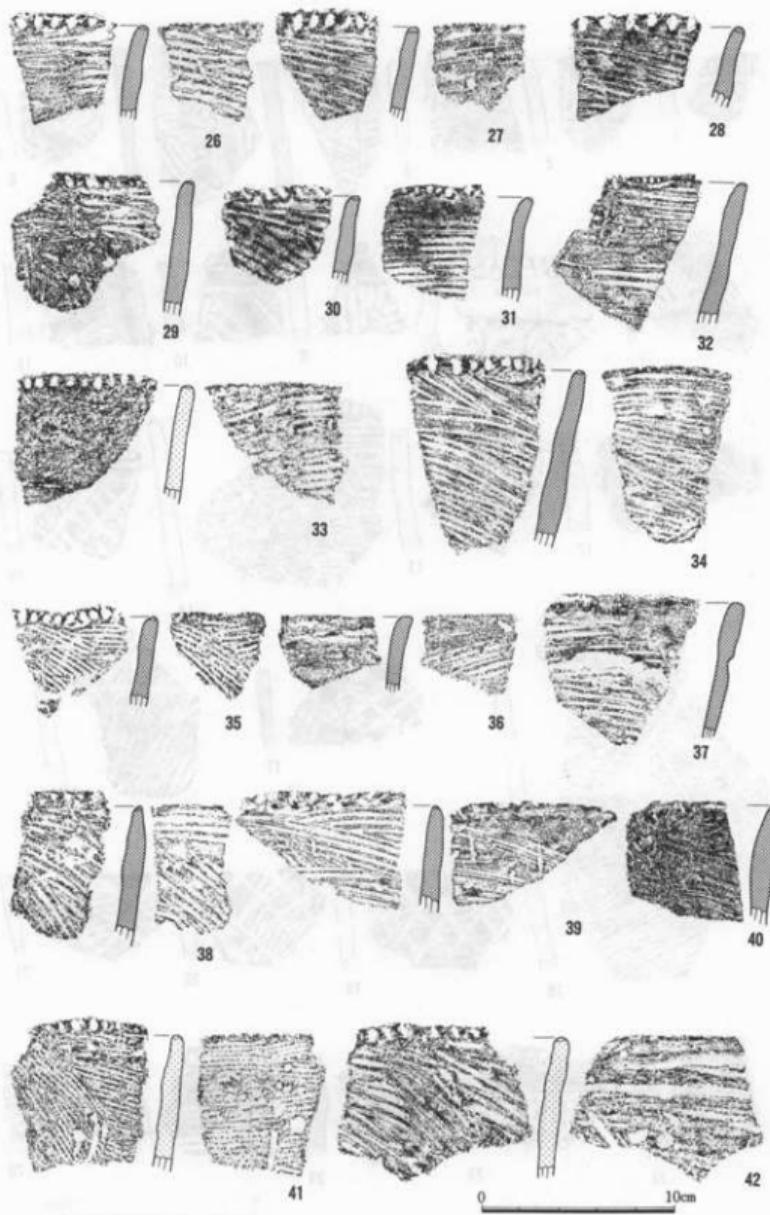


第38図 002A号住居跡実測図

有文土器は両方を合わせても約5%と少量である。1~3は野島式土器である。1は地文に条痕が施されるが、口縁下に横位の細隆起線による区画線を施し、口唇下にアナグラ属貝殻復縁を連続して押圧している。2、3は口縁下に細隆起線による区画文を有する。裏面の条痕はいずれも磨消されている。3点とも胎土中の纖維量は少ない。4~24は鶴ヶ島台式土器である。このうち4~9は、細隆起線を主体的に用いて直線的な幾何学文を形成する。いずれも細隆起線の接点には円形の刺突文が加えられ、無文帯以外の区画内には棒状工具により短沈線を連続して充填する。内面は4、5を除いて条痕が磨消されている。10~13は、沈線を主体的に用いて、やはり直線的な幾何学文を形成する。12、13の内面は条痕が磨消される。14~22は、沈線により斜格子状の文様を主体的に作出しているものである。このうち14~21は、整然とした格子目文となり、幾何学文を持つものと同様に、要所には円形の刺突文が加えられるものが多い。また、以上のものは胎土中に含まれる纖維の量が少ないので特徴である。22は斜沈線が交差す

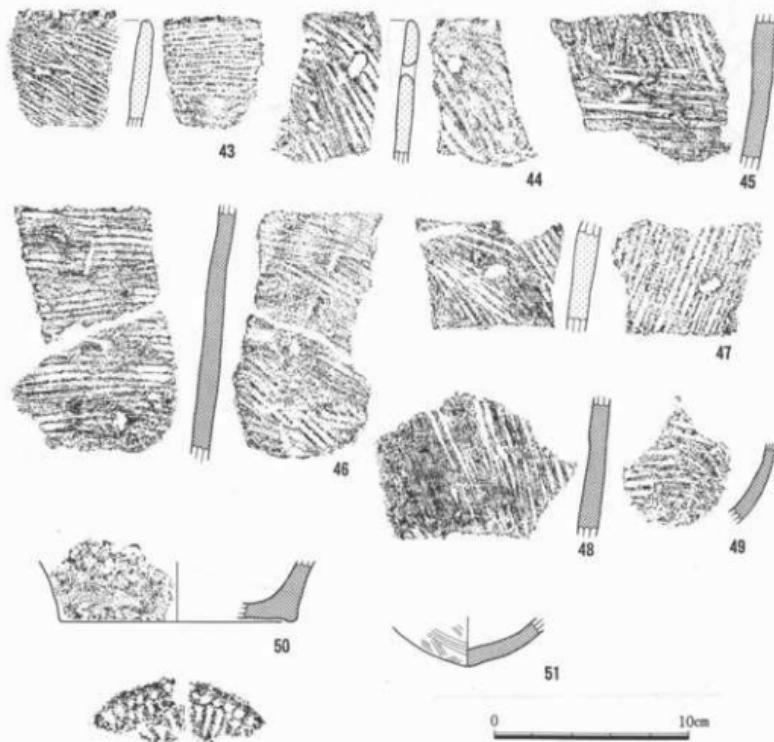


第39図 002A号住居跡出土土器(1)

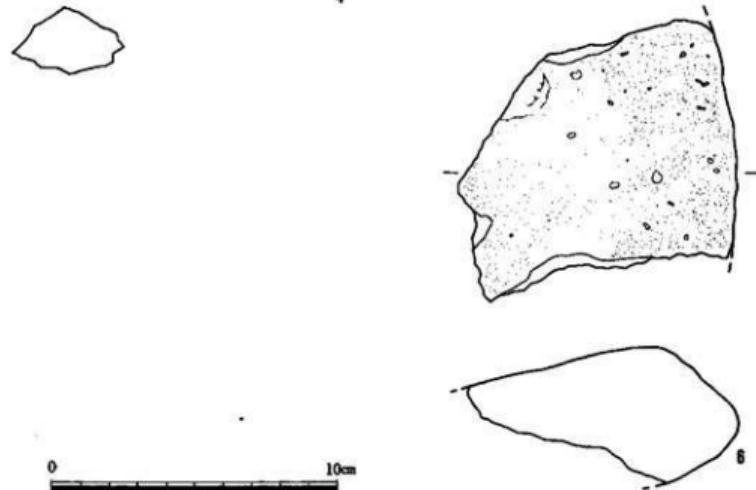
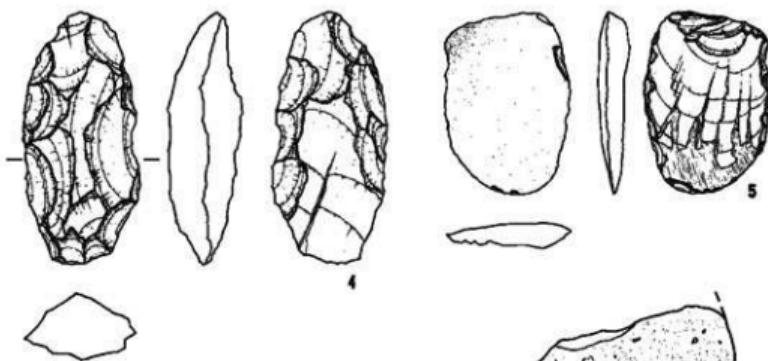
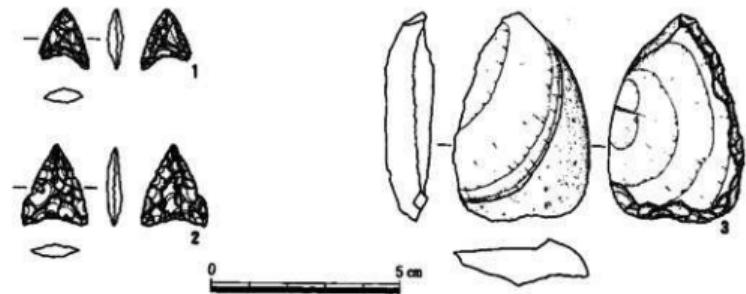


第40圖 002A號住居跡出土土器(2)

るもの、沈線が浅くやや雑である。器壁が厚い点も、他のものとは異なっている。口唇上は、棒状工具により連続爪形文状に刻み目を施す。23は沈線を主体に幾何学的な文様を施す。区画文内には、棒状工具を斜めに連続して刺突したものを充填する。24は区画線が2条の押し引き状刺突文により施される。区画線間は、棒状工具による短沈線が充填される。25以下は条痕のみ施されるもの、あるいは胎土に纖維を含む無文の土器である。このうち25～37は、器形的に口唇部付近が直線的か、やや外に向くものである。36、37を除いて口唇部に刻み目がある。また、28～32の内面は27と同じ程度に条痕を磨消している。33は磨耗もあるが、逆に表面側の条痕が磨消されている。36は裏面のみ条痕が施され、口唇上は整形され平坦となる。37は表裏面に条痕が施されているが、表面の口縁下は整形が一部省かれ、輪積状の痕跡が残る。38～40は、口唇部付近が尖り気味となるものである。40のみ表裏ともに無文であるが、表面には横位の擦痕が認められる。41～44は、器形的に口唇部付近でやや内湾するものである。すべて表裏面に条痕が施されるが、胎土中の纖維量はどれも少ないので特徴である。45以下は胴部片、ま



第41図 002A号住居跡出土土器(3)



第42图 002A号住居跡出土石器

たは底部片である。45~48は、いずれも硬い焼成状態のもので、45と48の裏面は条痕が磨消されている。49は尖底部付近の破片である。胎土中には砂粒が多く含まれている。51も尖底部である。内面の条痕は、軽く磨消される。50は平底の底部片である。胎土中には多量の纖維に加えて、やはり多量の雲母、石英粒等が含まれている。底面には棒状工具により、円形刺突と沈線を放射状に施している。施文される工具から考えて、鶴ヶ島台式土器の底部と思われる。

b. 石器（第42図、第21表、図版42）

1, 2は石鎚である。1は安山岩製で全面にわたりていねいな調整が施される。2は黒曜石製で1と同様に全面にわたり調整が施される。

3は、流紋岩製の削器である。剥片剥離工程の初期の段階に作出された剥片を素材とし、剥片の末端部から側縁部にかけて刃部作出の調整が施される。調整は表面から主要剥離面側に施される。

4は、安山岩製の打製石斧である。大型の剥片を素材とし、剥片の全周から調整が施されている。一部に剥片剥離時の主要剥離面が確認できる。

5は、頁岩製の磨製石斧である。表面は原石面で占められ、剥片剥離工程の初期の段階に作出された剥片を素材としていることがわかる。素材剥片の周縁部に整形のための調整を施し、剥片末端部の主要剥離面側を磨いて刃部を作出している。

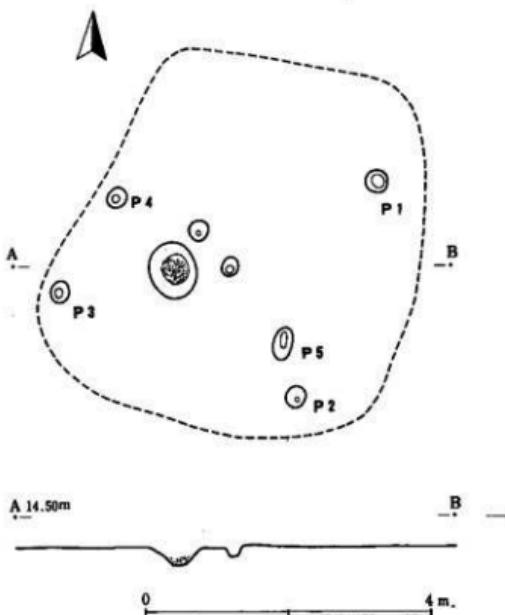
6は、安山岩製の石皿の破片である。全面よく磨かれている。

第21表 002A号住居跡出土石器表

件 番 号	遺物番号	種 類	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
42881	002, 1418	石 鎚	安 山 岩	1.6	1.3	0.4	0.60	
2	002, 1420	石 鎚	黑 曜 石	2.2	1.75	0.39	1.03	
3	002, 1713	削 器	流 紋 岩	5.4	3.55	1.27	22.15	原石面残る。
4	002, 1670	打 製 石 斧	安 山 岩	6.4	6.0	4.4	98.18	
5	002, 154	磨 製 石 斧	頁 岩	6.2	4.5	1.06	37.45	原石面残る。刃部のみ研磨。
6	002, 616	石 皿	安 山 岩	9.3	9.9	4.72	424.3	被熱。

002B号住居跡（第43図）

遺構 002A号住居跡の南西に重複する。本跡は、炉跡の存在と浮島式系土器片の分布状況、周辺のピット配置により推定したものである。規模はやはり推定で、5.0×4.7mほどのものと思われる。炉跡は住居中央より南西に寄った位置にあり、床面を20cm掘り込んでいる。炉跡内にはよく熱を受けた状況を呈する焼土の堆積がみられた。ピットは7か所に検出されている。外側に位置するP1とP3がそれぞれ深さ30cm, 40cmで対応し、P2, P4についてもそれぞれ10cmと浅いが、やはり対応関係にある。床面は002A号住居跡と変わらず、平坦だが特に踏み締められた様子はない。遺物はP5付近で床面近くの分布がみられるが、それ以外は覆土上層からの出土が多い。本跡は炉跡の存在と出土土器の要素から、浮島式期後半に属すると思われる。



第43図 002 B号住居跡実測図

出土遺物

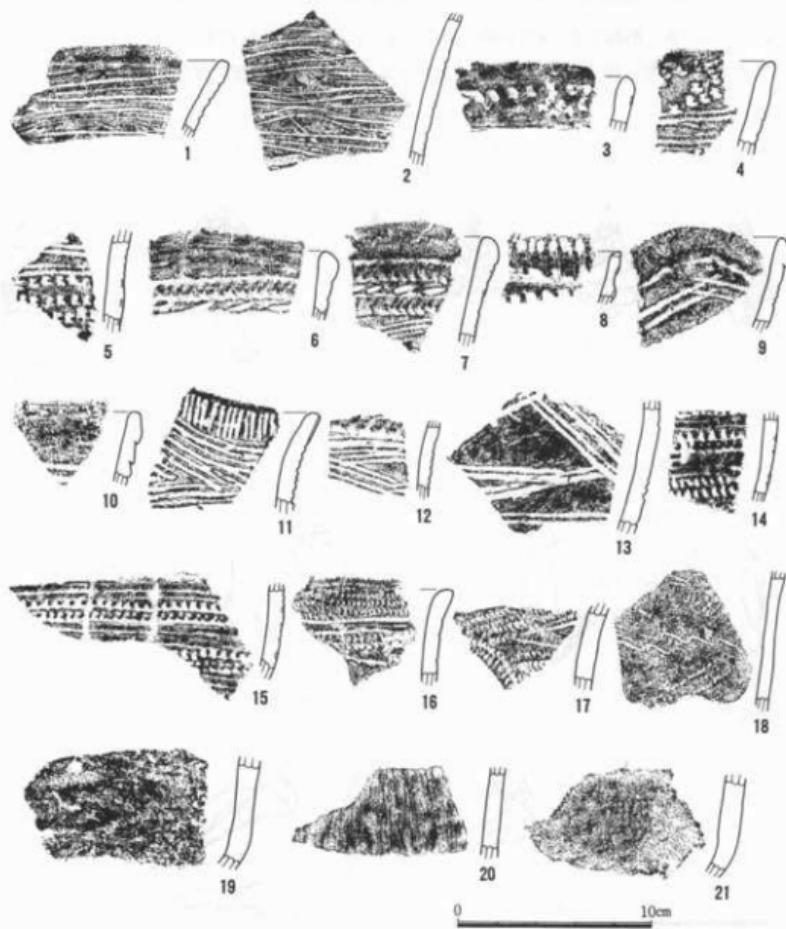
a. 土器 (第44図、図版30-2)

本跡の推定範囲内から出土した土器片は、約110点である。このうち胎土に纖維を含まない無文の土器を含めた浮島式系土器の占める割合は、約5割である。浮島式系土器は、内容的には浮島III式を除いてI式から前期末までのものが存在する。1, 2は外反する器形を呈し、半截竹管による平行沈線で弧状を主体とした文様を描出す。いずれも地文は持たない。3～5は同一個体と思われる。文様は、やはり半截竹管により連続爪形状文を施した後、平行沈線文を加えている。6, 7は幅の広い、いわゆる変形爪形文が施されている。変形爪形文とともに刻み状の短沈線、狭い間隔の平行沈線がみられる。8は輪積痕上に、棒状工具による刺突を連続的に施した、いわゆる凹凸文が施されている。9, 10は口唇下に折り返し状の輪積痕を残し、以下に平行沈線が施される。11～13は、平行沈線を深く施しているものである。このうち11は口縁部片で、器形が外半し口唇下に特徴的な刻み目状の短沈線がみられることから、興津式に含まれるものであろう。14, 15は狭い間隔で横位の平行沈線、連続爪形状文が施される。やはり興津式に含まれよう。16, 17は地文に貝殻復縁文を連続的に施し、平行沈線ないし沈線によ

り区画文を形成する。典型的な興津式土器である。18は細い原体の繩文を用いた綾絹文が施されており、前期末に位置づけられるものである。19～21は無文の土器片である。20には縦位の細い整形痕が残る。3点とも胴下部、あるいは底部付近のものである。

b. 石器 (第45図、第46図、第22表、図版42)

1, 2は石鏃である。1はチャート製で有茎鏃である。茎部が欠損している。調整は全面にわたりていねいな作りである。2はチャート製で、平面形状は二等辺三角形状を呈する。1と同様に調整は全面にわたりていねいな作りである。1, 2の石鏃は、岩名第14遺跡で出土して



第44図 002B号住居跡出土土器

いる他の石器の形状と異なり、有茎器を含むことや二等辺三角形状を呈する形状など、前期の特徴が強いといえる。

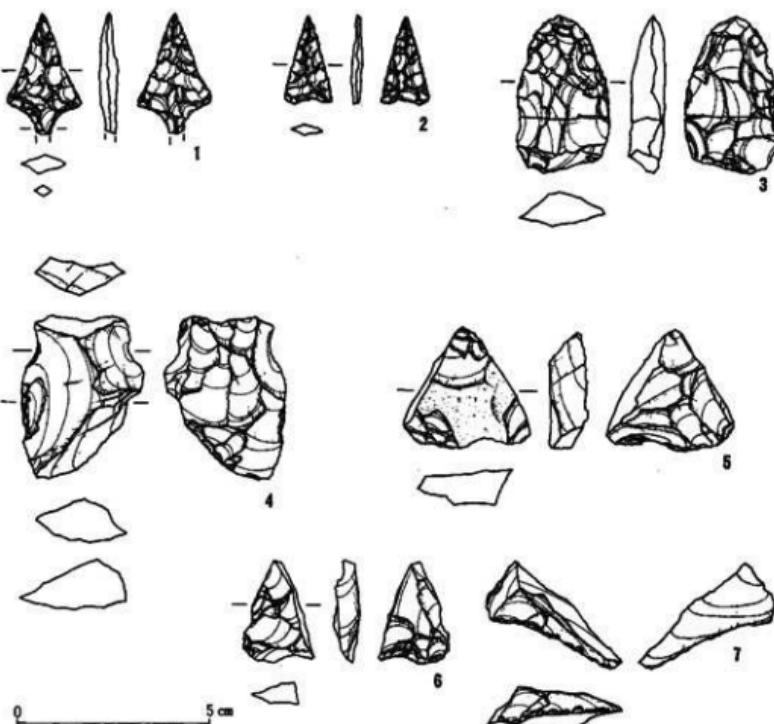
3は、チャート製の尖頭器である。素材剥片を粗い調整で形状を整え、さらに周縁部に微細な調整を加え製品としている。

4は、チャート製の石匙である。素材剥片の打面をそのまま残し、打面付近の両側縁に一回の剥離により抉りを作出している。刃部の調整は密ではなく極めて部分的である。

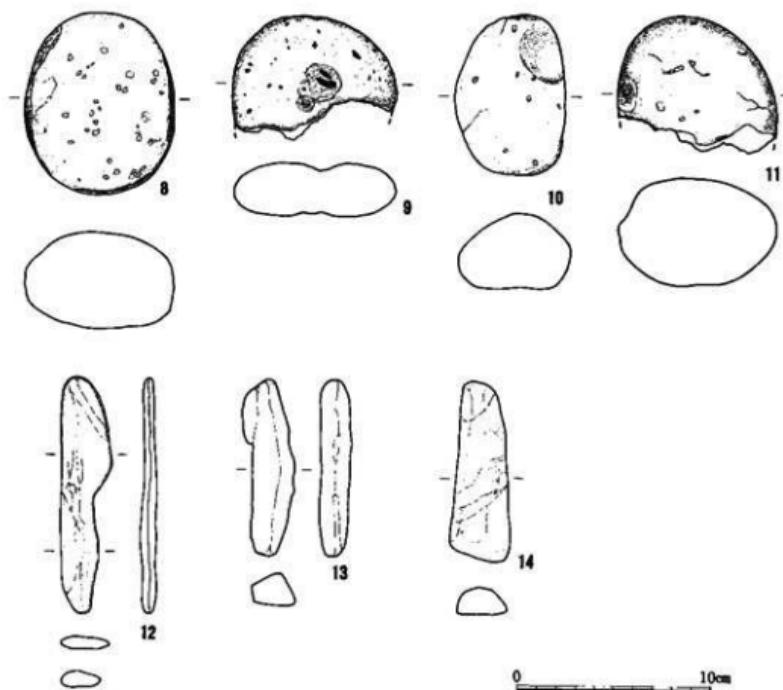
5、6は、チャート製の調整痕の認められる剥片である。5は剥片剥離工程の初期の段階に作出された剥片の末端部を折断、除去し、全体に調整が加えられる。石器の作出を意図したのか、形状は石器と酷似する。6も同様の調整が施され、石器製作技術を垣間みることができる。

7はチャート製の使用痕の認められる剥片である。剥片の末端部に使用による剥落痕がみられる。

8～11は磨石である。8の石英斑岩製以外はすべて安山岩製である。8、9は全体によく研



第45図 002B号住居路出土石器(1)



第46図 002B号住居跡出土石器(2)

第22表 002B号住居跡出土石器表

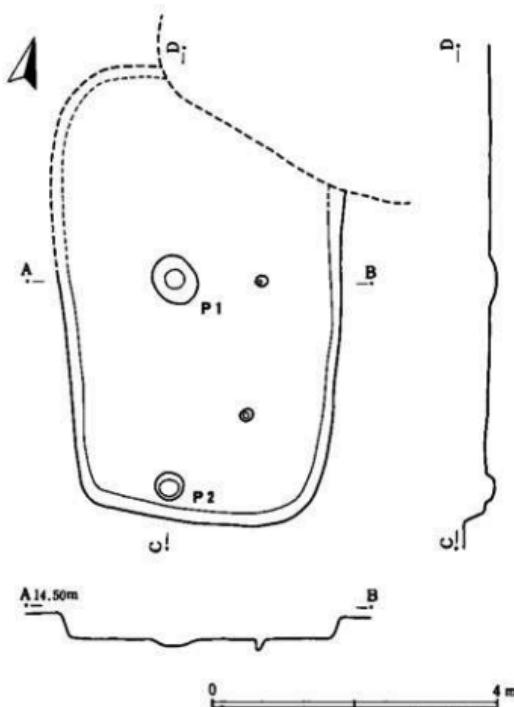
博 団 番 号	遺 物 番 号	形 態	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(㌘)	
46図1	002, 1215	石 破	チ ャ ー ト	3.1	1.9	0.46	1.72	至部分。
2	002, 1638	石 破	チ ャ ー ト	2.25	1.3	0.3	0.62	
3	002, 1216	尖 端 器	チ ャ ー ト	4.3	2.45	0.97	10.18	
4	002, 1212	石 破	チ ャ ー ト	4.2	3.2	1.3	16.89	
5	002, 1315	調整板ある剝片	チ ャ ー ト	3.0	3.3	0.94	9.78	原石剥離板。折断後用板に調整。
6	002, 761	調整板ある剝片	チ ャ ー ト	2.65	1.9	0.65	2.98	
7	002, 1355	使用痕ある剝片	チ ャ ー ト	3.9	1.5	0.94	3.96	末端部に使用痕。
46図8	002, 729	磨 石	石英 岩	9.7	7.9	4.95	545.2	被熱。
9	002, 769	磨 石	安山岩	8.5	6.7	2.81	182.41	被熱。
10	002, 1529	磨 石	安山岩	8.4	5.5	3.83	275.93	被熱。
11	002, 1502	磨 石	安山岩	7.5	8.3	5.66	403.1	被熱。
12	002, 1616	敲 破	石英 玻 璃	12.1	2.7	0.87	32.6	微細な敲打痕。
13	002, 1564	敲 破	石 チ ャ ー ト	9.1	2.4	1.5	47.97	微細な敲打痕。
14	002, 1551	敲 破	石 磨 床 岩	9.3	3.2	1.45	63.84	微細な敲打痕。

磨され、9にいたっては表裏面に凹みがみられる。10, 11は片面もしくは一部が磨かれており、形状も不定形である。

12～14は棒状礫を使用した敲石である。12は流紋岩製の扁平礫の一端に微細な敲打痕がみられる。13はチャート製で、やはり棒状礫の一端に微細な敲打痕がみられる。14は凝灰岩製で、上下両端に微細な敲打痕がみられる。

002C号住居跡（第47図）

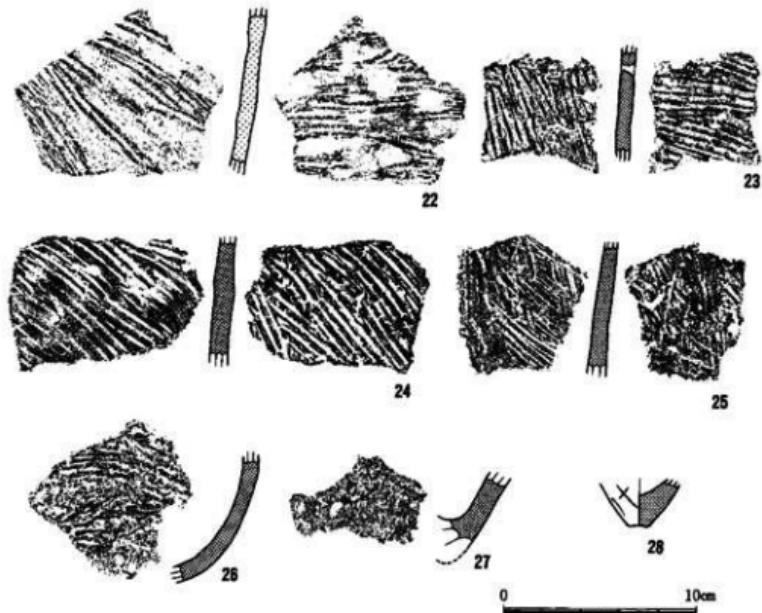
遺構 002B号住居跡の南に重複する。形状は隅の丸い長方形を呈し、 $6.2 \times 4.0\text{m}$ の規模を有する。覆土は002号住居跡全体にいえることだが、やや赤みのかかった暗褐色土が上層にあり、下部に向かって明褐色化する。床面は平坦だが、踏み締められた様子はない。住居跡の長軸上に、それぞれ径60cm, 40cmを測るP1, P2が存在するが、深さはいずれも浅く、10cm前後である。遺物は、鵜ヶ島台式土器片をはじめ、条痕文のみ施される土器片も多く検出された。本跡は、鵜ヶ島台式期を中心とした縄文時代早期後半に存在したものと思われる。



第47図 002C号住居跡実測図



第48圖 002C号住居路出土土器(1)



第49図 002C号住居跡出土土器(2)

出土遺物

a. 土器 (第48図, 第49図, 図版31)

本跡内覆土中から出土した土器片は、約370点を数える。やはり条痕のみ施されるものが圧倒的に多く、全体の6割以上を占めるが、縄ヶ島台式の有文土器も約1割存在する。1～7は野島式土器である。野島式土器は、本跡からは9点が出土している。1は口縁下に横位の細隆起線を施し、口唇下にはアナグラ属貝殻復縁を連続して押圧している。内面は斜位の条痕が残る。2も口縁下に細隆起線を施す。口唇下の刺突文は細かく、貝殻復縁によるものと思われる。表裏面ともに条痕は残されている。3, 4は口縁下に細隆起線による区画文を施す典型的なタイプ。いずれも条痕は裏面に残され、胎土中の纖維量は少ない。5, 6は細隆起線により、意匠文風の文様が施されている。いずれも内面の条痕は磨消されている。8～18は、縄ヶ島台式土器である。8のみ細隆起線を主体に文様が施されるもので、細隆起線上の要所には円形竹管による刺突文がみられる。9以下のほとんどは、沈線により直線的な幾何学文を作出しているが、無文帶以外の充填部は10, 16のように格子目状に施すものも存在する。また17, 18では、区画線としての沈線が省略される傾向にあり、17では充填文のみが残ったような印象を受ける。なお、内面の条痕は17には明瞭に残存するが、18では磨消されている。19～25は、条痕のみ施

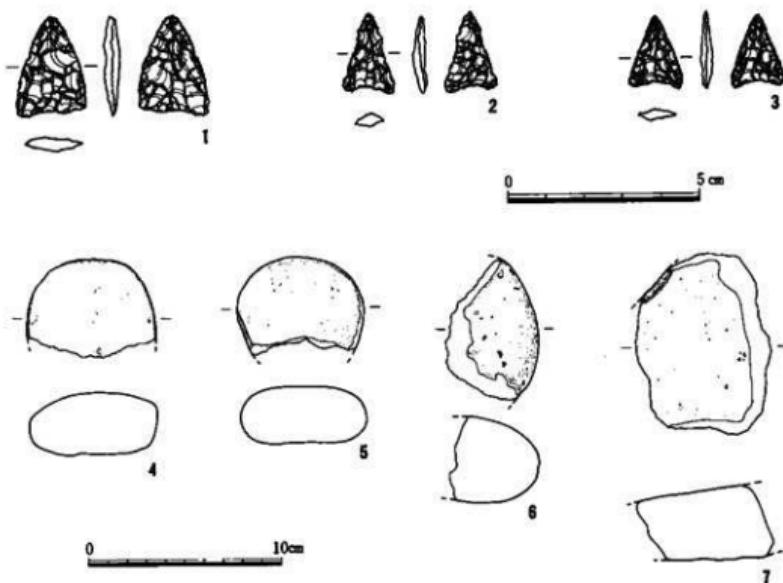
されるものである。図示したすべてのものが、表裏面に条痕を有する。19, 20の口唇部は、やや内側にそれがたような形状である。22～25は胴部片である。23は欠損部にかかるが補修孔を有している。胎土中の繊維量は、22が少ない他はどれも多く、脆弱な感じさえする。26～27は、尖底部である。26は丸みを帯びた器形のもので、表裏面に条痕が施されるが、裏面のそれは弱い。27は無文のもの、28は細い擦痕状の沈線が認められる。

b. 石器（第50図、第23表、図版42）

1～3は石鐵である。1は黒曜石製で、平面形は丸みを帯びた二等辺三角形状を呈する。調整は全面にわたる。2は黒曜石製で、二等辺三角形状を呈する形状である。先端部付近がやや肩が張るような感がある。調整は全面にわたり密に施されている。3はチャート製で、全面に密に調整が施される。平面形状は二等辺三角形状を呈する。

4～6は、いずれも安山岩製の磨石である。全面がよく磨かれているが、表面あるいは裏面に凹みをもつものはない。被熱し色調は赤みを帯びる。

7は、安山岩製の石皿である。表裏面共によく磨かれている。被熱している。



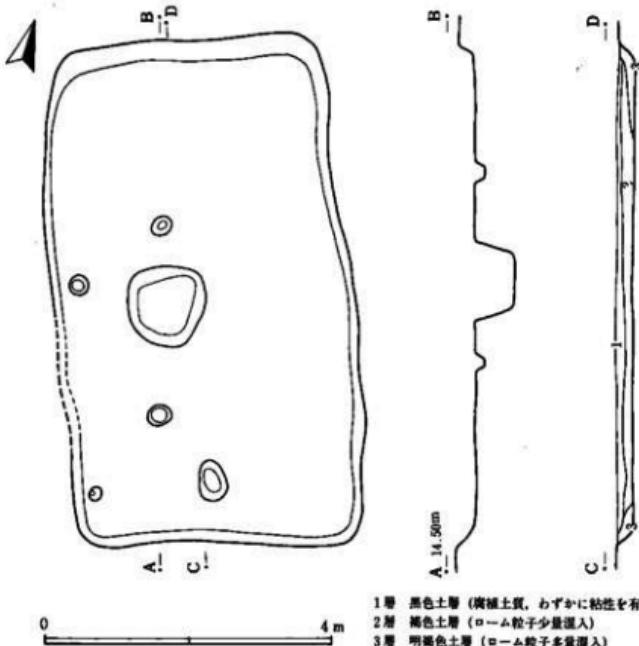
第50図 002C号住居跡出土石器

第23表 802C号住居跡出土石器表

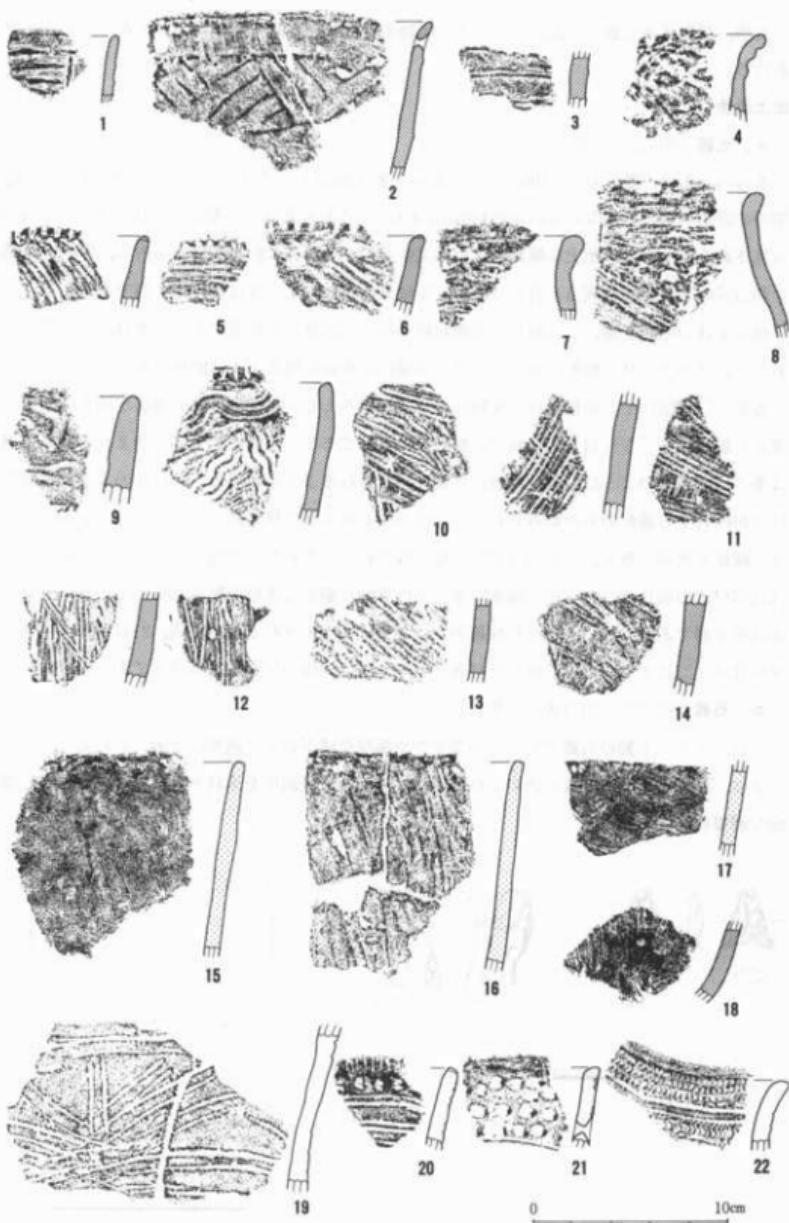
神 印 番 号	遺 物 番 号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
50回1	002, 885	石	黒 曜 石	2.55	1.8	0.4	1.81	
2	002, 405	石	黒 曜 石	2.1	1.4	0.38	0.73	
3	002, 1188	石	チ ヤ ー ト	1.95	1.4	0.3	0.62	
4	002, 1697	磨	石 安 山 岩	5.3	6.7	3.33	129.23	被焼。
5	002, 422	磨	石 安 山 岩	4.9	6.6	3.2	128.71	被焼。
6	002, 1670	磨	石 安 山 岩	6.4	6.0	4.4	178.37	被焼。
7	002, 374	石	石 安 山 岩	9.35	6.95	3.8	343.8	被焼。

003号住居跡（第51図、図版7-3）

遺構 002号住居跡群の東に隣接して位置する。形状は長方形を呈し、6.9×4.1mを測る。壁は傾斜しながら立ち上がり、掘り込みの深さは全体に20~25cmを測る。覆土は基本的に2層に分けられ、上位に黒色土、下位に褐色土の堆積が認められた。壁付近は、三角堆積状に明褐色土層がみられた。床面はわずかに凹凸がみられるが、特に踏み締められた様子はない。住居の中央付近には、径約1mを測り、深さ60cmに近い大きなピットが存在する。他に、径30cmほどの柱穴状のピットが5か所に掘られているが、深さはどれも20cm以内の浅いものである。遺物は、条文のみ施される土器片と、胎土中に纖維を含む無文の土器片がほぼ同率で、100点ほど出土



第51図 003号住居跡実測図



第52圖 003號住居跡出土土器

した他、浮島式系土器片も混入している。本跡もやはり縄文時代早期後半に存在したものと思われる。

出土遺物

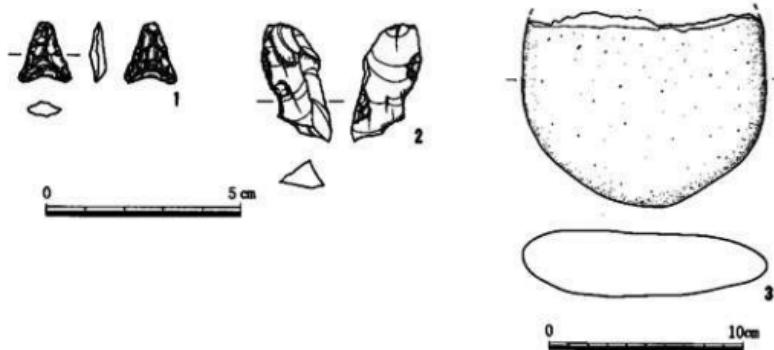
a. 土器 (第52図、図版32-1, 2)

本跡内からは、覆土中から300点に近い数の土器片が出土しているが、小片の割合が多く、時期等の詳細判別のできないものが約100点含まれる。これらを除いて割合を算出すると、条痕のみ施されるのものと、胎土に纖維を含む無文のものがいずれも約4割ずつを占め、野島式、鶴ヶ島台式の有文土器は両方を合わせても5%に満たない。1～3は野島式土器である。1, 3は横位主体の細隆起線、2は斜位の細隆起線を用いて区画文を形成する。内面は、口縁部片である1, 2がナデ状に整形されるが、3には横位の条痕が残る。4は磨耗が激しいが、外反する器形の口縁部片で、斜格子状の沈線による文様がみえる。裏面は縦位の条痕が残る。茅山下層式と思われる。5～14は、条痕のみ施されるものである。全体に胎土中に含まれる纖維の量は多く、7や8のように口唇部付近が外側に屈せられるような器形と、逆に10のように口縁部付近が内弯する器形のものがみられる。10は条痕が流水状に施される。15～17は、胎土中に少量の纖維を含み、無文、あるいは整形の際に残されたと思われる擦痕を認めるものである。18は底部付近の破片で、胎土中の纖維が多い。内外面に細かな条痕が施されている。19以下は浮島式系土器である。19, 20は平行沈線を主体に文様が作出される浮島I式、21は刺突文主体の浮島II式、22はずらしながら施した貝殻文上を、平行沈線が区画する興津式である。

b. 石器 (第53図、第24表、図版42)

1は、チャート製の石鏃である。小型でやや部厚な感がある。調整は全面にわたる。

2は、黒曜石製の調整痕の認められる剝片である。縦長剝片を素材とし、剝片の両側縁に微細な調整痕がみられる。



第53図 003号住居跡出土石器

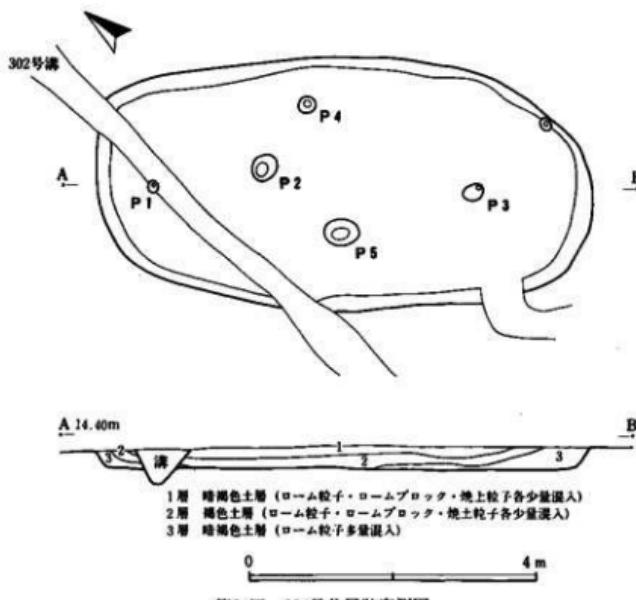
3は、安山岩製の磨石である。扁平鍛を素材とし、両面がよく磨かれているが、周縁の磨きはさほど施されていない。被熱し色調は赤みを帯びる。

第24表 003号住居跡出土石器表

件 固 番 号	遺 物 番 号	器 種	石 質	計 測 値				備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	
53號1	003, 178	石 盤	チ ヤ ー ト	1.5	1.3	0.4	0.66	
2	003, 208	圓盤或ある片 石	風 磨 石	3.05	1.8	0.7	3.32	側縁に倒壁痕。
3	003, 79	磨 石	安 山 岩	10.0	12.7	3.45	620.8	被熱。

004号住居跡（第54図、図版8-1）

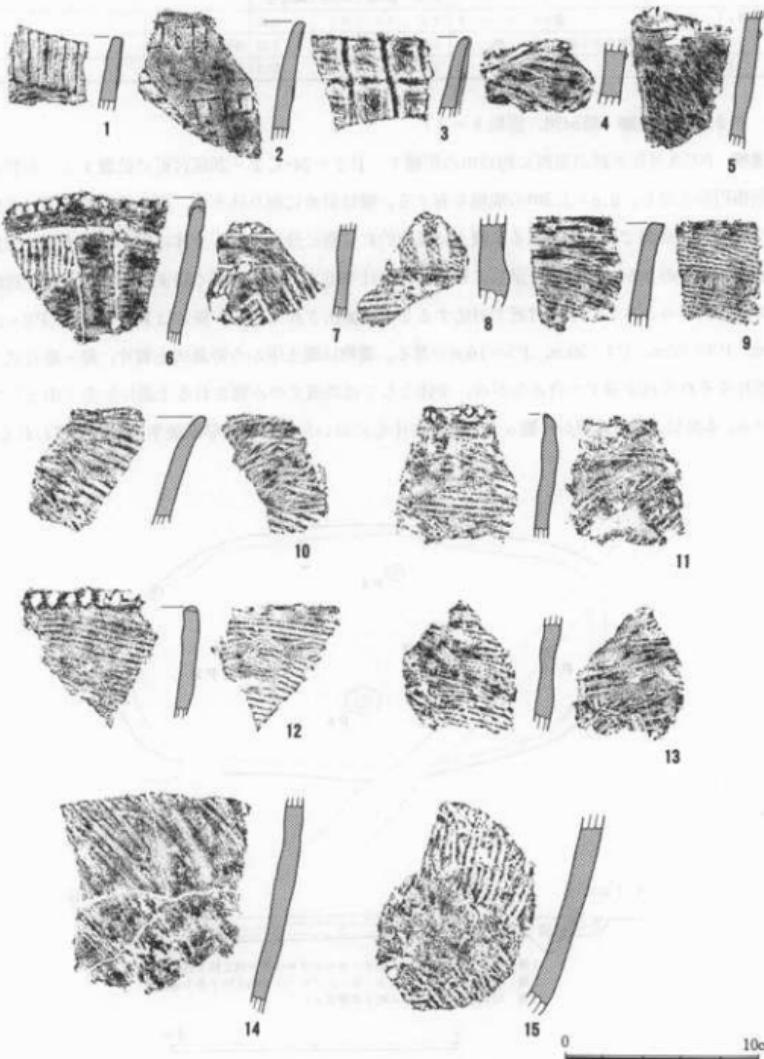
遺構 002A号住居跡の南西に約12mの距離で、B2-24・C2-20区付近に位置する。形状は長楕円形を呈し、6.8×3.5mの規模を有する。壁は斜めに掘り込まれ、掘り込みの深さは北側で約20cm、南側で約30cmを測る。覆土は基本的に3層に分けられ、全体に細かな焼土粒を少量含み、赤みのかかった色調を呈している。床面は平坦で、比較的固く締まる。ピットは住居跡の長軸上から3本と、中央付近で対応する2本が検出されている。深さはP1=21cm、P2=50cm、P3=32cm、P4=30cm、P5=16cmを測る。遺物は覆土中から野島式土器片、鶴ヶ島台式土器片をそれぞれ少量ずつ含みながら、全体としては条痕のみ施される土器片が多く出土している。本跡は、野島式期から鶴ヶ島台式期を中心においた縄文時代早期後半のものと思われる。



出土遺物

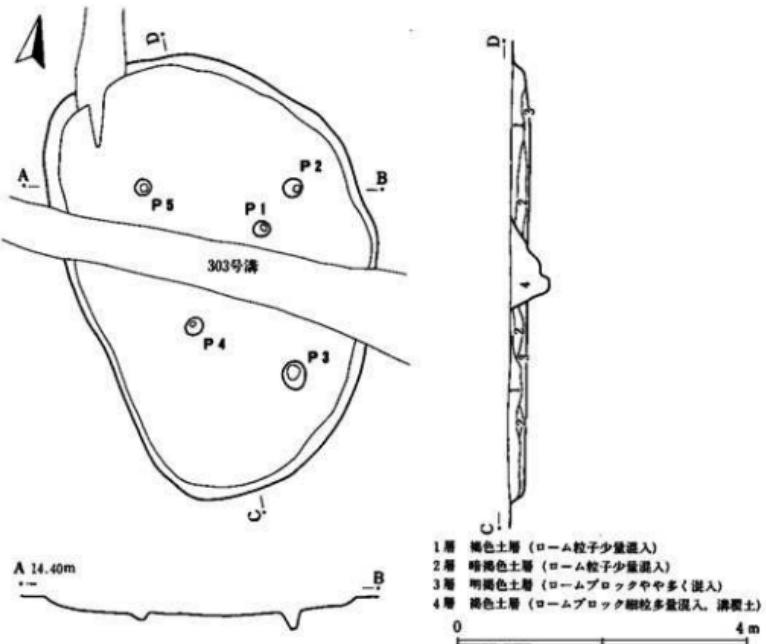
a. 土器 (第55図、図版33-1)

覆土中から条痕文系土器が約90点出土している。このうち、条痕のみ施される土器片が全体の6割以上を占める。また、野島式、鵜ヶ島台式の有文部の破片が約1割存在する。1～5は、



第55図 004号住居跡出土土器

細隆起線による区画文が施される野島式土器である。1は緩い波状口縁を呈するもので、縦位に比較的幅の狭い間隔で区画文を施す。裏面は横位の条痕が残る。2も緩い波状口縁を呈している。区画文は、口縁下部に横位、胴上半部に斜位で、梯子状となる。裏面は条痕が磨消されている。3は平縁に近いが、やはり緩い波状を呈する口縁である。隆起線は比較的太く格子状に施される。裏面には横位の条痕が残る。4は胴部片で、細隆起線により菱形状の区画がなされる。5は区画帯の下部付近のものである。表裏面ともに細かな条痕が残されている。6、7は鶴ヶ島台式土器である。いずれも沈線文を主文様として、幾何学的な文様を作出し、沈線の接点には円形の刺突文が加えられている。8は胴部の段部付近のもので、下位は横位の条痕文であるが、上位には単節R L 沈線文を地文としてヘラ状工具の先端を用いた幅広の沈線が施されている。茅山下層式と思われる。9以下は条痕文のみ施されるものである。9、10は外反する器形の口縁部片で、条痕は表裏に施されている。口唇上は9の方が平坦であるが、いずれも刻み目等は持たない。11は口唇部断面が尖り気味となるものである。器形的にはやや内弯し、口唇上には刻み目を有する。12も器形的にやや内弯するものである。13以下は胴部片である。13のみ表裏に条痕が認められる。14の裏面は条痕を磨消している。15は底部付近の破片である。内面は条痕を磨消した際の擦痕が残る。



第56図 006号住居跡実測図

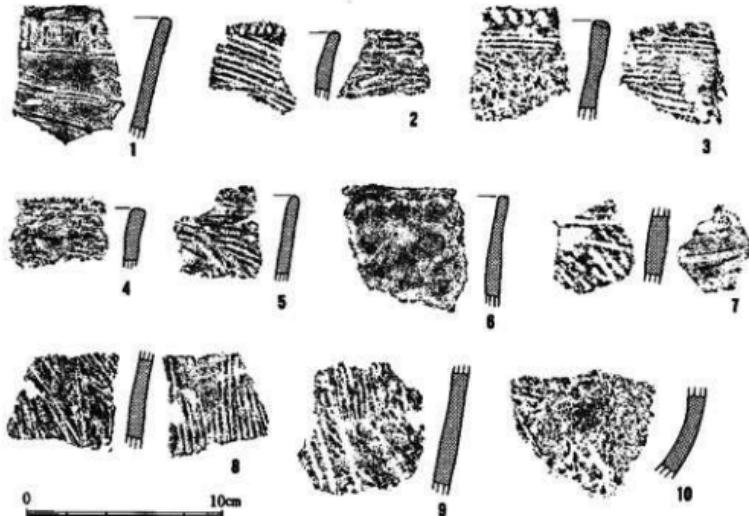
006号住居跡（第56図、図版8-2）

遺構 004号住居跡の南西に約4mを測る距離に位置する。住居跡の中央部は、東西に走る後世の溝により破壊されている。形状は稍円形に近く、 $6.0 \times 4.1\text{m}$ の規模を測る。壁は緩く傾斜しながら掘り込まれ、掘り込みの深さは約30cmである。覆土は基本的に3層で、上位から褐色、暗褐色、明褐色の色調を呈している。床面近くの明褐色土層には、ロームブロックが比較的多く含まれていた。床面は比較的平坦で、固く締まる。ピットは5か所に検出されている。ピットの深度は、P1=30cm, P2=22cm, P3=18cm, P4=10cm, P5=8cmである。検出された遺物は少量で、条痕文のみ施される土器片と、胎土中に纖維を含む無文の土器片が主体的に出土した他、石鐵が1点出土している。なお、遺物はほとんどが覆土の上層から検出されている。

出土遺物

a. 土器（第57図、図版32-3）

覆土中から約70点の土器片が出土している。1は口縁下に細隆起線による区画線と、胸部に横位の細隆起線が施されている野島式土器である。裏面は横位の条痕が残る。2, 3は表裏面に条痕が施されている口縁部片である。いずれも口唇上には刻み目が施される。4は器形的にやや外反するものだが、表裏面とも口縁下の条痕は磨消されている。5は裏面の条痕が磨消されて擦痕状となる。6は表裏面ともに無文のものである。整形はひじょうにていねいで、口唇上は平坦である。7は表裏に条痕を施し、表面には地文の条痕に加えて粗い沈線を施している。



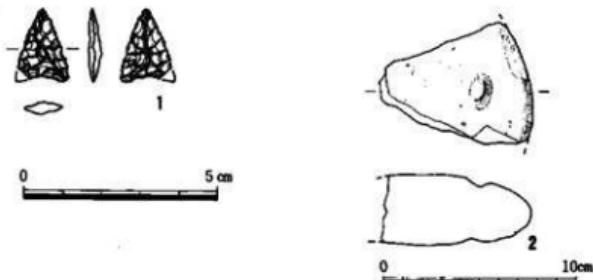
第57図 006号住居跡出土土器

8, 9は表裏条痕の脚部片。9の裏面は条痕が磨消される。10は底部付近の破片である。磨耗が激しいが、表面のみ一部条痕が認められる。

b. 石器（第58図、第25表、図版42）

1は、チャート製の石鏃である。片側の基部が欠損している。調整は密に施され、ていねいな作りである。

2は、安山岩製の磨石である。全面にわたりよく磨かれ、表裏面の縁辺に近い部位に凹みがみられる。



第58図 006号住居跡出土石器

第25表 006号住居跡出土石器表

査定 番号	遺物番号	器種	石質	計測値			備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	
58891	006.7	石鏃	チャート	1.9	1.3	0.36	0.6
2	006.6	磨石	安山岩	6.4	7.8	3.64	223.25 被削。

2. 土坑とその出土遺物

a. 土坑

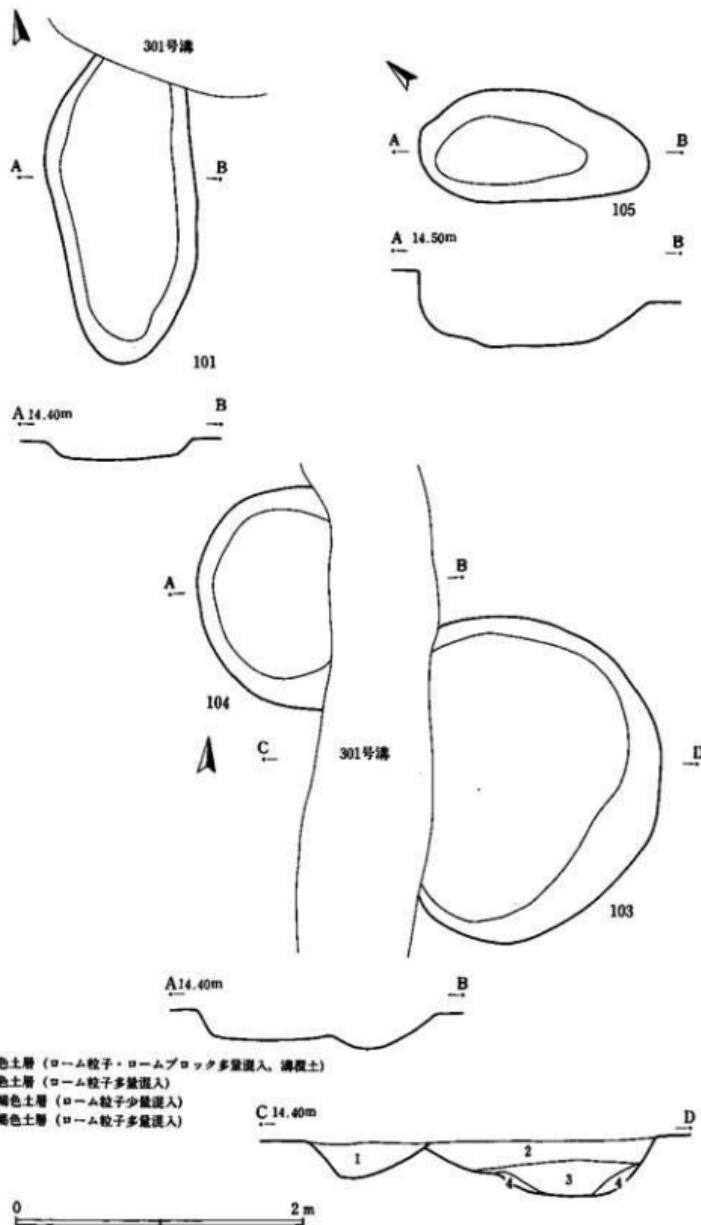
縄文時代の土坑は、総数39基が検出されている。炉穴群と同様に、多くのものが調査区の東側に分布している。

1 0 1号土坑（第59図、図版9）

調査区北部、C 2-00区に位置する。北側の壁は301号溝によって破壊されている。長楕円形に近い形状を呈し、規模は推定で 2.4×1.0 mを測る。掘り込みの深さは約10cmと浅く、坑底は凹凸が激しいものの、深さは一定している。遺物は、条痕文系土器の小片が少量出土している。

1 0 3号土坑（第59図）

101号の南東に約5mの距離を有するC 2-11区に位置する。西側は301号溝により破壊されている。円形を呈し、径2.2mを測る。坑底は中央よりやや東寄りに深い面があり、擂鉢状に傾



第59図 土坑実測図(1)

斜する。遺物は、覆土中から条痕文系土器片が10点ほど出土している。

104号土坑（第59図、図版9）

103号の西に隣接した位置である。形状は円形で、径1.4mである。掘り込みの深さは25cmで、坑底は平坦で固く締まっている。遺物は、細い沈線により格子目状の文様を施す鶴ヶ島台式土器片の他、条痕文系土器小片がわずかに出土した。

105号土坑（第59図、図版9）

C 1-42区に位置する。梢円形を呈し、 1.6×0.8 mの規模を有する。東側を002号遺構と接するが、本跡が002号を掘り込んでおり本跡の方が新しい。坑底は中央部がやや低い。覆土は黒色土の單一層であるが、少量のロームブロックが含まれていた。遺物は鶴ヶ島台式土器片の他、表裏に条痕の施された土器片が主体となる。

106号土坑（第60図）

C 2-04区に位置する。径0.5mを測る小型の土坑である。深さも10cmと浅いものである。遺物はやはり、鶴ヶ島台式土器片と少量の条痕文系土器片が出土している。

107号土坑（第60図、図版9）

106号の南に2mの距離で、C 2-14区に位置する。梢円形を呈し、 1.2×0.9 mの規模を有する。坑底は中央に向かって傾斜し、北壁下に坑底を10cm掘り下げたピットを有している。遺物は、条痕文系土器が主体である。

108号土坑（第60図、図版9）

C 2-44区に位置する。梢円形を呈し、 1.9×1.0 mの規模を有する。坑底の東側には、壠鉢状に窪むピットを有している。遺物は条痕文系土器の小片が主体となるが、前期の興津式、後期の加曾利B式土器片が混入する。

109号土坑（第60図）

C 3-03区を主体に位置する。南西側が張り出す長梢円形を呈し、 3.2×1.4 mの規模を測る。南西の壁に接するように2か所のピットが存在する。いずれも坑底からの深さは、30cm以上を測り、しっかりとした掘り込みである。遺物は、細縫起線文の施される野島式土器片と、表裏に条痕文が施される土器片が主体となる。

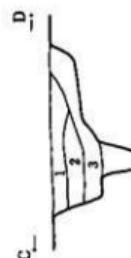
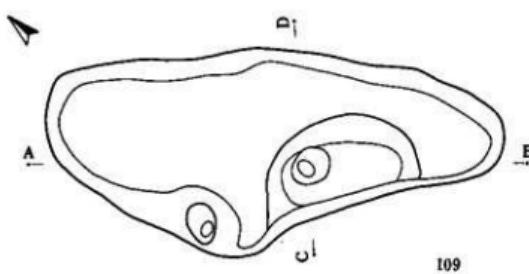
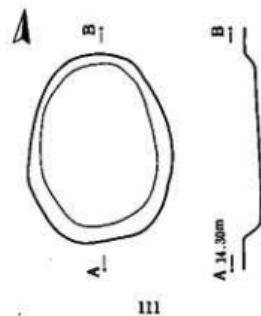
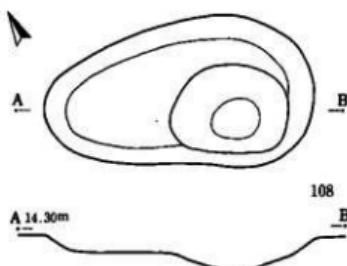
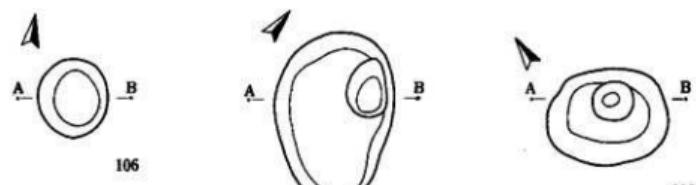
110号土坑（第60図）

縄文時代遺構群の中央部に近いD 2-12区に位置する。梢円形を呈し、 0.8×0.7 mの規模を有する。坑底の1か所に、坑底からの深さ10cmの浅いピットを有する。出土遺物はない。

111号土坑（第60図、図版9）

D 2-30区に位置する。梢円形を呈し、 1.3×1.0 mの規模を測る。掘り込みは浅く、確認面から10cmほどである。坑底は平坦である。出土遺物はない。

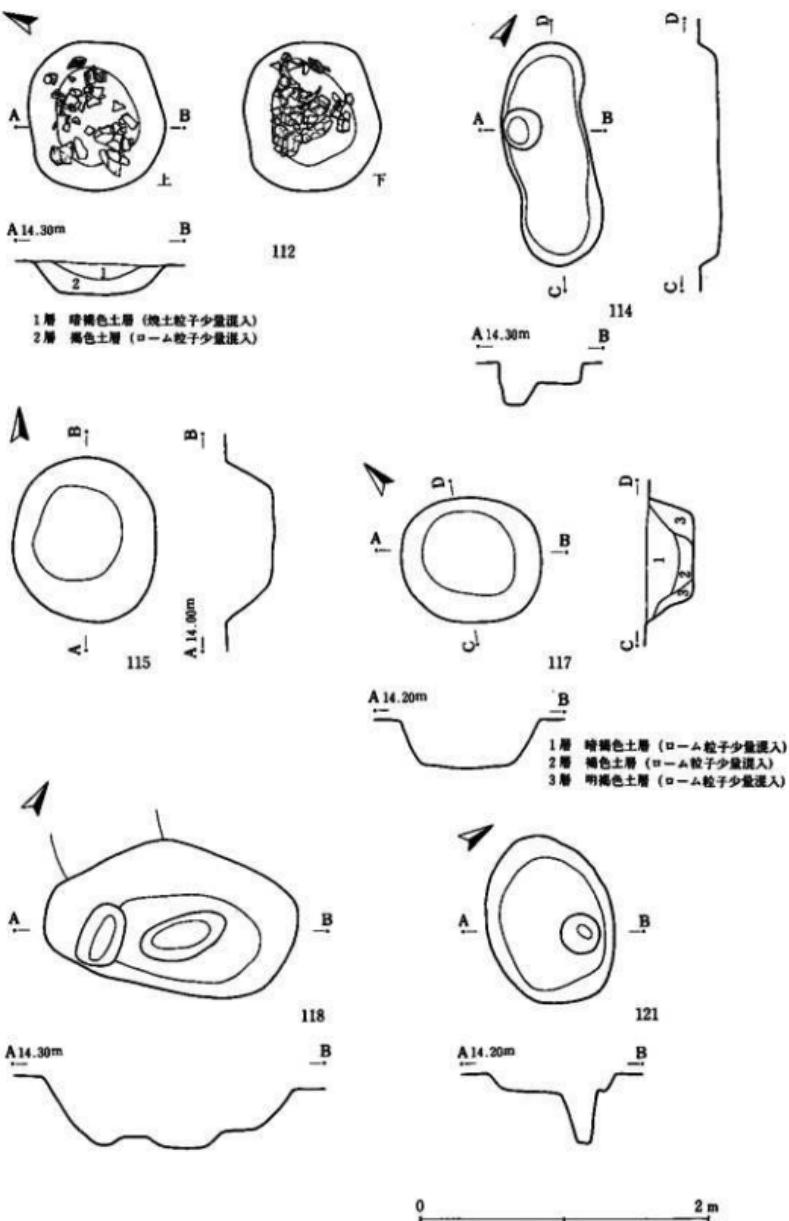
112号土坑（第61図、図版9）



1層 棕褐色土層 (ローム粒子少量混入)
2層 暗褐色土層 (ローム粒子少量混入)
3層 明褐色土層 (ロームブロック少量混入)

0 2 m

第60図 土坑実測図(2)



第61図 土坑実測図(3)

D 3-01区に位置する。平面形は円形に近く、径1.0m、深さ20cmの規模を有する。坑底から、縄ヶ島台式の深鉢形土器3個体以上が破片となって出土した。覆土は2層に分けられ、上位の暗褐色土層中には少量の焼土粒の混入が認められた。遺物は上半部が復元できた縄ヶ島台式土器2個体及び、口唇下から全面に条痕文の施される土器3個体等、小規模な土坑としては、多量の土器が検出されており、特殊な性格を持つ土坑の可能性が高い。

114号土坑（第61図）

D 2-40区で204号炉穴に隣接して位置している。長楕円形を呈し、1.6×0.6mの規模を有する。掘り込みの深さは15cmで、南西壁に接してさらに15cm掘り下げたピットを有する。遺物は、条痕文系土器片が少量出土したが、図示し得るものはなかった。

115号土坑（第61図、図版10）

調査区北部で東側の台地縁辺に近いD 1-24区に位置する。円形を呈し、径0.5m、深さ35cmの規模を有する。壁の掘り込みは比較的しっかりとしているが、坑底には凹凸がある。出土遺物はない。

117号土坑（第61図、図版10）

調査区北部の縄文時代遺構群の中央付近にあたるD 2-22区に位置する。円形を呈し、径1.0m、深さ30cmの規模を有する。覆土は、全体に暗い色調を呈し、自然な堆積状況を呈していた。出土遺物はない。

118号土坑（第61図、図版12-2）

D 2-43・44区に位置し、119号炉穴を掘り込んでいる。楕円形を呈し、1.7×1.0mの規模を有する。坑底までの深さは40cmを測るが、坑底には中央と南西壁下にそれぞれ坑底からの深度10cmのピットを有している。遺物は平底を呈する条痕文系土器片をはじめ、沈線で条痕文上に文様を施す茅山式土器片の出土がある。

120号土坑（第62図、図版10）

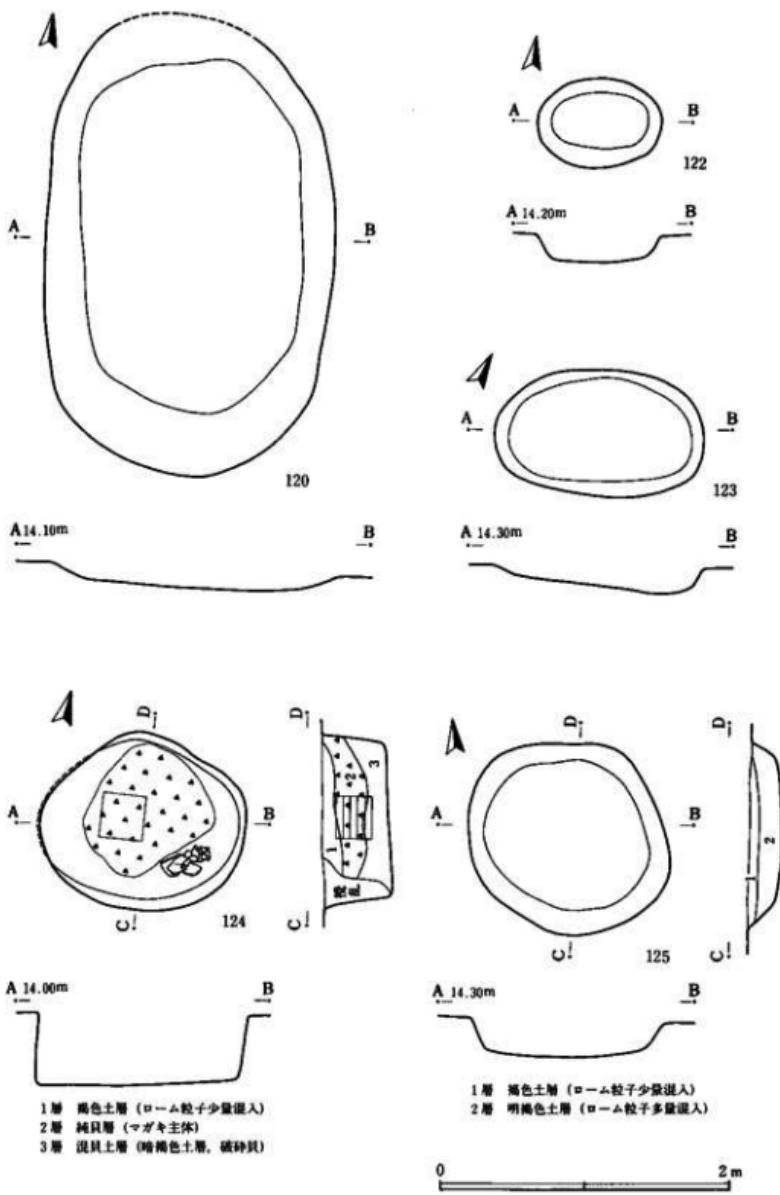
調査区東側の台地縁辺に近いE 2-10区に位置する。楕円形を呈し、3.2×2.0mの規模を測るが、掘り込みは浅く10cmに満たない。覆土は單一層で、やや赤みを帯びた褐色土が堆積していた。坑底は凹凸が激しい。覆土中からの遺物は、比較的多くの条痕文系土器片が出土し、沈線区画による幾何学的な文様の縄ヶ島台式土器片が含まれている。

121号土坑（第61図）

110号土坑の東に近接するD 2-12区に位置する。卵形を呈し、1.2×0.9mの規模を測る。掘り込みは浅く、坑底は平坦だが、北壁寄りに坑底からの深度35cmを測るピットを有する。遺物の出土はなかった。

122号土坑（第62図）

121号土坑の北に近接するD 2-12区に位置する。楕円形を呈し、0.9×0.6mの規模を測る。



第62図 土坑実測図(4)

掘り込みは坑底の中央に向かってやや深くなるが、最大でも20cmを測るのみである。

123号土坑（第62図）

D2-11区に位置する。梢円形を呈し、 $1.5 \times 0.9m$ の規模を有する。坑底は、東側に傾斜して深くなる。掘り込みの深さは、西側で10cm、東側で20cmである。遺物は、胎土中に比較的多量の纖維を含む条痕文系土器片が少量出土している。

124号土坑（第62図、図版10）

調査区東側の台地縁辺に面するE2-41・42区に位置する。平面形は梢円形に近く、 $1.4 \times 1.2m$ の規模を有する。壁は垂直近くに掘り込まれ、西壁はややオーバーハングする。確認面からの深度は50cmを測り、覆土としてカキを主体とする純貝層が認められた。貝層の上面からは表裏全面に条痕文が施される丸底の大型深鉢形土器1個体及び、胎土に纖維を含み内面に擦痕を残す尖底土器等が出土している。

125号土坑（第62図、図版10）

E3-10区に位置する。円形に近く、径1.3mを測る。坑底は中央がやや低く、全体に凹凸を有する。中央部での掘り込みの深さは、30cmを測る。覆土は自然な堆積状況を示している。遺物は、覆土中から石鐵1点が出土している。

126号土坑（第63図、図版10, 11）

D3-23区に位置し、210号（炉穴）の西側を掘り込んでいる。平面形は円形に近いが、北半分の壁の上端部にはテラス状の段を有している。規模は、テラス部を含めて径1.8~2.0mを測り、大型の土坑である。壁は垂直に近く立ち上がり、掘り込みの深さは60cmと深い。坑底は平坦で固く締まり、壁面も堅緻である。覆土中にはロームブロックの顯著な混入はないものの、各層中にローム粒子が含まれ、人為的に埋め戻された可能性もある。遺物は、覆土の3層上面で一括遺物の検出があった他、坑底付近からも大型土器片等の出土がある。出土した土器はすべて、表裏に条痕文のみが施されるものである。本跡は、縄文時代早期後半には類例の少ない、いわゆる小豎穴的な特徴をもっており、他の土坑とは性格的に区別されるかもしれない。

127号土坑（第63図）

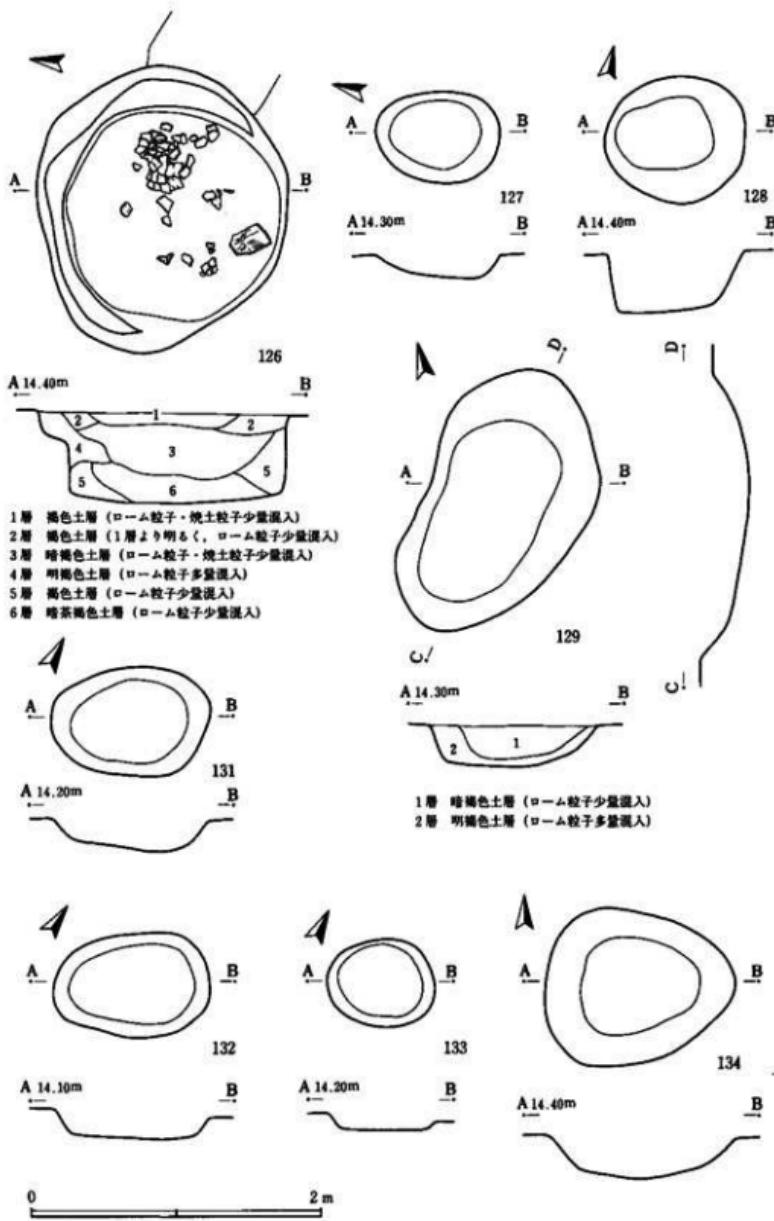
D2-44区に位置する。梢円形を呈し、規模は $0.8 \times 0.6m$ と小さい。坑底は南側が低く傾斜するが、比較的平坦である。遺物は、わずかな土器小片が出土したのみである。

128号土坑（第63図、図版11）

D3-14区に位置する。円形を呈し、径1.0mの規模を測る。坑底は西側の方が低く、壁も急な立ち上がりである。坑底は全体に平坦で、深さは西側で40cmを測る。遺物は、表裏に条痕文のみ施されるものが多く出土している。

129号土坑（第63図）

調査区東側の台地縁辺に近いE3-31区に位置する。平面形は不整な梢円形で、 $1.9 \times 1.1m$



第63図 土坑実測図(5)

の規模を有する。壁及び、坑底ともに緩やかに中央に向かって傾斜し、坑底は軟質である。

131号土坑（第63図、図版11）

129号土坑の東に近接して位置する。橢円形を呈し、 $1.1 \times 0.8m$ の規模を有する。坑底はやや凹凸があり、東に向かって傾斜する。掘り込みの深さは、東側で20cmを測る。

132号土坑（第63図）

調査区東側の台地縁辺部にあたるE 3-12区に位置する。橢円形を呈し、 $1.1 \times 0.7m$ の規模を有する。掘り込みの深さは、20cmを測る。坑底は平坦であるが、やや軟質である。

133号土坑（第63図）

E 2-41区に位置する。平面形は円形に近く、径 $0.6 \sim 0.7m$ を測る小型のものである。掘り込みの深さは、10cmとひょうに浅く、坑底は平坦である。出土遺物はない。

134号土坑（第63図）

D 3-14区に位置する。平面形は卵形を呈し、 $1.3 \times 1.1m$ の規模を有する。坑底は中央に向かって低くなり、壁、坑底ともに軟質である。出土遺物はなかった。

135号土坑（第64図、図版11）

E 4-22区に位置する。橢円形を呈し、 $1.5 \times 0.7m$ の規模を測る。掘り込みの深さは20cmで、坑底は平坦である。

136号土坑（第64図）

D 3-20区に位置する。橢円形を呈し、 $1.8 \times 1.4m$ の規模を有する。掘り込みの深さは20cmと浅い。坑底は平坦だが、軟質である。

137号土坑（第64図、図版11）

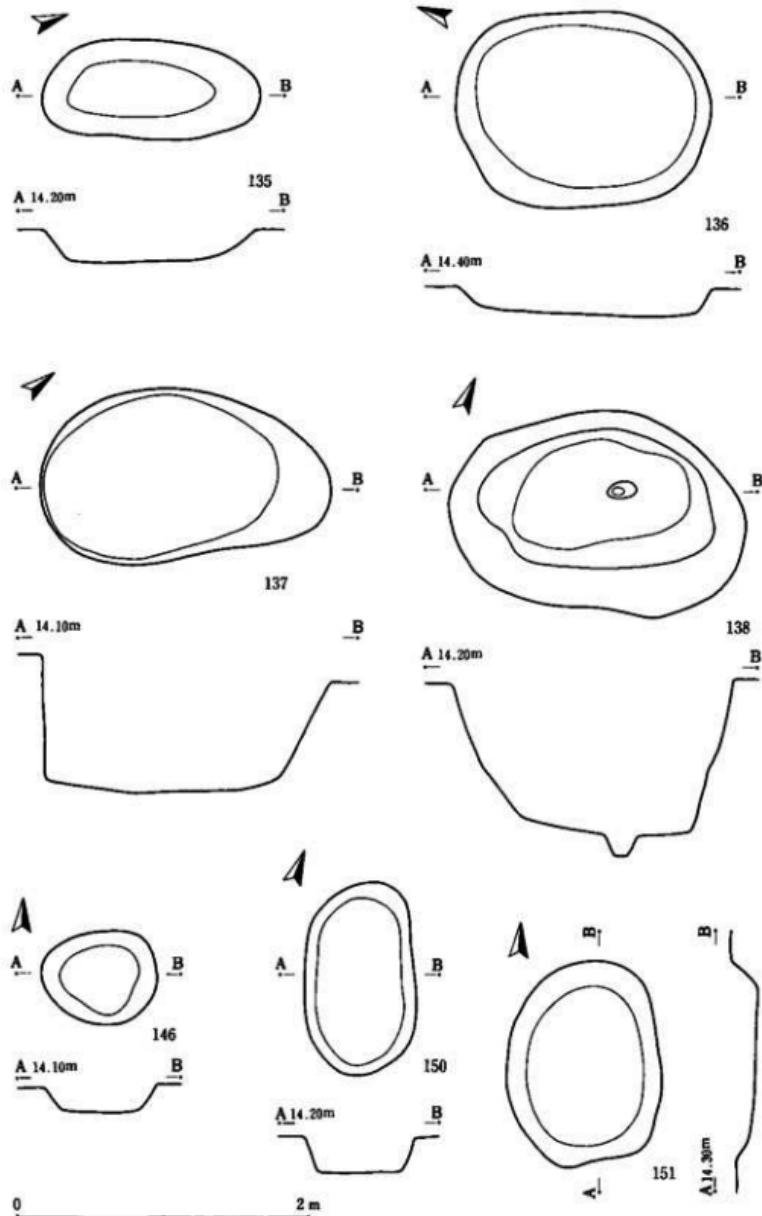
E 4-22・23区に位置する。形状は橢円形に近く、 $2.0 \times 1.2m$ の規模を有する。壁は、北側が傾斜を持つが、南側は垂直に近い。掘り込みの深さは、95cmを測る。坑底はわずかに凹凸があるが、固く締まった状況である。遺物は、覆土の上層から少量の土器片等が出土している。本跡は、その形状と規模から陥し穴と推測される。

138号土坑（第64図、図版11）

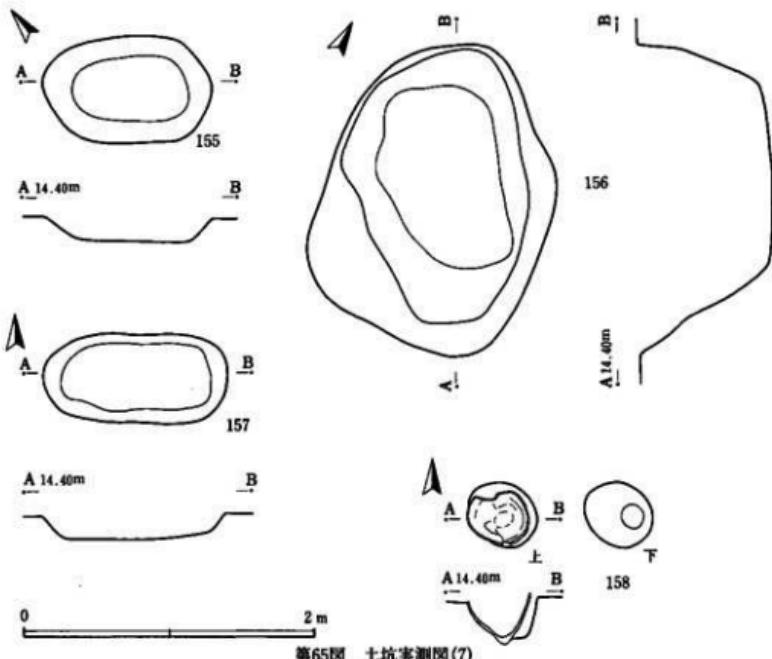
調査区東側の台地縁辺に近いが、調査区北部の縄文時代遺構群とはかなり離れた場所のG 6-11区に位置する。形状は橢円形で、 $2.0 \times 1.4m$ 、深さ $1.1m$ の規模を有する。断面形は壁の中段に傾斜の変換線があるが、基本的には台形状である。坑底は平坦で固く締まり、中央付近に坑底からの深度15cmの小ピットが掘られている。本跡も、規模、形状等から陥し穴としての機能が考えられる。

139号土坑（第64図）

138号土坑の南に6mの距離を測るG 6-20区に位置する。形状は円形に近く、径 $0.7 \sim 0.8m$ 、深さ20cmの規模である。坑底はやや軟質だが平坦で、覆土上面付近から礫等が出土している。



第64図 土坑実測図(6)



第65図 土坑実測図(7)

150号土坑（第64図、図版11）

E 6-14区に位置する。形状は橢円形を呈し、 $1.3 \times 0.8m$ の規模を有する。掘り込みの深さは25cmを測り、坑底にはやや凹凸がある。出土遺物はなかった。

151号土坑（第64図）

410号の南に近接するE 5-23区に位置する。形状はやや不整な橢円形を呈し、 $1.4 \times 1.1m$ の規模である。坑底は北側にやや傾斜し、確認面からの深さは北側で20cm、南側で10cmを測る。

155号土坑（第65図）

C 3-14区に位置する。橢円形を呈し、 $1.2 \times 0.8m$ 、深さ20cmの規模を有する。壁は斜めに緩く立ち上がり、坑底は平坦だがやや軟質である。

158号土坑（第65図、図版11）

155号土坑の西に近接する。形状は不整な橢円形を呈し、 $2.2 \times 1.6m$ 、深さ90cmの規模を有する。断面形は基本的に台形状で、形状の不整は崩落によるものと考えられる。坑底は比較的平坦で、固く締まっている。本跡は形状、規模から陥穴と推測される。

157号土坑（第65図）

156号土坑の西に2mの距離で、C3-12区に位置する。椭円形を呈し、 1.3×0.6 m、深さ15cmの規模を有する。壁の立ち上がりは緩やかで、坑底もやや軟質である。

158号土坑（第65図）

調査区の西南端にあたるB5-41区に位置する。原位置で確認できたのは、条痕文系土器の胴下半部だけであるが、もともとは埋甕状に土器が直立していたものと思われる。周辺の精査を行ったが焼土等の痕跡もなく、単独で検出されたものである。

b. 土坑出土土器（第66図～第73図、図版33-2～図版34）

101号土坑（1） 1は表裏面ともに無文の胴部片である。胎土中の纖維量が多い。

103号土坑（2～4） 2、3はいずれも口縁部が外反気味に開く器形のものである。表面は条痕を磨消して擦痕化し、裏面は横位の条痕が残る。4は表裏面に条痕を有する副部片。

104号土坑（5） 5は細い沈線により格子状の文様を施すものである。沈線の接点等には円形の刺突文を加える。裏面にも密な間隔の条痕が残る。繩ヶ島台式土器である。

105号土坑（6～10） 6は比較的直立する器形の口縁部片で、口唇部はやや内そぎ状となり、表面側の口端にのみ刻み目を有する。7とともに沈線による区画文が施され、集合沈線が充填される。8～10はいずれも表裏面に条痕を施すもので、条痕はどれも比較的深く残る。

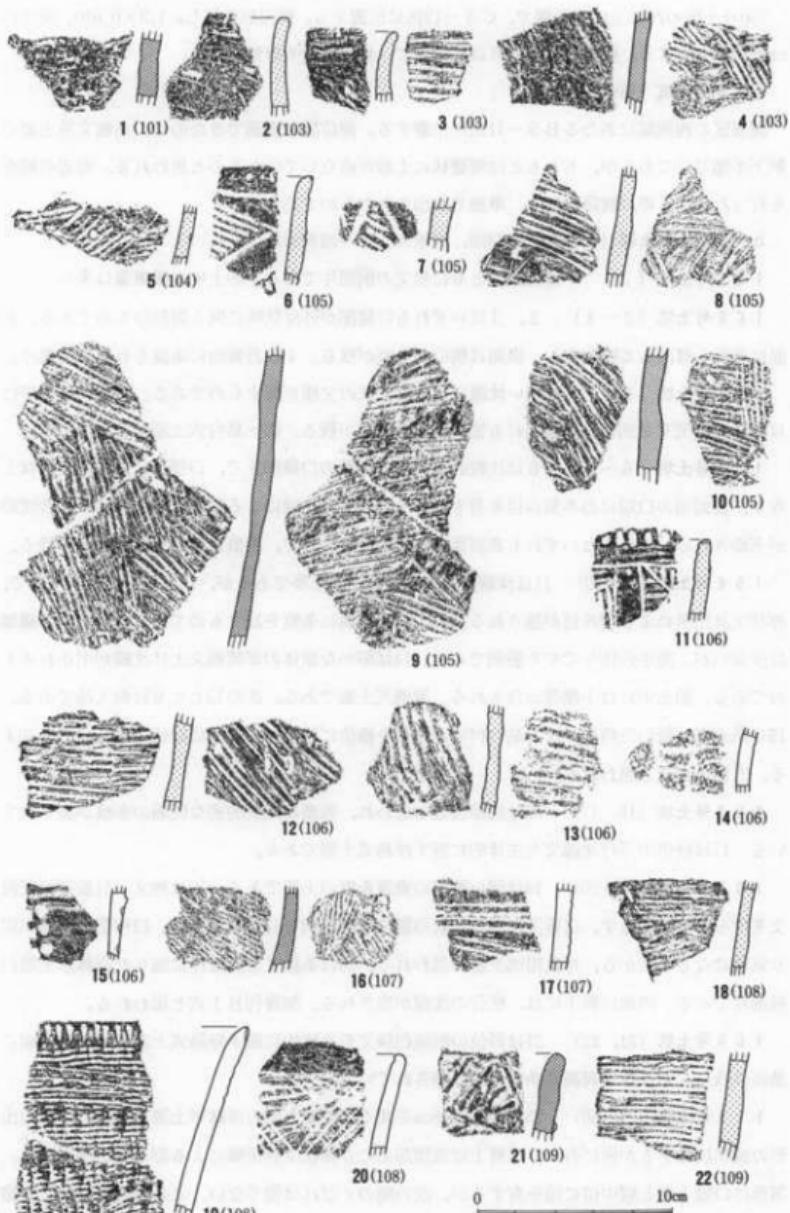
106号土坑（11～15） 11は沈線区画の繩ヶ島台式土器であるが、口唇上は比較的平坦で、棒状工具圧痕による刻み目が施される。12、13は表裏に条痕を施すものである。胎土中の纖維は少ないが、薄手の作りでやや脆弱である。14は細かな原体の单節纏文上に沈線が引かれるものである。胎土中には小穂等が含まれる。諸磯式土器である。次の15とともに混入品である。15は断面形が低い三角形になる貼り付けの隆帯を横位に施し、その下に縦位の刺突文列を加える。五領ヶ台式と思われる。

107号土坑（16、17） 16は底部付近と思われ、表裏に比較的密な間隔の条痕が施されている。17は横位の平行沈線文を主体的に施す浮島式土器である。

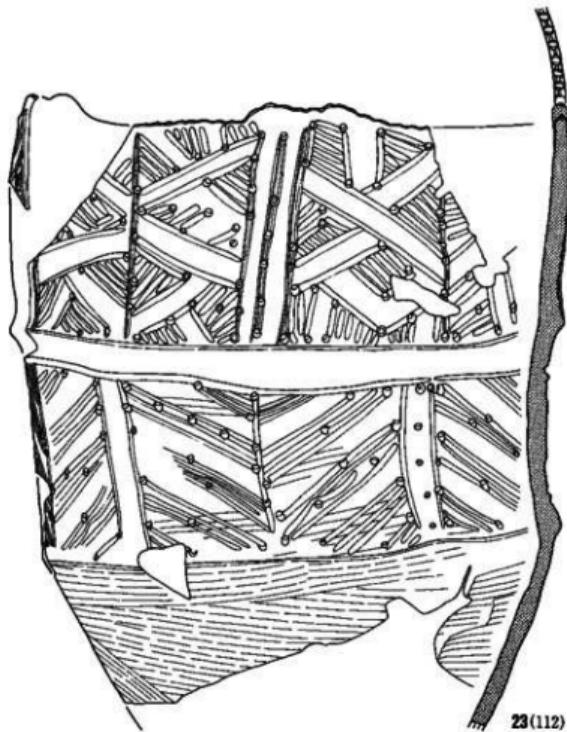
108号土坑（18～20） 18は薄い器壁の表裏条痕の土器である。19は地文に貝殻復縁圧痕文をずらしながら施す。口唇下に刻み目状の縦位短沈線列を有することと、口唇部の断面が尖り気味になることから、浮島III式土器と思われる。20は条線文を無難作に施した深鉢形土器口縁部片である。内面口唇下には、横位の沈線が施される。加曾利B1式と思われる。

109号土坑（21、22） 21は斜位の細縦起線文を主体的に施す野島式土器である。内面に条痕は残らない。22は表裏に条痕が深く施されている。

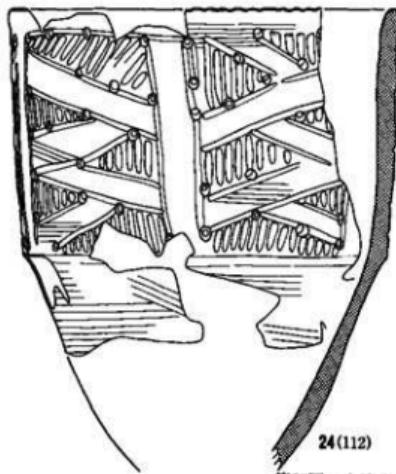
112号土坑（23～30） 23は口径28.8cmを測る比較的大型の深鉢形土器である。2連の山形の波状口縁を5か所に有し、口唇上は波頂部上にも棒状工具圧痕による刻み目が施される。器形は口縁下部と胴中位に段を有するが、段の間のくびれは強くない。この段によって文様帶の区画もなされ、底部付近に続く横位の条痕のみ施文される部分を加えれば、全体に3帶の文



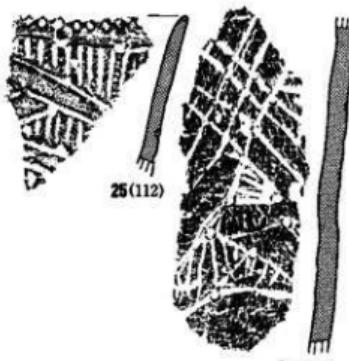
第66圖 土坑出土土器(1)



23(112)



24(112)

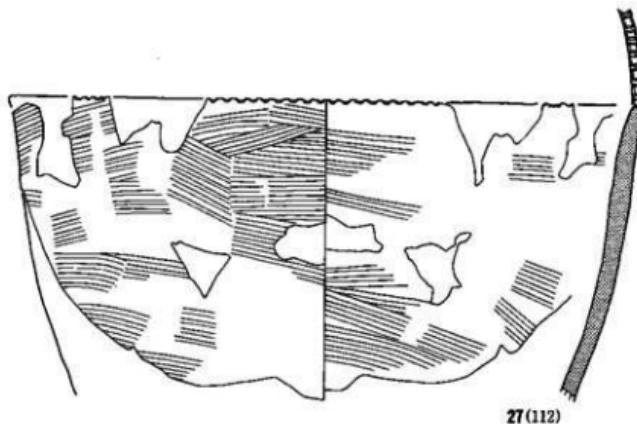


25(112)

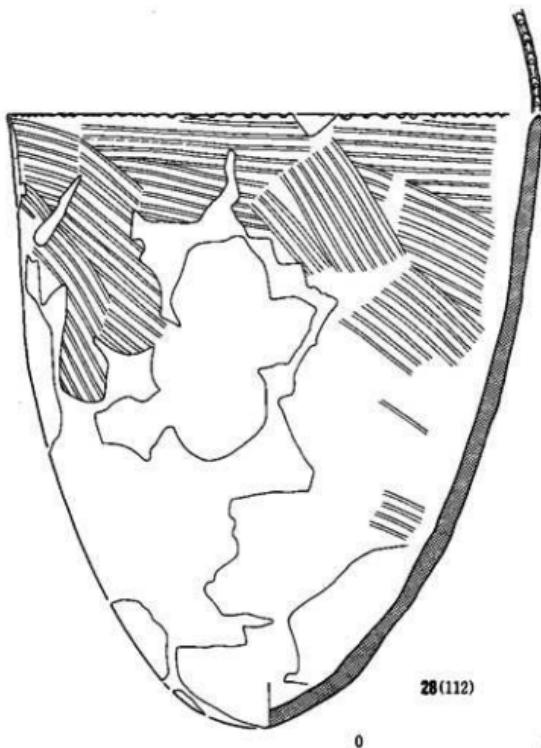
26(112)

0 10cm

第67圖 土坑出土土器(2)



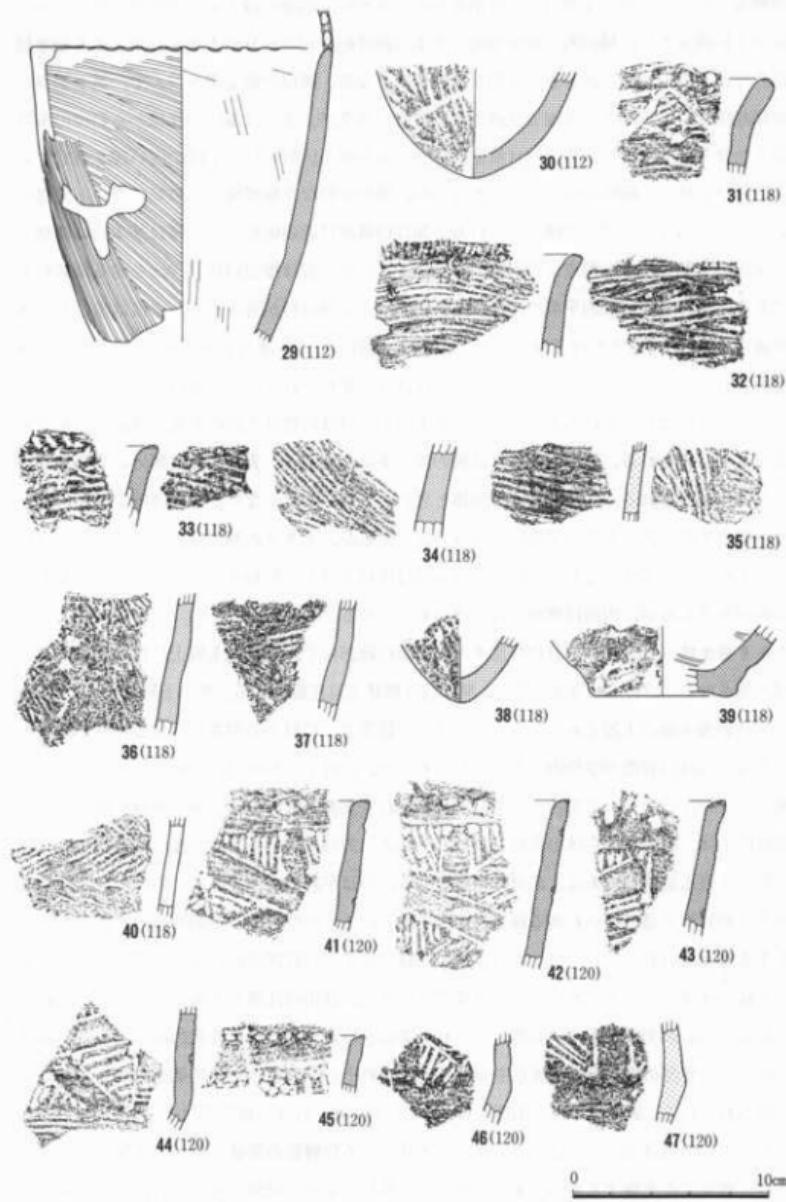
27(112)



28(112)

0 10cm

第68圖 土坑出土土器(3)

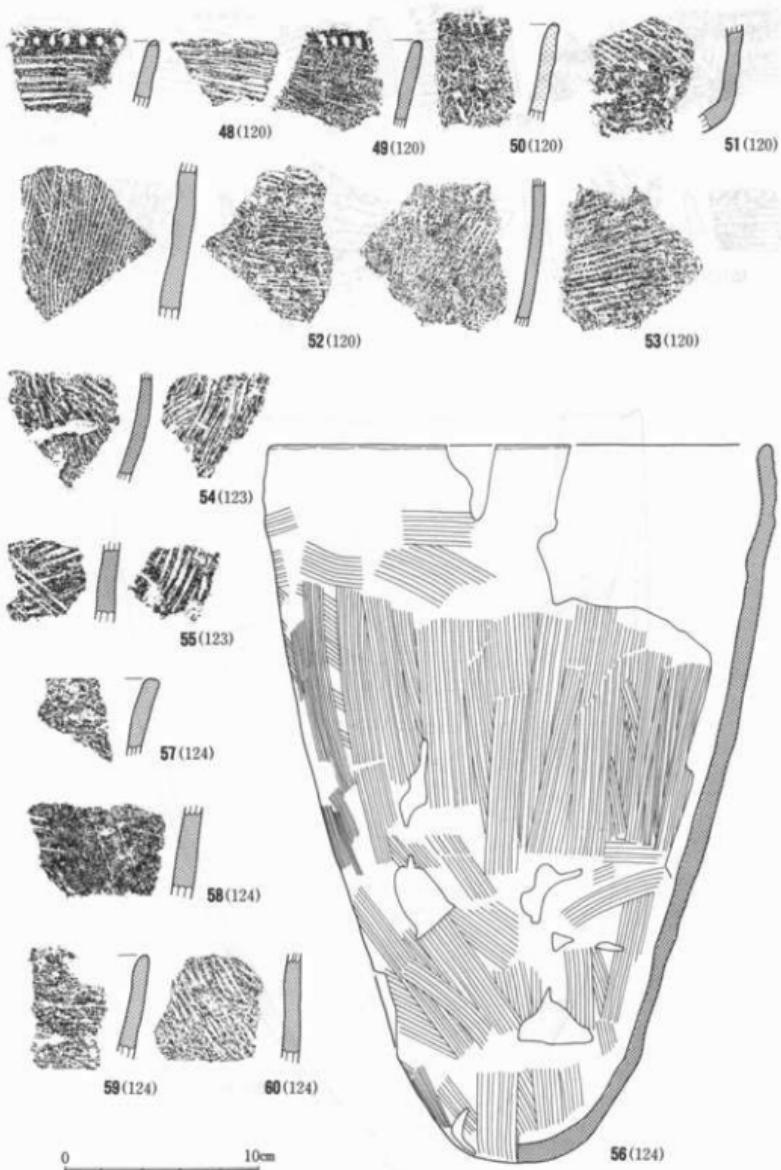


第69圖 土坑出土土器(4)

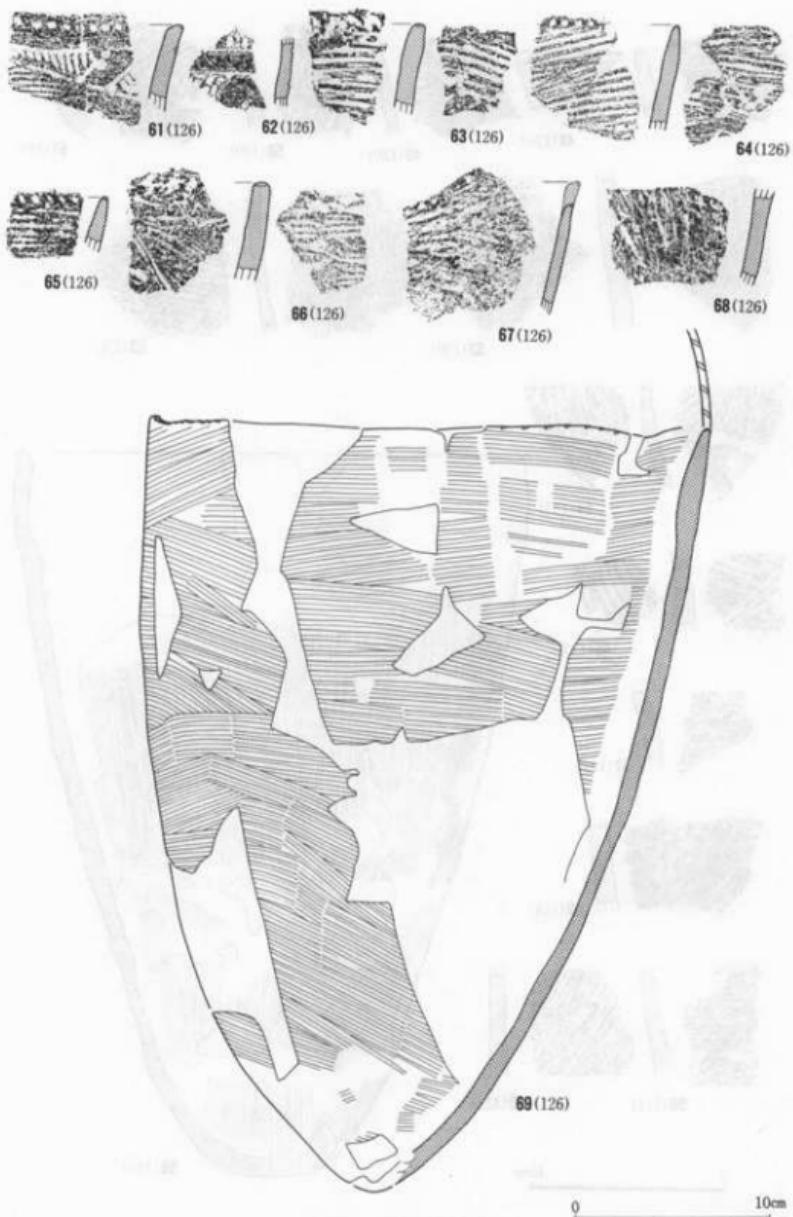
様帶構成となる。上から1帶目は、波頂部から3条単位の細隆起線を垂下させることにより、縦位の主区画文とし、補助的に波頂部間に1条の細隆起線がやはり垂下する。垂下する細隆起線以外では、斜位沈線区画の幾何学的な文様構成となる。横位の無文帶を挟んで、第2帶目には細隆起線は用いられず、沈線で区画された縦位の無文帶、または縦位の沈線から斜位の集合沈線を肋骨文状に配している。24は推定口径20.4cmを測る。胴中位に1段の弱い段を有している。口縁は平縁で、細隆起線は用いられないが、幾何学的な文様構成は23の第1帶目と同様のものである。25は24と同一個体と思われる。26は口縁部付近の破片で、文様は基本的に斜格子状の沈線文を配し、その接点に円形刺突文を加えている。27は推定口径33.0cmを測る深鉢形土器である。口唇上は比較的平坦で、棒状工具圧痕による刻み目が施される。条痕は横位を主体に表裏に施されるが、それほど深いものではなく、擦消している部分もみられる。28は口径27.8cm、高さ31.2cmを測る尖底土器である。器壁はほぼ一定しており、尖底部付近が厚くなることはない。口唇部はわずかに内そぎ状で、口唇上の刻み目は竹管状工具の先端を連続して刺突することにより施される。表裏面ともに比較的浅い条痕が施され、表裏面の大部分に二次焼成による赤色化がみられる。29、30は同一個体と思われるが、接合しない。口径は推定で15.4cmを測る小型の尖底土器である。器壁はやはり一定であるが、大きさの割に厚いものである。口唇部はわずかに内そぎ状となり、口唇上の刻み目は棒状工具をやや斜めに押圧している。表裏面に条痕が施されるが、内面は擦消されて浅いものとなる。

118号土坑（31～40） 31は外反する器形の口縁部片で、地文の条痕によって浅い沈線による文様が施される。口唇上は丸味を帯び、刻み目は棒状工具圧痕による。茅山下層式と思われる。32～35は表裏条痕の土器である。32も外反する口縁部で、口唇上の刻み目は貝殻復縁の連續圧痕である。33は口唇部がやや内そぎ状となるもので、口唇上の刻み目は、おそらく半截竹管等を横にして押圧したものであろう。34、35はいずれも表裏条痕の土器。36は磨耗が激しいが、表面縦位主体、裏面横位主体の条痕が施されている。37は表裏に多方向の浅い条痕が残る。38は小型の尖底土器底部である。表裏に条痕が残る。39は平底の底部である。内面の一部に条痕が残る。40は混入品で、いわゆる綾路文が施されている。前期末から中期初頭の土器である。

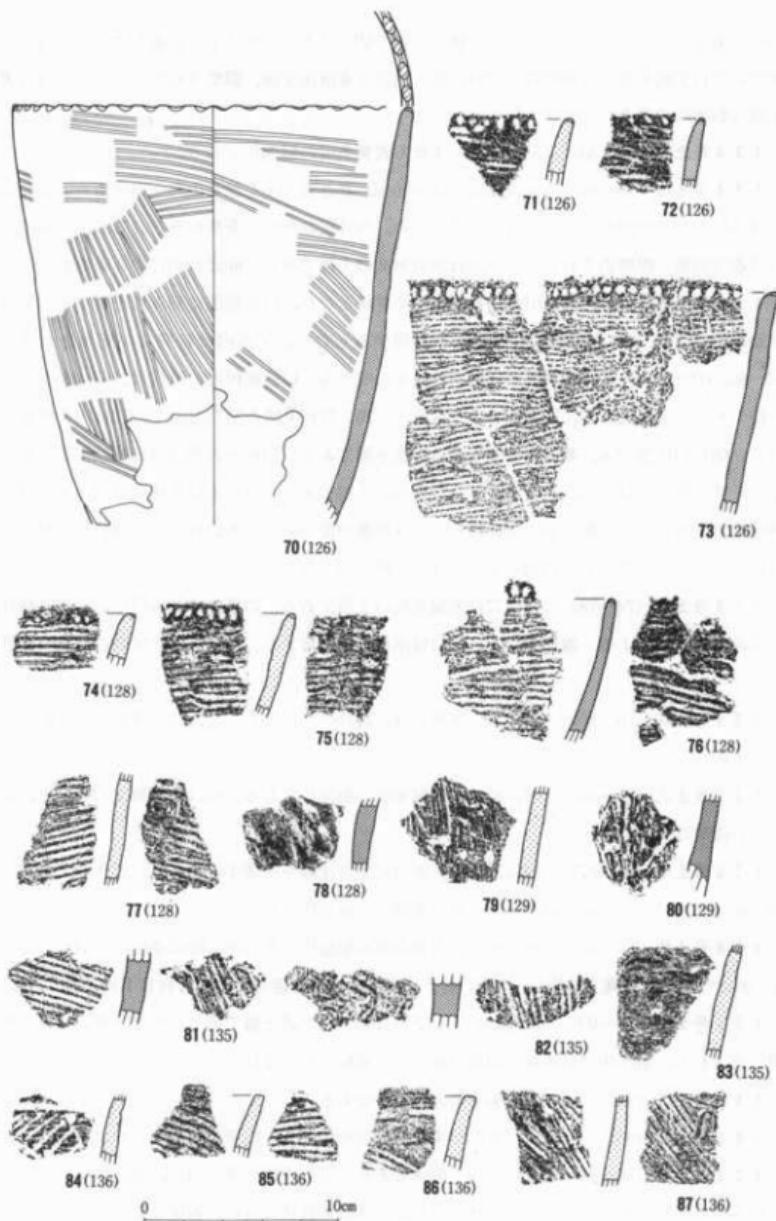
120号土坑（41～53） 41、42は平縁の口縁部片で、口唇部の形状はやや内そぎ状を呈する。文様は沈線区画による幾何学的な構成で、区画内には集合沈線を充填する。また、沈線の接点には円形の刺突文を配す。裏面はいずれも条痕を持たない。43は波状口縁を呈する口縁部片である。口唇部の形状は内そぎ状を呈するが、口唇上の刻み目は口唇端部の内側と外側に交互に施されている。裏面はやはり条痕を持たない。44、46、47は口縁下部付近のものであるが、いずれも器形の段は弱い。45は明らかに内そぎ状となる口唇部の形状を有し、沈線で区画された文様に刺突文を充填するものである。裏面には横位の条痕が明瞭に残る。48、49は表裏条痕の口縁部片で、口唇上の刻み目は棒状工具圧痕による。50は表面無文、裏面に擦痕が残る口縁



第70圖 土坑出土土器(5)



第71図 土坑出土土器(6)



第72図 土坑出土土器(7)

部片である。口唇上の刻み目は、ヘラ状工具等で切り込みを入れるように施している。51は丸底状に近い尖底土器の底部付近と思われる。内面は条痕施文後、調整されてる。52, 53は表裏条痕の胴部片である。

123号土坑 (54, 55) 54, 55はいずれも表裏条痕の胴部片である。

124号土坑 (56~60) 56は推定口径26.0cm、高さ37.0cmを測る尖底土器である。器形は口縁部付近がやや内弯し、底部は丸底状に近い。内外面の全面に条痕が施されるが、口縁部付近は器面調整の際磨消される。57~59は表裏無文の土器である。60は表面にのみ条痕が残る。

125号土坑 (61~73) 61は口唇部が内そぎ状となり、口唇端部に刻み目を有する。62は比較的細い沈線による曲線的な区画文を併用するもので、区画内は刺突文が充填される。63~66, 69~73は、表裏に条痕のみ施されるものである。口唇部付近の形状は、63, 66が厚みを持つもの、64, 65, 69, 72が細身となるもの、70, 71が丸味を持つもので、73は内そぎ状となる。69は口径28.2cm、高さ38.0cmを測る尖底土器である。口唇上の刻み目は棒状工具圧痕による。70は推定口径20.6cmを測る表裏全面条痕の土器である。口唇上は丸味を帯び、刻み目は棒状工具圧痕による。胴下部内面は被熱により刺離が激しい。73も口唇上の刻み目は、棒状工具圧痕によるものである。内面の条痕は浅く、擦痕的となる。

128号土坑 (74~78) 74~77は表裏条痕の土器である。口唇上の刻み目は、すべて棒状工具の側面圧痕による。器形的に76は、口縁部付近が内弯する。78は表面に縦位の調整痕が残る。

129号土坑 (79, 80) いずれも表裏面は、磨耗のためもあって、浅い条痕が残されるのみである。

135号土坑 (81~83) 81, 82は、表裏条痕の胴部片である。83は表裏無文のもので、胎土中の繊維は少ない。

136号土坑 (84~87) 84は、沈線区画内に集合沈線を充填する鶴ヶ島台式土器である。85, 86は、口唇上が平坦に調整される表裏条痕の口縁部片である。

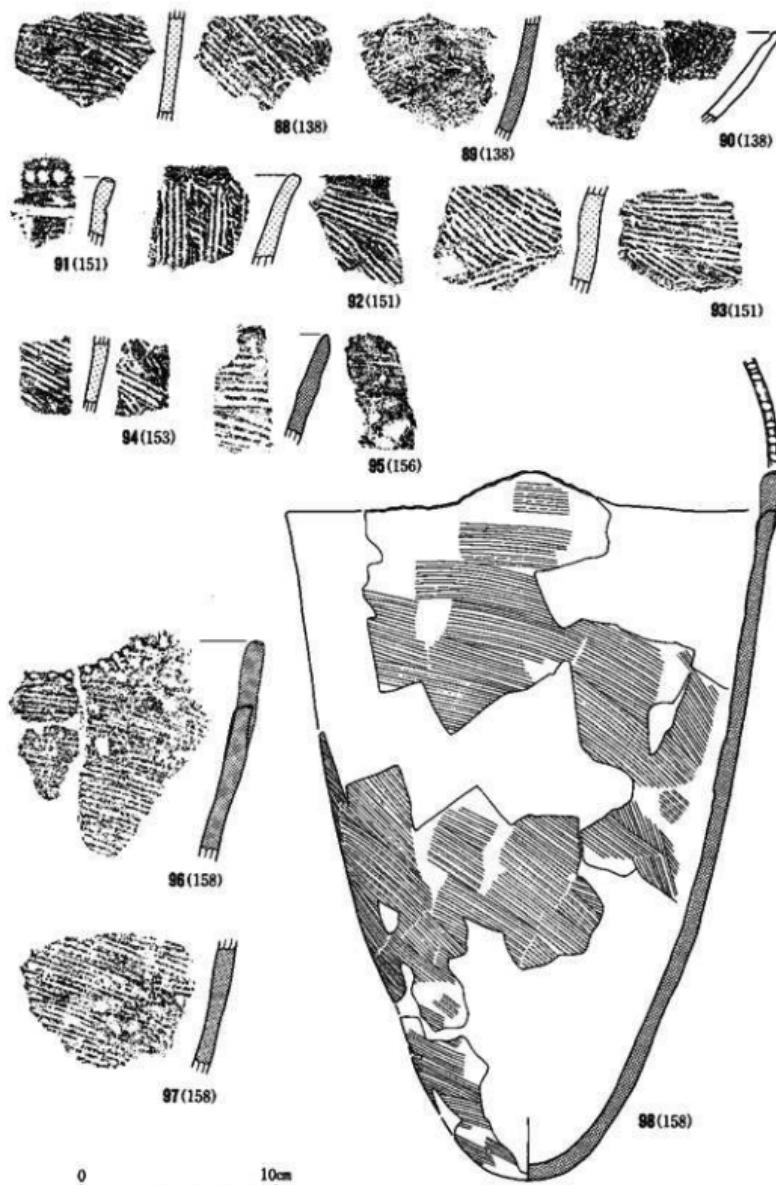
138号土坑 (88~90) 88, 89は、表裏条痕の胴部片であるが、89は条痕上を調整している。90は器面上にL R縄文を施し、内面口唇下に横位の沈線を巡らせる加曾利B1式土器である。

151号土坑 (91~93) 91は口唇上が平坦な鶴ヶ島台式土器である。92は表裏に条痕が明瞭に残される。胎土中には少量の繊維の他に、石英粒等が含まれる。

153号土坑 (94) 94は、表裏条痕の小破片である。

156号土坑 (95) 95は、口唇部が尖る口縁部片である。内面は条痕がやや調整される。

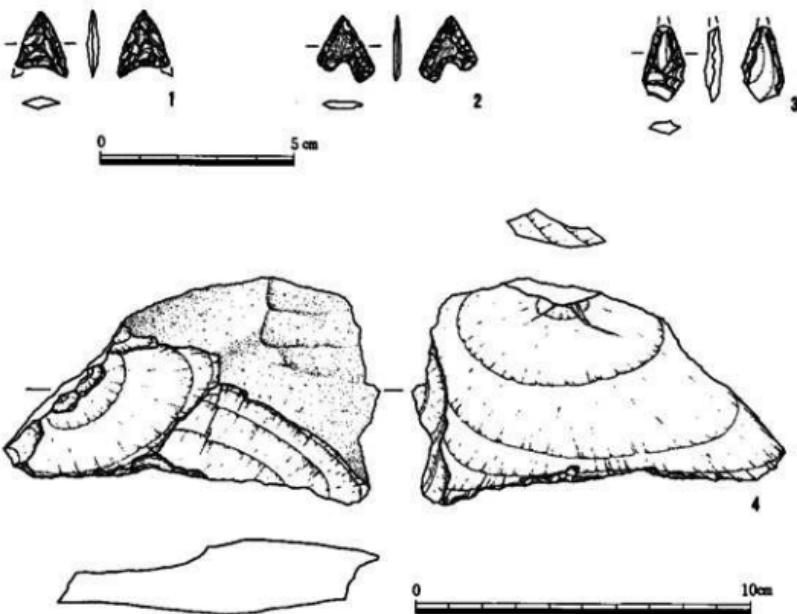
158号土坑 (96~98) すべて同一個体である。98は推定口径25.4cm、推定の高さ36.4cmを測る尖底土器である。口縁部は波状を呈し、底部は丸底状に近い。器壁は底部までほぼ一定している。表裏面ともに、条痕を明瞭に残している。



第73図 土坑出土土器(8)

○、土坑出土石器（第74図、第26表、図版42）

1～3は石鏃である。1は120号土坑から出土した。变成岩製である。正三角形状を呈する形状で、基部がやや抉れている。調整は全面にわたり密に施される。2は125号土坑から出土し、黒曜石製である。抉りが内面にまで及ぶ。表面には研磨痕がみられ、研磨は調整により現在の形状に整形された後に施されており、結果としてかなり薄い器厚となる。3は頁岩製で、横長の小型剝片を素材とする。先端部が欠損している。調整は周縁にのみ施され、裏面には素材剝片作出の際の主要剝離面が残る。4は126号土坑から出土した頁岩製の調整痕の認められる剝片である。大型の横長剝片であるが、岩名第14遺跡からはこの他に同一の石材の石器は出土していない。調整は剝片の末端部に施されるが粗い調整であり、整形の目的で施されたものとは思えない。むしろ刃部作出のための調整と思われる。



第74図 土坑出土石器

第26表 土坑出土石器表

擇 図 番 号	遺 物 番 号	器 形	石 質	計 測 値				圖 号
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重 量(g)	
74図1	120, 1	石 鏃	變 成 石	1.7	1.4	0.3	0.51	片基部欠。
	2	石 鏃	黑 曜 石	1.7	1.5	0.19	0.36	表面研磨整形。
	3	石 鏃	頁 岩	1.9	1.1	0.4	0.93	先端欠。
	4	調整痕ある剝片	頁 岩	7.8	19.6	2.3	144.69	原石面残る。末端部に調整痕。

3. 炉穴とその出土遺物

a. 炉穴

炉穴は総数22基が検出されている。分布は東側の台地縁辺に多くみられ、調査区北部の縄文早期土器包含層と重なる様子を呈するが、炉穴群として数メートルの範囲内に集中するようことはなく、視覚的には炉穴同士のまとまりをみいだすことはできない。検出された炉穴のうち3基には、炉穴としての機能を喪失した後、貝の投棄を行っている例が認められた。

102号炉穴（第75図）

調査区の北西部、C 1-40、C 2-00区に位置する。梢円形を呈し、 $1.4 \times 1.0\text{m}$ の規模を測る。掘り込みは浅く、5cmほどである。底面の中央付近に径40cm、深さ10cmのピットを掘り込み、火床部とする。焼土中には暗褐色土が混入しており、それほど強い燃焼があったとは思えない。遺物は、覆土中から少量の条痕文系土器が検出されている。

113号炉穴（第75図）

調査区の北東部、D 1-13区に位置する。径0.7mを測る円形を呈し、深さは20cmである。規模は小さいが、掘り込みはしっかりとしている。覆土中には多量の焼土が認められたが、ブロックでの検出はない。底面は狭いが平坦である。出土遺物はない。

115号炉穴（第75図、図版12-1）

調査区の北東部で台地縁辺に近いE 1-30区に位置する。長梢円形を呈し、 $1.7 \times 0.7\text{m}$ の規模を測る。底面は西側を1段低く掘り込み火床部とし、東側を足場とする。覆土の中層から小規模な貝のブロックを2か所に検出している。貝はマガキのみが認められるもので、それとほぼ同一の面から条痕文系土器の尖底部が出土している。

119号炉穴（第75図、図版12-2、3）

調査区北部の縄文時代遺構群の中央に近い、D 2-43区に位置する。本跡の南側は118号土坑により切られている。本来の平面形は梢円形と思われ、短軸長0.8mを測る。北側に火床部としての浅い掘り込みがみられ、焼土は底面よりやや浮いた状態で検出された。焼土の直上で覆土の中層にあたる位置からは、完形のハイガイ等を含む混貝土層が検出された。土器等の遺物としては、胎土に纖維を含む無文の土器片がわずかに出土したが、図示し得るものはなかった。

130号炉穴（第75図、図版13-1、2）

調査区東部の台地縁辺に近いE 3-11区に位置する。梢円形に近く、 $1.5 \times 1.0\text{m}$ の規模を測る。火床部と足場を併せ持つ典型的なタイプの炉穴だが、火床部の底面は平坦で広い。火床部底面までの深さは40cmを測る。焼土上に堆積した貝層は2層に分けられ、上層はハイガイ主体の混土貝層、下層はシオフキを多く認める純貝層となる。

154号炉穴（第79図、図版13-3）

調査区西部、B 3-23区に位置する。平面形は長梢円形を呈し、 $3.1 \times 1.0\text{m}$ の規模を測る。

東側には、底面よりさらに15cmほど掘り下げた火床部を有しており、浮いた位置ではあるが焼土を認めているため、炉穴とした。覆土の中層以上を主体に、石器製作に伴う石片が多量に出土している。また、石片は本跡の周囲の包含層中からも同様に検出されている。本跡は、これらの石片の状態から石器製作跡と考えられ、他の炉穴とは機能的にも分けられる性格のものである。なお、周囲から検出された石器群とともに、次項で石器製作跡として説明する。

201号炉穴（第75図）

調査区の北西部、C 1-40区に位置する。中央を後世の溝である301号により切られ、北側は調査区外となる。平面形は楕円形に近く、 $1.1 \times 0.6m$ の規模を測る。掘り込みは浅く、約10cmである。遺物は、覆土中と焼土の下から少量の土器片が出土している。

202号炉穴（第76図）

調査区の北西、C 2-30区に位置する。本跡の上部は303号溝によって破壊されている。火床部だけが残存し、規模は推定で径1.0mである。底面までの深さは30cmである。

203号炉穴（第76図）

202号の東に7mの距離のC 2-32区に位置する。本跡もやはり303号溝により上面を破壊されており、火床部の焼土も二分された形となる。規模、形状とも202号に類似するが、底面までの掘り込みは50cmとやや深い。

204号炉穴（第76図）

調査区北部の中央付近にあたるD 2-40区に位置する。平面形は足場側の方が膨らみを持つ瓢箪形に近く、 $1.3 \times 0.7m$ の規模を測る。掘り込みの深さは、足場までが約20cm、火床部までが約40cmである。遺物の出土はない。

205号炉穴（第76図、図版14-1）

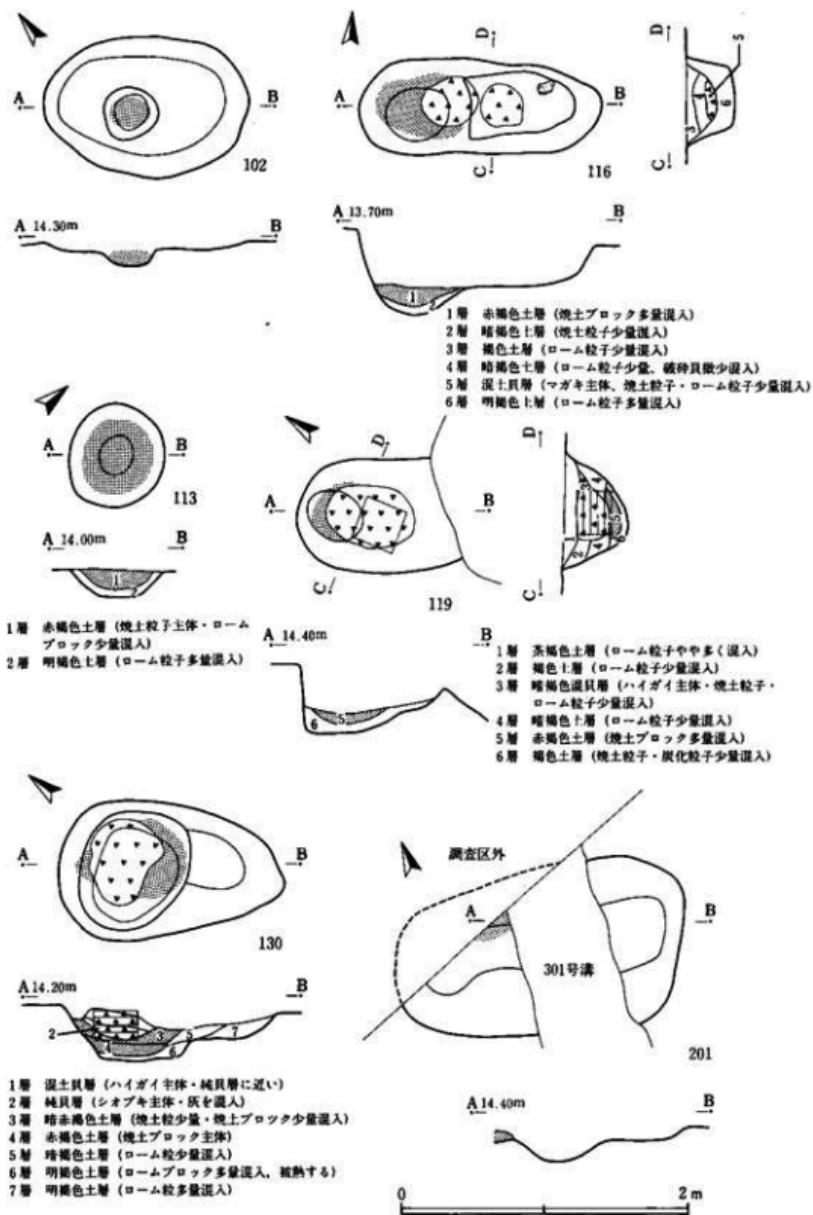
調査区北部の縄文時代遺構群の中央にあたるD 2-42区に位置する。楕円形を呈し、 $1.3 \times 0.9m$ の規模を測る。掘り込みの深さは約30cmであるが、中央部はやや高まりがある。焼土は底面の全域に堆積するが、北側の下部にはブロック化した燃焼の強い部分が認められる。遺物は、覆土中から条痕文系土器片等が出土している。

206号炉穴（第76図、図版14-2）

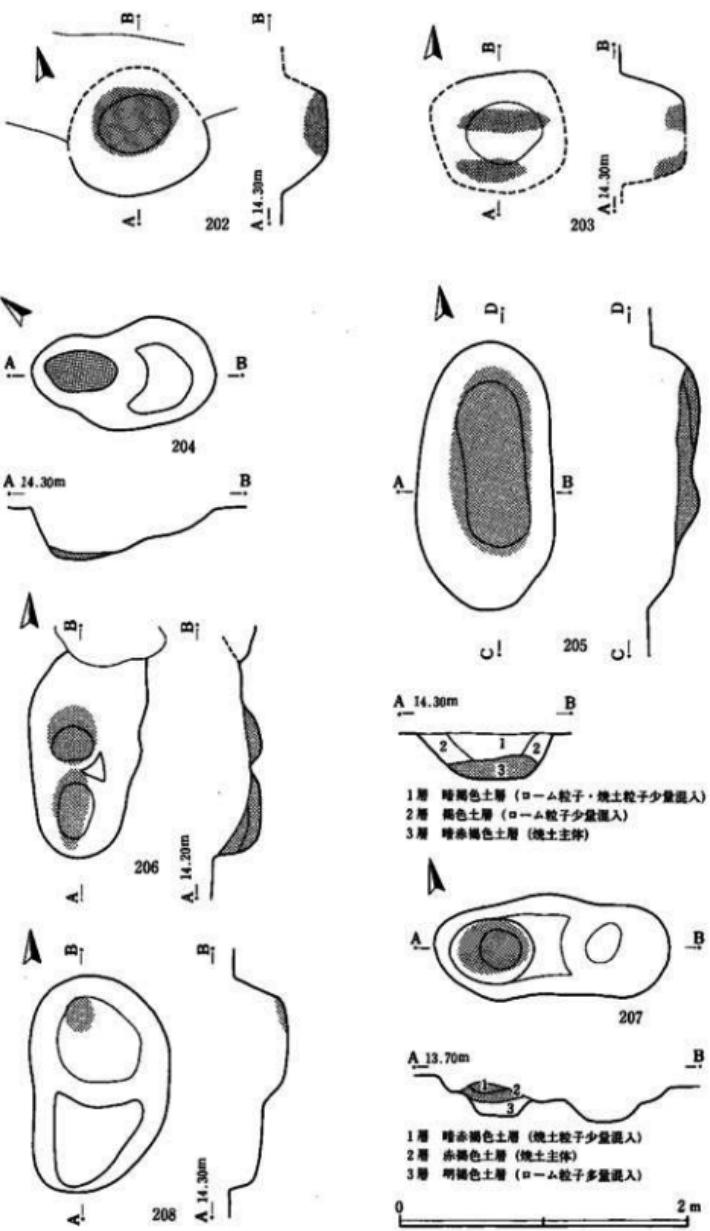
調査区北部の縄文時代遺構群の中央付近に当たるD 2-20区に位置する。北側は401号により切られている。平面形は楕円形を呈し、 $1.5 \times 0.8m$ の規模を測る。長軸上の2か所に火床部としての掘り込みを有する。焼土はいずれも、下部ほど燃焼した様子が認められた。

207号炉穴（第76図、図版14-3）

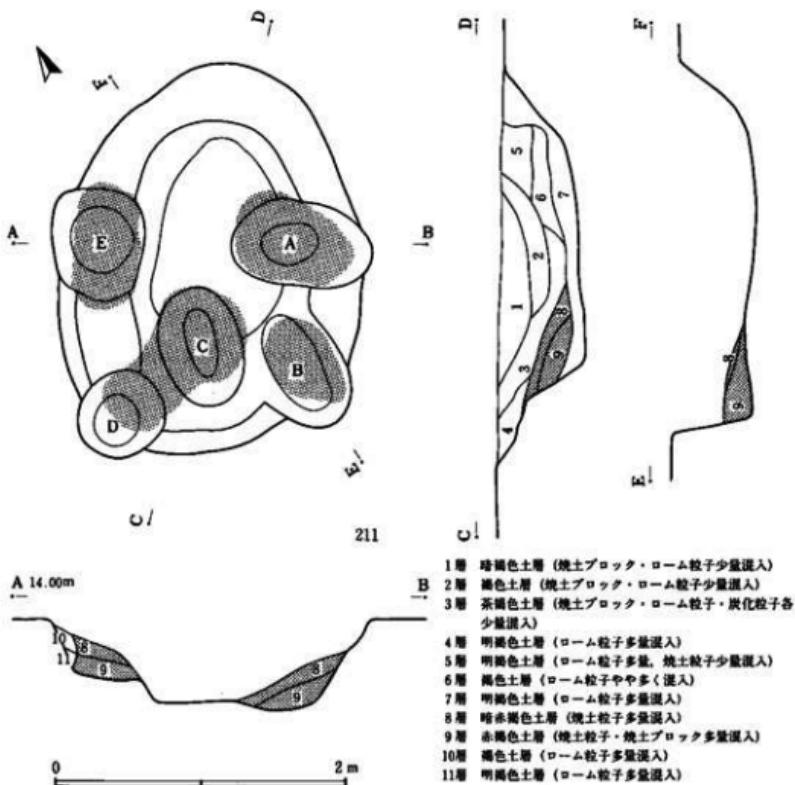
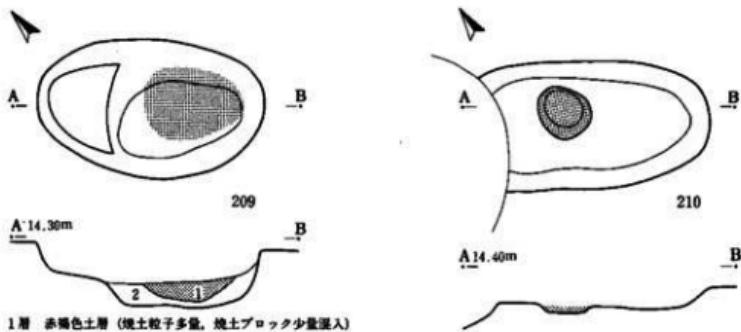
116号の北に約7mの距離を測るE 1-10区に位置する。平面形は長楕円形を呈し、 $1.6 \times 0.7m$ の規模を有する。底面の西側には、火床部が掘り込まれる。東側にも大きく窪む部分が存在するが、東側ピットの周囲は軟質であるため、後に掘り込まれた可能性が高い。火床部の焼土



第75図 炉穴実測図(1)



第76図 炉穴実測図(2)



第77図 炉穴実測図(3)

は、2層に分層でき、下部に位置する層のほうが強い燃焼を示している。遺物は、出土していない。

208号炉穴（第76図）

E 3-11区に位置し、130号炉穴が南東に近接している。本跡上を303号溝が東西に走るが、溝の掘り込みが浅かったため残存できた。平面形は梢円形に近く、 $1.5 \times 1.0\text{m}$ の規模を有する。掘り込みは足場までが20cmを測り、足場から火床部として、さらに20cmの深さで掘り込まれている。焼土の残存はわずかであった。

209号炉穴（第77図、図版15-1）

調査区東部の台地縁辺に近いE 3-20区に位置する。平面形は梢円形を呈し、 $1.6 \times 1.0\text{m}$ の規模を測る。南東側に火床部を有し、火床部底面までの深さは約50cmを測る。焼土は底面よりやや浮いた状態で検出されたが、下部ほど燃焼が強かった様子を示している。

210号炉穴（第77図、図版15-2）

D 3-23・24区に位置し、西側は小豊穴状の土坑である126号により切られる。梢円形を呈し、長軸推定 1.8m 、短軸 0.9m の規模を測る。掘り込みは20cmと浅く、中央付近に底面を5cmほど掘り下げた火床部を有する。

211号炉穴（第77図、図版15-3）

縄文時代の遺構群としては南端に近い、F 4-20区に位置する。5か所に火床部及び、焼土を認める複合型の炉穴である。本跡の中央部にあたる平坦な面を足場とし、そこを中心にして回転するように、順次火床部を移動して使用されたものと思われるが、土層からはこれらの新旧関係は明確にできなかった。ただし、焼土D及びEは足場よりもレベル的に高い位置に焼土が残存するため、他のものよりは古く存在したものかもしれない。規模は全体で、長軸 2.7m 、短軸 2.1m 、足場までの深さ60cmを測る。

212号炉穴（第78図、図版16-1）

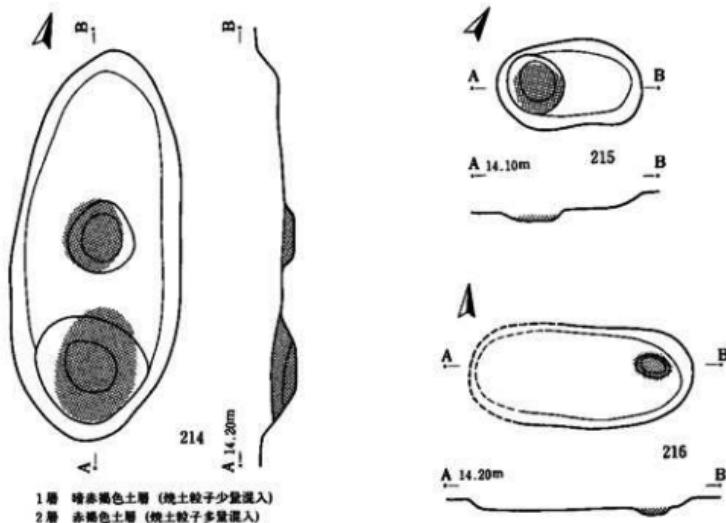
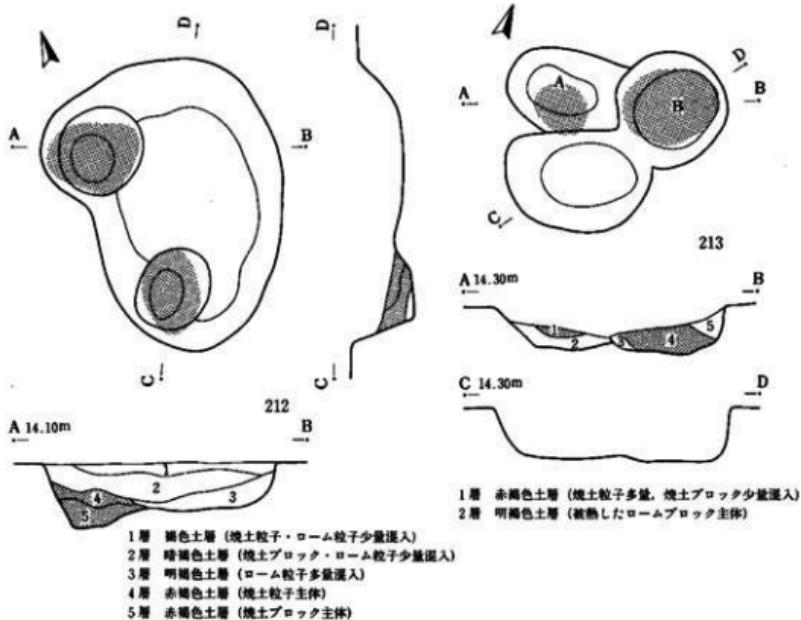
211号の南に約5mの位置で近接するF 4-40区に位置する。火床部は2か所にあり、本跡も複合型の炉穴である。火床部は足場からみて、西側と南側に位置し、いずれも強い燃焼の跡が認められたが、その新旧関係は明確ではない。規模は南北 2.0m 、東西 1.6m を測る。

213号炉穴（第78図、図版16-2）

調査区の中央付近で、縄文時代の遺構群からはやや南に離れたD 4-33区に位置する。2基の炉穴が重複しており、焼土Bを伴う瓢箪形のB号が、梢円形を呈すると思われるA号を掘り込んでいる。いずれも強い燃焼状況を示す焼土が認められたが、A号のそれは底面よりやや浮いた状態である。B号は長軸 1.7m を測り、火床部は足場からわずかに掘り込んだだけである。

214号炉穴（第78図、図版16-3）

やはり調査区の中央付近で、213号の西に12mの距離を有するD 4-20区に位置する。平面形



第78図 炉穴実測図(4)

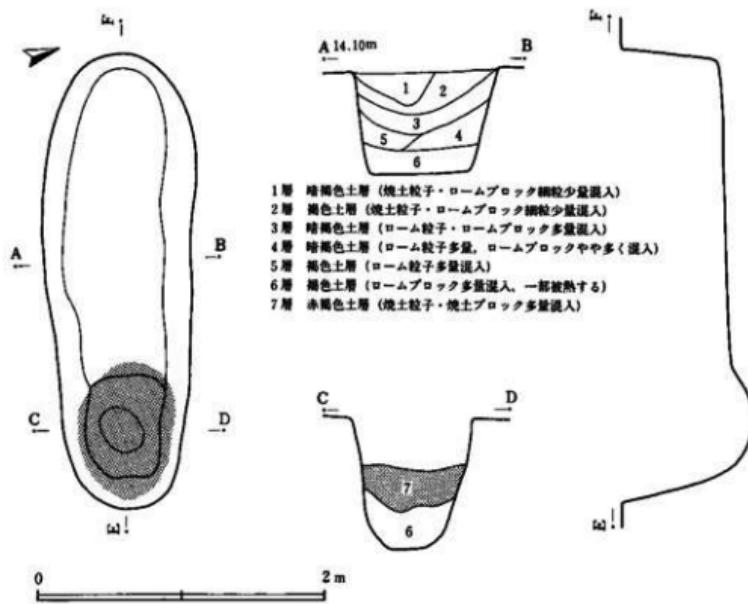
は長楕円形を呈し、 2.7×1.2 mの規模を測る。底面の中央と南壁に接した2か所に火床部を有している。火床部の掘り込みは、いずれも底面から10cmを測るが、南側のものの方が堆積した焼土の量は多かった。

215号炉穴（第78図）

調査区東側の台地縁辺に近いE 4-01区に位置する。楕円形を呈し、規模は 1.0×0.6 mと比較的小さい。南西の壁下に火床部が掘られ、少量であるが焼土の堆積を認めた。

216号炉穴（第78図）

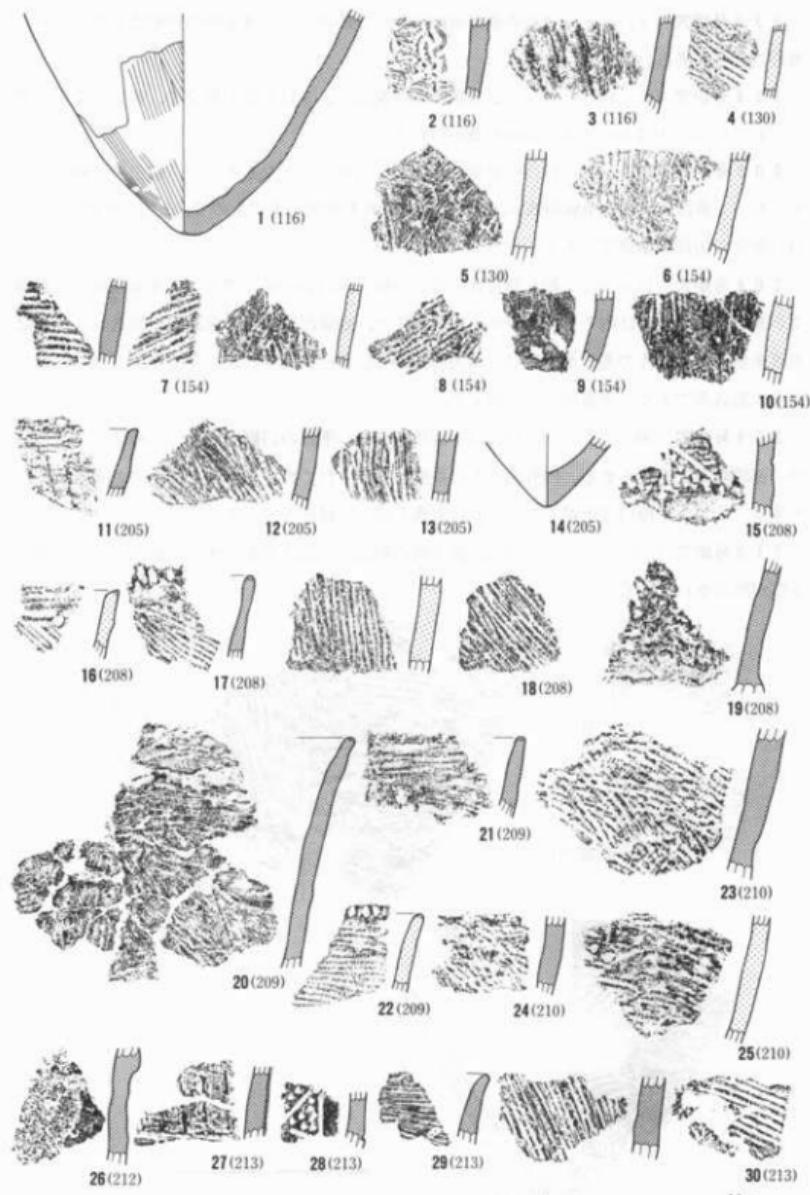
D 3-00区に位置する。掘り込みが 10 cmと浅く西側は不明瞭であるが、 1.5×0.7 mの規模を有する。東側の壁下にやはり浅い火床部を有している。



第79図 154号炉穴実測図

b. 炉穴出土土器（第80図、第81図）

118号炉穴（1～3） 1は尖底土器底部である。器壁は比較的一定しており、尖底中心部もそれほど厚くならない。表面にのみ浅い条痕が認められる。2は表面に半截竹管によるコンパス文状の文様がみられる。裏面は横位の条痕が残る。3は表面縁位の調整痕、裏面横位の条痕が残る。



第80図 炉穴出土土器(1)

130号炉穴 (4, 5) 4は表裏条痕の小片。5の表面には多方向の調整痕が認められ、裏面は無文である。

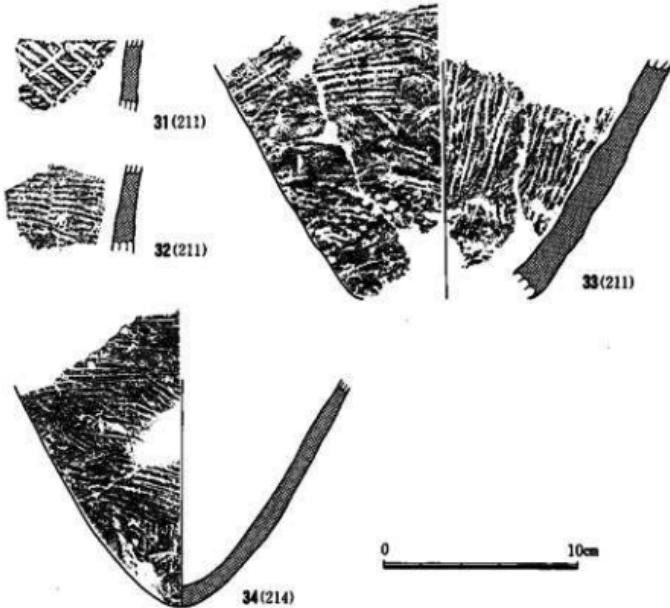
154号炉穴 (6~10) 6~8は表裏条痕の胸部片。9は表面が無文で、裏面の条痕は磨消されている。10は表面に浅い条痕が認められる。

205号炉穴 (11~14) 11は口唇部がわずかに内そぎ状となるもので、縦位の凹線文が認められる。裏面は横位の条痕が残る。12, 13はいずれも表裏条痕のもので、条痕は明瞭である。14は無文の尖底土器底部である。

208号炉穴 (15~19) 獅ヶ島台式土器の口縁下部付近の破片である。沈線区画内に刺突文が充填される。16は内そぎ状を呈する口縁部片で、細隆起線による区画線が施される。17は表裏条痕の口縁部片であるが、口唇下は表裏面ともに条痕が調整され、無文帶状となる。19は平底土器底部である。表裏面ともに無文である。

209号炉穴 (20~22) 20, 21は同一個体である。平縁の口縁部片で、口縁部には角押し状の連続刺突文を巡らせる。内外面ともに条痕は調整されて擦痕化する。胎土中の繊維は比較的多量である。子母口式土器である。22は表裏条痕の口縁部片である。

210号炉穴 (23~25) 23, 24は表裏条痕の胸部片。25は表面に浅い条痕を有し、裏面は条痕が磨消されている。



第81図 炉穴出土土器(2)

211号炉穴 (31~33) 31は沈線による格子状文が施されるものである。33は平底と思われる底部付近で、器壁は全体に厚手となる。

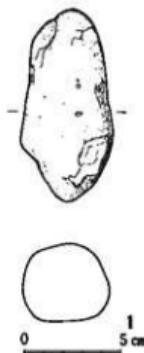
212号炉穴 (26) 26の表面は剥離しているが、横位の隆起を有するものである。

213号炉穴 (27~30) 27は口縁部付近の破片で、細隆起線による窓枠状文が施される野島式土器である。28は沈線区画内に刺突文を充填する鶴ヶ島台式土器である。29は口唇部付近が外反する器形の口縁部で、裏面の条痕は磨消される。

214号炉穴 (34) 34は比較的尖底角の狭い尖底土器底部である。器厚は底部まで一定し、内面は調整されて無文となる。

c. 130号炉穴出土石器 (第82図、第27表、図版42)

1は、安山岩製の敲石である。棒状錐を素材とし、先の尖る一端に敲打痕がみられる。被熱し、表面には無数の小さいひびがみられる。色調は赤色を帯びる。



第82図 130号炉穴出土石器

第27表 130号炉穴出土石器表

序 番 号	造 物 番 号	器 種	石 質	計 量 値			備 考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	
8281	130. 5	敲	石 安 山 岩	10.2	4.8	4.48	271.16 被熱。

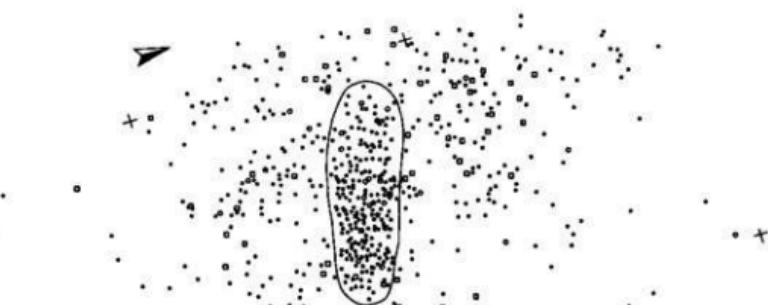
4. 154号炉穴周辺石器製作跡とその出土遺物

a. 石器製作跡 (第83図)

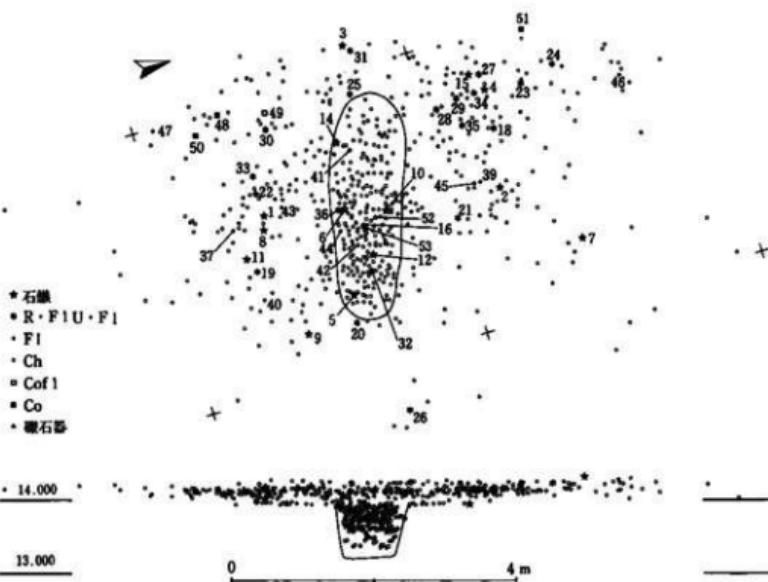
154号炉穴と位置を同じくし、長径 8 m、短径 4 m の橿円形状に石器が分布している。分布範囲の短軸は炉穴の長軸方向とほぼ一致する。

石器組成は石錐が主体であり、他に削器、磨石、敲石が含まれるが、定型的な石器以外に石錐製作過程の調整を施した剝片、いわば石錐未製品が確認されている。のみならず調整を施す前段階の、折断により石錐の形に近づけた折断剝片、石錐の調整剝片が多数確認され、石錐の製作過程が明確に把握できる。

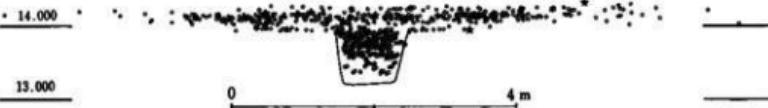
154号炉穴との関係であるが、154号炉穴の掘り方内からも石器の出土がみられ、炉穴が完全に埋没する前に石錐の製作が行われていたことは確実である。しかし、炉穴としての機能を表す掘り方内の焼土層から上に石器の出土がみられ、焼土から下には全く出土していないことや、



- ・チャート
- ・チャート(赤)
- ・チャート(黒)
- ・メノウ
- ・变成岩
- ・砂岩



- ・石器
- ・R・F1U・F1
- ・F1
- ・Ch
- ・Cof1
- ・Co
- ・礫石器



第83図 石器製作跡遺物分布図

焼土から上の層は自然堆積したと思われる層であるため、炉穴が機能していたときと同時並行で石器の製作が行われていたとは判断できない。

出土した石器の大半はチャート製で、概して小型である。なかには1cm足らずの石器も含まれる。石器と同様に、共に出土している石器未製品や素材剥片もチャートでほぼ占められる。チャートは、肉眼による観察であるが、大別して三種類の母岩が含まれている。ここで、それについて石材の質感の違いを明記しておく。

チャートA：下總台地の縄文時代石器に普遍的にみられるチャートである。色調は青灰色で、青色の節理が縦横に混入している。原石の部位によっては節理がみられず、青灰色を呈するのみの石材も含まれる。

チャートB：色調は黒色、もしくは暗青灰色を呈する。節理が縦横に混入するが、色の違いはない。器表面には光沢がある。

チャートC：色調は赤色、もしくは赤茶色を呈する。いわゆる赤チャートと呼ばれるものである。この石器製作跡から出土しているこの石質の石器は点数的に少ない。

石器の形態、使用される石材から、石器製作跡は前期に帰属すると考えられる。154号炉穴から出土している土器は条痕文系土器であり、炉穴が機能していたと考えられる早期とは時期が異なる。両者の遺構の関係は同一平面上に設けられているという点のみである。

第28表 石器製作跡出土石器組成表

石 器	石 鋸	尖頭器	打 石	鋸 片	磨 石	刮 石	石 盤	磨 石	研 器	R- フレイク	U- フレイク	剝 片	脊 片	石 板	破 片	計	
チャートA	13									14	1	35	416	3		482	
																84.5	
チャートB	1										1		8	40	1		51
																8.9	
チャートC	1												1	20			22
																3.8	
珪質頁岩	1																1
																0.2	
変 成 岩												1	2		1	4	
																0.7	
砂 岩												1		1	2		
																0.4	
安 山 岩				1											1	2	
																0.4	
チャート							1								1	2	
																0.4	
質 岩								1				3				4	
																0.7	
計	16				1			1	1	15	1	45	482	4	4	570	
	2.8				0.2			0.2	0.2	2.6	0.2	7.9	84.5	0.7	0.7	100%	

b. 出土遺物（第84図～第87図、第28表、第29表、図版43）

1～15は石錐である。概して小型であり、基部の抉れている形状と、基部が平坦な形状とに大別できる。調整は表面全面に施されるものと主要剥離面を一部残すもの、また縁辺部のみの調整に留まるものなど多種にわたる。石錐の完成品の中には14、15のように石錐の形状に類似した碎片を素材としているものもみられ、およそ実用には不適な形態も含まれる。

16は、石錐の調整碎片、あるいは石錐製作過程で打点の位置を間違え、誤って一部を欠損してしまったものと思われる。

17は、凝灰岩製の削器である。大型の剥片をほぼ中央部で打割し、剥片の末端部に刃部作出の調整を施す。

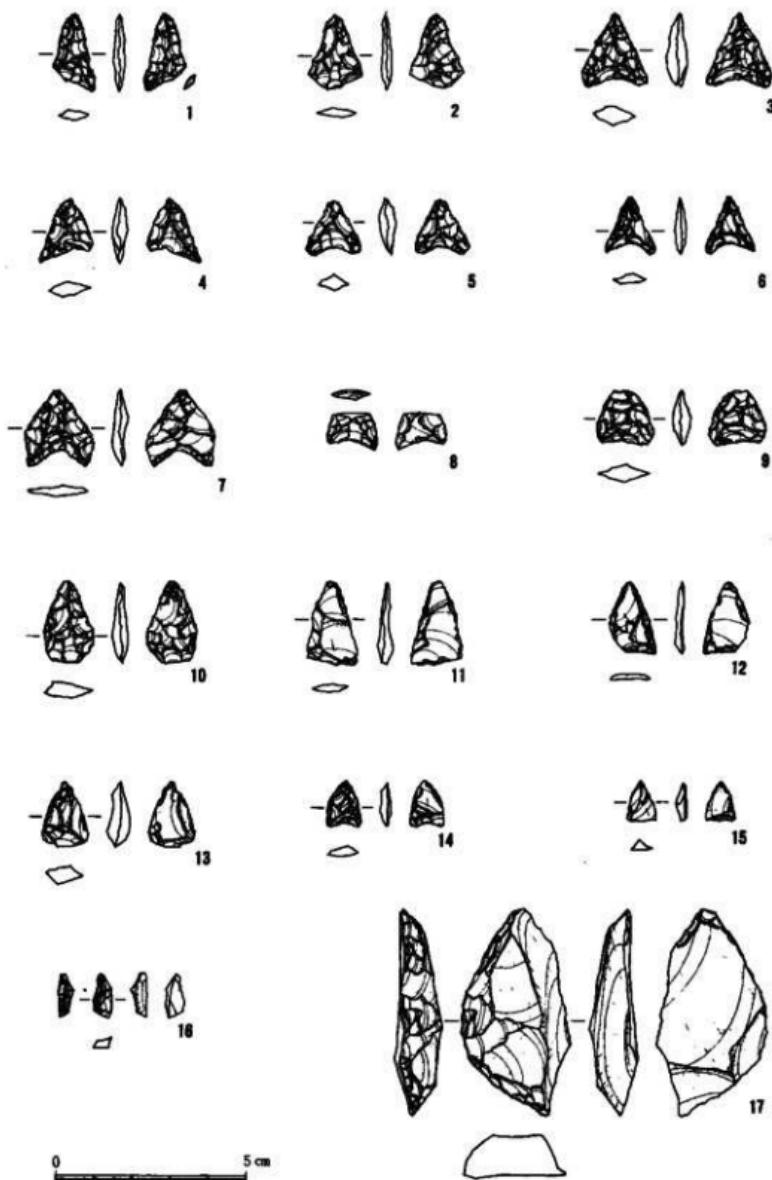
18～26は、石錐の未製品である。未製品は作出了した剥片のうち石錐の形状に類似したものを作断せずに調整を施すものと、素材剥片を1、2回の作断により石錐の形状に近づけ、調整を施すものとに分けられる。

27～30は、素材剥片を作断し、調整を行う前段階の剥片である。作断される部位は、剥片の末端部あるいは打面側であり、その両方が作断されるものもみ受けられる。

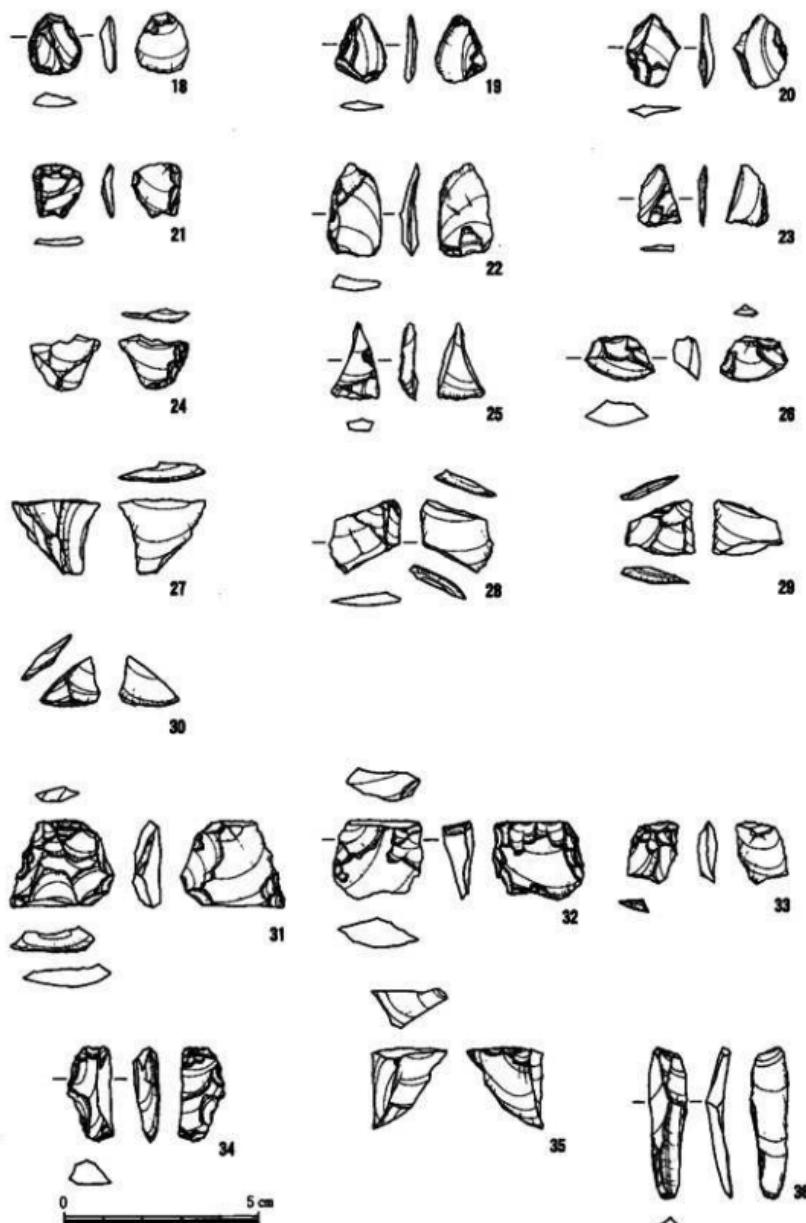
31～36は、調整度の認められる剥片である。石錐の未製品と別に記載した根拠は、素材とされる剥片の大きさが、石器製作跡で出土している他の素材剥片より大型であり、器厚も部厚な剥片が多い点からである。33、34はその点では石錐未製品と変わりはないが、33の剥片に施される調整は、剥片の打面周辺と末端部に施されている。石錐未製品にも同様の調整はみられるが、この段階で石錐未製品はほぼ石錐の形状に整えられていることに対し、33の形状はその様子がみられないからである。34の調整は素材剥片の周縁に施され、石錐未製品の調整部位と大きな違いはないが、調整を施した跡で剥片を分割するよう意図的に作断している。石錐の作出を目的とするならば作断の必要性は全くなく、現状からいえば楔形石器に近い形状、調整となるからである。36は素材剥片の形状、調整部位共に石錐未製品にみられるようなものではなく、強いていえば石錐の形状、調整方法であるといえる。

37～47は、石錐の素材剥片と思われる。剥片の大きさは多様であるが、完成品の石錐の形状はやはり多様であるため、大小を問わず石錐の素材剥片となる可能性が高いからである。石錐の素材剥片は作断あるいは周縁部の調整により完成品となることは先述したとおりである。

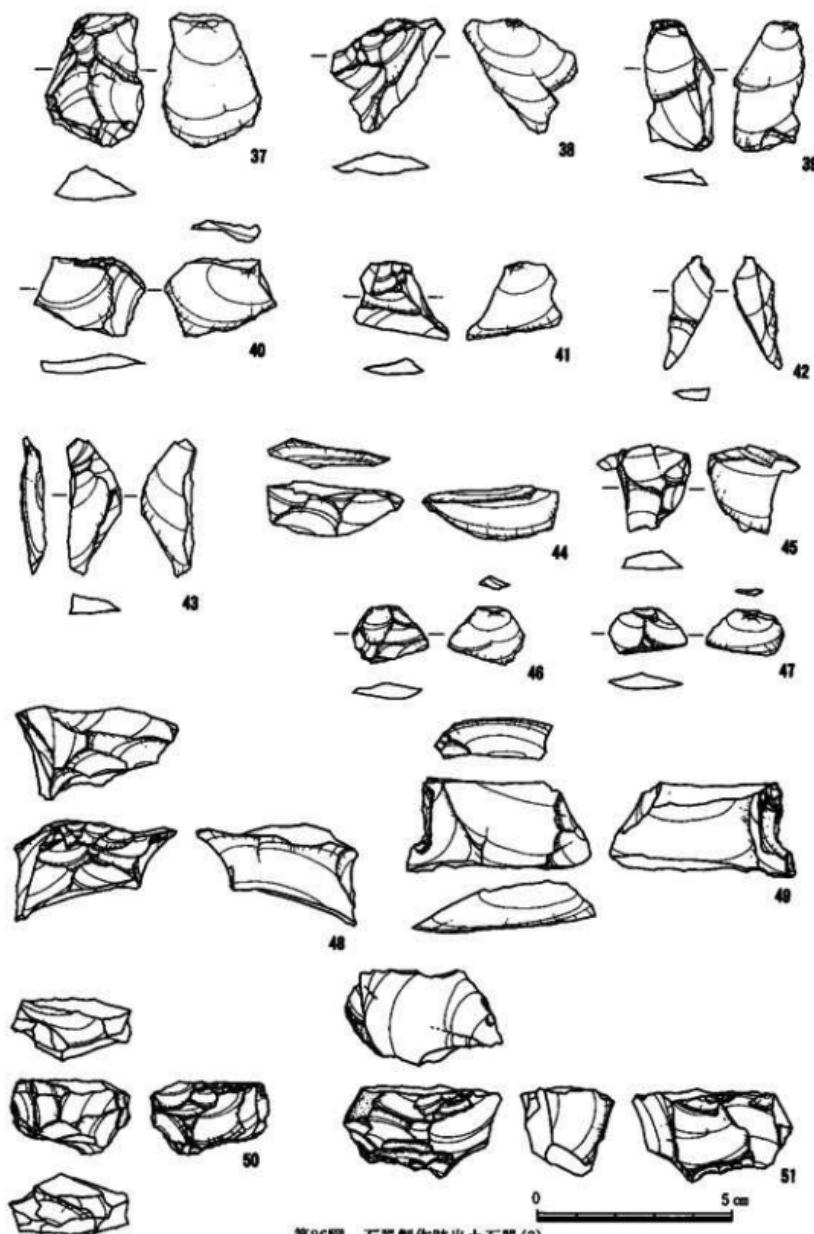
48～51は石錐素材剥片を作出した石核である。48、49は大型の剥片からさらに石錐素材剥片を作出した剥片利用石核である。両者とも剥片として作出された時点では5cm内外の大きさと思われ、母岩からの剥片剥離工程の初期の段階にまず大型の剥片を作出し、その剥片の形状を作断などの調整で石核としての形状を整え、石錐の素材剥片のような小型の剥片を作出しているものと思われる。50、51は、普遍的にみられる石核である。剥片利用石核と比較すると、部厚であり、打面の作出も明確に行われている。断定はできないが、剥片利用石核のような大型



第84図 石器製作跡出土石器(1)



第85図 石器製作跡出土石器(2)



第86図 石器製作跡出土石器(3)

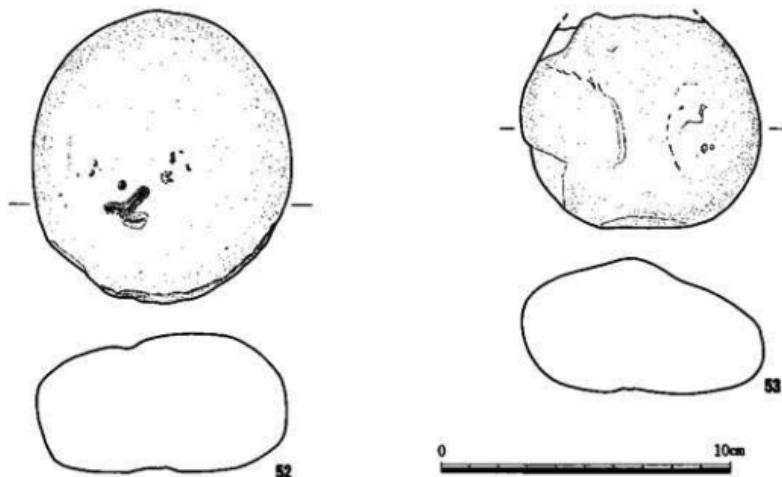
第28表 石器製作跡出土石器表

辨別番号	遺物番号	種類	石質	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
84881	B3-23, 37	石	黒	チヤート A	2.05	1.15	0.37	0.62 片茎歯欠。
2	B3-13, 54	石	黒	チヤート A	2.0	1.35	0.32	0.72 両茎歯欠。
3	B3-22, 9	石	黒	チヤート A	2.0	1.75	0.49	1.23
4	B3-13, 92	石	黒	チヤート A	1.7	1.4	0.39	0.64
5	154, 48	石	黒	チヤート A	1.45	1.4	0.45	0.65
6	154, 189	石	黒	チヤート A	1.5	1.3	0.3	0.49
7	B3-13, 4	石	黒	チヤート A	2.0	1.85	0.35	1.12
8	B3-23, 151	石	黒	チヤート A	0.95	1.24	0.23	0.32 断面のみ薄部。
9	B3-23, 15	石	黒	チヤート A	1.4	1.5	0.45	0.94
10	154, 173	石	黒	チヤート A	2.1	1.33	0.43	0.93
11	B3-23, 114	石	黒	チヤート B	2.1	1.4	0.36	0.88
12	B3-23, 56	石	黒	チヤート A	1.82	1.22	0.2	0.53 片茎歯欠。
13	154, 197	石	黒	チヤート A	1.7	1.2	0.49	0.90
14	B3-23, 239	石	黒	チヤート A	1.2	0.9	0.2	0.33
15	B3-13, 151	石	黒	チヤート A	0.72	1.05	0.38	2.56
16	154, 58	石	黒	チヤート A	0.65	1.1	0.35	0.23
17	B3-23, 80	石	黒	真	4.8	3.3	1.25	17.50
HS8818	B3-13, 25	側面ある剝片	チヤート B	1.6	1.35	0.4	0.85	
19	B3-23, 23	側面ある剝片	チヤート A	1.6	1.4	0.29	0.61	
20	B3-23, 58	側面ある剝片	チヤート A	1.35	1.9	0.4	0.85	
21	B3-13, 112	側面ある剝片	チヤート A	1.4	1.27	0.26	0.62	
22	B3-23, 69	側面ある剝片	チヤート A	2.38	1.4	0.31	1.27	
23	B3-13, 61	側面ある剝片	チヤート A	1.08	2.36	0.22	0.36	
24	B3-13, 37	側面ある剝片	チヤート A	1.4	1.8	0.33	0.71	
25	B3-23, 132	側面ある剝片	チヤート B	1.3	1.9	0.5	0.87	
26	B3-24, 3	側面ある剝片	チヤート A	1.15	1.8	0.62	1.26	
27	B3-13, 77	側面ある剝片	チヤート A	1.92	2.1	0.52	1.93	
28	B3-13, 29	側面ある剝片	チヤート A	1.4	2.1	0.32	1.17	
29	B3-13, 74	側面ある剝片	チヤート B	1.4	1.85	0.42	1.03	
30	B3-23, 137	側面ある剝片	チヤート A	1.0	1.7	0.31	0.52	
31	B3-22, 8	側面ある剝片	チヤート A	2.25	2.7	0.7	5.27	
32	154, 73	側面ある剝片	チヤート A	2.0	2.35	0.75	3.43	
33	B3-23, 58	側面ある剝片	チヤート A	1.55	1.4	0.43	0.86	
34	B3-13, 31	側面ある剝片	チヤート B	2.4	1.2	0.68	1.83	
35	B3-13, 52	側面ある剝片	チヤート B	2.0	2.04	1.07	3.01	
36	154, 160	側面ある剝片	チヤート A	3.6	1.7	0.6	1.39	
868837	B3-23, 203	剝片	チヤート A	3.4	2.5	0.98	8.10	
38	B3-13, 53	剝片	チヤート A	2.35	3.1	0.61	3.62	
39	B3-13, 29	剝片	チヤート A	3.4	1.87	0.5	2.55	
40	B3-23, 239	剝片	チヤート A	2.0	2.9	0.42	2.97	
41	154, 94	剝片	チヤート B	1.95	2.5	0.47	1.85	
42	154, 182	剝片	チヤート B	2.8	1.5	0.38	1.12	
43	B3-23, 36	剝片	チヤート A	3.05	2.2	0.65	2.21	
44	154, 20	剝片	チヤート A	1.45	3.55	0.74	3.85	
45	B3-13, 70	剝片	チヤート A	2.25	2.43	0.68	2.41	
46	B3-13, 42	剝片	チヤート A	1.4	1.95	0.41	1.04	
47	B3-23, 45	剝片	チヤート B	1.1	2.0	0.44	1.01	
48	B3-23, 48	石	黒	チヤート A	3.5	3.8	1.82	19.49
49	B3-23, 33	石	黒	チヤート B	2.4	4.7	1.13	19.46
50	B3-23, 44	石	黒	チヤート A	1.87	3.1	1.14	9.92
51	B3-13, 82	石	黒	チヤート A	2.4	4.1	2.36	23.23
878832	154, 136	石	安山岩	16.05	9.1	4.73	623.50	
53	154, 175	石	砂	4.8	8.3	4.87	419.20	

の剥片を作出した後に、小型化した石核からさらに今度は石鐵の素材剥片のような小型の剥片を作出していると思われる。

52は安山岩製の磨石である。全面が研磨され、特に周縁部は面的に研磨され、形状を整えている。表裏面には明確ではないが凹みがみられる。変色はしていないが被熱し、器表面はざらざらである。

53は砂岩製の敲石である。微細ではあるが周縁に敲打痕がみられる。被熱し器表面は赤化している。



第87図 石器製作跡出土石器(4)

5. グリッド出土遺物

a. 繩文土器 (第88図～第97図, 図版35～41)

グリッド（遺構外）から出土した縄文土器の総数は、約11,000点である。時期的な主体となるのは、早期後半の条痕文系土器群であるが、器面に条痕のみ施されるものや、胎土に纖維を含むが無文のものが多く、既存の各型式に比定できるものが少ない。

なお、胎土中に含まれる纖維の量を観察し、土器断面図にスクリーントーンの濃淡で示している。纖維量の「普通のもの」と「多いもの」が濃、「少ないもの」が淡である。

以下にそれらの概要を説明するが、分類の基準は次のとおりである。

第I群土器 早期中葉の沈線文系土器群

第II群土器 早期後半の条痕文系土器群

第III群土器 前期前半の土器群

第IV群土器 前期後半の土器群

第V群土器 中期の土器群

第VI群土器 後期の土器群

第I群土器

早期中葉の沈線文系土器群である。出土数は僅少で、分類可能な土器片数7,400のうちでは、約0.1%にしかならない。

第1類(1, 2) 1, 2はいずれも沈線により矢羽状の文様が施されたもので、三戸式土器と思われる。

第2類(3) 3は沈線文が横走する田戸下層式土器である。

第II群土器

早期後半の条痕文系土器である。本群土器が全体の中で占める割合は、85%に達する。ここではまず、有文土器について分類、説明し、さらに条痕のみ施される土器片等についても、口縁部の断面形等を観察し、できるだけ分類することにしたい。

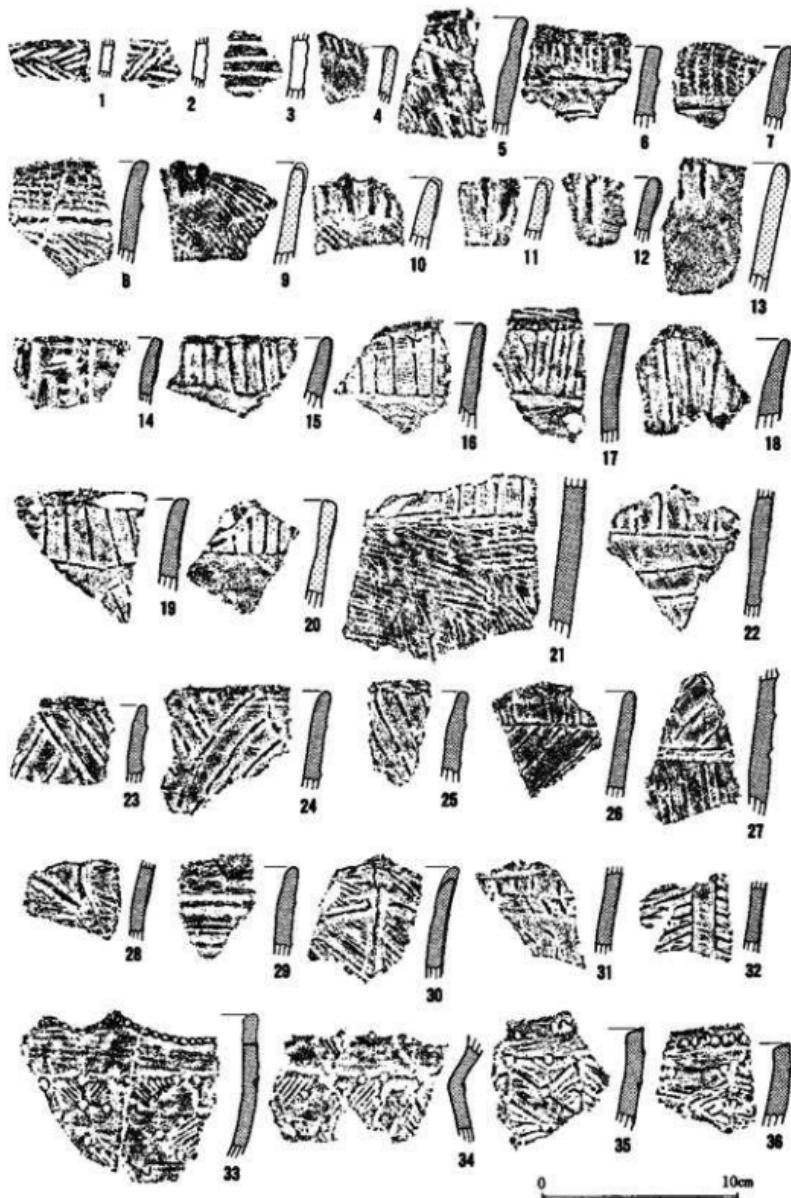
第1類(4) 絡条体圧痕を有するものである。4は外そぎ状の口唇部と、内面口唇下に絡条体圧痕を有する。器表面には細かな縦位の擦痕がみられ、胎土中の纖維量は微量である。

第2類 子母口式土器とする。グリッドからの出土はなかったが、209号炉穴から検出された土器(第30図20, 21)がこれにあたる。

第3類(5~8) 口唇下に貝殻復縁圧痕を施すものである。胎土中にはすべて纖維が含まれ、裏面はやはりすべてに条痕が施されている。5を除き、貝殻文列の下位には横位の細隆起線が付されている。

第4類(9~14) 口唇下に縦位の隆起線が貼り付けられるものである。全体に胎土中の纖維量の少ないのが特徴的で、13を除き内面は条痕が施される。類例が、佐倉市タルカ作遺跡の第III群土器中に1点だけみられた。9の口唇上には、細い縞文原体圧痕が認められる。本類はおそらく、子母口式から野島式付近の時期に比定されるものと思われる。

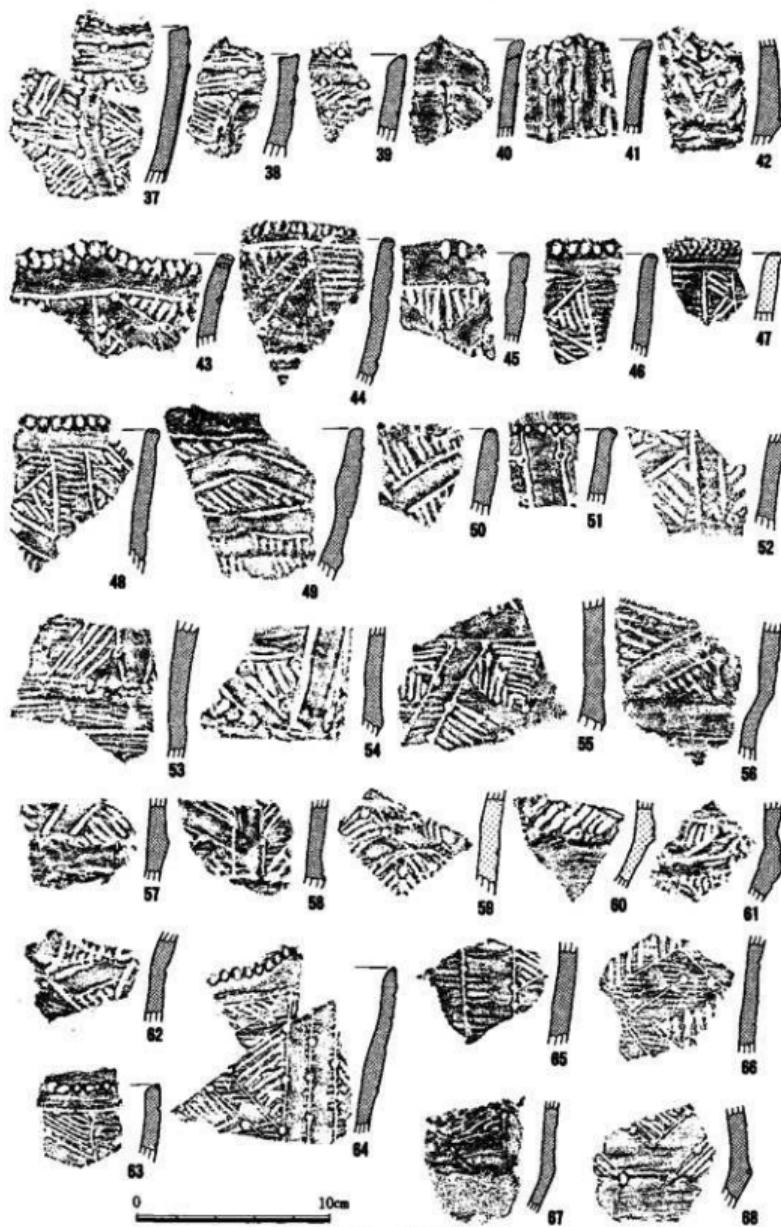
第5類(15~32) いわゆる細隆起線により文様が施される野島式土器を一括する。全体に焼成は良好で、堅くしっかりとした土器である。15~22は口縁部、あるいは口縁部近くの破片で、縦位の細隆起線文を主体に意匠状の区画文が施されている。22を除き、内面には条痕が残っている。23~27も口縁部ないし、口縁部近くの破片であるが、細隆起線は斜位を主体として施されている。内面はすべてに条痕が残される。28は他よりもやや高い隆起線が施される。内面は無文である。29~32は、細隆起線を組み合わせて意匠的に施すものである。内面はやはりすべてに条痕または、擦痕化された条痕を残す。



第88図 グリッド出土土器(I)

第6類(33~46, 48~78) 猿ヶ島台式土器である。グリッドから検出されたものの中には、復元可能なものはなく、器形等を知りうる資料が少ない。胎土中の纖維量は、前述の第4類、第5類よりはやや多くなる傾向にある。また、内面の条痕が磨消されて擦痕状になったものも多い。33~42は、細隆起線文を主体に文様を作出するものである。33, 34は同一個体と思われる。胎土中には纖維に加えて、石英、雲母が混ぜられている。特に雲母の割合が高く、器表面に金粉状に浮き出る。文様は、細隆起線文により幾何学的な区画文を作出し、文様充填部となる部分には沈線を集合させている。また、細隆起線文の接点には円形の刺突文が加えられている。35~40は、やはり細隆起線による幾何学的な文様が施されるもので、沈線を集合的に充填する。口唇部の断面はいずれも内そぎ状となり、表面側の口唇端部に刻み目を有する。41は波状口縁の波頂部片で、縁位に細隆起線が施される。細隆起線上には刺突文を加えるが、おそらく充填文は持たないものであろう。内面は横位の条痕が残る。43~68は、区画線が沈線によるもので、文様充填部はやはり集合沈線が充填されている。区画線となる沈線には、63~68のように細く鋭利な感じのするものもみられる。これら細い区画線を用いるものについては、すべてのものに沈線の接点部分に刺突文が加えられる。一方、これよりもやや太い沈線を用いたものの中では、48~50のように沈線の接点上に刺突文が加えられないものも存在する。口唇部の形状は、細隆起線を区画文に用いたもののように内そぎ状とはならず、口唇上の平坦なものが多い。これに伴って、口唇上の刻み目も端部に施されるのではなく、棒状工具などで口唇上全体に施されるものが主である。69~76は、列点文が充填文として施されている。口唇部の形状はやはり、平坦か丸みを帯びており、刻み目は70を除き棒状工具等により口唇上全体に施される。区画文となる沈線は、69~74が直線的、75が曲線的なものである。76には区画線がみられない。77, 78は沈線文が斜格子状となるものである。いずれも沈線の接点等には刺突文が加えられている。グリッドの土器で図示した他に、002A号住居跡の覆土中から比較的良好な資料(第39図16~21)が出土している。

第7類(47, 79~93) 茅山式の有文土器である。文様は沈線文を主体に施文されるが、沈線の種類は多様で、細く引かれるもの、太く浅いもの、押し引き状に引かれるものがある。器形的には、口縁部の下位に段を有するものが多く、83, 87を除くほとんどが茅山下層式に比定できるものであろう。79, 80は地文に条痕を施した後、沈線文を比較的密な間隔で施したものである。文様は79が横位の沈線を主体に、意匠文風の円形文を組み合わせる。80は斜位の沈線が主体である。47, 81, 82は胎土中に含まれる纖維が他よりは少なく、沈線は細い棒状工具による。84, 85は押し引き状の連続刺突によって文様が作出されるものである。86, 87は胎土中の纖維量がひじょうに多い。いずれも内外面ともに条痕ではなく、擦痕が地文となる。沈線文は86が浅い斜沈線、87は口縁上部に爪形状の半円文が施される。88~93は、いわゆる凹線文と呼ばれる浅く太い沈線により、文様が作出されているものである。胎土中の纖維量は、すべ



第89図 グリッド出土土器(2)



第90図 グリッド出土土器(3)

てひじょうに多い。88, 89, 91は凹線文が曲線的なもので、内面はすべてに条痕が残る。91は縦位に隆帶状の区画文を付し、隆線の頂部に刺突文を加えている。90はX状に交差する凹線文と、その下位に押し引き状の沈線がみられる。口唇部の断面形は内そぎ状となり、内面に条痕は見られない。92は条痕を地文とし、曲線文から2条の直線が垂下する。93は他のものとやや様相を異にする。薄い器壁を有し、内面は研磨されている。表面は無文上に縦位のなぞりを加えるようである。83は尖り気味の口唇部断面を有する口縁部片である。口唇上は細い刻み目を有する。半截竹管による平行沈線を斜位に施し、さらに円形竹管の刺突が加えられている。内外面とも、地文に条痕が施された様子もなく、他とは趣を異にするが一応本類に含めておく。

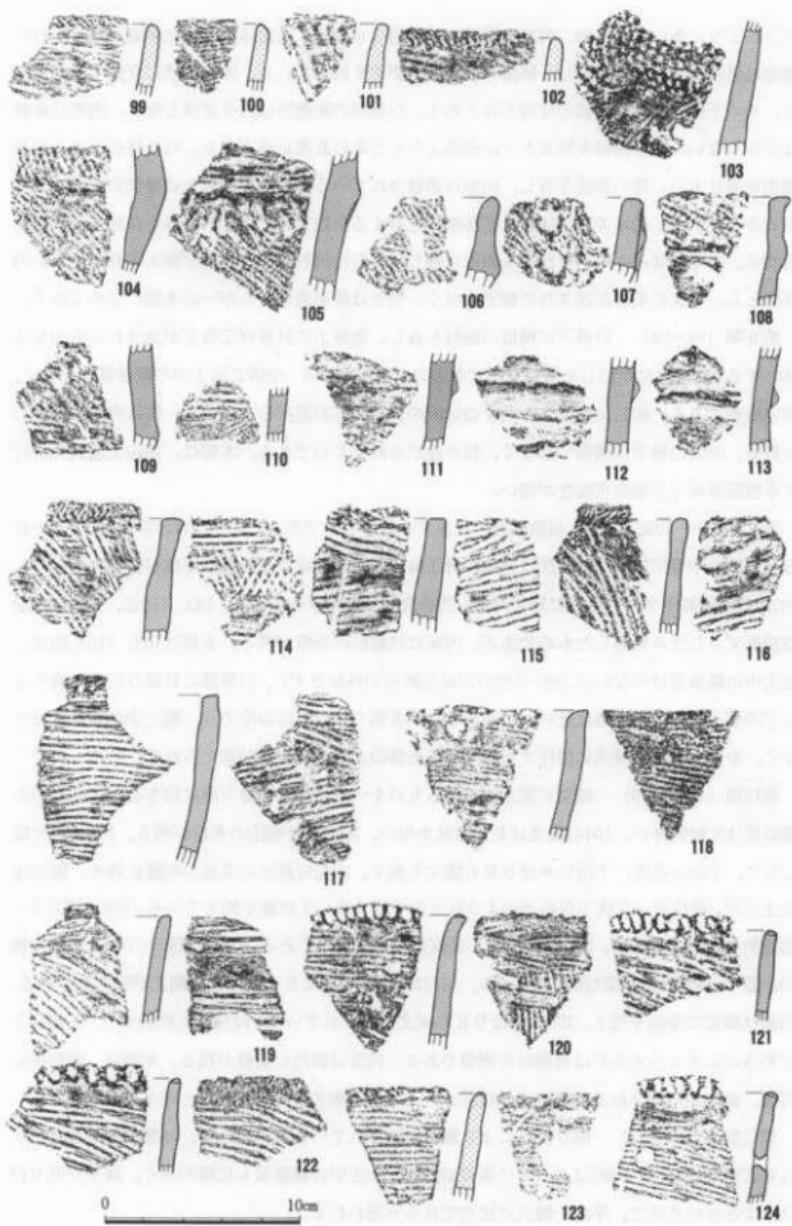
第8類 (94~98) 口唇下に横位の隆帶を有し、隆帶上に貝殻背圧痕文が施されるものを主体とするが、それに類似した様相を呈するものも含んでいる。全体に胎土中の纖維量は少なく、堅い焼成である。地文に条痕文を残すのは94の表裏、95の表面のみである。97は内面に擦痕のみ残る。98の口唇下は隆帶ではなく、折り曲げられたものである。本類は、茅山上層式に併行する西関東系の土器の可能性が高い。

第9類 (99~103, 110) 貝殻復縁の圧痕文を施すものである。99~101は同一個体と思われる。条痕を地文に施し、口唇部は貝殻の背圧痕、器表面には貝殻腹縁の圧痕が施されている。102は貝殻腹縁をずらしぎみに施した後、凹線文的ななぞりを加える。103, 110は、やはり貝殻腹縁をずらしぎみに施したものである。内面には縦位の条痕が残る。本類は103, 110を除き、胎土中の纖維量は少ないが、99~102の口縁部断面が外反せず、口唇部に貝殻背圧痕を有するなどの茅山上層式の特徴に近いものがある。第8類でみたものの中でも、胎土中の纖維量は少なく、やはり茅山上層式に併行する西関東系土器の土器の可能性が考えられる。

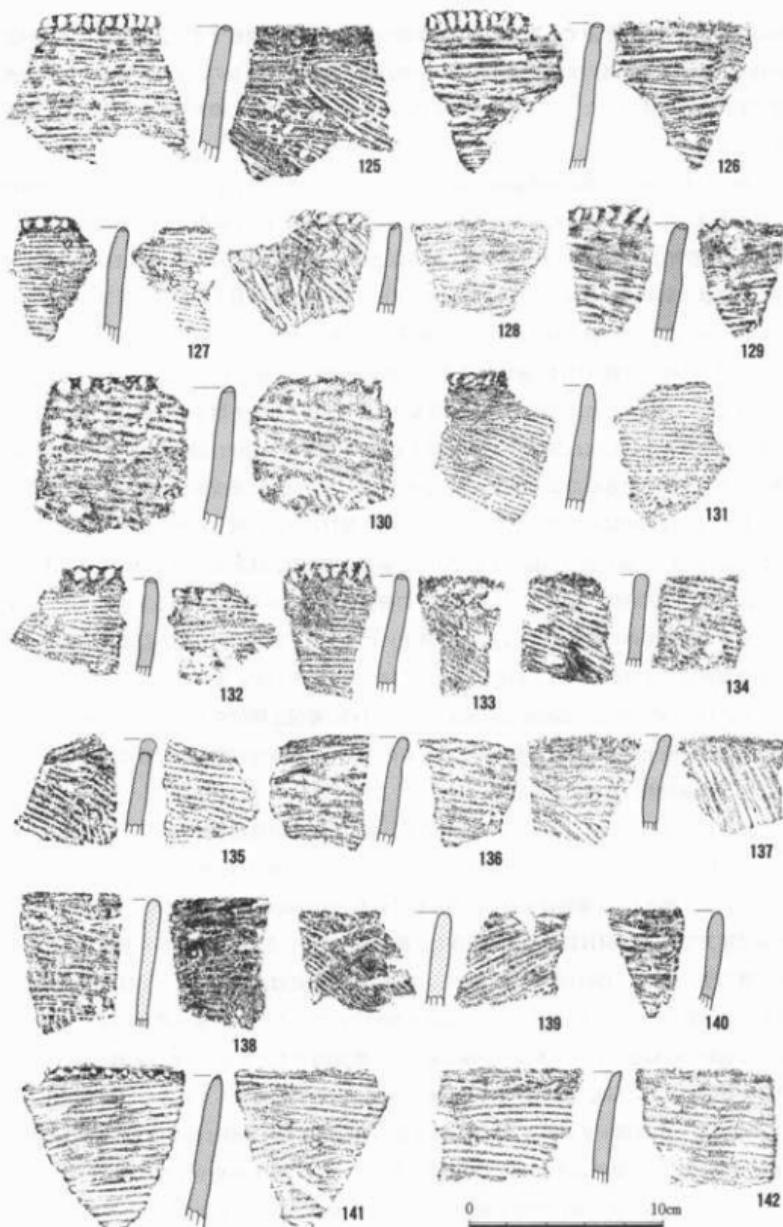
第10類 (104~109) 繩文が施されているものを一括した。口縁下部に段を有し、胎土中の纖維量は比較的多い。104の繩文はR L原体を用い、内面には横位の条痕が残る。105は段を境にして、上位に条痕、下位にやはりR L繩文を施す。内面は斜位の条痕が明瞭に残る。繩文施文上には、縦位にヘラ状工具の先のようなもので短く浅い太沈線を加えている。106は繩文上に曲線的な凹線文を施す。内面は風化し、条痕の有無は不明である。107は頂部が平らな波状口縁の土器で、縦位に指捺状圧痕を並べる。108は口縁部の段より上位にR L繩文が施されている。内面は横位の条痕を残す。109もやはりR L繩文が施されている。段部は比較的尖り、拓影図上で刻みのようにみえるのは発掘時の損傷である。内面は横位の条痕が残る。本類は、器形的な特徴、繩文上に施される沈線文等の状況から、茅山下層式に比定できると考えられる。

第11類 (111~113) 貼り付けによる隆帶が施されているものである。隆帶の断面形はいずれも三角形になり、内面はすべてに条痕が残る。胎土中の纖維量も比較的多く、隆帶が貼り付けによるという点で、茅山上層式に比定できると思われる。

第12類 (114~197) 胎土中に纖維を含み、器面が条痕ないし擦痕、あるいは無文の、いわ



第91図 グリッド出土土器(4)

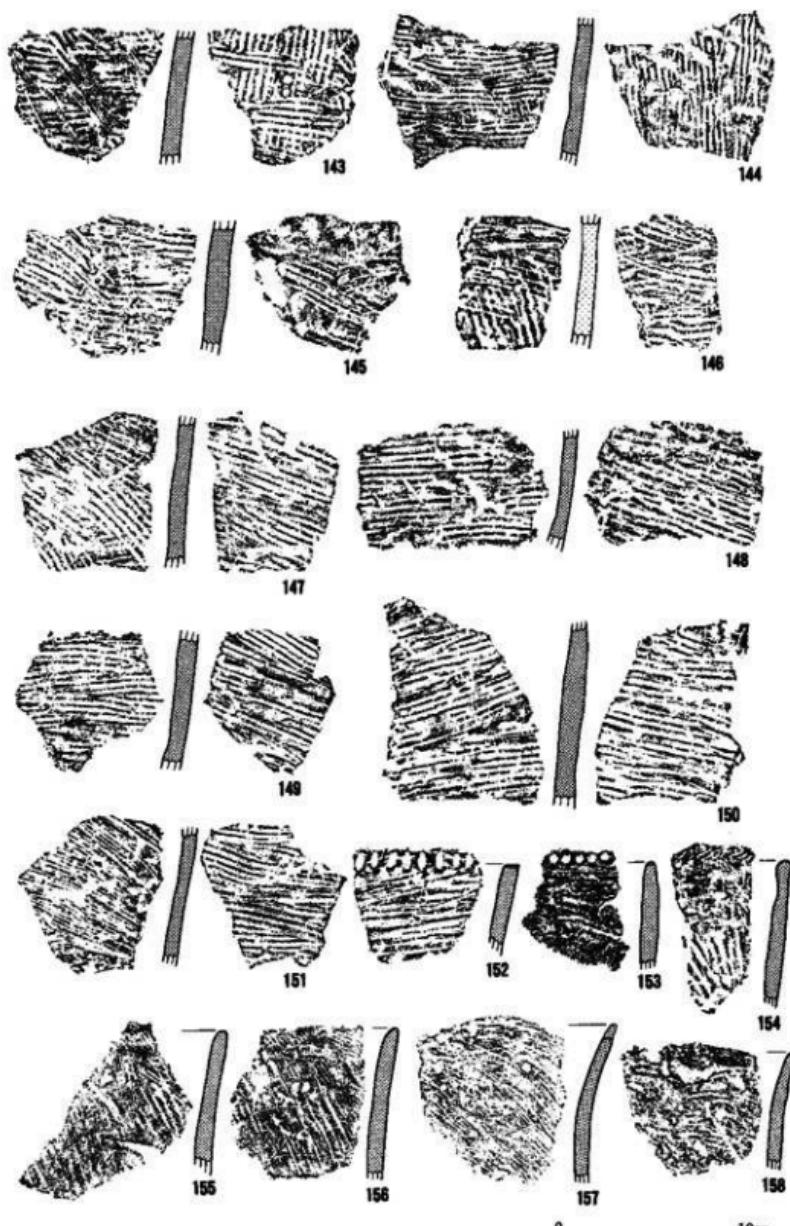


第92図 グリッド出土土器(5)

ゆる文様を持たない土器である。しかし、条痕の施される面を観察すると、表裏面に条痕が施されるものが主体とはいへ、表面だけのものや、逆に裏面だけのもの、またいずれかの面の条痕が磨消されて擦痕となるもの等の土器片がみられる。以下にその類型を種として示し、説明することにする。

1種 (114~151) 条痕が表裏面に施されているものである。114~119は、口唇上が角頭状を呈するほど平坦に調整されるものである。このうち、114、115の口唇上には条痕が施され、116には貝殻背圧痕が施される。いずれも刻み目と同様の効果が施されている。117の口唇上は浅い擦痕状の刻みがみられる。118、119の口唇上は平坦に調整されるが、刻み目等は加えられない。120~133は、口唇上が平坦かやや丸味を帯びる形状を呈し、口唇上に刻み目を有するものである。口唇上の刻み目は、細い棒状工具の側面を押圧して施すものがほとんどで、133を除くすべてがこれにあたる。133の口唇上の刻み目は、ヘラ状工具の先端を連続的に刺突することによって施される。120は口唇部付近が外屈する器形のもので、裏面は縦位の条痕を施した後、横位に条痕を磨消するかのように擦痕状の調整を加える。124には焼成後に補修孔が穿たれている。134~140は、やはり口唇上が平坦かやや丸味を帯びるが、口唇上に刻み目を持たないものである。135のみ、緩い波状口縁の土器である。条痕の方向は、ほとんどのものが横位主体となるが、137の裏面は縦位である。141、142は、口唇部の断面が尖り氣味となるものである。いずれも表裏に横位主体の条痕を施し、141の口唇上にはヘラ状工具を用いた刻み目が施される。143以下は表裏面に条痕が施される胴部片である。ほとんどのものが、表裏面同方向の条痕施文であるが、144は表面横位、裏面縦位の施文となる。143は縦位と横位を交互に施し、籠を思わせる。本種は、胎土中の纖維量を多く観察したものの中でも、器面が脆弱になるほどのものはなく、堅く焼成状態の良好な土器が多い。

2種 (152~164) 表面は条痕が施されるが、裏面はなんの痕跡も認められない無文の土器である。152のみ口唇上が平坦で角頭状を呈する。口唇上の刻み目は、棒状工具の側面を押圧することにより施される。裏面は条痕が磨消されている。153は胎土中の纖維が他よりもやや多い。裏面は無文である。154は口唇上に貝殻背の圧痕が施されている。裏面は上位が無文、下位は条痕を磨消する。155、156は同一個体である。表面の口唇下には、幅1cmほどで貝殻背の圧痕がみられる。裏面の口唇下約2cm以下は、条痕が磨消されている。157は緩い波状口縁を呈し、外反する器形の口縁部である。表面の条痕は細かく、擦痕的でさえある。裏面は剥離が激しいが、無文のものである。158、159も外反する器形の口縁部片、裏面は明らかに条痕が磨消されている。160は胎土中の纖維量が極めて少ない。表面の条痕は浅く、裏面は無文である。161は内弯気味の器形を呈し、裏面は横位の擦痕が顕著に残る。162は口唇上がやや尖り気味となる。口唇上の刻み目は、ヘラ状工具の先端を連続して刺突したものである。裏面は条痕を磨消した擦痕が残る。163、164はいずれも胴部片で、裏面には器面調整のためと思われる擦痕がみられる。



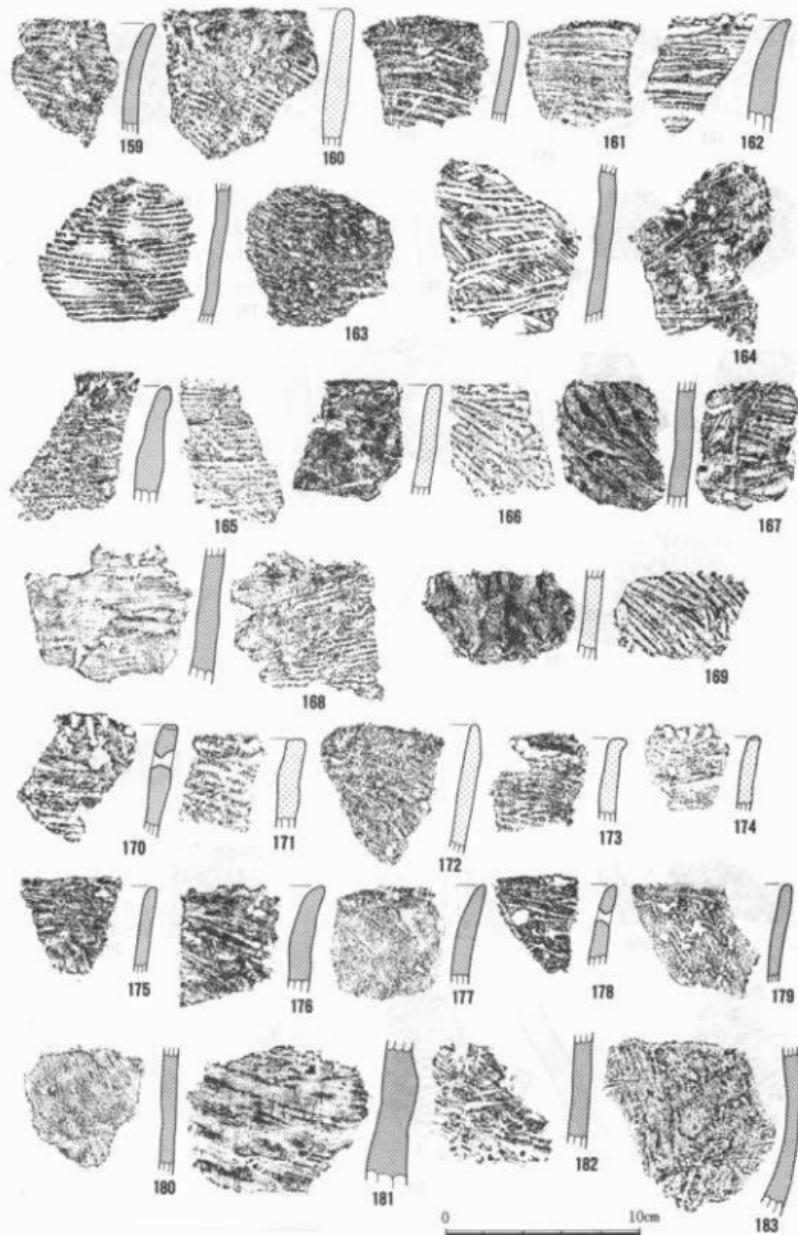
第93図 グリッド出土土器(6)

3種 (165～169) 表面は擦痕が残る程度の無文に近いが、裏面に条痕を残しているものである。165の表面は、条痕が磨消された擦痕状を呈し、口唇上には浅い刻みが施される。166の口唇上は、角頭状に調整されている。器表面は浅い擦痕がわずかに残る。167～169は胴部片で、表面にはいずれも調整の痕跡が面取り状に残っている。

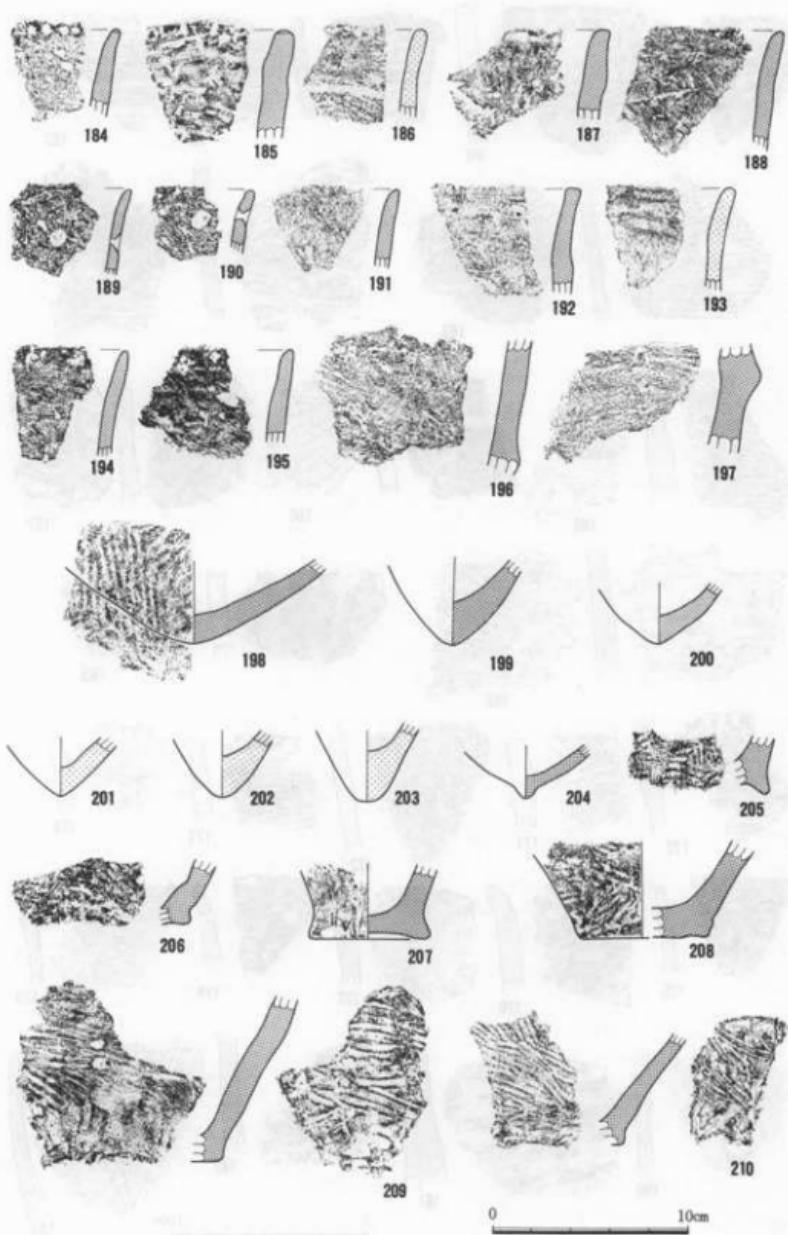
4種 (170～183) 表面に擦痕を残し、裏面はやはり擦痕が残るか無文のものである。170は口唇上が平坦な形状を呈し、ヘラ状工具による刻み目が施される。器面には両面側からの穿孔による補修孔を有する。171, 173, 179も口唇上は平坦に調整されているが、刻み目は有さない。表裏の擦痕は、いずれも条痕を磨消した際のものと思われる。174は口唇上に、棒状工具の押圧による刻み目を有し、擦痕は表面にのみ認められる。172, 175～178は、口唇部がやや尖り気味となる。補修孔を有する178以外は、条痕を磨消した擦痕ではない。また、177の擦痕の方向は、縦位が主体である。180以下は胴部片である。表面には、条痕を磨消したものではない擦痕がみられるが、180, 182の裏面の擦痕は、明らかに条痕を磨消している。

5種 (184～197) 表面が無文の土器である。184～193, 195は、表裏面ともに無文のものである。184は、口唇上に棒状工具圧痕による刻み目を有する。185は比較的厚手の土器で、口唇上はヘラ状工具先端の刺突による刻みが施される。186, 187は口唇上に刻み目を持たないが、口唇上は平坦に調整されている。188～191は口唇上が丸味を帯び、外反する器形を呈している。189, 190には補修孔が穿たれる。192, 193も外反気味に開く器形を呈するが、口唇上は平坦に調整される。194は表面無文だが、裏面は条痕を磨消した擦痕が残る。196, 197は、いずれも胴部片で、表面は無文だが、196の裏面には横位の条痕、197の裏面にはやはり横位の条痕を磨消した擦痕が残る。

6種 (198～210) 条痕文系土器の底部を一括する。底部の形態としては、尖底と平底があり、平底には上げ底のものも存在する。また尖底の中でも、尖底角の広いものや、狭いもので細かな分類を行うことも可能ではあるが、量的なまとまりがないため、ここでは図示したものの特徴を説明するに止める。198～204は、尖底土器の底部である。198の尖底角は比較的広い。器厚は尖底部の中心部に至るまでほぼ一定で、中心部のみ厚くなるということはない。表裏に条痕文が施されている。199～202も、尖底部の中心で器壁が著しく厚くなることはない。以上は表裏面ともに無文のものである。このうち、201, 202の胎土中に含まれる繊維量は、他と比べて少量である。203は、唯一尖底部の中心部が厚いものである。やはり胎土中の繊維は少ない。204は比較的薄手の作りで、尖底部の中心部のみ突起状に膨らむ形状を呈する。205～210は、平底を呈する底部である。205は外面と上げ底の底面付近に貝殻背压痕文が施されている。胎土中の繊維量が多いわりには、内面は研磨されたような状況であることから、あるいは前期に属する土器の可能性もある。206の内外面は、無文である。207は上げ底を呈し、外面に縦位の条痕が残る。推定底径は6.2cmである。208～210は、比較的開き気味に器形が立ち上がるものである。



第94図 グリッド出土土器(7)



第95図 グリッド出土土器(8)

いずれも内外面に条痕文が施されている。

第III群土器

縄文時代前期前半の土器群である。本群土器が全体の中に占める割合は1%にも満たない。本群土器はすべて黒浜式土器である。少量とはいって、要素的には古い段階のものから新しい段階のものまで含んでいる。

第1類(211, 212) 器面に貼り付けによる隆帯が施されるものである。211は波状口縁の破片で、波頂部から隆帯が垂下する。内面はよく研磨調整されている。212は頸部付近の破片であろうか。横位の隆帯上にも、地文と同一の原体R Lが施されている。

第2類(213~219) 縄文や燃糸文等の、地文のみが施されているものである。213はやや内湾する器形の口縁部で、L R縄文が施されている。内面は軽く研磨調整される。214は横位にL R縄文が施文されるが、原体の端部はループ状となる。214は無節L, 217は無節R縄文が施されている。218は縄文原体を軸に、付加条文を施している。219は貝殻背による圧痕文が施され、内面は軽く研磨調整される。

第3類(220) 半截竹管による平行沈線で文様を描出するものである。220は平行沈線により、崩れたコンパス文が描出される。内面は縦位の研磨調整痕が残る。

第IV群土器

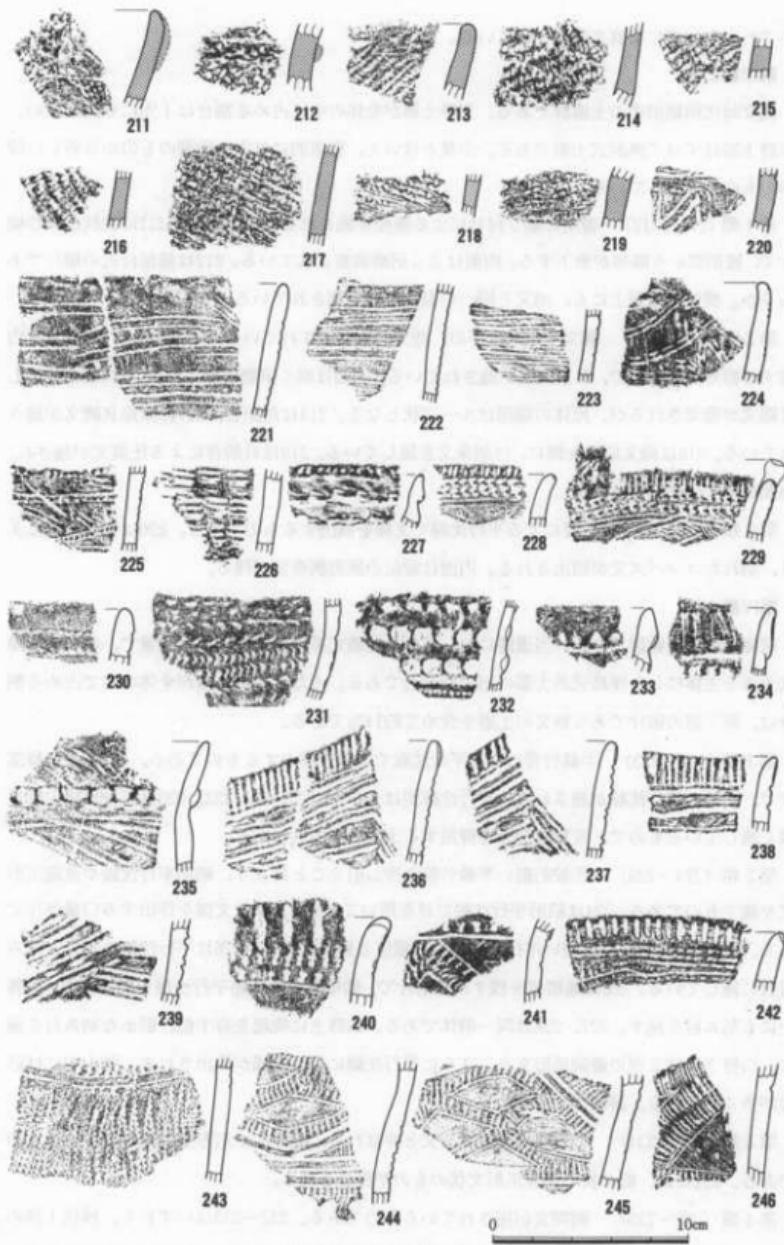
前期後半の土器群である。当遺跡においては、諸磯式系の土器の出土は微量で、むしろ興津式土器を主体にした浮島式系土器の出土が顕著である。また、本群土器が全体の中で占める割合は、胴下部の破片である無文の土器を含めて約14%である。

第1類(221~223) 半截竹管による平行沈線で文様を描出するものである。221のみ口縁部片で、横位の平行沈線が施される。平行沈線間はやや空いている。222, 223は平行沈線を密に深く施しているもので、変形爪形文を併用する土器の可能性がある。

第2類(224~229) 比較的細い半截竹管を押し引くことにより、結節平行沈線や連続爪形文を施すものである。224は結節平行沈線だけを用いて、意匠文風な文様を作出する口縁部片である。225は連続爪形文と短い平行沈線文を、横位と斜位に施す。226は平行沈線を短く、刻み目状に施している。226は輪積痕を残す口縁部片で、輪積痕上に結節平行沈線を加える他、口唇上にも刻み目を施す。227, 228は同一個体である。口唇上に突起を有す他、細かな刻み目を施す。口唇下には2列の連続爪形文と、さらに平行沈線による文様が描出される。胎土中には砂粒が多く含まれる。諸磯式土器である。

第3類(230, 231) いわゆる変形爪形文と呼ばれる、幅の広い爪形文が施されているものである。231には、幅の狭い連続爪形文状のものが併用される。

第4類(232~235) 刺突文が施されているものである。232~235はいずれも、棒状工具の先端を斜めに強く器面に押しつけるため、反対側が盛り上がったいわゆる凹凸文が施されてい



第96図 グリッド出土土器(9)

る。232の下位には三角文の刺突が、235には平行沈線文がそれぞれ併用される。

第5類（236～239） 口唇下部に刻み目状の短沈線を連続的に施し、文様は平行沈線文を深く、比較的密に施しているものである。236、237は、いずれも波状口縁を呈し、平行沈線は口縁に沿って施されている。

第6類（240～256） 地文にアナグラ属貝殻腹縁の圧痕文を有するものである。さらに沈線区画により、貝殻文施文部と無文部を分けるものが多くみられ、これらは興津式である。240、241は同一個体である。240は厚手の口縁部で、口唇上の刻み目は幅広く深い。内面には赤色塗彩の痕跡が残っている。242は口唇下に刻み目状の短沈線列を巡らし、以下にはずらしながら施した貝殻文を地文とし、沈線文が加えられている。243はやはり地文の貝殻文上に、平行沈線文を施しているが、平行沈線内は貝殻文が一部磨消されている。244～249は、幾何学的な沈線区画により、貝殻文施文部と無文部を分けるものである。多少の変形はあるが、菱形状の区画文が多くみられる。250、251、253は、あるいは同一固体かもしれない。胎土中に砂粒を多く含み、焼成はあまり。口縁部付近が外屈する器形を呈し、区画文となる沈線は鋭利な感じのするものである。252も上記とよく似た焼成状況を呈しており、区画線はそれほど深くないが曲線的となる。254～256は、胴部片である。255などは貝殻腹縁圧痕文が、それほどずらされたものではなく、興津式以前のものかもしれない。

第7類（257～261） 前期末に位置づけられる土器である。浮島式から続く東関東的なものと、諸磯式から続く西関東的なもの両者の出土がみられるが、量的にまとまらないため、一括する。257、260は、横位の集合沈線を文様の基調とするものである。胎土中には、砂粒、小礫等を含む。261も同様の胎土を呈し、文様は貼り付けの隆帯上に連続爪形文を加え、いわゆるミミズ状文とする。十三菩提式である。以上の3点はいずれも西関東的な前期末の土器といえる。258は輪積痕を意識的に残している。259には結節繩文である、いわゆる綾絡文が施される。

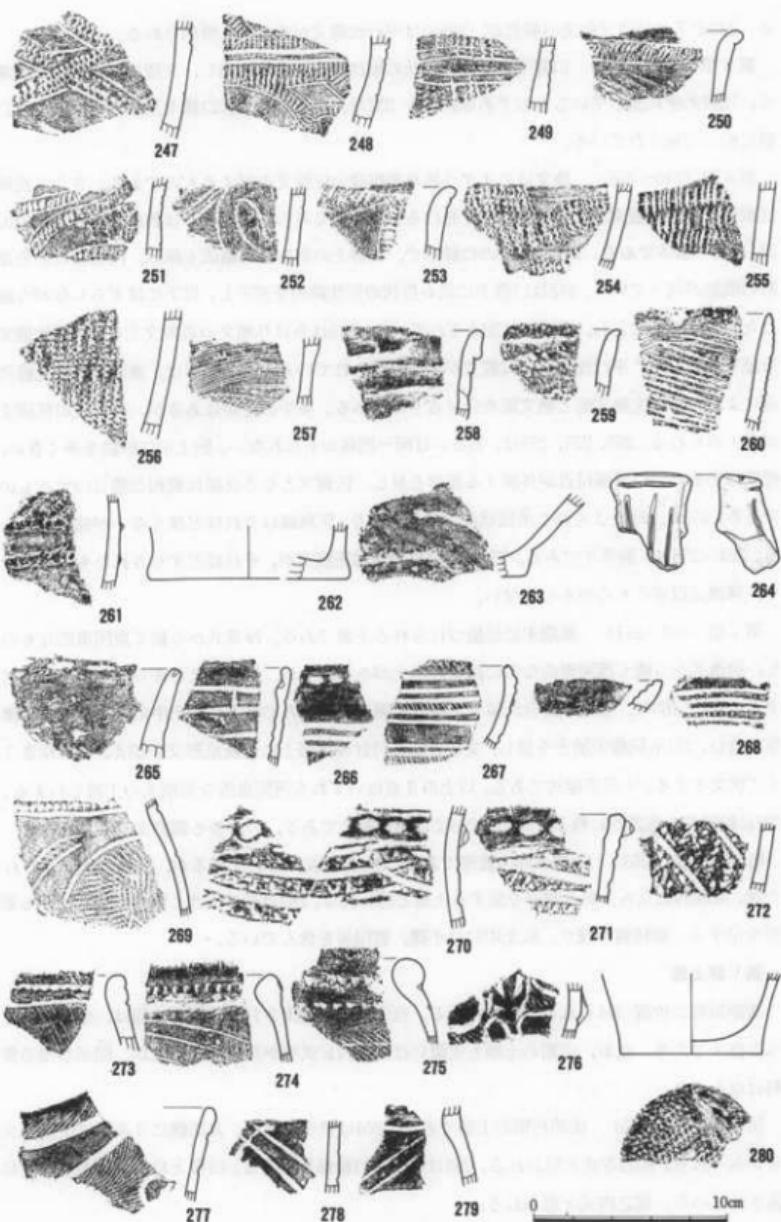
第8類（262、263） 本群土器の底部である。262は無文のものであるが、底縁直上がくびれた後、直線的に立ち上がる器形を呈する土器と思われる。263は逆に大きく開いて立ち上がる器形を呈する。輪積痕が残り、胎土中には小礫、雲母等を含んでいる。

第V群土器

後期以降に位置づけられる土器群である。当遺跡から検出された後期の土器は、全体の約1%と僅少である。なお、中期の土器も実際には加曾利E式等が数点出土したが、図示し得る資料はなかった。

第1類（264、265） 後期初頭の土器である。264は把手である。表面側に3条の縦位沈線文等がみられる。称名寺式と思われる。265は無文の口縁部片である。口唇上には刺突が連続的に施されている。堀之内式と思われる。

第2類（266～272） 加曾利B式土器である。266～269は精製土器で、266～268は横位の沈



第97図 グリッド出土土器(10)

線文を整然と施す加曾利B 1式土器である。269は頸部付近に刻み目を有し、胴部は弧状の沈線により区画文が作出されている。加曾利B 3式と思われる。270～272は粗製土器である。270, 271は貼り付け隆带上に指頭圧痕を加え、いわゆる紐線文を施す。

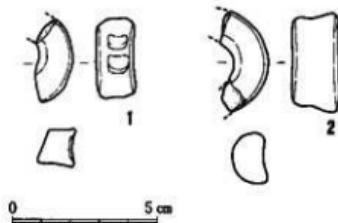
第3類 (273～276) 後期安行式の土器である。273～275は口唇下に連続する刺突文を施したものである。273, 274の地文には条線文が施される。275は弧状の沈線が縄文施文部との区画をなしているが、口唇部の肥厚の様子から一応本類に含める。以上は安行I式である。276はいわゆるブタ鼻状突起を施すほか、沈線で区画された縄文帯を有している。安行II式である。

第4類 (277～279) 晩期安行式の土器である。277は波状口縁のもので、区画文となる沈線は、太いがシャープに引かれるものである。安行3a式である。278, 279はやはりシャープな沈線文のみ施されるものである。いずれも安行3c式と思われる。

第5類 (280) 本群土器の底部である。280は推定底径9.8cmを測るもので、底面には網代痕が残る。おそらく加曾利B式土器であろう。

b. 土製品 (第98図)

耳飾が2点出土している。1は抉状耳飾である。側面に爪形状の圧痕を有する。胎土中には砂粒を多く含んでいる。2は側面が凹状となり、表面の径よりも裏面の径が大きい。両端を欠損するが、耳栓の可能性が高い。



第98図 グリッド出土土製品

c. 石器 (第99図～第105図, 第30表, 第31表, 図版44～46)

岩名第14遺跡の調査では、遺構内で出土した石器以外に多数の石器が出土している。時期的には早期に属する石器が大半を占め、特に石鎌、小型の打製石斧が点数的に多い。

石鎌 (1～17)

グリッドから出土している石鎌は、大別して早期に属するもの(1～9), 前期に属するもの(10, 11), 中期に属するもの(12～16), 後期に属するもの(17)として分類できる。

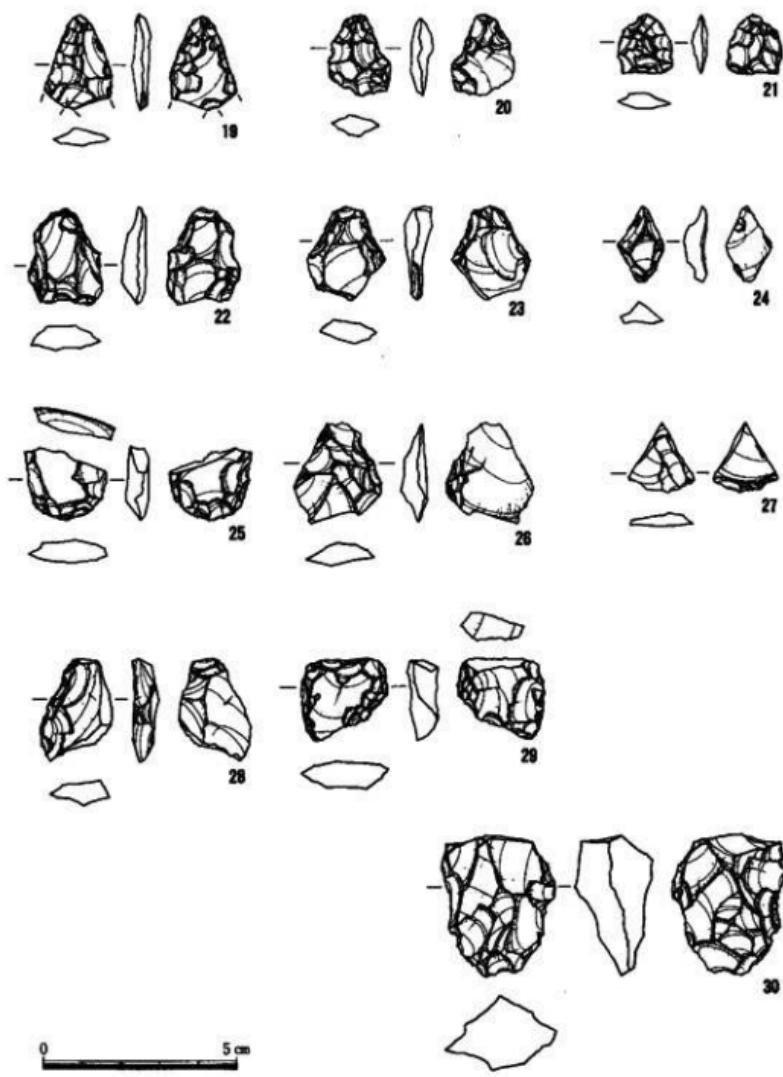
早期に属する石鎌は概して小型であり、平面形状は正三角形もしくは正三角形に近い二等辺三角形状を呈する。基部はそれほど発達していない。使用される石質はチャートで占められ、これは遺構内あるいは石鎌製作跡から出土している石器の石材と同様のことがいえる。調整は全面にわたるが、剥離の稜線が明確でないものが多い。

前期に属する石鎌は、二辺の長い二等辺三角形状を呈し、器形も早期の石鎌と比較すると大きくなる。

中期に属する石鎌は、早・前期の形状と異なり、特に基部の抉れが発達している。調整も密



第99図 グリッド出土石器(1)



第100図 グリッド出土石器(2)

に施され稜線も明確になる。石質は早・前期と同様チャートがほとんどであるが、14のように黒曜石製の製品が混在する。

後期に属する石鏃は17の1点のみである。頁岩製で基部がふくれ、肩の張る形状である。

尖頭器 (18)

18はチャート製で、表裏面に整形の際の研磨痕がみられる。125号土坑で出土している石鏃と同様の作りで、研磨は調整により形状を整形した後に施されている。

調整痕の認められる剝片 (19~29)

グリッドから出土した調整痕の認められる剝片は、ほとんどがチャート製であり、早期に属するものと思われる。調整部位に統一性はないがその形状から石鏃未製品と思われるものが多い。19~24は石鏃未製品と思われ、形状も石鏃に非常に近いものとなる。調整は押圧剝離により行われているが、中には23のように折断と押圧剝離の両者を施すものもみられる。

25は尖頭器の未製品と思われる。調整は素材剝片の全周に施される。折断面がみられ、これは石器製作時の意図しない折断面、換言すれば失敗したため折れたものと思われ、結果としてこの段階で石器の製作を断念したものと思われる。

26~29の中には石鏃未製品に近い形状のものも含まれるが、調整部位が上記の石鏃未製品のそれとは異なるため、ここでは別とした。

削器 (30)

30はチャート製の削器である。調整は粗いが刃部作出の調整が側縁に施される。002B号住居跡から出土している石匙と同様の調整であり、おそらくこの削器も前期に帰属するものと思われる。

打製石斧 (31~46)

岩名第14遺跡から出土している打製石斧は概して小型のものが多く、その大部分は早期に属するものと思われる。46の棒状縛を素材としたもののみ前期に属する可能性がある。

石斧の素材はほとんどが剝片素材であり、石質も変成岩が大半を占める。調整は刃部とその他の部位の調整はさほど差ではなく、全体に粗い調整といえる。46の打製石斧は棒状縛の一端に刃部作出の調整を施す。他の石斧と異なり、刃部の調整は密に行われている。

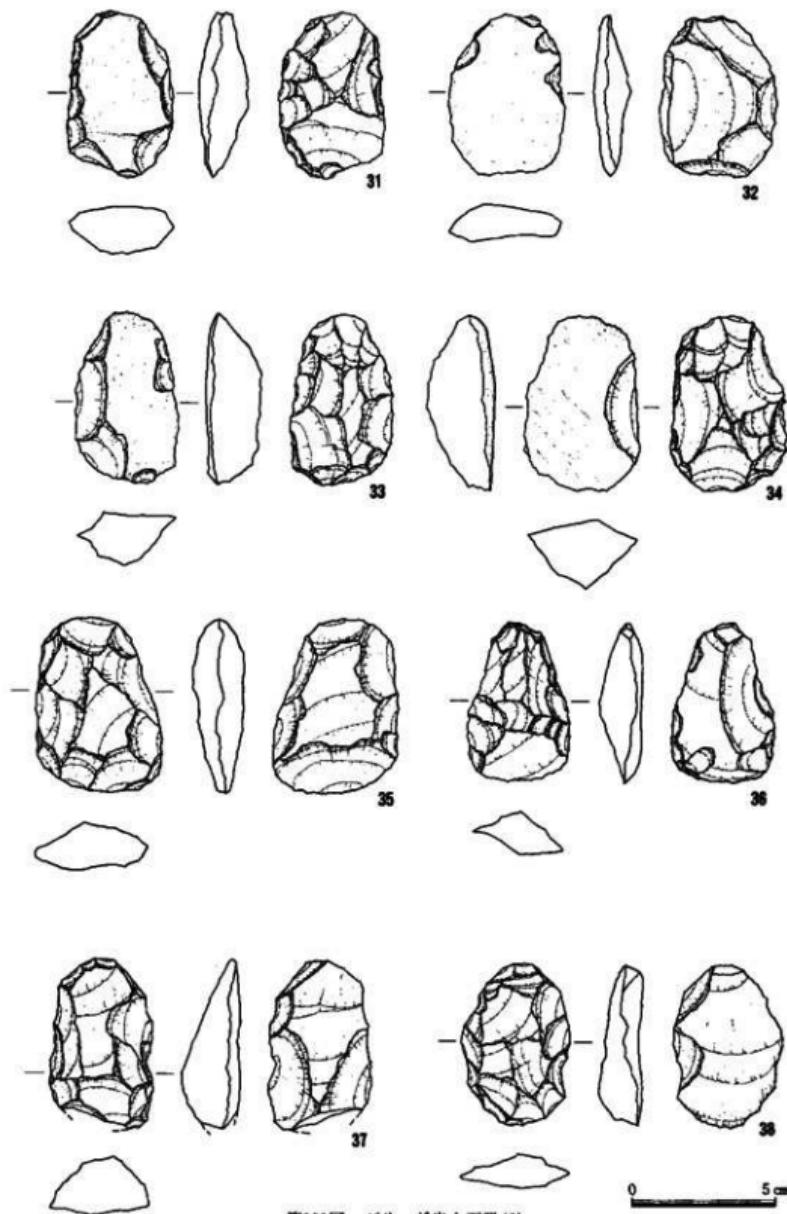
磨製石斧 (47)

47の1点のみの出土である。安山岩製の棒状縛を素材とし、全体によく研磨された製品としている。基部が欠損している。

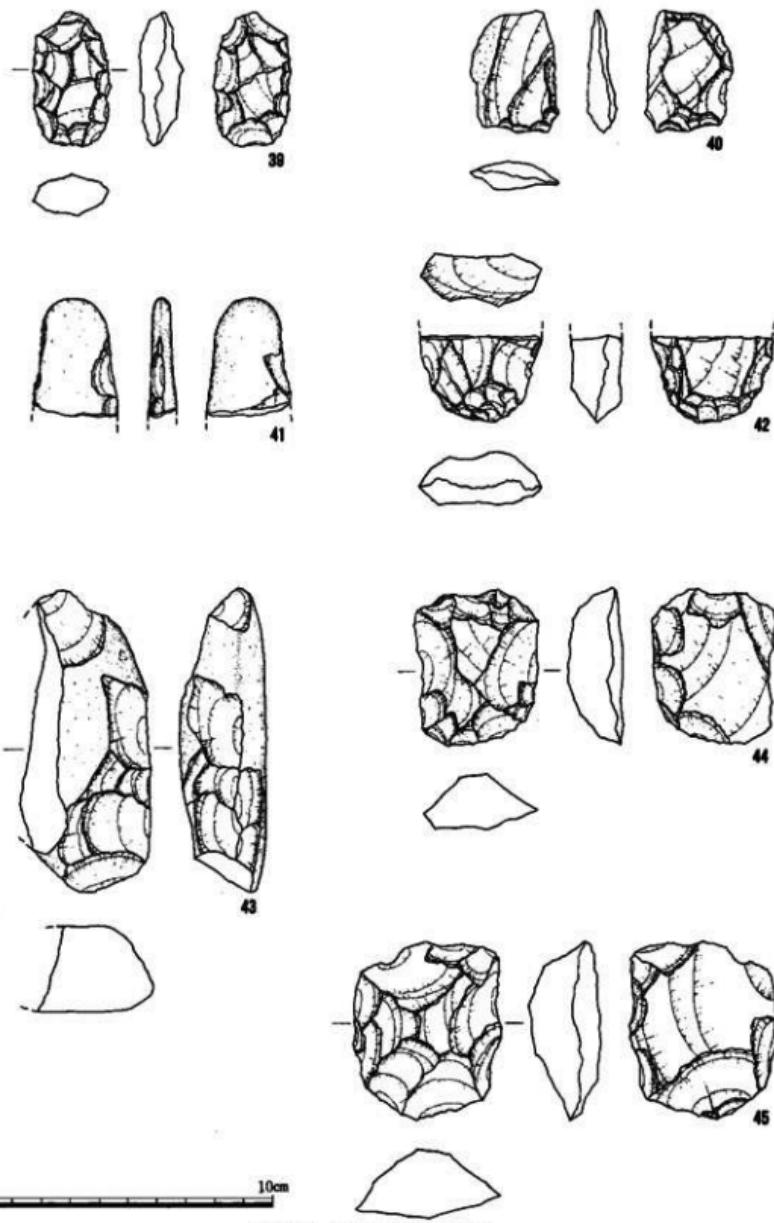
スタンプ形石器 (48)

48は安山岩製の棒状縛を打割し、打割面から数回調整を施す。岩名第14遺跡からはこの1点のみの出土であるため、他の製品との比較・検討は難がある。

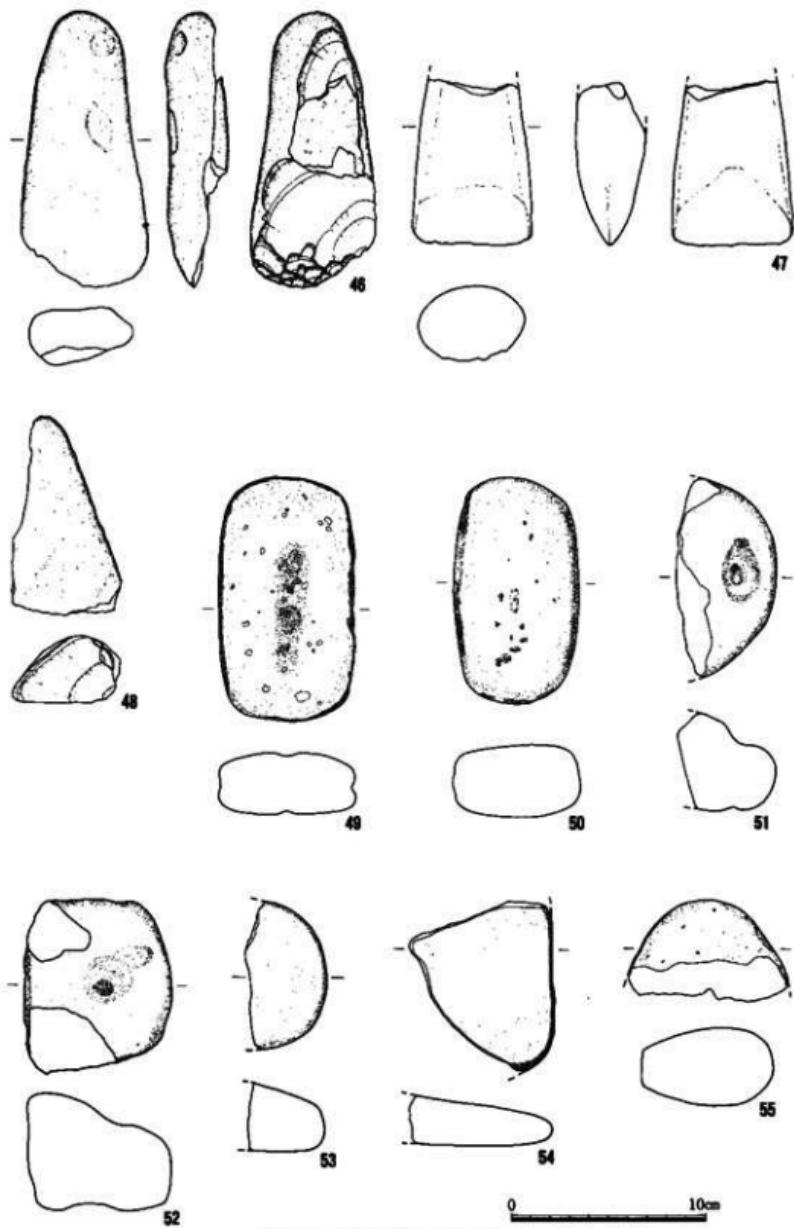
磨石 (49~68)



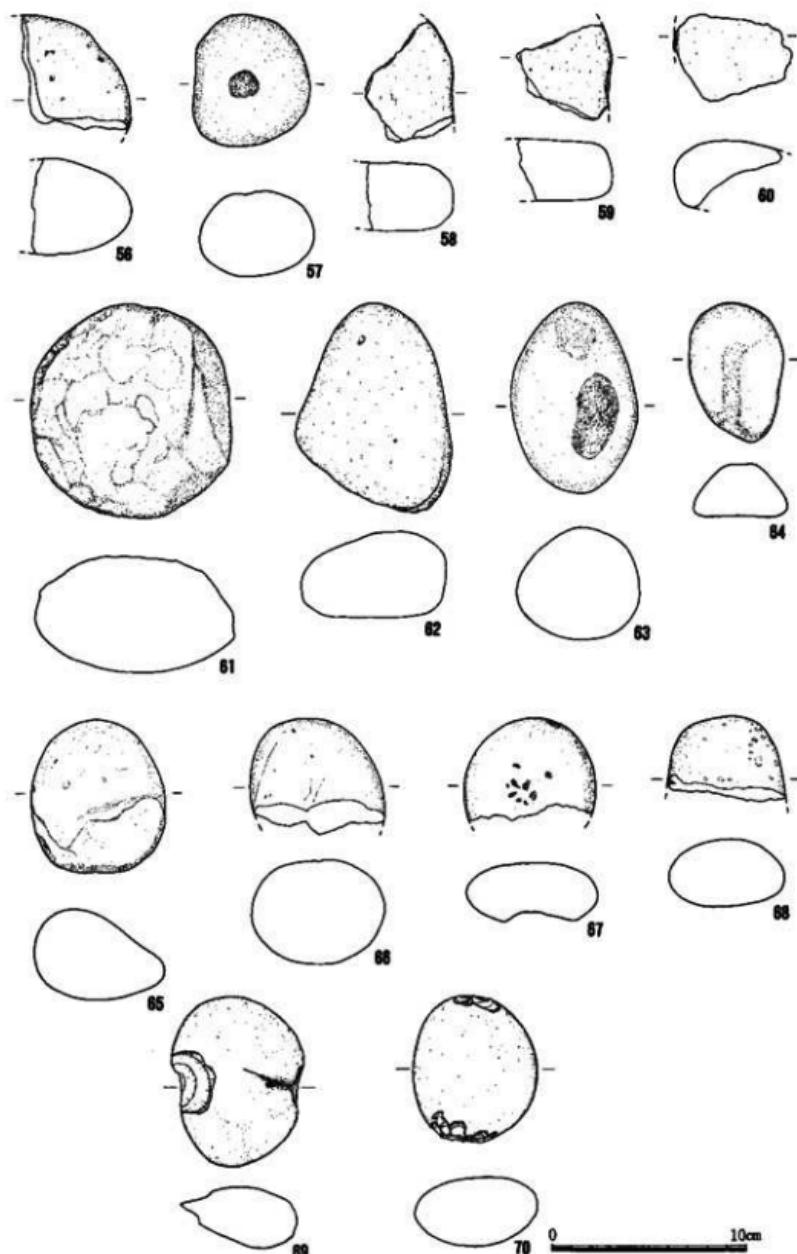
第101図 グリッド出土石器(3)



第102図 グリッド出土石器(4)



第103図 グリッド出土石器(5)



第104図 グリッド出土石器(6)

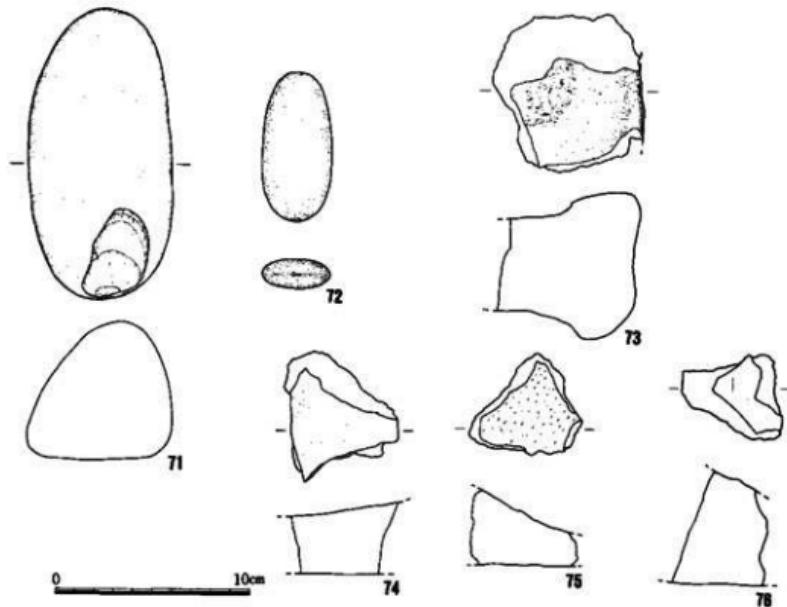
出土している磨石は形状、擦痕の部位など多種である。49, 50のように全面を研磨し、さらに平面形状を長方形に整形しているものや、不定形ながら全面を研磨し形状を整えているもの(51~60)、礫の一部のみ研磨するもの(61~68)などがみられる。49, 50はおそらく前期に帰属するものであろう。これらの磨石はすべて被熱しており、色調は黒色あるいは赤色を帯び、器表面が荒れているものも多い。

敲石 (69~72)

69, 70は円礫の両端を作用部としている。両者とも敲打による剝落痕が顕著である。71, 72は棒状礫の一端を作用部とし敲打している。

石皿 (73~76)

岩名第14遺跡から出土した石皿はすべて破片であり、全体の形状を推測できるものはない。ほとんどの表裏面がよく磨かれ被熱している。



第105図 グリッド出土石器(7)

第30表 グリッド出土石器表(1)

件 番 号	造物番号	器種	石質	計測値				備考	
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
99回1	D2-21, 9	石	白	チヤード	1.78	1.45	0.5	1.00	
2	D2-21, 4	石	白	チヤード	2.18	1.7	0.48	1.38	
3	D2-01, 12	石	白	チヤード	1.97	1.35	0.3	0.72	
4	G6-30, 1	石	白	チヤード	1.9	1.25	0.4	0.91	片端部欠。
5	D2-32, 11	石	白	チヤード	1.4	1.33	0.58	1.05	
6	D2-32, 5	石	白	チヤード	1.7	1.4	0.47	0.92	
7	D1-20, 2	石	白	チヤード	1.98	1.37	0.39	0.75	
8	D2-12, 2	石	白	チヤード	1.8	1.3	0.3	0.56	
9	D2-24, 2	石	白	チヤード	2.05	1.3	0.4	0.76	
10	C2-14, 51	石	白	チヤード	3.4	1.8	0.5	2.06	
11	C2-44, 28	石	白	チヤード	2.5	1.2	0.4	1.09	片端部欠。
12	C2-13, 3	石	白	チヤード	2.82	1.4	0.33	0.80	片端部欠。
13	D2-03, 4	石	白	チヤード	2.3	1.6	0.44	1.21	
14	鉢	石	白	白	1.7	1.65	0.32	0.65	
15	D1-31, 9	石	白	チヤード	1.4	1.36	0.29	0.39	
16	D4-30, 1	石	白	チヤード	1.2	1.1	0.3	0.38	片端部欠。
17	D1-46, 11	石	白	白	2.5	1.5	0.44	0.92	
18	D5-36, 1	尖頭	白	チヤード	3.6	1.45	0.3	1.55	先端欠。表面研磨跡有。
100回19	D2-02, 15	調整板ある削片	白	チヤード	2.45	1.75	0.42	1.77	石器未製品。
20	D2-02, 4	調整板ある削片	白	チヤード	2.9	1.8	0.59	1.60	石器未製品。
21	D1-32, 3	調整板ある削片	白	チヤード	1.55	1.5	0.39	0.80	石器未製品。
22	E2-31, 2	調整板ある削片	白	チヤード	2.5	1.9	0.67	1.23	石器未製品。
23	D2-13, 4	調整板ある削片	白	チヤード	2.35	2.05	0.68	2.40	石器未製品。
24	303, 1	調整板ある削片	白	白	2.4	2.3	1.03	4.77	石器未製品。
25	D1-11, 1	調整板ある削片	白	チヤード	1.7	2.3	0.6	2.98	尖端部未製品。
26	D2-02, 11	調整板ある削片	白	チヤード	2.5	2.3	0.7	3.32	
27	D2-41, 18	調整板ある削片	白	チヤード	1.5	1.75	0.4	1.07	
28	D2-00, 6	調整板ある削片	白	チヤード	1.7	2.45	0.67	3.18	
29	C2-04, 15	調整板ある削片	白	チヤード	2.1	2.3	0.8	4.41	
30	D2-12, 2	雨	白	チヤード	3.53	3.1	1.68	18.18	
101回31	403, 1	打製石斧	白	成形	5.8	3.7	1.52	46.85	原石面残る。
32	D2-31, 1	打製石斧	白	砂	5.7	4.15	1.23	34.15	原石面残る。
33	B1-44, 2	打製石斧	白	成形	5.9	3.6	1.93	45.82	原石面残る。
34	C2-44, 1	打製石斧	白	成形	6.0	4.1	2.33	64.36	原石面残る。
35	D2-22, 21	打製石斧	白	成形	6.05	4.4	1.77	58.46	
36	D2-36, 8	打製石斧	白	成形	5.45	3.6	1.5	29.75	
37	C2-44, 1	打製石斧	白	成形	5.8	3.7	1.9	47.79	
38	C5-01, 1	打製石斧	白	成形	5.53	3.9	1.54	34.32	
102回39	D1-36, 4	打製石斧	白	成形	4.7	2.7	1.47	28.48	
40	D3-00, 3	打製石斧	白	成形	4.2	3.0	1.0	13.29	原石面残る。
41	F5-21, 1	打製石斧	白	成形	4.1	2.9	1.0	14.45	
42	D3-41, 1	打製石斧	白	成形	3.1	4.3	1.75	26.57	
43	D2-31, 1	打製石斧	白	砂	10.35	4.7	2.94	169.64	原石面残る。
44	D2-46, 1	打製石斧	白	成形	5.2	4.4	1.9	53.83	
45	D2-32, 1	打製石斧	白	成形	6.9	5.4	2.5	87.09	
103回46	D2-00, 4	打製石斧	安山岩	白	14.23	6.67	3.03	354.30	
47	G6-32, 1	打製石斧	安山岩	白	8.6	6.3	3.77	271.39	基部欠。
48	A6-04, 1	スタンダード石斧	安山岩	白	10.3	5.8	3.8	253.00	

第31表 グリッド出土石器表(2)

井田 番号	遺物番号	層番	石質	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
103B549	C2-43, 1	■	石安山岩	12.4	7.2	3.1	447.5	全面研磨。被熱。
50	C2-14, 20	■	石安山岩	11.6	6.7	3.61	409.5	全面研磨。被熱。
51	C2-14, 12	■	石砂岩	10.14	4.8	4.9	291.42	全面研磨。両面に凹み。被熱。
52	F5-20, 1	■	石安山岩	8.8	7.53	6.1	534.2	全面研磨。両面に凹み。被熱。
53	A6-04, 1	■	石安山岩	7.6	4.4	3.23	147.15	全面研磨。被熱。
54	C2-14, 23	■	石砂岩	8.7	7.6	2.8	216.51	全面研磨。被熱。
55	C1-41, 75	■	石安山岩	4.5	8.2	4.3	184.55	側面研磨。被熱。
104B556	D2-31, 1	■	石安山岩	5.4	6.3	5.05	181.35	側面研磨。被熱。
57	C2-14, 24	■	石安山岩	6.9	6.2	4.35	230.39	側面研磨。表面に凹み。被熱。
58	B5-31, 2	■	石安山岩	6.0	4.8	3.5	132.93	側面研磨。被熱。
59	B5-24, 4	■	石安山岩	4.9	5.0	3.2	93.39	側面研磨。被熱。
60	D2-31, 1	■	石安山岩	4.8	5.4	4.0	77.37	側面研磨。被熱。
61	D1-43, 2	■	石安山岩	11.6	10.3	5.89	530.2	全面研磨。被熱。
62	B5-41, 3	■	石安山岩	10.8	8.0	4.3	456.1	全面研磨。被熱。
63	C2-41, 3	■	石砂岩	9.8	6.66	5.9	483.3	全面研磨。被熱。
64	D2-16, 7	■	石砂岩	7.15	4.98	2.22	156.97	全面研磨。被熱。
65	416, 4	■	石安山岩	7.9	6.9	4.25	287.55	全面研磨。被熱。
66	C2-02, 1	■	石安山岩	5.7	6.35	5.18	281.39	全面研磨。被熱。
67	C2-23, 10	■	石砂岩	5.6	6.77	2.94	143.76	全面研磨。被熱。
68	C2-14, 1	■	石安山岩	4.98	5.97	3.42	123.48	全面研磨。被熱。
69	B5-41, 3	■	石砂岩	8.7	6.8	3.3	232.65	両面に敲打痕。石細か。
70	A6-04, 1	■	石砂岩	7.5	6.5	3.52	237.49	両面に敲打痕。
105B71	B2-44, 1	■	石砂岩	14.8	7.5	6.9	1062.9	下端に敲打痕。
72	502, 3	■	石砂岩	7.9	3.7	1.5	57.77	下端に側面敲打痕。
73	B5-22, 1	■	石安山岩	8.1	6.9	7.9	576.4	被熱。
74	B5-32, 1	■	石砂岩	7.95	5.62	3.66	148.49	被熱。
75	D2-11, 2	■	石安山岩	5.2	6.13	3.84	63.54	被熱。
76	B2-14, 1	石	■安山岩	5.3	4.9	5.7	139.44	被熱。

6. 自然遺物

a. 貝サンプルの採取と処理方法

本遺跡における縄文時代貝層の検出は、すべて遺構中からのものである。遺構は、土坑1基(124号)、炉穴3基(116号、119号、130号)で、いずれも堆積した貝層は比較的小規模である。このため、貝サンプルの採取は、貝層の平面的分布を確認後、サンプル採取範囲(30×30cm)を設定し、サンプル面の一辺を断面観察できるような状態で発掘した。コラムサンプルの容量は30×30×5 cm(4,500cm³)である。116号炉穴については、さらに貝層が小規模であったため、確認できた貝ブロック2か所をそれぞれすべて持ち帰った。また、近世の溝である311号については、細い幅ながら溝を埋めるようななかたちで0.2×4.5mの範囲に貝層がみられた。サンプルの採取は任意に近いが、20×100×5 cm(10,000cm³)を上下層2カット分採取した。

サンプルは、メッシュ寸法9.52mm、4.0mm、2.0mm、1.0mmの試験フルイにより水洗・分離を行い選別した。

b. 同定と集計方法

腹足綱は体層部を保存しているものだけを集計した。二枚貝綱は主歯を保存しているものを右殻と左殻を別々に集計し、記載には集計数の多い側の数を用いた。2.0mmメッシュ以下の貝片は集計条件を満たさず、破片のみであった。なお、今回の資料中からは魚骨・獸骨等の遺体は全く検出されなかった。

c. 貝類遺体の同定集計結果

まず、今回の岩名第14遺跡発掘調査から得られたサンプルの同定結果を挙げておく。

第32表 岩名第14遺跡出土貝類一覧

①縄文時代遺構

腹足綱

ウミニナ類	<i>Batillaria spp.</i>
シマヘナタリ	<i>Cerithidea ornata</i>
カワアイガイ	<i>Cerithideopsis djadjariensis</i>
アラムシロガイ	<i>Reticunassa festiva</i>
イボニシ	<i>Thais (Reishia) clavigera</i>
アカニシ	<i>Rapana venosa</i>

二枚貝綱

マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i>
シオフキ	<i>Mactra quadrangularis</i>
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>
オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>
カガミガイ	<i>Phacosoma japonicum</i>
オオノガイ	<i>Mya arenaria oonogai</i>
ウネナシトマヤガイ	<i>Trapezium liratum</i>
ナミマガシワ	<i>Anomia chinensis</i>

②近世遺構

腹足綱

オオタニシ	<i>Cipangopaludina japonica</i>
アカニシ	<i>Rapana venosa</i>

以下に各遺構毎の同定結果についての概要を述べる。

124号土坑（第33表）

条痕文期の土坑であるが、規模的にはやや大きく小堅穴状のものである。貝層は覆土内に径0.9mの範囲で検出された。マガキを主体としており、80%以上の割合を占める。アサリが約10%でこれに続き、少量のハイガイ、オキシジミが加わる。また、本跡からのみ岩礁性の貝であるナミマガシワ、節足動物フジツボの検出がみられた。

第33表 124号土坑出土貝類同定結果

種名	サンプル番号						合計	相対頻度(%)
	①	②	③	④	⑤	⑥		
ウミニナ			1	2	4		7	0.6
シマヘナタリ	2	1		2			5	0.4
カワアイガイ	1						1	0.1
イボニシ	1						1	0.1
マガキ	106	181	167	255	234	45	19	1,007
ハイガイ	2	4	1	8	7	7	29	2.4
シオフキ	4	2	1	2		1	10	0.8
ハマグリ					1		1	0.1
アサリ	30	24	22	26	20	3	2	127
オキシジミ	1		2	1	6	13	5	28
カガミガイ					1		1	0.1
ウネナシトマヤガイ	1			1	2	1	5	0.4
ナミマガシワ	4	1	1	1	2		9	0.7
合計	145	215	199	289	280	70	33	1,231
フジツボ	○	○	○	○	○	○		100.1

116号炉穴（第34表）

条痕文尖底土器を伴出した炉穴である。それぞれ径20~30cmの2か所から検出された貝プロックの資料である。サンプル①が足場の上面から検出されたもので、サンプル②が火床部の上面から検出されている。いずれもマガキのみが認められる。

第34表 116号炉穴出土貝類同定結果

種名	サンプル番号			相対頻度(%)
	①	②	合計	
マガキ	197	536	733	100.0

119号炉穴（第35表）

早期後半と思われる炉穴である。貝層は火床部の上面から、60×30cmの範囲で検出された。ハイガイが主体で、80%以上を占める。また、マガキ、シオフキが少量、ウミニナ、シマヘナタリ、アラムシロ、カワアイガイ等の小型の腹足綱がごく少量検出されたほか、ハマグリ、アサリ、オキシジミ等の二枚貝綱が、やはりごく少量検出されている。

第35表 119号炉穴出土貝類同定結果

種名	サンプル番号						相対頻度(%)
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	合計	
ウミニナガイ	1	12	25	17	3	58	3.5
シマヘナタリ	1		1	1	1	4	0.2
カワアイガイ	1	6	9	7	1	24	1.4
アラムシロ				2		2	0.1
マガキ	5	29	49	40	8	131	7.8
ハイガイ	126	328	529	309	100	1,392	83.6
シオフキ	9	17	9			35	2.1
ハマグリ	1		1	2		4	0.2
アサリ	2	3	3	2	2	12	0.7
オキシジミ		3	5	4		12	0.7
合計	146	398	631	384	115	1,674	100.3

130号炉穴（第36表）

早期後半と思われる炉穴である。貝層はやはり火床部の上面から、60×40cmの範囲で検出された。ハイガイが主体で80%近くを占め、シオフキが10%強でこれに次ぐ。他のものはどれもごく少量で、組成的にも119号と類似する。

第36表 130号炉穴出土貝類同定結果

種名	サンプル番号						相対頻度(%)
	(1)	(2)	(3)	(4)	合計		
ウミニナガイ	6	5	4		15		0.8
シマヘナタリ				1	1		0.1
カワアイガイ	6	11	4		21		1.2
マガキ	17	41	32	3	93		5.1
ハイガイ	819	358	236	17	1,430		79.0
シオフキ	9	56	116	21	202		11.2
ハマグリ	1	4	6	1	12		0.7
アサリ	2	8	4		14		0.8
オキシジミ	2	8	8	1	19		1.0
オオノガイ		1	2		3		0.2
合計	862	492	412	44	1,810		100.1

311号溝（第37表）

近世の溝である。貝層は溝を埋めるように堆積していた。上下層ともほとんどがオオタニシによって占められるが、下層サンプルからアカニシ3点が検出されている。

第37表 311号溝出土貝類同定結果

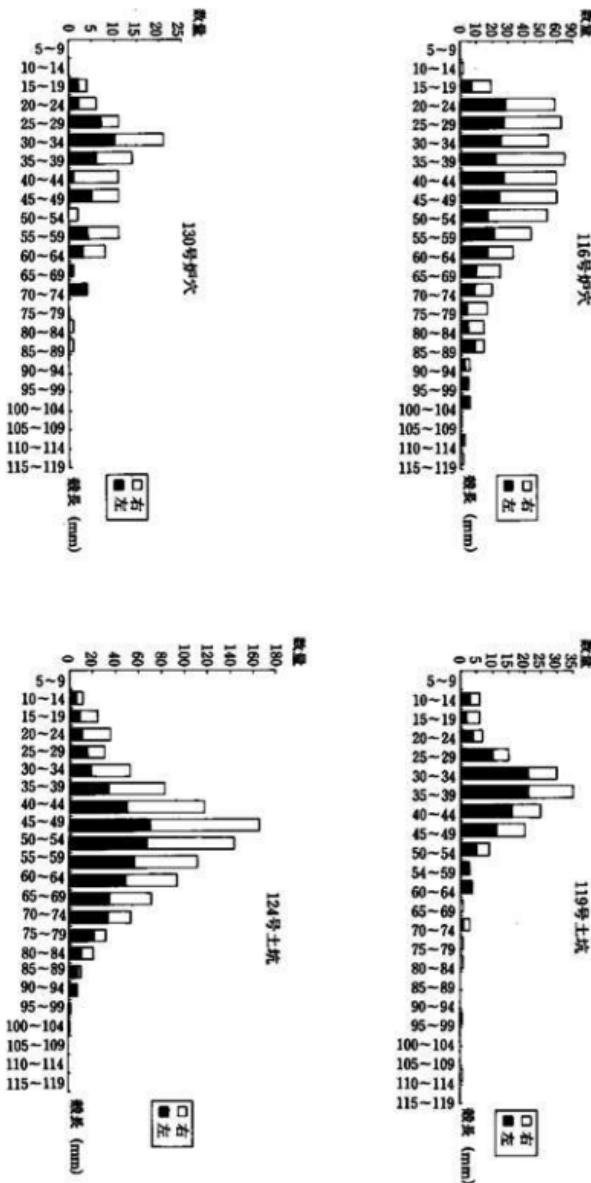
種名	サンプル番号						相対頻度(%)
	(1)	(2)	合計				
オオタニシ	184	125	309				99.0
アカニシ		3		3			1.0
合計	184	128	312				100.0

d.まとめ

岩名第14遺跡から検出された貝層のうち、縄文時代のものは3基の炉穴と1基の土坑からの検出で、サンプル数は18を数える。いずれも早期後半条痕文期の遺構で、主体となる貝は116号炉穴と124号土坑ではマガキ、119号炉穴と130号炉穴ではハイガイである。どれも各遺構内での占有率は約80%で、短期間に貝の廃棄が行われたことを示している。総数からみてもハイガイは50%を超え、マガキと合わせて両者が占める割合は88%にも達する。ハイガイ、マガキはいずれも内湾の潮間帯に生息するものであるが、これらの貝が主体となることで、付近の環境は比較的泥底の発達した干潟が広がっていたものと推測される。明らかに岩礁性の貝であるナミマガシワは、関宿町の飯塚貝塚等からも検出されている。飯塚貝塚ではマガキに付着したスガイの存在が報告されており、当遺跡においても、マガキを主体出土とする124号土坑からの検出であることから、やはり124号土坑から検出されたフジツボなどと一緒にマガキに付着したまま、あるいはマガキ採取に伴って運ばれた可能性が高い。

次に、貝の大きさという点で、主要な貝の計測をもとにグラフ化を行った。計測は従来の基準に従い、可能なものを計測しひとひとつ実数値を留めた。今回のグラフは、とりあえず殻長を5mm毎に刻んだ単位における数量を数えたものだが、計測値が実数値で残っているので、今後これらの単位を自由に変えて、さらに効果的なグラフを作成することが可能である。次に貝種毎の計測値にみられた特徴を簡単にまとめておく。マガキ(第106図)は、4基の遺構すべてから検出され、数量的に700~1,000点を数える116号と124号(仮にA群とする)、100点前後の119号と130号(同じくB群とする)とに大別できる。計測的には、B群の130号にややバラつきはあるものの、いずれも殻長30~40mmのものが多く採られており、グラフはそれを頂点とした三角形状となる。A群はマガキを主体的に出土した遺構であるが、両者にみられる殻長計測値の分布は極めて対照的である。124号では、殻長がB群よりも平均して10mm以上大型である。ひとつに考えられることは、採取時期の違いであろう。同じくA群の116号は、マガキのみが検出された遺構である。こちらのグラフはみた目に三角形状とはならず、殻長20mm~60mm付近の比較的広い範囲で採取されている。マガキを主体とすること、殻長50mm付近のものも比較的多く含まれるという点で、採取の時期は124号と大差ないと思われる。ただし、マガキのみの検出という点や殻長が自然抽出的ではないという点で、可能性としてはどうかと思うが、採取したマガキの再分配等があったと考えておきたい。いずれにしてもマガキは、現在と比べるとかなり小型のものが採れていたようである。ハイガイ(第107図)は、119号と130号で主体的にみられたが、いずれも殻長20mm~30mmのものが突出して多い。シオフキ(第107図)は、130号で202点が検出された他は数量的にまとまらなかった。殻長40mm前後を主体に、殻長30mm以上のものが採取されている。アサリについては、欠損したものが多く計測できなかった。

なお、今回の調査で検出された縄文時代各遺構の貝類総数と相対頻度は、以下の表に示すと



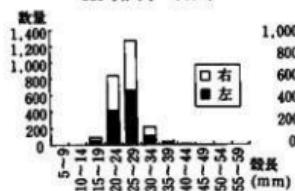
第106図 造構別マガキ根長計測値頻度グラフ

おりである。

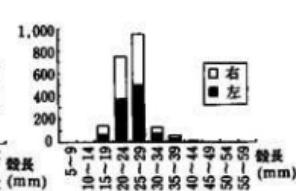
第38表 岩名第14遺跡出土貝類同定結果

遺構番号	124	116	119	130	合計	相対頻度(%)
ウミナシ類	7		58	15	80	1.5
シマヘナタリ	5		4	1	10	0.2
カワアイガイ	1		24	21	46	0.8
イボニシ	1				1	0.0
アラムシロ			2		2	0.0
マガキ	1,007	733	131	93	1,964	36.0
ハイガイ	29		1,392	1,430	2,851	52.3
シオフキ	10		35	202	247	4.5
ハマグリ	1		4	12	17	0.3
アサリ	127		12	14	153	2.8
オキシジミ	28		12	19	59	1.1
カガミガイ	1				1	0.0
ウネナシトマヤガイ	5				5	0.1
オオノガイ				3	3	0.1
ナミマガシワ	9				9	0.2
合計	1,231	733	1,674	1,810	5,448	99.9

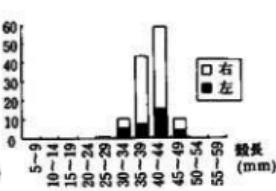
119号炉穴ハイガイ



130号炉穴ハイガイ



130号炉穴シオフキ



第107図 ハイガイ・シオフキ殻長計測値頻度グラフ

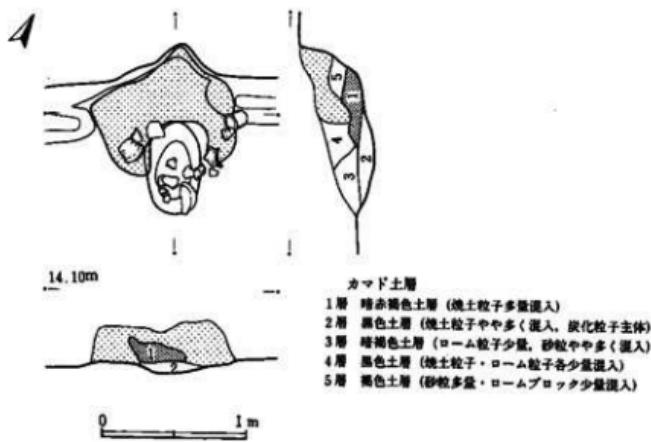
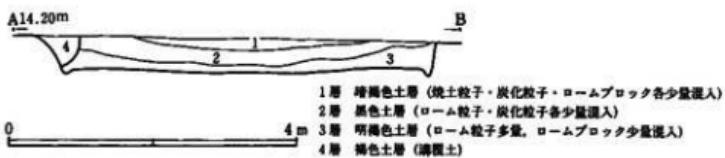
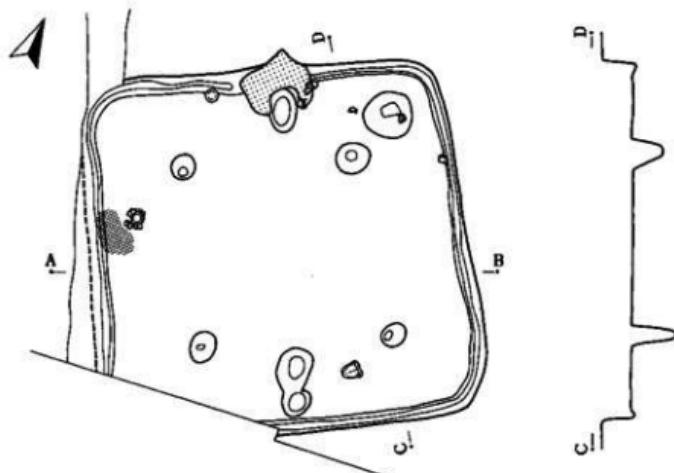
第3節 古墳時代

1. 住居跡とその出土遺物

古墳時代に属する遺構は、堅穴住居跡が3軒検出されている。いずれも調査区南端部における検出で、それより北側からは古墳時代の遺構は検出されていない。このため、今回検出された住居跡は、当遺跡における古墳時代集落の北限を示している。既に述べたように、南側に突出する当台地の先端には岩名古墳という円墳1基があり、古墳時代における当台地の占地は南側に偏っている。

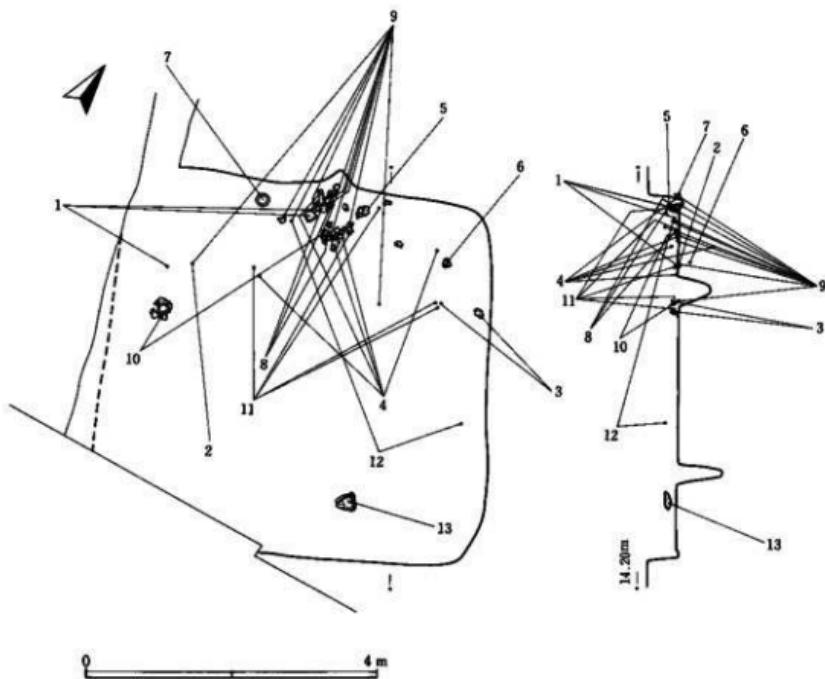
501号住居跡（第108図、第109図、図版17-1、2）

遺構 調査区の南端で、検出された3軒のうちでは最も東側の台地縁辺近くに位置する。住居跡の南西コーナー付近は調査区外にかかり、未調査である。また、住居跡の西壁上は後世の溝により破壊されている。平面形は隅がやや丸い正方形で、5.2×5.0mの規模を有する。掘り込



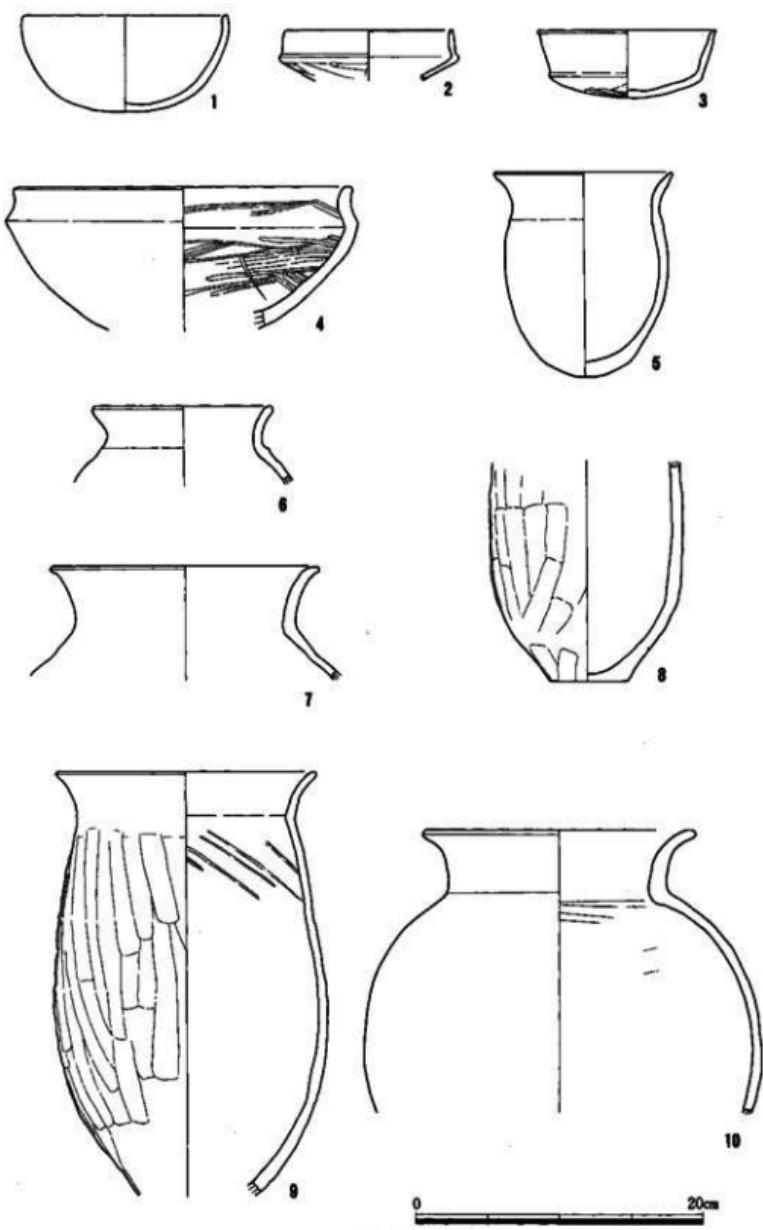
第108図 501号住居跡実測図

みの深さは40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は自然な堆積状況である。主軸の方位はN-32°-Wで、カマドは北壁の中央に位置する。床面は比較的平坦で、全体に固く締まっている。周溝は、カマド部分で途切れる他は一周すると思われる。カマド対面の南壁下からは、出入口施設と思われる2連のピットを検出している。深さは壁際が約20cm、北側が約30cmである。主柱穴は4本で、住居の対角線上に配置される。柱穴の掘り込みは、いずれもしっかりとしたもので、深さは40~60cmを測る。貯蔵穴はカマドの東側で、形状は円形に近く、底面積の狭い掘り方である。カマドは比較的良好な遺存状態を呈する。住居の北壁を30cmほど掘り込み煙道とし、その立ち上がりは急である。火床部は床面を浅く掘り窪めており、炭化粒が多く混入する黒色土が主体的に残存していた。遺物はカマド付近で、變形土器が破片となって集中的に出土したほか、全体に壁付近に寄った位置でみられ、出入口施設の近くからは瓶1個体が横になった状態で出土している。



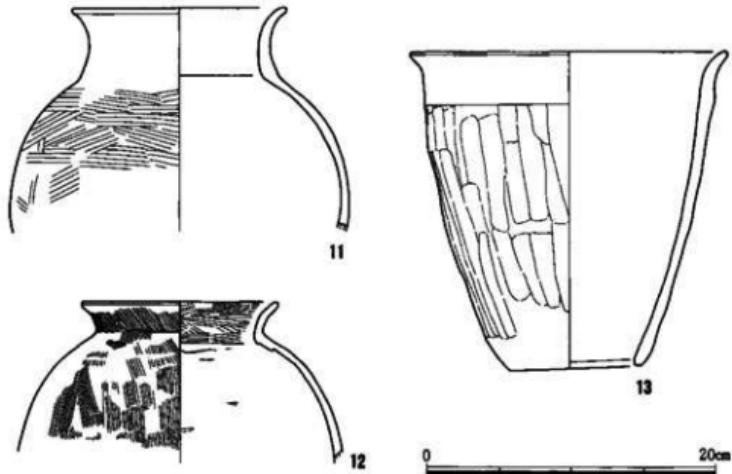
第109図 501号住居跡出土土器接合図

出土遺物（第110図、第111図、図版47、48） 出土遺物はすべて土師器で、杯、碗、壺、瓶が出土している。1は口径14.2cm、高さ6.8cmを測る碗状の杯である。整形は外面にヘラケズリ後、



第110圖 501号住居跡出土遺物(1)

ナデを施し、口縁部に幅の狭い横ナデを加える。内面はナデにより調整される。色調は明褐色で、胎土は密である。2、3は、いわゆる須恵器模倣杯である。2は推定口径11.7cmを測る。体部に鋭い稜を有し、口縁部はわずかに内傾して高く立ち上がる。整形は体部外表面がヘラケズリ、内面がナデ、口縁部は横ナデが施される。色調は赤味がかった褐色を呈し、胎土中には細粒砂を含む。3は口径12.4cm、高さ4.8cmを測る。底部から体部への立ち上がりは、明瞭な稜を境とし、口端直下は調整が強いため沈線状となる。整形は口縁部（体部）が横ナデ、底部外表面ヘラケズリ、内面ナデが施される。器内外面とも二次焼成による剥離が著しい。色調は全体に橙褐色を呈し、底部外表面は黒斑を有する。4は口径23.5cmを測る碗である。底部は欠損するが、高さは推定で10.0cm以上の比較的深いものである。口縁部の横ナデは強く施され、体部との境に弱い稜をなす。体部外表面はヘラケズリ後、ヘラによるナデ、内面は横位にミガキが施される。色調は全体に明褐色を呈し、胎土中には少量の細粒砂が含まれる。5～12は甕である。5は口径12.5cm、高さ14.2cmを測る完形の小型甕である。最大径は口縁部にあるが、肩部がわずかに丸味を有し、底部は丸底となる。調整は口縁部が横ナデ、肩部は内外面ともヘラによるナデが施される。色調は全体に明褐色を呈し、全体の1/4に、口縁部から底部にかけての黒斑が認められる。6は口径12.6cmを測り、比較的小型の甕口縁部である。整形は横ナデによる。胎土中に少量の小礫が含まれる。全体に二次焼成による剥離が激しい。7は口径18.8cmを測る甕口縁部である。器形は口縁部の上端がわずかに外屈し、肩部はなで肩状に開く。胎土中には多量の粗粒砂が含まれている。器面は内外面とも、やはり二次焼成による剥離が激しい。8は比較的長肩の甕、肩下部である。底径5.3cmを測り、肩部は直線的に立ち上がる。整形は外面が縱位

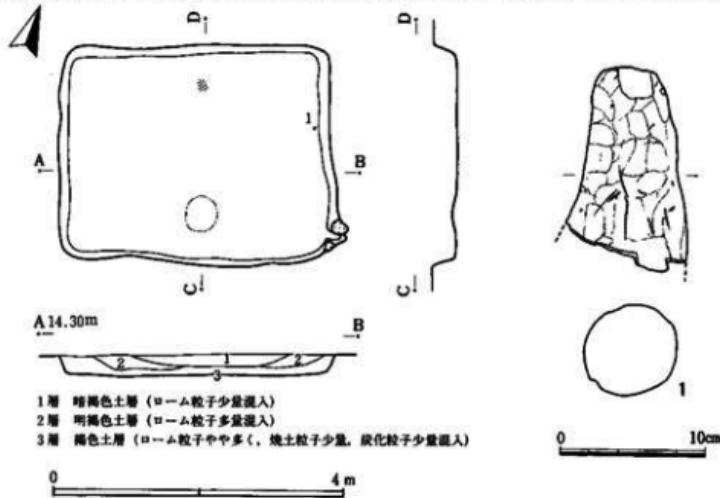


第111図 501号住居跡出土遺物(2)

のヘラケズリ、内面は横位のナデを施す。胎土中には中粒砂が含まれている。9も長胴の甕であるが、最大径は胴下部付近にある。口径18.1cm、最大径18.8cmを測る。器形は胴下部にわずかな丸味を持ちながらも、頸部に向かって直線的に立ち上がり、頸部から口縁部が開くものである。整形は胴部に縦位のヘラケズリの後、口縁部に横ナデを施す。胴部内面はヘラナデで、ヘラの強い当たりが認められる。胎土には粗粒砂、小砾等が多量に含まれている。色調は黄褐色に近い。10は口径19.0cmを測り、球胴を呈する甕である。頸部は直立し、口縁部が強く外反する。整形は胴部外面がヘラケズリ後ナデ、内面ナデ、口縁部は横ナデである。色調は明褐色を呈し、胎土中には中粒砂が含まれる。11も球胴を呈し、10とよく似た器形を有するが、口縁部の外反が10よりはやや弱い。整形は外面の口縁部、胴部ともハケ目による調整が施される。色調は橙褐色を呈し、胎土中には細粒砂が多く含まれる。12は推定口径13.6cmを測る。胴部はやはり球形を呈し、口縁部内外面と胴部外面は、ハケ目による調整が施される。色調は黄褐色を呈し、胎土中には少量の細粒砂が含まれる。13は口径22.1cm、高さ21.8cm、底径9.2cmを測るほぼ完形の甕である。器形は、胴部が逆ハの字状に直線的に開いて立ち上がり、口縁部が外反する。整形は胴部に縦位のヘラケズリを施した後、口縁部に横ナデを加える。胴部内面は縦位のミガキが施されるが、器面の細かな剥離が著しい。色調は全体に明褐色を呈するが、外面の1/3に黒斑が認められる。

502号住居跡（第112図、図版17-3）

造構 501号の西に5mの距離に位置する。表土上に旧道が通っていたため、確認面やカマド部分を含む覆土は圧迫され硬化しており、調査は困難を要した。平面形は長方形で、3.8×3.0m



第112図 502号住居跡・出土遺物実測図

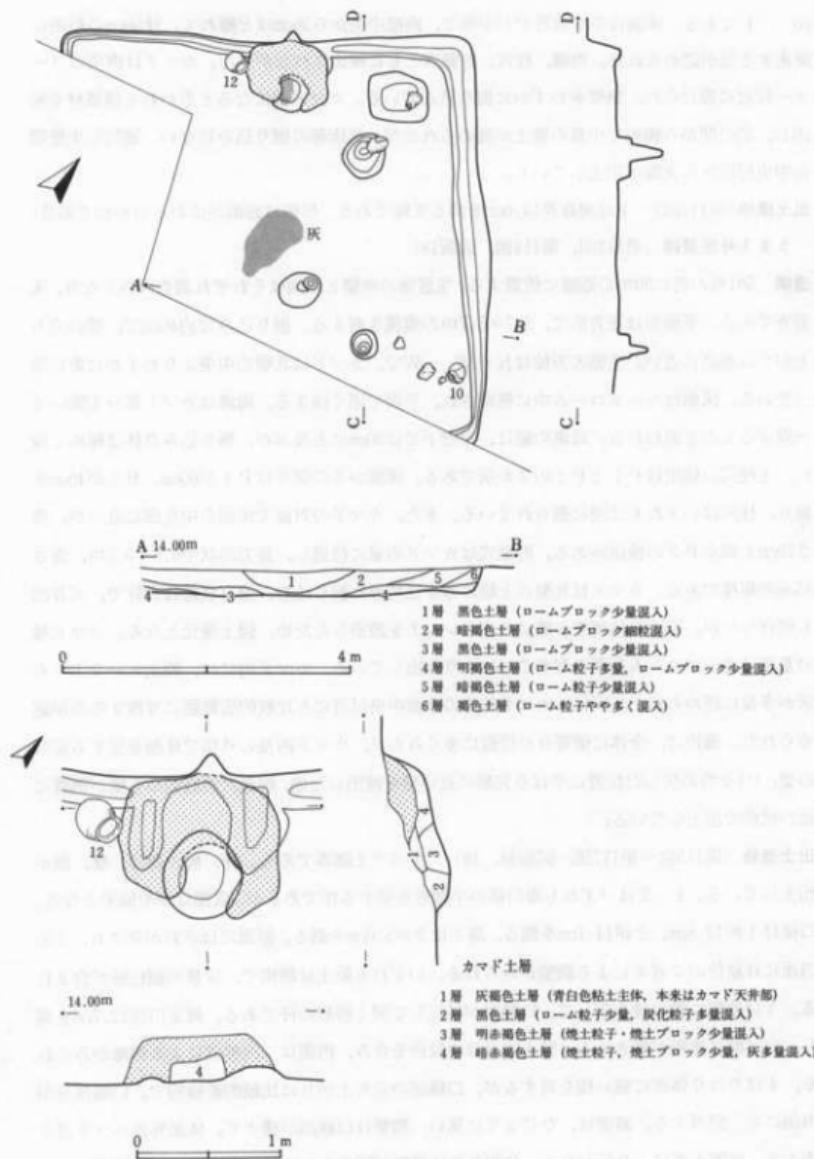
の規模を測る。掘り込みの深さは20~30cmで、比較的浅い。カマドを通る主軸の方位は、N-70°-Eである。床面はやや軟質だが平坦で、南壁中央から30cmほど離れて、径50cmの範囲の硬化する面が認められた。周溝、柱穴、貯蔵穴ともに検出されなかった。カマドは南東のコーナー付近に設けられ、東壁をわずかに掘り込んでいる。カマド袖になると思われる構築材を検出し、袖の間から極めて少量の焼土が認められたが、火床部の掘り込みはない。遺物は東壁際の中央付近から支脚が出土している。

出土遺物(第112図) 1は現存長14.0cmを測る支脚である。形態は底面が広がる台形状である。

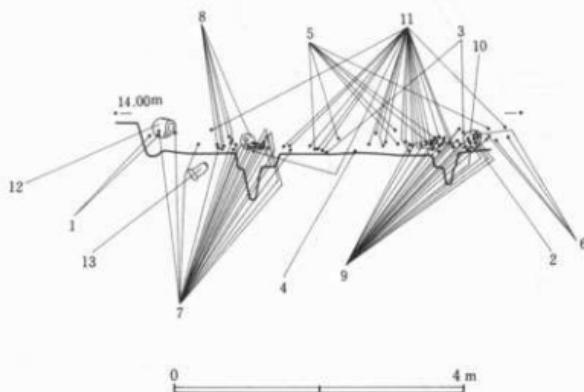
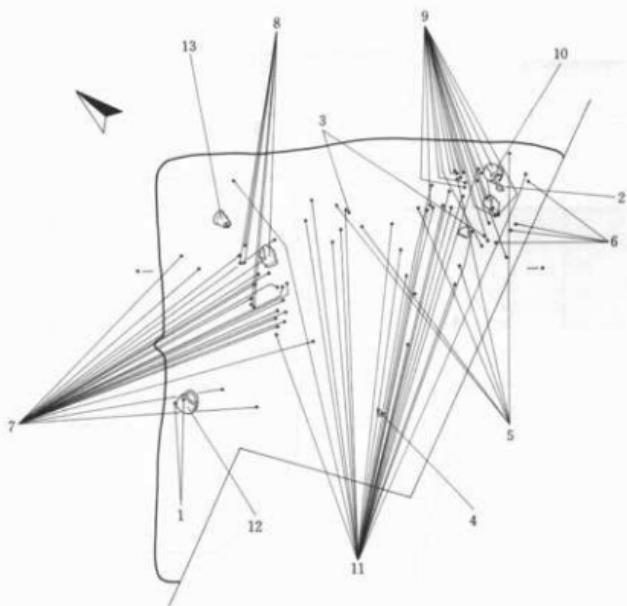
503号住居跡(第113図、第114図、図版18)

造構 501号の西に20mの距離に位置する。住居跡の南側と西側はそれぞれ調査区外となり、未調査である。平面形は正方形で、5.7×5.7mの規模を有する。掘り込みは約40cmで、壁の立ち上がりは垂直に近い。主軸の方位はN-38°-Wで、カマドは北壁の中央よりわずかに東に寄っている。床面はハードローム中に形成され、平坦で固く締まる。周溝はカマド部分を除いて一周するものと思われる。周溝の幅は、東壁下では30cmにも及ぶが、掘り込み自体は極めて浅い。主柱穴の検出はP1とP2の2か所である。床面からの深さはP1が60cm、P2が40cmを測り、柱穴はいずれも2段に掘られている。また、カマドの対面で床面の中央部に近いが、深さ70cmを測るP3の検出がある。貯蔵穴はカマドの東に位置し、長方形で0.8×0.6m、深さ45cmの規模である。カマドは北壁の上端のみを三角形に掘り込む。遺存状態は良好で、天井部も残存したが、平面図は調査の際にサブトレンチを設定したため、図上復元となる。カマド袖の基部は地山のロームを削りだすことにより作出している。カマド内には、焼土というよりも灰が多量に認められた。灰は、カマド前方の床面中央付近にも比較的広範囲に堆積するのが認められた。遺物は、全体に壁寄りの位置に多くみられ、カマド西袖の外側で球胸を呈する完形の甕、P1を埋め戻した位置にやはり完形に近い甕を検出した他、貯蔵穴の底面から瓶が倒置に近い状態で出土している。

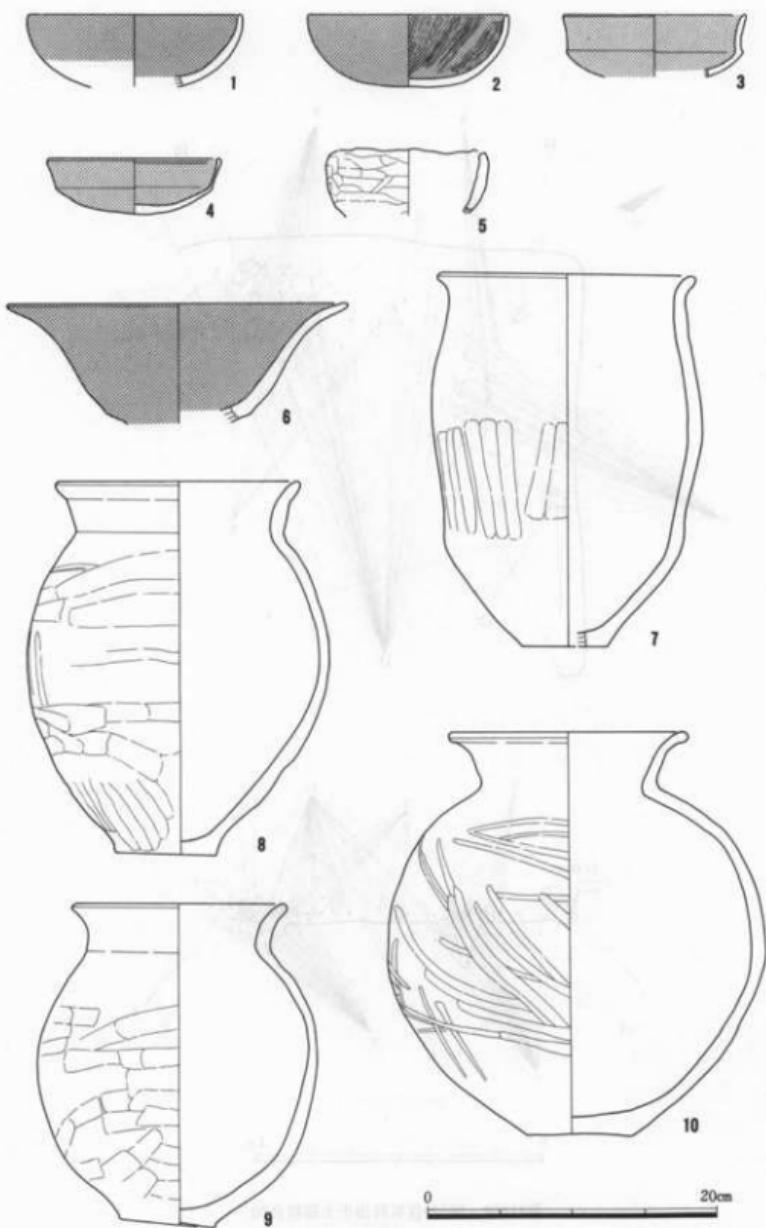
出土遺物(第115図~第117図、図版48、49) すべて土師器である。杯、椀、高杯、甕、瓶が出土している。1、2はいずれも素口縁の半球形を呈する杯であるが、底部はやや偏平となる。口径は1が14.8cm、2が14.1cmを測る。高さは2が5.0cmを測る。器面には赤彩が施され、2の内面には縦位のミガキによる調整がみられる。いずれも胎土は緻密で、少量の細粒砂が含まれる。3は体部に鋭い稜を有して、口縁部が外反して開く器形の杯である。推定口径12.7cmを測り、内外面に赤彩が施される。胎土中には中粒砂を含み、内面は二次焼成による剥離がみられる。4はやはり体部に鋭い稜を有するが、口縁部の立ち上がりは比較的直線的で、口端部分が内側に丸く肥厚する。器壁は、ひじょうに薄い。調整は口縁部が横ナデ、体部外面へラケズリ後ナデ、内面ナデにより行われる。体部外面に黒斑が認められる他、内面には二次焼成による剥離がみられる。5は口径11.0cmを測る比較的大型の手捏ね椀である。内外面とも粗いヘラケ



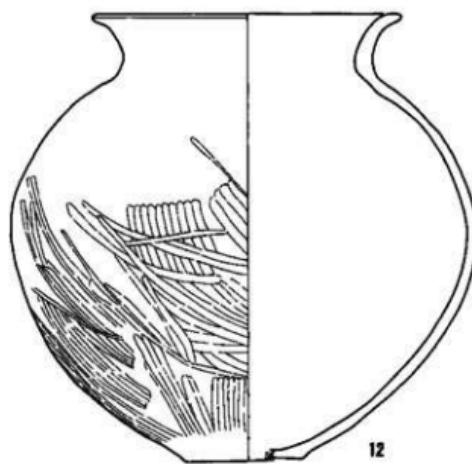
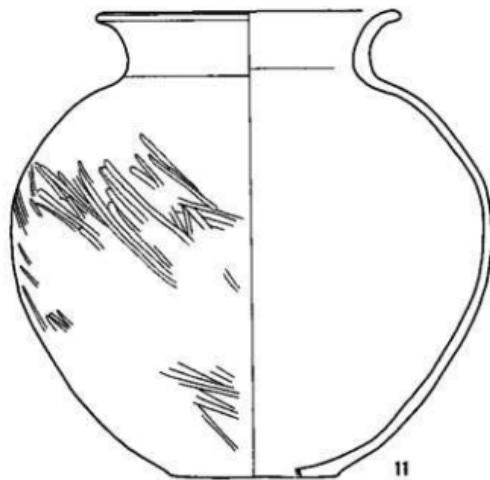
第113図 503号住居跡実測図



第114图 503号住居跡出土土器接合図

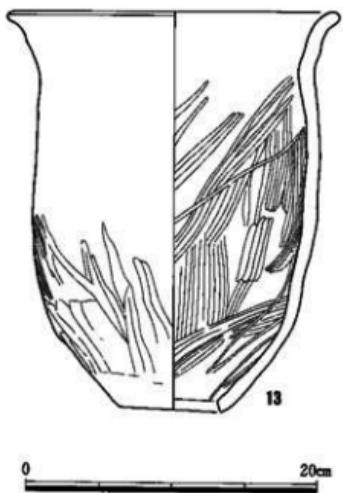


第115図 503号住居跡出土遺物(1)



0 20cm

第116図 503号住居跡出土遺物(2)



第117図 503号住居跡出土遺物(3)

ズリ調整がなされる。6は推定口径23.7cmを測る高杯部である。器形は口縁部が大きく外反する。内外面ともに横位のミガキ調整が施される。内面底部付近は、二次焼成による剥離がみられる。胎土中には少量の細粒砂が含まれる。7は口径18.0cm、高さ25.3cmを測る壺である。胴部は比較的長胴に近く、口縁部は短く外反する。整形は、胴中位外面に底部側から口縁部側に向かって、ヘラケズリを施す。口縁部は横ナデ、胴部内面はナデによる。色調は全体に明褐色を呈し、胎土中には中粒砂が含まれている。8はほぼ完形で、口径16.9cm、高さ25.3cmを測る壺である。胴部の丸味は弱く、頸部が直立する。整形は口縁部横ナデ、胴部外面へラケズリ、胴部内面ナデである。内面には二次焼成による剥離が認められる。色調は、全体に赤味を帯びた褐色を呈し、胴部外面に黒斑が認められる。胎土中には中粒砂を少量含む。9は口径14.9cm、高さ21.8cmを測る壺である。やはり胴部の丸味は弱く、頸部が直立する。整形は口縁部横ナデ、胴部外面横位を主とするヘラケズリ、胴部内面ナデである。色調は褐色を呈し、胎土中には中粒砂が含まれる。10~12は、胴部が球形を呈する壺である。10は口径16.6cm、高さ27.4cmを測り、頸部の立ち上がりはやや外反する。最大径は胴中位にあり、26.2cmを測る。整形は口縁部が横ナデ、胴部内面がナデ、胴部外面は横位ないし斜位のミガキによる。色調は全体に赤味のかかった褐色を呈し、黒斑が認められる。胎土中には細粒砂が含まれる。11は推定口径21.2cm、高さ32.1cmを測る。器形は、頸部が直立ぎみに立ち上がる。整形は口縁部横ナデ、胴部内面ナデ、外面は胴中位付近から下位をミガキが施される。胎土中には、長石・石英等の小礫を多く含んでいる。12は口径21.5cm、高さ30.5cmを測る。11と器形、整形ともに同様のものである。胎土中にはやはり小礫等を多く含んでいる。13は口径22.8cm、高さ27.5cmを測る壺である。器形は胴部が比較的直線的に立ち上がり、頸部付近で口縁部が弱く外反する。整形は口縁部が横ナデ、胴部内面と外面の下位にミガキが施される。色調は明褐色で、黒斑が認められる。全体に厚手の作りのものである。

第4節 平安時代

1. 穴状造構とその出土遺物

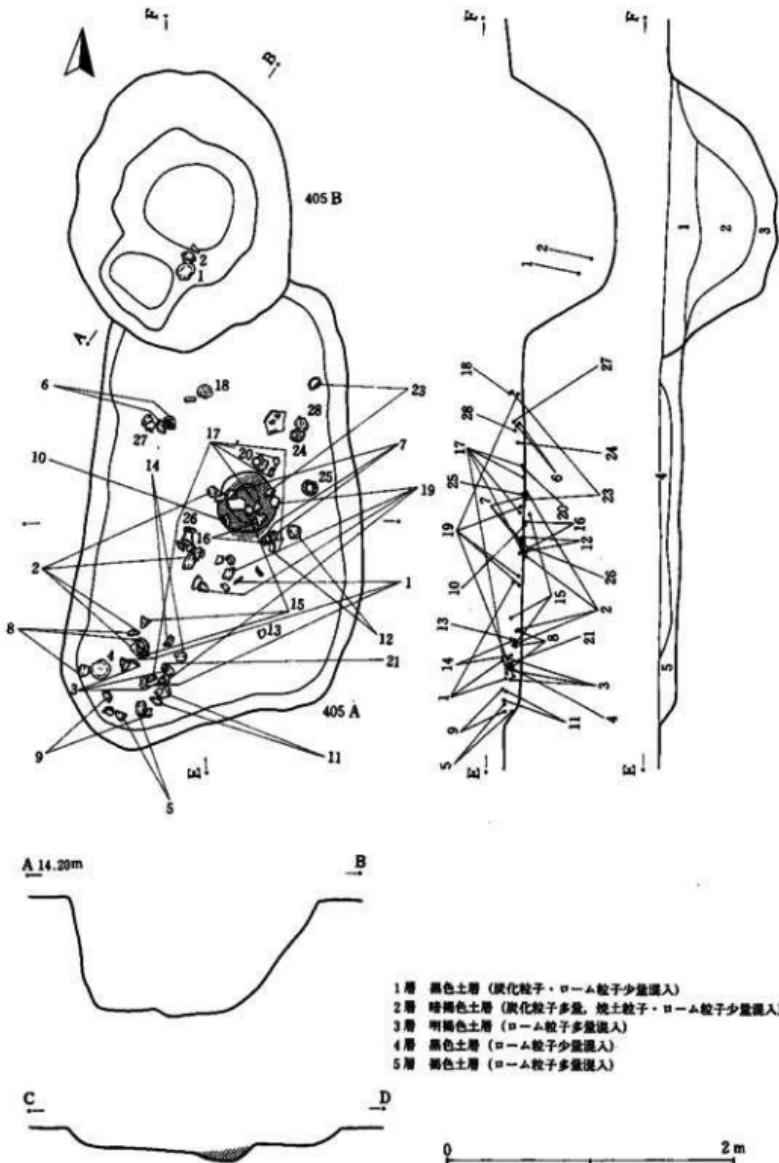
平安時代に属する遺構が1か所から検出されている。重複する2基の遺構からなり、北側に位置する405B号中からも同時期の遺物が出土したが、405A号からの流れ込みによるものとも考えられ、両者の関係については明らかではない。

405A号堅穴状造縄（第118図、図版19）

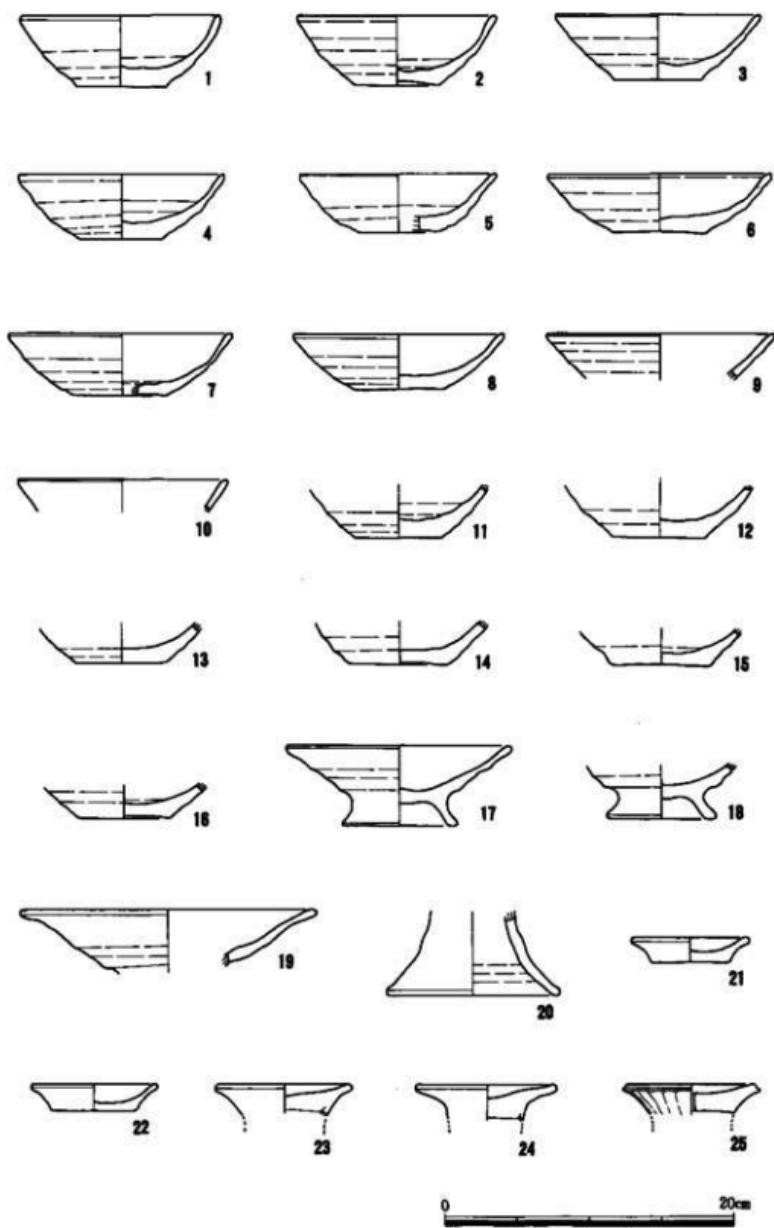
遺構 調査区南東部で、台地縁辺に近いG5-30区付近に位置する。形状は不整長方形で、3.2×1.9mの規模を測る。掘り込みの深さは15cmと浅く、壁は斜めに立ち上がる。底面は軟質で、凹凸がある。底面の中央付近には、径40cm、深さ10cmを測る炉と思われる施設が掘られている。遺物はすべて土師器で、遺構中央の炉跡内及び、その周囲と南西隅付近からまとまって出土した。

出土遺物（第119図、第120図、図版50、51-1）

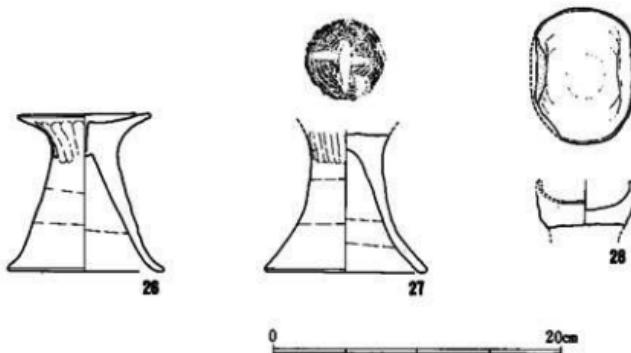
杯、高台付杯、小皿、器台の他に、大甕の胸部片が1片出土している。大甕片については、器形復元できず図示していない。1～16は杯である。器形の深いものと、浅いものとの2種に分けられる。1～5は、深い作りのものである。1は口径13.9cm、底径6.0cm、高さ5.0cmを測る杯である。底部は回転糸切り後、ナデにより調整される。体部は内弯気味に立ち上がる。内外面ともにナデにより調整されるが、内面のナデは弱い。胎土中には中粒砂を多く含む。2～5は、底部回転糸切り後未調整の杯である。2は推定口径13.8cm、底径5.7cm、高さ4.9cmを測る。やはり体部は内弯気味に立ち上がる。内面はナデにより調整される。内面口端部付近には黒斑がみられる。3は推定口径14.2cm、底径5.8cm、高さ4.6cmを測る。体部は、ほぼ直線的に開く。外面の一部と内面の広範囲に黒斑が認められる。4は口径14.2cm、底径5.6cm、高さ4.6cmを測り、法量的に3とほぼ同一である。内外面ともていねいな横ナデにより調整される。胎土中には細粒砂を含む。5は口径13.7cm、底径5.5cm、高さ4.1cmを測る。内外面ともていねいな横ナデが施される。胎土中には中粒砂を含む。内面の広範囲に黒斑が認められる。6～8は、やはり回転糸切り後未調整の杯で、浅い作りである。6は推定口径15.4cm、底径6.4cm、高さ4.2cmを測る。体部は内弯気味に立ち上がり、口端部は強い横ナデにより尖ったものとなる。胎土中に少量の細粒砂、雲母、スコリアを含む。7は推定口径15.3cm、底径6.3cm、高さ4.2cmを測る。体部はやはり内弯気味に立ち上がる。外外面は横ナデにより、ていねいに調整される。胎土中には砂粒を含む。8は推定口径14.5cm、底径6.0cm、高さ3.8cmを測る。内面の口端部付近に、黒斑を認める。胎土中には中粒砂、スコリアを含む。9、10は口縁部片である。9は推定口径15.6cmを測る。体部は直線的に開いて立ち上がる。胎土中には少量の中粒砂を含む。10は推定口径14.5cmを測る。杯と思われるが、口縁の立ち上がりは他のものに比べて急である。11～16は底部片である。11は底径6.0cmを測る。外外面の横ナデは、ていねいに施される。内面の全面に、黒斑が認められる。12は底径6.4cmを測る。胎土中には細粒砂が含まれている。13は底径6.0cmを測る。胎土中には、細粒砂と少量の雲母及びスコリアが含まれる。14は底径6.9cmを測る。



第118図 405A・B号竪穴状遺構実測図



第119圖 405A號堅穴狀結構出土遺物(1)



第120図 405A号竪穴状遺構出土遺物(2)

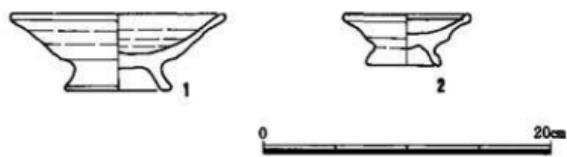
内面にみられる粘土紐接合痕のひび割れから、成形は底部からの粘土紐巻き上げによるものと判断される。15は底径6.7cmを測る。胎土中には中粒砂を含む。16は底径6.2cmを測る。胎土中には細粒砂を含み、外面褐色の色調を呈する。17、18は、高台付杯である。17は推定口径15.6cm、高台径8.0cm、高さ5.4cmを測る。体部は大きく直線的に開く。全体にていねいな横ナデにより調整される。18は高台径7.4cmを測る。胎土は緻密で、混入物は少ない。19、20は、高坏と思われる。19は杯部で、口径20.4cmを測る。体部は開きが大きく、皿状である。調整は横ナデによる。胎土中の混入物は少ない。20は幅径12.0cmを測る脚部である。調整はていねいな横ナデによる。内面には黒斑が認められる。色調等から19と同一個体の可能性がある。21、22は、口径8.0cm前後を測る小皿である。体部は外反して立ち上がる。底部は糸切り後未調整である。23～27は器台である。23～25は脚部から剝離しており、露出した底部には糸切り痕がみられる。口径は、9.4～9.8cmを測る。23、25の外面の調整は、縦位のヘラケズリによる。25のみ中央が穿孔され、口縁部の周囲がヘラにより整形されている。26は、ほぼ完形である。器受部は浅く偏平な作りである。法量は、口径9.2cm、裾部径10.7cm、高さ10.8cmを測る。器受部中央に穿孔が施されるが、脚部を貫通するには至らない。器受部と脚部の接合部は、縦位のヘラケズリにより調整される。胎土中には中粒砂を比較的多く含んでいる。27は脚部である。穿孔の跡はみられず、器受部は23、24のように無孔のものであったと思われる。器受部との接合部は、外面にはやはり縦位のヘラケズリを施し、内面の接合面には十文字状の沈線が施される。胎土中には中粒砂を含んでいる。28は耳皿である。口径9.2cmを測る。脚部から剝離した痕跡が、23～25と同様のため、器台になると思われる。剝離面に糸切り痕が残り、外面の接合部はヘラケズリにより調整される。

405 B号豊穴状遺構（第118図、図版19-2）

遺構 405 A号の北側を掘り込んだ、円形に近い形状のものである。規模は径1.8mで、最深部までの深さ80cmを測る。段差のある底面を2か所に認める。その高低差は約10cmで、南側のものがやや高い。覆土は3層に分けられた。土質は全体に軟質だが、ロームブロック等の混入が認められないことから自然堆積と思われる。遺物は、405 A号側の壁面付近から高台付杯2点が出土した。

出土遺物（第121図、図版51-2）

1は高台付杯である。推定口径14.8cm、底径7.2cm、高さ5.2cmを測る。体部は直線的、台部はハの字状にそれぞれ開く。調整は、外面ともていねいな横ナデによる。胎土中には細粒砂を含んでいる。2は小型の高台付杯である。口径8.9cm、底径5.6cm、高さ3.5cmを測る。体部外下位に稜を有し、内面の口端下部は沈線状の凹となる。内面には黒斑が認められる。胎土中には小石英粒等を含んでいる。



第121図 405 B号豊穴状遺構出土遺物

第5節 中近世

1. 豊穴状遺構とその出土遺物

調査区北部のD2区から、ほぼ同時期に存在したであろうと思われる豊穴状遺構が4基検出されている。いずれも遺構の確認面は縄文時代の遺構より高い位置にあり、落ち込みは黒く明瞭であった。出土した遺物は僅少で、時期決定には不明確な点が多いが、後の項で述べる溝状遺構との関連から、中世に存在したものとして考えられる。また、すべてのものの覆土は埋め戻された状況を呈していることから、墓壙の可能性が考えられる。

a. 豊穴状遺構

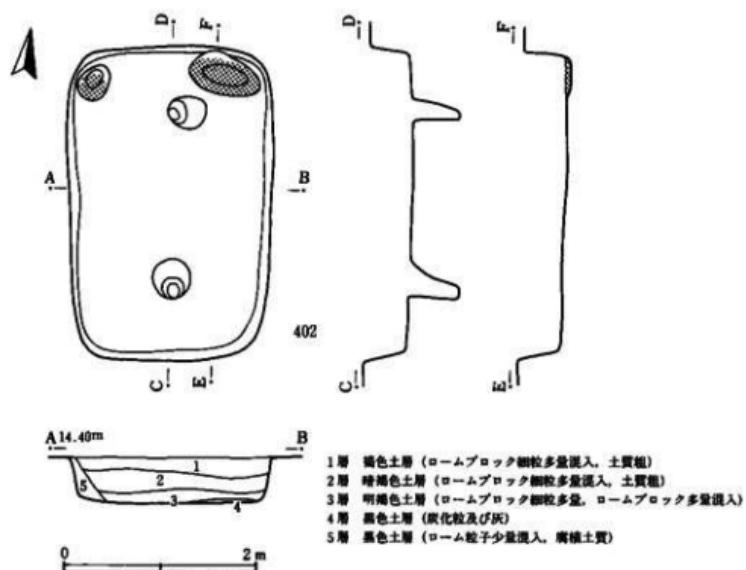
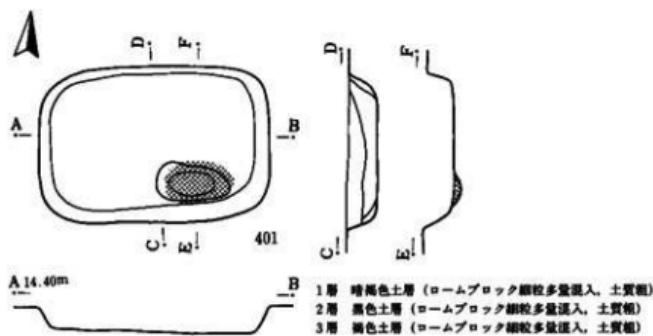
401号（第122図、図版20-1）

隅の丸い長方形を呈する。規模は2.4×1.6mで、4基中では最も小さい。掘り込みの深さは30cmを測り、壁はやや傾斜する。覆土は基本的に3層に分けられたが、いずれの層にも細かなロームブロックが多量に含まれており、本跡が埋め戻されたものであることを示している。底面は全体に平坦で固く締まる。南壁に接して浅い炉跡が検出された。残存する焼土はブロック

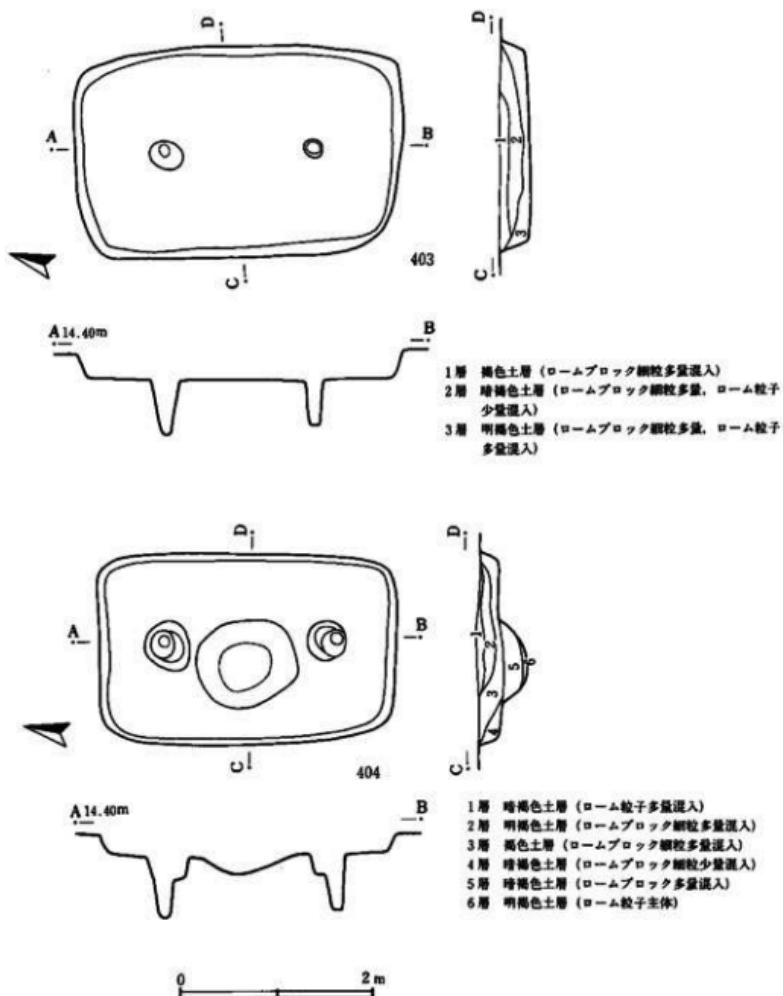
ク化しており、強く熱を受けた様子がみられる。

402号（第122図、図版20-2）

やはり隅がやや丸い長方形状を呈する。規模は3.2×2.1mを測る。掘り込みの深さは40cmで、壁は垂直近くに掘り込まれている。覆土中には細かなロームブロックが多量に混在する。底面



第122図 穴状追跡実測図(1)



第123図 竪穴状遺構実測図(2)

は平坦で固く締まり、長軸上の2か所に柱穴状のピットを有する。ピットの深さはいずれも底面から50cmを測る。北壁下の2か所に炉と思われる焼土が認められた。このうち東側のものは、焼土と灰が混在し下部は焼土がブロック化している。西側のものは、灰が主体的に堆積するが、下部はやはり焼土がブロック化する。遺物は覆土中からカワラケ片が出土している。

403号 (第123図、図版20-3)

平面形は、隅の丸みが比較的弱い長方形である。規模は 3.4×2.2 mを測る。壁はわずかに傾斜して掘り込まれるが、状態はしっかりとしている。覆土中にはやはりロームブロック等が多量に含まれている。底面は比較的平坦で、固く締まる。402号と同様に長軸上の2か所に柱穴状のピットが認められるが、本跡からは焼土の検出はなかった。底面からのピットの深さは、40~50cmを測る。

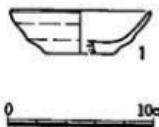
404号（第123図、図版21-1）

平面形は隅のやや丸い長方形である。規模は 3.1×2.0 mを測る。掘り込みの深さは20cmで、他の3基と比べるとやや浅いものとなっている。覆土中には多量のロームブロック等が含まれており、明らかに埋め戻された状況を呈している。底面は平坦で固く締まり、長軸上の2か所に柱穴状のピットを有する。ピットの深さは60cmを測り、その壁面はひじょうに堅密である。また、底面の中央には径1.0mの窪み状のピットを有している。ピット内の覆土は、暗褐色土が主体であるが、やはりロームブロックを多く含んでおり、これも埋め戻されたものである。

b. 竪穴状遺構出土遺物（第124図）

これら4基の竪穴状遺構から、遺物はほとんどみられなかった。唯一、カワラケ1点が出土したのみである。なお、このカワラケは402号と403号間で接合したものである。

1は推定口径9.6cm、高さ3.0cmを測る。杯形を呈し、成形はロクロによる。器面は磨耗が激しく、調整の痕跡等は残していない。体部の器壁は薄い作りである。



第124図 竪穴状遺構出土遺物

2. 土坑とその出土遺物

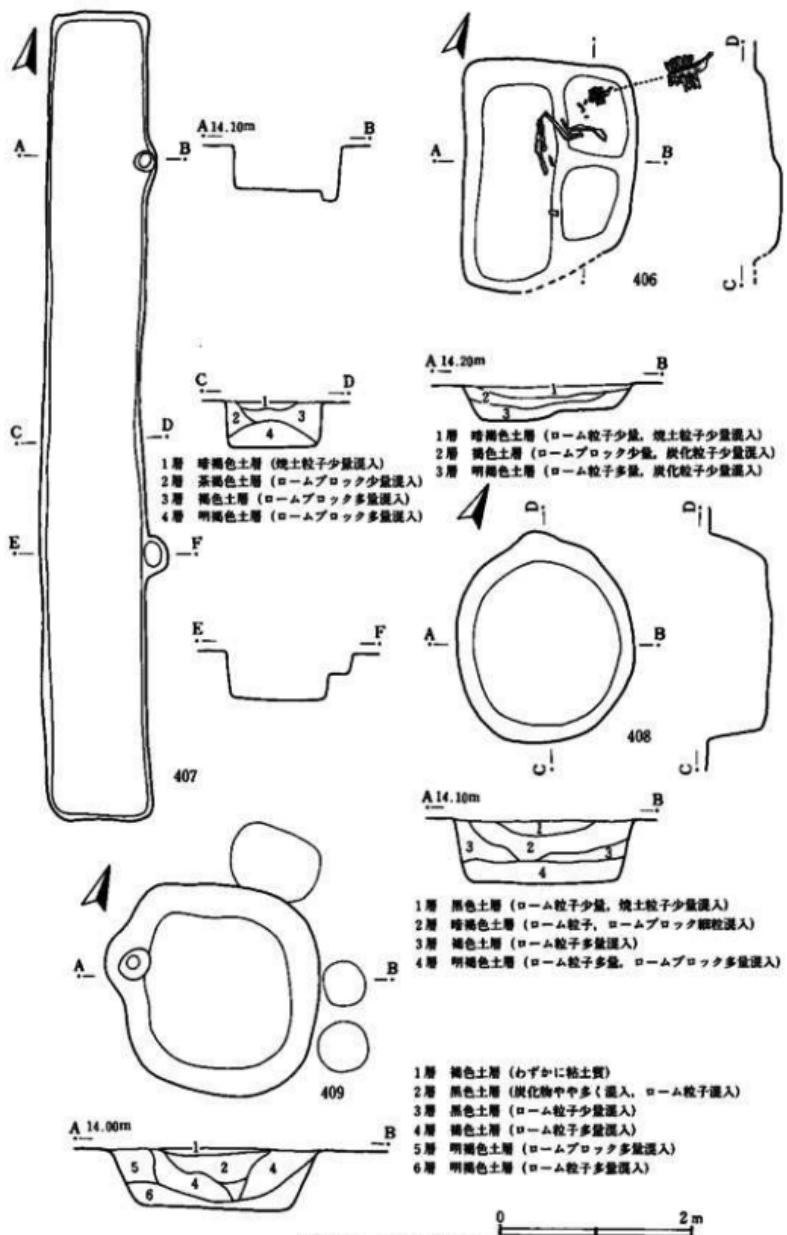
中近世に属するとみられる土坑は総数19基が検出されている。すべてのものが前項の中世竪穴状遺構群とは離れた位置の、調査区南部に所在する。土坑中からの出土遺物が少なく、覆土の観察のみで時期判断したものがほとんどであるので、中世・近世を一括した。陶磁器等の出土により、明らかに中世の土坑と思われるものは410号土坑のみである。

a. 土坑

406号土坑（第125図、図版21-2）

調査区南部のF6区に位置する。馬の下顎骨、歯、肢骨等が検出されており、馬を埋葬した墓壙と考えられる。平面形は長方形に近く、 2.4×1.8 mの規模を測る。掘り込みには二つのテラス面が認められる。北東隅付近の最も高いテラス上に馬歯等の検出がみられることから、馬の頭部を一段高くして埋葬したものであろう。

407号土坑（第125図）



第125図 土坑実測図(1)

調査区南部のF 6区に位置する。超長方形状を呈し、幅1.0m、長さ8.3mの規模を有する。底面までの深さは比較的一定しており、50cmを測る。底面は全体に平坦で固く締まっている。覆土中には、ロームブロックや腐食土質の土が混在しており、埋め戻された状況を呈している。東壁の2か所に、底面を浅く掘り込むP 1と壁中段で止まるテラス状のP 2が存在する。遺構の性格には不明な部分が多く、近接する144号や145号土坑をはじめとする他の遺構との関連を考える必要があるかもしれない。

4 0 8号土坑（第125図）

F 6区に位置する。形状は円形を呈し、径1.9~2.0mの規模を有する。壁はわずかに傾斜するがしっかりとおり、確認面からの深さ60cmを測る。覆土中にはローム粒子、細かなロームブロック等が含まれるが、明らかに埋め戻されたという状況ではない。坑底は比較的平坦で固く締まる。

4 0 9号土坑（第125図、図版21-3）

408号の西に2mの距離で近接して位置する。平面形は円形に近い方形を呈し、 $2.0 \times 2.0\text{m}$ の規模を測る。壁の立ち上がりは緩やかで、坑底は平坦である。覆土は内容的には408号に似て、ローム粒子や細かなロームブロック等を認めるが、堆積状況は408号よりも複雑で、埋め戻された可能性の方が高いと思われる。

4 1 0号土坑（第126図）

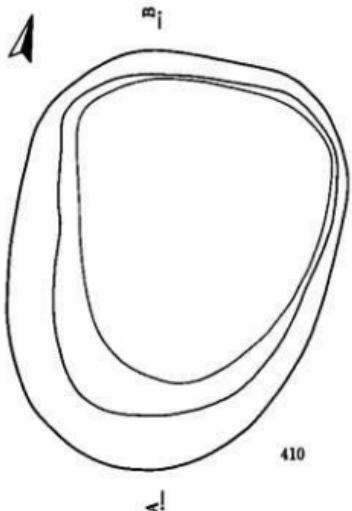
調査区南部で南北に延びる311号溝の北端から4mの距離で、E 5区に位置している。平面形は横円形に近く、 $4.3 \times 3.3\text{m}$ の規模を有する。遺構確認面での検出時は竪穴状遺構的なものかと思われたが、掘り込みの深さが思いのほか深く、最終的には作業の安全面を優先し、坑底の検出は重機を使用している。このため、細部に関する坑底の状況は不正確ではあるが、確認面からの深さは2.9mを測る。覆土は上層についてのみ土層断面の実測を行い得た。覆土上層はその観察から、埋め戻されたものと考えられる。また、坑底は粘土層には達しておらず、井戸や粘土採掘坑といった性格のものではないようである。遺物は少數であるが15世紀代に比定できる常滑系の甕口縁部、灰釉皿等が出土している。

4 1 1号土坑（第126図、図版22-1）

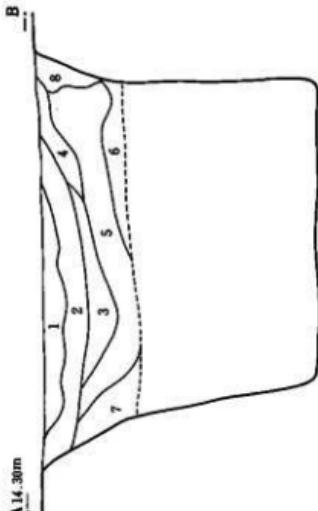
調査区南部で408号や409号に近接するF 7区に位置する。平面形は隅の丸い台形状に近い。規模は長軸上で2.9mを測る。掘り込みは浅く、20cmに満たない。坑底は凹凸があり、中央付近に径30cmの浅いピットを有する。

4 1 2号土坑（第126図、図版22-1）

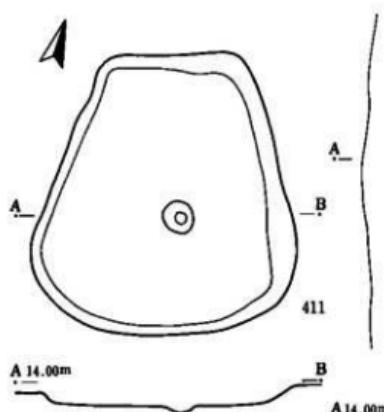
411号の北西に1.0mの距離で隣接する。平面形は円形に近く、径2.2mを測る。西側は310号溝により切られている。掘り込みの深さは20cmと浅く、411号と同様に坑底の中央付近にピットを有する。覆土は自然な堆積状況を呈し、坑底は比較的平坦である。



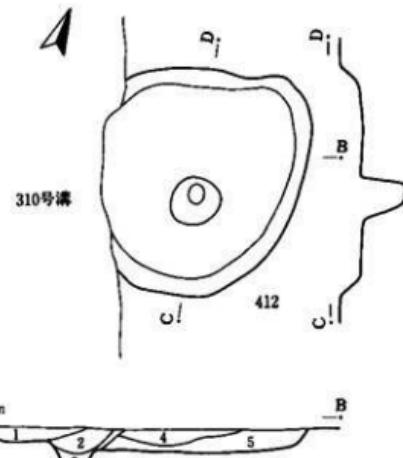
- 1層 明褐色土層（ローム粒子多量、ロームブロック細粒多量混入）
 2層 褐色土層（ロームブロック細粒少量混入）
 3層 單褐色土層（ロームブロック細粒少量混入）
 4層 茶褐色土層（ローム粒子多量、ロームブロック細粒混入）



- 5層 褐色土層（ローム粒子多量、ロームブロック細粒混入）
 6層 明褐色土層（ローム粒子多量、ロームブロック細粒混入）
 7層 單褐色土層（ローム粒子少量、ロームブロック細粒少量混入）
 8層 明褐色土層（ローム粒子主体、壁の崩落土）



A 14.00m



- 1層 明褐色土層（ロームブロック少量、ローム粒子多量混入）
 2層 單褐色土層（ローム粒子少量混入）
 3層 褐色土層（ローム粒子少量混入）
 4層 黒色土層（ローム粒子少量、炭化粒少量混入）
 5層 明褐色土層（ローム粒子多量、ロームブロック少量混入）

第126図 土坑実測図(2)

141号土坑（第127図、図版22-2, 3）

E5区に位置する。311号溝と重複するが、お互いの掘り込みの深さが浅いため、新旧関係は不明である。平面形は横円形を呈し、 $1.9 \times 1.1\text{m}$ の規模を測る。北壁付近から馬の歯及び下顎骨が検出されている。馬を埋葬した墓壙と考えられる。

140号土坑（第127図）

F6区に位置し、140号から143号までの4基がまとまった状態で検出されている。平面形は長方形形状を呈し、 $2.6 \times 1.2\text{m}$ 、深さ20cmの規模を有する。坑底は凹凸があり、やや軟質な状況である。

141号土坑（第127図）

140号の北側で平行して位置する。やはり長方形に近い形状を呈し、 $2.3 \times 1.1\text{m}$ 、深さ20cmの規模を有する。坑底の中央で北壁に寄った位置に、坑底からの深さ50cmを測るピットを有する。140号と同様に坑底は凹凸があり、やや軟質な状況である。

142号土坑（第127図）

140, 141号の西に隣接して位置する。平面形は円形を呈し、径1.5mを測る。掘り込みの深さは15cmと浅く、坑底はやや軟質である。

143号土坑（第127図）

142号の北に隣接する。平面形は卵形に近く、 $1.6 \times 1.4\text{m}$ 、深さ15cmの規模を有する。坑底はやはり凹凸があり、やや軟質である。

144号土坑（第127図）

407号の東に平行するような位置である。平面形は横円形に近く、 $1.5 \times 0.8\text{m}$ の規模を有する。掘り込みの深さは15cmと浅く、やや凹凸があり軟質である。

145号土坑（第127図）

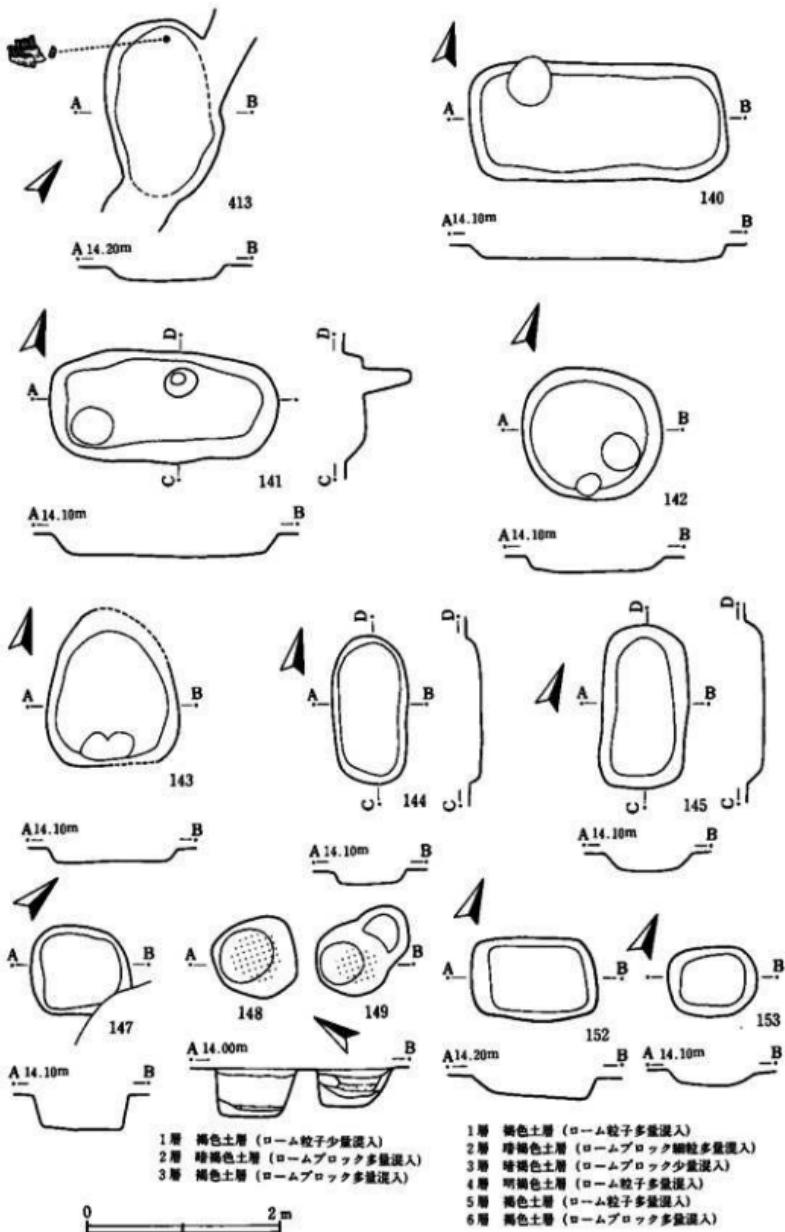
144号の北に位置する。隅の丸い長方形に近い形状を呈し、 $1.7 \times 0.9\text{m}$ の規模を有する。掘り込みの深さは20cmで、坑底等の状況を含め、全体に144号と類似するものである。

147号土坑（第127図）

408号の西に接している。東壁の一部を408号により掘り込まれている。形状は方形を呈し、 $1.0 \times 0.9\text{m}$ 、深さ35cmの規模を有する。坑底は比較的平坦で、固い。遺物は、覆土中から用途不明の鉄製品が出土している。

148号・149号土坑（第127図、図版23-1）

調査区の最南端F7区に位置する。互いに隣接して検出され、いずれも版築された状況の粘土面を有するものである。148号の形状は円形を呈し、径0.9mを測る。掘り込みの深さは50cmと深く、粘土面は坑底近くにある。掘り方は壁面、坑底ともにしっかりとしており、坑底は平坦である。149号は2段掘りされたような状況を呈し、東側にテラスを有するが、主体となる部分



第127図 土坑実測図(3)

の形状はやはり円形である。径は148号よりも一回り小さく、0.8mを測る。深さは40cmで、粘土面は覆土の中層にある。坑底はやはり平坦で、固く締まる。

152号土坑（第127図）

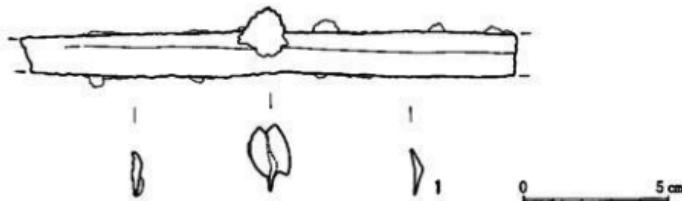
F5区に位置する。形状は隅の丸い長方形を呈し、1.3×0.8mの規模である。覆土は軟質な黒色土の単一層であったが、圓化はしていない。坑底は東側に向かってやや傾斜し、深さ20cmを測る。

153号土坑（第127図）

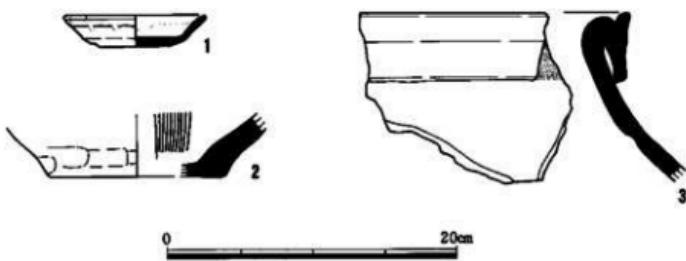
152号の東に隣接する。隅が極端に丸い長方形を呈し、0.9×0.7mの規模を有する。掘り込みの深さは15cmと浅いが、坑底の中央に向かって傾斜する。

b. 407号・410号土坑出土遺物（第128図、第129図）

第128図1は407号土坑から出土した用途不明の鉄製品である。現存長17.1cm、重量21.6gを測る。片面にのみ稜線及び刃部を有する。中央部には、両面にまたがって突起部分を有する。第129図は、410号土坑からの出土遺物である。1は推定口径9.7cm、高さ2.1cmを測る瀬戸・美濃系の灰釉陶器皿である。釉は口縁部を一周するように施される。底部には回転糸切り痕が残される。2は推定底径11.9cmを測る擂鉢である。内面に施される櫛目の単位は10条である。3は常滑焼きの壺である。口縁部はN字状に折り返される。色調は、表面灰褐色、内面は暗赤褐色を呈す。15世紀に属するものと考えられる。



第128図 407号土坑出土鉄製品



第129図 410号土坑出土遺物

3. 溝状遺構とその出土遺物

a. 溝状遺構

中近世の溝状遺構が、調査区内での総延長395mにわたって検出されている。それぞれの配置から考えて、いくつかは同時に存在し、複数で機能していたものと考えられる。ここでは、それらまとまりを持つと考えられる溝をグループに分け、さらに個々の溝状遺構の説明を行う。

溝A群（301・302・303・309号）

調査区北西側から中央部にかけて位置する。

301号溝（第130図）

調査区の北西の隅から、鍵の手状に屈曲して南下する。全体に幅は約80cm、深さも一定しており、約20cmを測る。底面は細く狭まり、幅15cmほどである。覆土は褐色を呈する単一層で、ローム粒子、ロームブロック等の混入が多くみられた。溝覆土中からの出土遺物は、わずかな陶磁器片が出土したのみである。

302号溝（第130図）

調査区の北西の隅から301号に平行するように、南北に走る溝である。掘り方は幅60cm、深さ40~45cmを測る。覆土は軟質な単一層である。溝覆土中からの遺物はない。

303号溝（第130図）

301号、302号溝の南部付近から、座標軸に沿って鍵の手状に屈曲し、調査区東側の谷部に向く溝である。006号住居跡付近は、掘り直しのためか、溝が重複する。掘り方の幅は、東西方向がやや広く、70~90cmで一定しないが、南北は50cmでほぼ一定する。深さも東西方向が40~50cmで不規則なのに対し、南北は約15cmで一定する。覆土は全体に自然な堆積状況を呈している。D2~30区付近では掘り込みが深いため、堆積層多かったが、基本的には黒色土層が主体である。遺物は、中国産の青磁皿等が出土している。

308号溝（第130図）

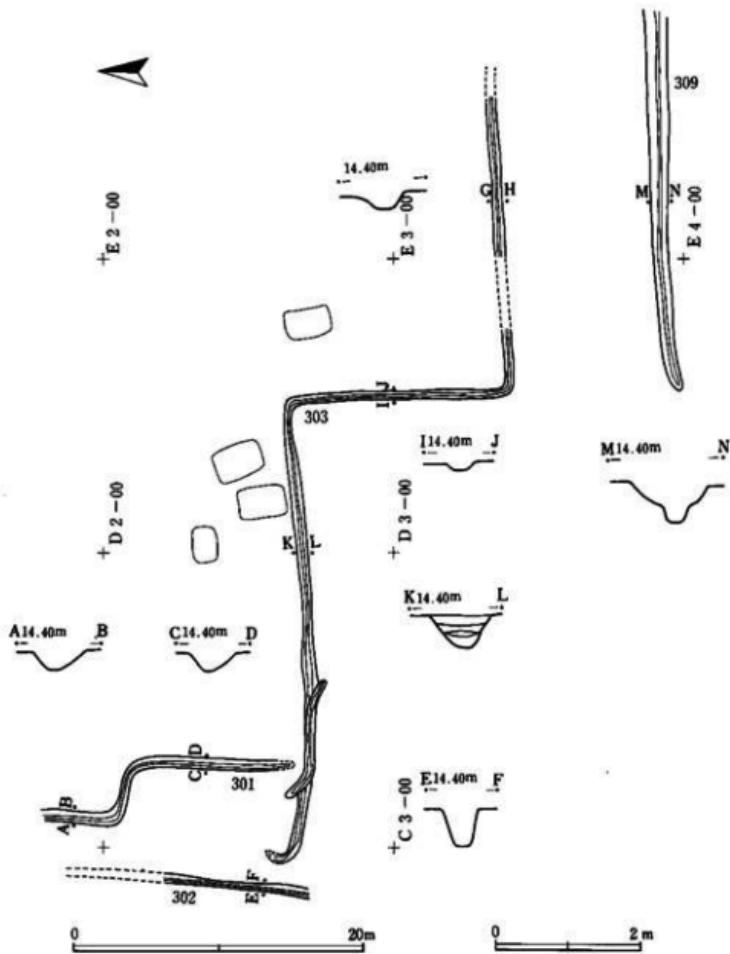
303号溝の東側部分に約10mの間隔を空けて平行する。幅は100cm~150cmで、東に向かうに従い広くなる。深さも40~70cmで、やはり東に向かって深くなる。

溝B群（304・305・306・307・308号）

溝A群の南側で、方向はやはり座標軸上の南北または東西である。308号を除き、規模、方向とともに類似性がみられる。わずかではあるが、出土した陶磁器等の遺物等から中世に属する溝と思われる。

304・305号溝（第131図）

まず、東西方向の304号が存在し、305号は304号を延長するか、深さを加えて掘り直したものと思われる。305号が直角に方向を変えるC5~30区付近では、明らかに304号を切っている。幅は304号が100cm、305号が100~150cmである。深さは304号が30~40cmで、305号が40~50cmを測



第130図 溝状造構（A群）実測図

るが、どちらかの方向に向かって規則的に深くなるということはない。覆土は、両溝とも軟質だが自然な堆積状況を呈していた。遺物は、中世と思われる陶器片がわずかに出土している。

305号溝（第131図）

305号に直交し、南北に走る。両溝の直交部と溝の北端部には、溝底から15cmの深さを有する円形状のピットが掘られている。幅120~180cm、深さ20~40cmを測るが、平均的な深さは25cm

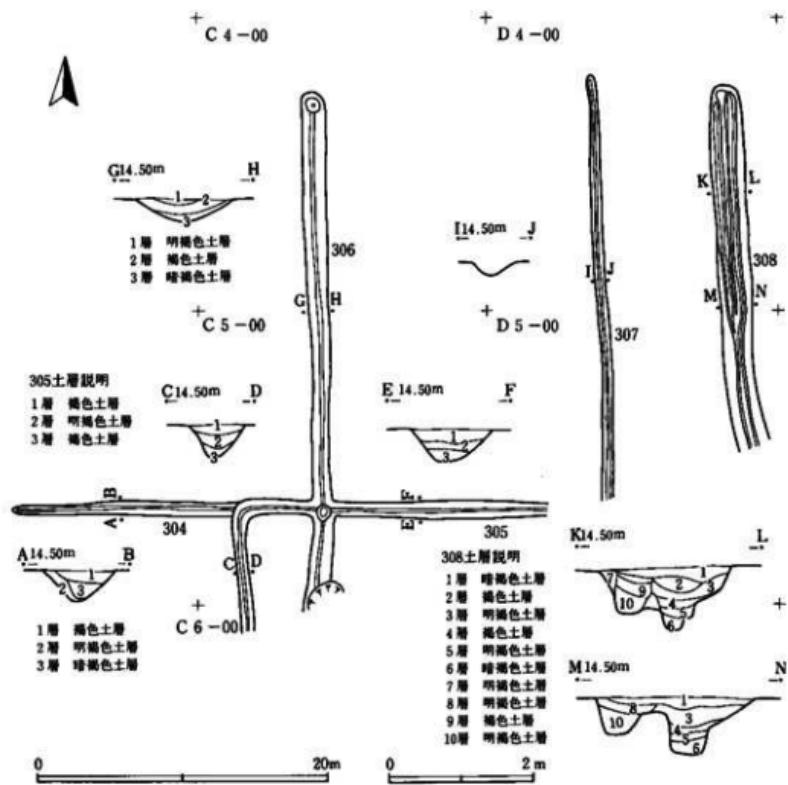
位である。覆土はやや軟質だが、自然な堆積状況である。遺物はわずかであるが、瀬戸・美濃系の陶器碗等が出土している。

307号溝（第131図）

306号に平行して南北に走る。306号との間隔は、約18mで一定する。南端部は調査区外となり未調査であるが、305号につながる可能性もある。掘り方は幅60cmと狭く、深さは全体に20~25cmを測る。覆土は軟質な單一層である。遺物は常滑系陶器片、土鍋片等が出土している。

308号溝（第131図）

307号に平行して南北に走る。307号との間隔は、約8mで一定する。北半は溝底部を2条有する複合的なものであるが、土層断面から判断すると、一方が埋まりきった後に、もう一方が掘られたものである。このため、溝B群中では最も幅が広く、200~220cmを測る。深さは複合部分の東側が最も深く約70cmを測り、その深さが南側へと続く。また、平行する西側は40~50



第131図 溝状造構（B群）実測図

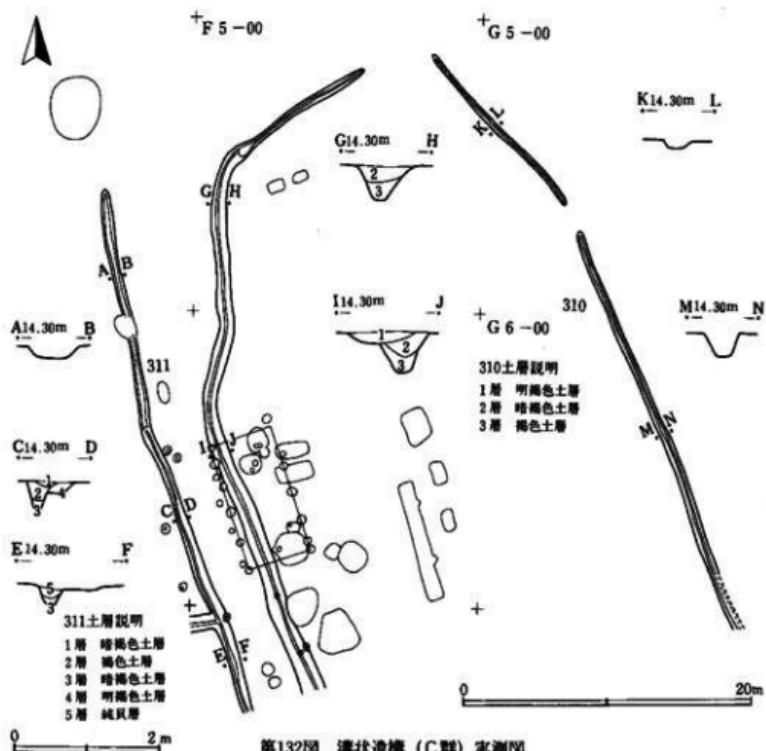
cmを測る。両溝とも、覆土中には多量のロームブロック等が含まれており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は土鍋片、伊万里系磁器碗小片等が出土している。遺物量が少なく、明確な時期判断ができないが、当溝南端部はやや東にカーブし未調査区に続いており、これが311号に平行するならば、近世に属する可能性も考えられる。

溝C群（310・311号）

調査区南東部に位置し、方向は座標軸よりもやや北西にずれる。311号から出土した土鍋等と、方向性の不規則さから、近世に属するものと考えられる。

310号溝（第132図、図版23-3）

途中2か所の途切れはあるが、調査区南東部内を一周するように掘られている。西側部分の方が幅は広く、120~150cm、深さ約50cmを測る。東側では幅40~60cm、深さは南東部ほど深く、約30cmを測るが、北部で短く切れる部分では5~10cmとひじょうに浅い。覆土は明褐色土の単一層である。遺物で、当該期と思われるものの出土はない。



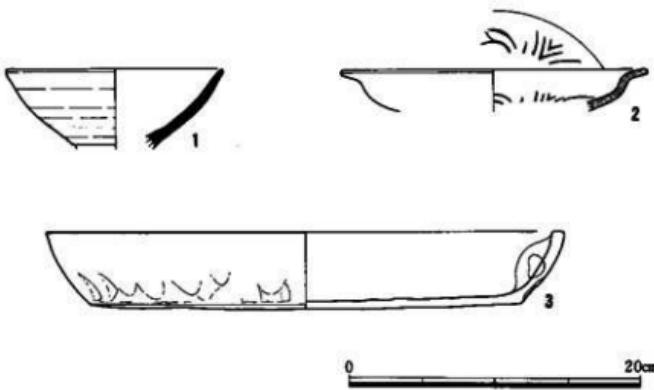
第132図 溝状遺構（C群）実測図

311号溝（第132図、図版23-2）

310号の西側に平行するように位置する。F7-00区付近では、西側に派生する溝の一部もみられる。掘り方は幅60~100cmを測り、南側の方が幅広となる。深さもE6-30区付近から南側は、溝底がもう一段掘り込まれ、40~50cmの深さとなっている。遺物は、調査できた南端から約4mの範囲に、オオタニシを主体とする貝が廃棄されていた。また、貝層の北端より北に約4mの位置からは、内耳の付された土鍋が出土している。

b. 溝状造構出土遺物（第133図）

1は、305号溝から出土した瀬戸・美濃系の碗である。釉は内面の全面と外面の上半部に施される。高台部分は削り出しにより成形される。口径14.8cmを測る。2は、303号溝から出土した中国産の青磁皿である。内面見込みには草花文が描かれる。胎土は白色を呈するが、やや粗いものである。口径21.2cmを測る。3は、311号溝から出土した土鍋である。3か所に内耳が付されるが、配置は均等分ではなく、1対2で向き合っている。胎土中には雲母を含み、外面にはススが付着する。法量は、口径35.7cm、高さ5.4cmを測る。

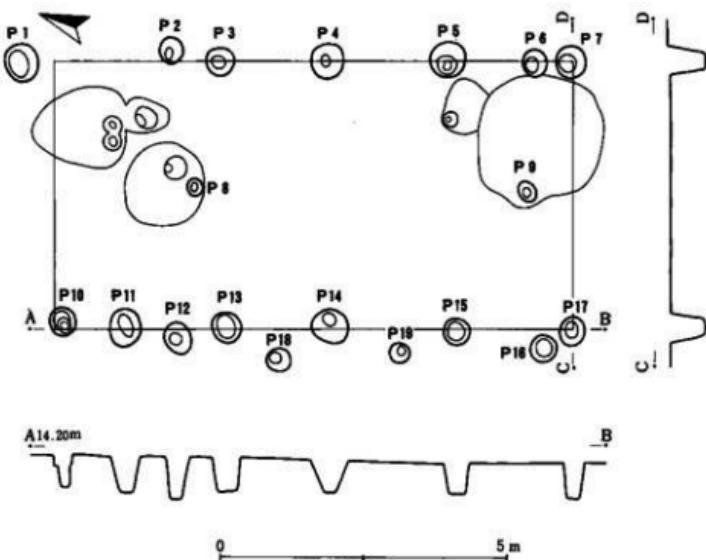


第133図 溝状造構出土遺物

4. 掘立柱建物跡（第134図、図版23-3）

溝C群が存在する調査区南部から、掘立柱建物跡が1棟検出されている。出土遺物がないため、明確な時期判断ができないが、近世の溝である311号と柱穴列の方向が一致しており、ほぼ同時期のものと思われる。規模は桁行9.0m、梁間4.5mを測る。主軸方位はN-19°-Wである。柱掘り方は円形で、径40~50cm、深さ50~70cmを測る。妻側に棟持ち柱となるような柱穴は検出されず、西側柱の柱間寸法は、P17-P15間2.2m、P15-P14間2.0m、P14-P13間1.8mと一定しない。それより北側については、P11に対応する柱がみられないなど、曖昧である。

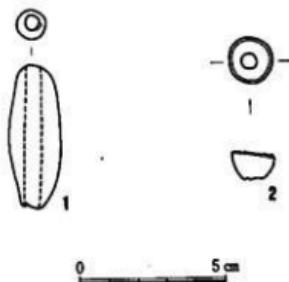
る。主軸の中心線上よりわずかに東側で、P8, P9の検出があるが、これも側柱との位置的対応がとれないため、性格を決定することはできない。以上のことから本跡は、簡易な構造を持つ作業小屋的な建物跡と考えられる。また、建物の範囲内に存在する142号、143号、409号の各土坑についても、作業小屋に伴う付帯施設の可能性があることを加えておきたい。



第134図 挿立柱建物跡実測図

5. その他の遺物（第135図）

1はD 2-11区から出土した管状の土錐である。全長4.9cmを測り、端部側の径は小さくなる。重量11.7gを量る。2はF 5-23区から出土した煙管の雁首である。火皿部分のみ残存する。



第135図 その他の遺物

第3章 調査の成果

第1節 先土器時代

1. 岩名第14遺跡における先土器時代文化層について（第136図～第138図）

岩名第14遺跡では合計9地点の先土器時代石器集中地点を検出し、それらが5つの文化層に分別できることは先述したとおりである。

岩名第14遺跡の所在する台地は、旧利根川、荒川水系による沖積地に突出した台地であり、下総台地の他の遺跡とは地理的に条件が異なる遺跡といえる。この地理的条件の差異が下総台地でみられる各文化層を構成する石器製作技術あるいは石器組成、また石材等に違いがあるのかは重要な課題である。しかし、岩名第14遺跡周辺では近年当該期の調査事例が増加しているにもかかわらず、報告についてはその内容を知るには資料的に不足している点が多い。

ここでは岩名第14遺跡の資料をまず整理し、岩名第14遺跡が所在する下総台地北部の先土器時代文化層を考えてみたいと思う。なお、本文中でグリッド出土石器としたうちの槍先形尖頭器の一群について第6文化層とし、槍先形尖頭器を石器組成に含む文化層を新たに設けた。

各文化層の特徴及び周辺遺跡との比較

文化層ごとの特色については本文中の事実記載で記述したため、その他本文中で触れていない点を加味し、あらためて各文化層の特色をまとめる。また岩名第14遺跡周辺の遺跡で出土している先土器時代石器群との対比にも触れてみたいと思う。

第1文化層

ナイフ形石器を定型的な石器として組成に含む。一般に南関東における第2黒色帶上部に位置する石器群で使用される石材は、頁岩、チャートが多く、黒曜石の使用される割合が増すのはVI層段階であるが、岩名第14遺跡で検出した該期に属するブロックでは黒曜石のみ使用される。石刃技法に基づく剝片剥離が行われるが、下総台地一般にみられる石刃と比較するとやや小型の感がある。

第2文化層

2ブロックが該期に属するが、両ブロックの性格は全く異なる。第4ブロックでは明確な石核がみられ、石核から作出された剝片は石刃ではないが縦長剝片を意識していることが窺えるが、第5ブロックでは明確な石核はみられず、剝片剥離の際に作出された大型の剝片を石核とし、それより剝片を作出している。第5ブロックの剝片剥離技術はむしろIV層下部の特色が強いといえるが、石器出土層位は明らかにVI層である。

第3文化層

チャート礫を主体とした礫群を伴う。ただし石器、剝片類の中にはチャート製の石器はみられず、石器の石材選択を意識しているようである。角錐状石器を石器組成に含むのは、南関東

ではほぼ普遍的な特徴といえる。出土している石器、接合資料をみるとかぎりでは、剥片剝離の際に特に素材剥片の形状は意識していないように感じる。

第4文化層

2ブロックが該期に属するが、両ブロック共に出土した石器は少數なため、剥片剝離技術を明確にするのは困難である。両ブロックとも礫群を伴い、礫は第3文化層と同じくチャート礫が組成の大半を占める。

第5文化層

石器に使用される石材の種類が減少する。

第6文化層

ソフトローム層上部から黒色土にかけて、槍先形尖頭器を石器組成の主体とする文化層である。多少隔たりはみせるが、同一の水系に属する流山市の桐ヶ谷新田遺跡で検出した槍先形尖頭器を主体とした石器集中地点はこの期に属する。

下総台地北部における先土器時代の様相

岩名第14遺跡および周辺遺跡から出土した資料から、下総台地北部における先土器時代の様相を明らかにするには現時点では難しい。ここでは一地域の特色としてまとめ、後の資料の蓄積を待ちたいと思う。

各文化層の石器形態、石器組成には特色は認められず、下総台地をはじめ、南関東での様相と変わりがない。唯一特色としてあげるならば、使用される石材についてであろう。特に第1文化層としたVII層段階で、黒曜石が多く利用されているのは注目できる。また、第6文化層とした槍先形尖頭器の一群にも黒曜石製の資料がみられ、これは周辺遺跡の尾崎南遺跡、同水系の流山市桐ヶ谷新田遺跡でも同様のことがいえる。さらに剝片石器ではないが、ブロックに伴う礫群の石材としてチャートが多用されていることも一特色としてあげることができる。これは横の内遺跡でも同様である。横の内遺跡では珪岩として報告されているが、おそらく同質の石材であろう。

以上、下総台地北部の一様相を記述した。石材について特色がみられたが、この要因として水系からみた立地条件が大きく関係するものと思われるが、この点については資料の蓄積を待ち、再度検討を試みたいと思う。

参考文献

- 中山吉秀・川根正教・朝比奈竹雄 「桐ヶ谷新田遺跡」 1979
田村 隆他 「房総考古学ライブラリー1 先土器時代」(財)千葉県文化財センター 1984
金山喜昭他 「横の内遺跡」 1987
飯塚博和・金山喜昭他 「尾崎南遺跡」 1989
山本 黒・金山喜昭・柴田 敦 「石器組成の変遷」『石器文化研究3 シンポジウムAT降灰以前の石器文化—関東地方における変遷と列島内対比—』 1992
高橋直樹 「千葉県内から出土する玉類の原材の原産地についての考察」『千葉県文化財センター 研究紀要13』 1992

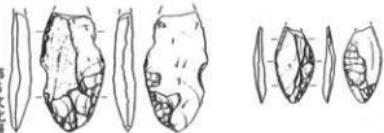
剥片石器	剥片類	石核, 磬石器等
 第6文化層 24.00m		
		
		
		
	第9ブロック	
		
	第8ブロック	

図136図 先土器時代石器組成図(1)

剥片石器	剥片類	石核, 磬石器等
第4文化層 14.00m		
第7ブロック		
第3文化層 13.00m		
第6ブロック		
第2文化層 12.00m		
第5ブロック		

The diagram illustrates the stratigraphy of the site, showing the distribution of different types of stone tools across four distinct cultural layers and three excavation blocks. The layers are defined by horizontal lines and labeled with their elevations: 14.00m, 13.00m, and 12.00m. The blocks are labeled Block 7, Block 6, and Block 5. Within each block, specific artifact types are grouped together. For example, in Block 7, there are two groups of flakes (剥片石器) and two groups of cores (石核, 磬石器等). In Block 6, there are three groups of flakes and one group of cores. In Block 5, there are two groups of flakes and two groups of cores. The artifacts are depicted as simple line drawings.

第137図 先土器時代石器組成層(2)

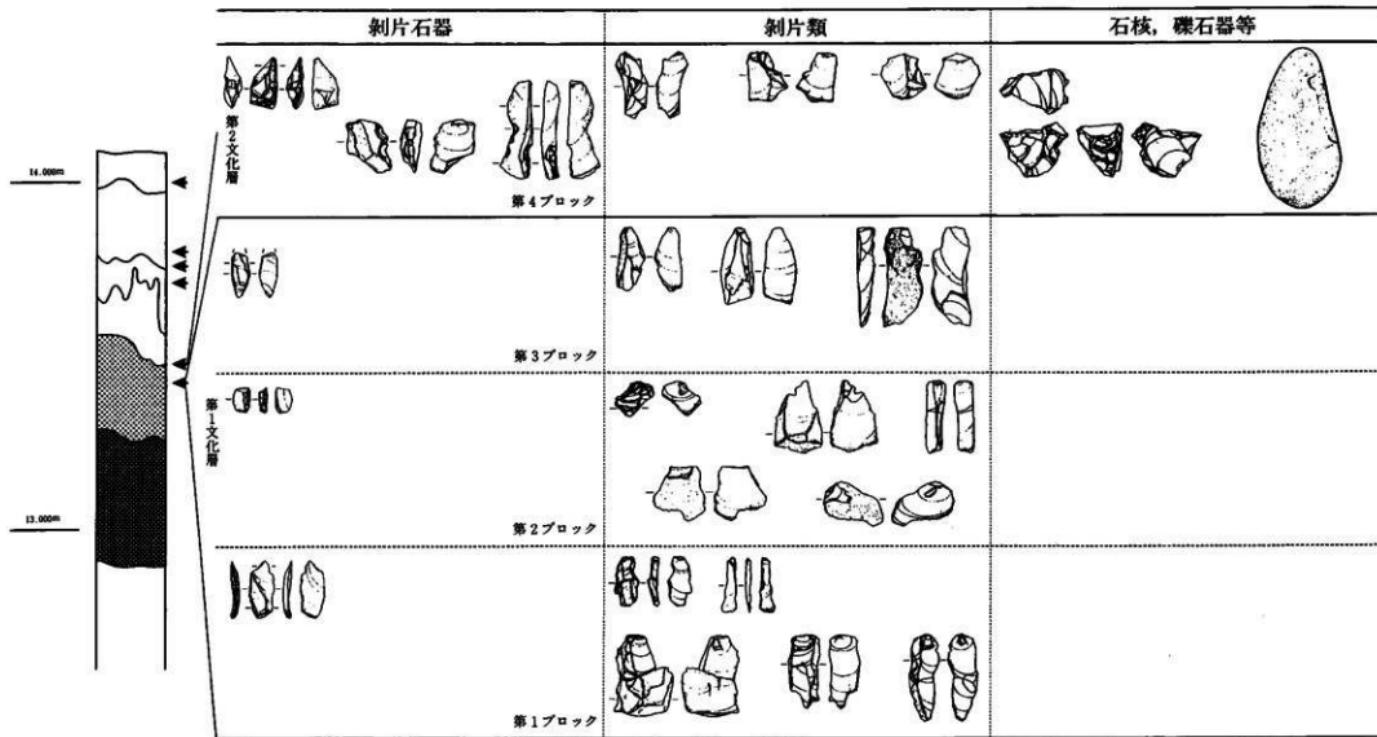


図138 四先土器時代石器組成図(3)

第2節 繩文時代

1. 早期の遺構

岩名第14遺跡において検出された縄文時代の遺構は、早期及び前期に属するものである。ここでは当遺跡の主体をなす早期について、簡単にまとめておくこととする。早期に属する遺構は、竪穴住居跡5軒、炉穴22基、土坑39基がある。

竪穴住居跡は、確認面清掃時、明らかに周囲のローム面とは色調を異にする落ち込みを検出したことから調査したものだが、002A・002C・003号の各住居跡の壁、及び床面はひじょうに不明瞭であった。これら3軒については、竪穴と呼べるほどの構造を伴っていたかは疑問である。しかし、多量にみられた縄文時代早期土器片は、調査された区域全体からみても、002号住居付近に集中しており、この付近が当集落の中心的位置を占める場所であるには違いないだろう。ただ、土器片を主とする遺物が多く出土したものの、内容的には廃棄されたものがほとんどで、復元して器形を窺えるようなものもなく、住居跡として生活の匂いが薄いのも事実である。今回は、早期の住居跡を検出した他の遺跡と比較することをしていないが、現段階では当該期における集落的な研究は、やはり竪穴住居中心にはできないということか。あるいは、早期においては、このように生活の中心が竪穴住居におかれていないと云うのが、時代的な特色になるのかもしれないが、住居跡あるいは土坑、炉穴それぞれを別個に考えるのではなく、早期においては、ことさら総合的に分析することが必要である。当遺跡においては、このように不明瞭な状況といわざるを得ない遺構群の中で、焼土の検出がないことは、少なくとも炉穴は存在していなかったことを表しており、この点でいえば、居住区と調理場の占地は分けられている。

炉穴は平面形態において、次のようないくつかの類型に分類することができる。A形=円形に近いものが多く、規模も小さい。火床部のみがみられる、焼土跡と呼べるようなものである。113号、202号、203号がこれに当たる。B形=橢円形プランを呈し、足場と火床部が備わるものである。火床部は、片方の壁に接して掘られている116号、119号、130号、201号、204号、205号、206号、207号、208号、209号、215号、216号、154号と、火床部の掘り込みが遺構の中心部付近に位置する102号、210号がある。また、214号のように火床部が壁際と中央の2か所に設けられるものもある。C形=火床部を複数ヶ所有するものである。基本的には、いわゆる複合型と呼ばれる炉穴を指す。211号、212号、213号がこれに当たる。A形は、規模が小さく出土遺物もなかった。それだけ、使用期間が短かったといえるかもしれない。B形は、最も多く検出され、16基を数える。ほとんどのものが、調査区の北半で住居跡群の南を中心にして、さらに住居跡群を取り囲むような配置で検出された。明確に時期決定の判断を下せるものは少ないが、わずかに出土した土器からみる限りでは、これらB形炉穴群のはば中央に位置する209号から子母口式土器が出土しており、これが最も古い時期である。規模的には長軸1.5m前後を測るもの

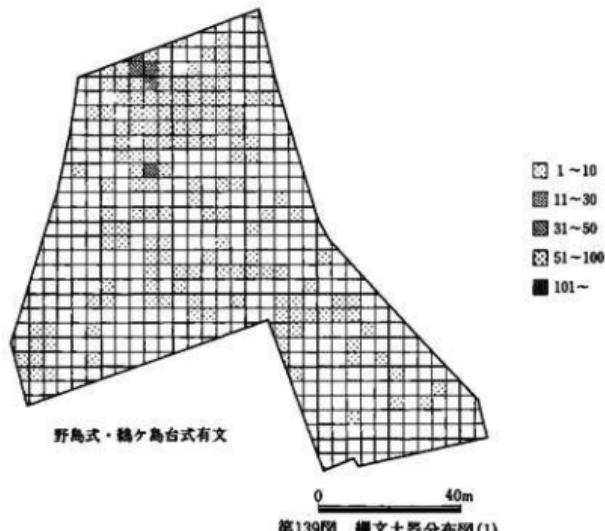
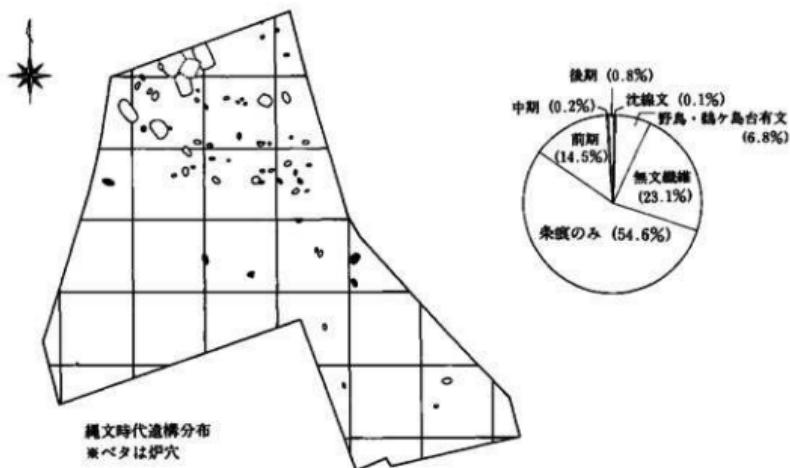
が多いが、154号と214号の両炉穴は、いずれも3m前後の規模を有し、他より突出したものとなっている。また、炉穴としての機能を廃絶した後、貝の投棄が行われているものが3基に認められた。貝は、すべて焼土の上面から検出され、貝に被熱の痕跡はみられない。当遺跡では、他にも土坑から検出された貝層があるが、覆土の下層が埋まった時点で、貝の堆積が始まるため、明らかに廃棄されたものである。いずれにしても、ひとつの遺構が意識的に貝の廃棄場所として選ばれており、特に廃絶後の炉穴を貝の廃棄場所とした例は、今のところ希少である。

土坑は、全体に調査区北半のD2・D3区付近に集中するような分布を示す。位置的には、住居跡群の南東で、炉穴の分布範囲の内側に適在する傾向がある。検出された39基のうち、23基から遺物が検出されている。小破片での出土例が多いが、次にあげる遺構からは、まとまった土器が出土しており、注目できる。①112号は、径1.0mの小規模で浅い土坑であるが、出土した鵜ヶ島台式土器の個体数が多い。器形のわかるほどに復元されたものは、5個体(第142図1～5)である。これについては、次項で少し検討を加えるが、ひとつの土坑から同時性を保って出土したことによる大きな意義があるだろう。②124号は、マガキを主体とする貝層を伴った土坑である。径1.2m前後を測る円形に近いもので、しっかりとした掘り込みを持つのが特徴である。深さは、50cmを有する。貝は、出土状態から廃棄とみられることは、既に述べてある。③126号は、径1.8mを測る比較的大型の土坑である。深さも60cmを測り、小堅穴と呼べるような規模を有する。覆土の観察から、埋め戻されたものである可能性が考えられる。出土した器形のわかる土器は2個体であるが、出土位置に違いがみられる。1点は坑底付近からの出土、もう1点は、覆土の上層付近の面から一括して検出されている。両者の間には、わずかながらも時間差が存在するものと思われる。④158号は、他の遺構とは位置的に離れ、調査区南西部で単独検出されたものである。いわゆる埋甕として捉えられる。

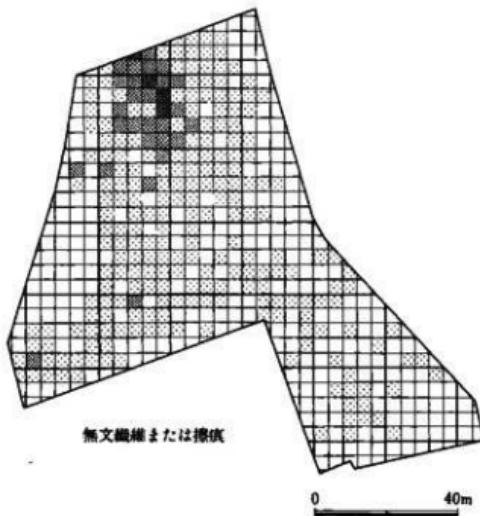
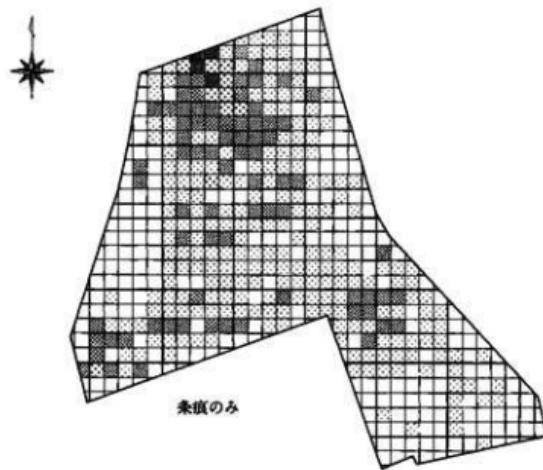
2. 岩名第14遺跡出土の条痕文系土器群(第139図～第143図)

岩名第14遺跡から出土した縄文土器は、全体で11,000点余りを数える。何度も述べたように、主体となるのは早期の条痕文系土器群で、本文中では第II群土器としたものである。これらの土器は、さらに①野島式土器の有文部。②鵜ヶ島台式土器の有文部。③茅山式土器の有文部。④条痕文のみ施されるもの。⑤胎土中に纖維を混入するが、器面は無文か擦痕のみ認められるもの。という5つに大別され、総数は全体の80%以上に及ぶ。

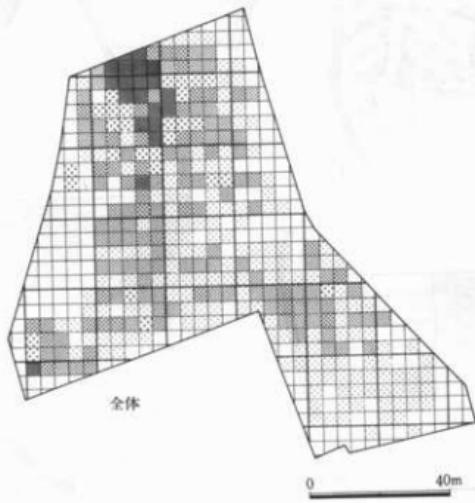
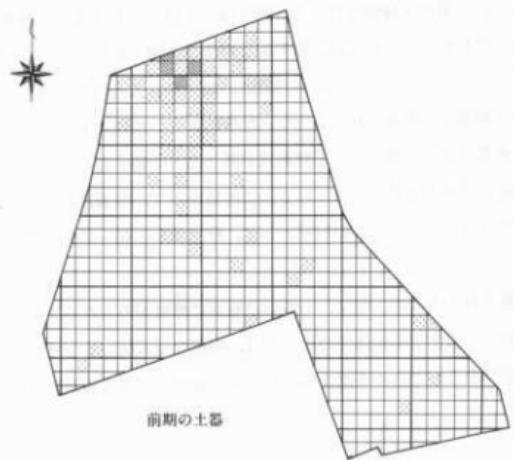
まず、当遺跡でみられた野島式及び鵜ヶ島台式の有文土器の特徴を、一部重複するがもう一度簡単にまとめておくことにする。①野島式は、器形のわかる個体の出土はなかったが、細縫起線により窓枠状の区画文を施したもののが主体である。焼成は全体に堅い仕上がりで、脆弱なものはほとんどない。胎土中の纖維量は、極めて少ないものと普通以上のものの二種を示したが、鵜ヶ島台式以降の条痕文土器と比べると相対的に少ないのが特徴となる。内面には、条痕



第139図 縄文土器分布図(1)



第140図 縄文土器分布図(2)

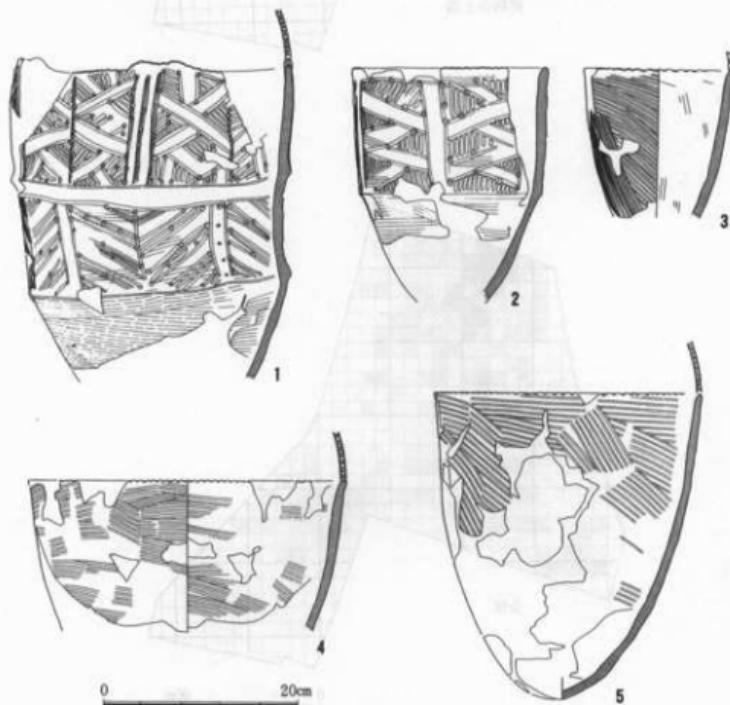


第141図 繩文土器分布図(3)

が施されるものが多い。②鶴ヶ島台式は、112号土坑から器形のわかる個体が出土した。第142図1は、胸部に2段の段を有するが、胸部のくびれは緩やかなものである。上位から1段目付近の無文帯を挟んで、2带の文様帯を有する。同2は、1段の段と1带の文様帯を有し、底部は尖底になるものと思われる。これらは、器形的な特徴から鶴ヶ島台式の古い段階のものとして位置づけることができる。しかし、これが当遺跡の鶴ヶ島台式土器を象徴的に表すものではなく、区画線の中に刺突文が充填されるような、比較的新しい段階のものも存在する。

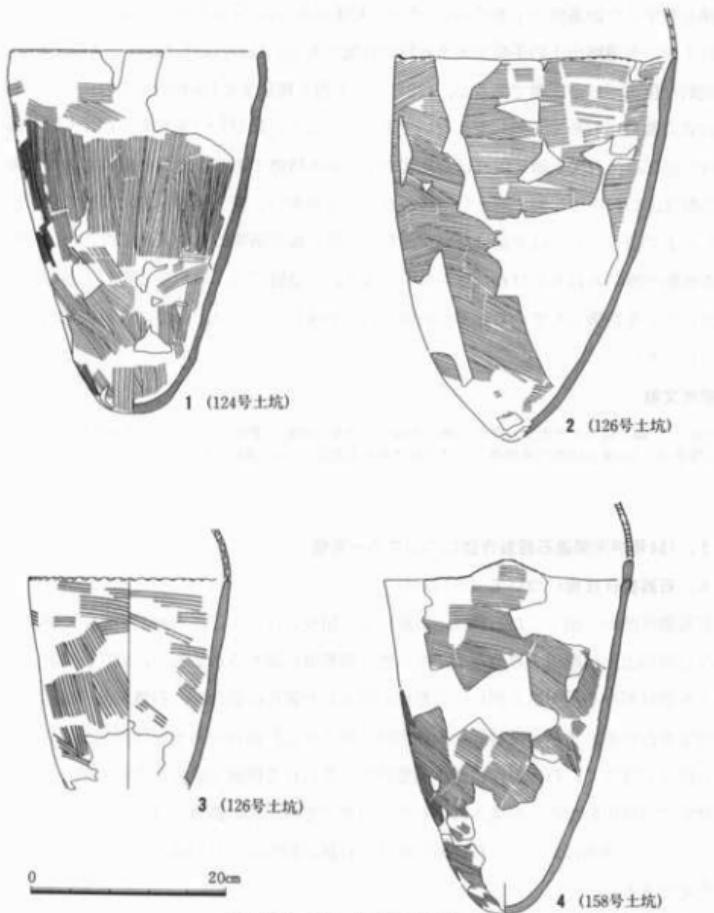
有文土器中に占める各型式の割合は、①野島式が35.5%、②鶴ヶ島台式が54.2%、③茅山式が10.3%で、鶴ヶ島台式が過半数を占めている。この値を以て、当遺跡における時期的な主体を導くことは適当ではないが、ひとつの目安として、野島式から鶴ヶ島台式期を中心とした時期が想定できる。

次に、条痕のみ施されるものや、無文、あるいは器面に擦痕がみられる土器についてみてみよう。これらは、破片での出土や単体での出土では、明確な型式認定を下せなかった。当遺跡出土の条痕文系土器群のうちで占める割合は、胎土中に纖維を含み器面が無文、あるいは擦痕



第142図 112号土坑出土の一括資料

の認められる土器群が、27.3%，条痕のみ施される土器群が64.7%である。本来、前者の持つ特徴は、先行する子母口式の特徴でもあるが、すべてを子母口式とするには数量比の上からも無理があり、野島式や鶴ヶ島台式以降にも存在するものと考えておきたい。いずれにしても、有文土器との共伴例を蓄積し、緻密な観察とともに分析されるのが今後の課題である。条痕のみ施される土器群についても同様のことがいえる。当遺跡では、112号土坑から、古い段階の鶴ヶ島台式に伴って、器形のわかる3個体の出土がある。また、それぞれ条痕文のみ施されるものの単独的な出土ではあるが、やはり器形のわかるものとして、124号、126号、158号の各土坑から出土した土器を比較資料としてあげておく。112号から出土した第142図3と4、5では、



第143図 土坑出土条痕文土器

大きさの違いはあるものの、器形は口唇部付近がわずかに外反するという共通点を有する。底部の器形が窓えたのは5のみである。全体に丸味を帯びてはいるが、尖底の先端は比較的シャープである。124号出土の第143図1は、口縁部付近の器形はやや内寄し、底部は丸味を有している。条痕は、胴部以下が内外面とも縦位主体であるのに対し、口縁部付近はやはり内外面とも横位に施した後、指ナデにより調整され磨消している。文様帶は有さないものの、内寄気味の器形とともに口縁部を意識した作りである。126号出土土器は、第143図2及び3である。2は覆土の上層付近の面で一括して検出され、3は坑底付近から検出されている。3は全体にやや細身であるが、112号から出土した条痕施文の土器と類似する。158号出土の第143図4は波状口縁を有する全面条痕の土器である。底部に丸味がある点で、器形的に124号のものと類似する。

以上が、当遺跡出土の条痕文系土器群の特徴である。112号以外は確実な共伴土器を持たず、時期的な位置づけが困難であるが、112号出土土器と類似する126号出土土器については、鶴ヶ島台式の範疇に収めても差し支えないであろう。なお、124号・158号から出土した土器の丸味を持つ底部は、有文土器に限れば野島式の中にある特徴である。全面条痕のものや、無文等の土器群は、いわゆる粗製土器として扱われることが多い。有文土器との時間的な併行関係を認識した上で扱うことには異論はないが、有文土器の編年研究に力を入れるならば、同時に共伴する粗製土器にも目を向けねばならないだろう。当遺跡では、いわゆる粗製土器の占める割合が高いことを特徴としている。その特徴の持つ意味については、今後の資料の増加を待って明らかにしたい。

参考文献

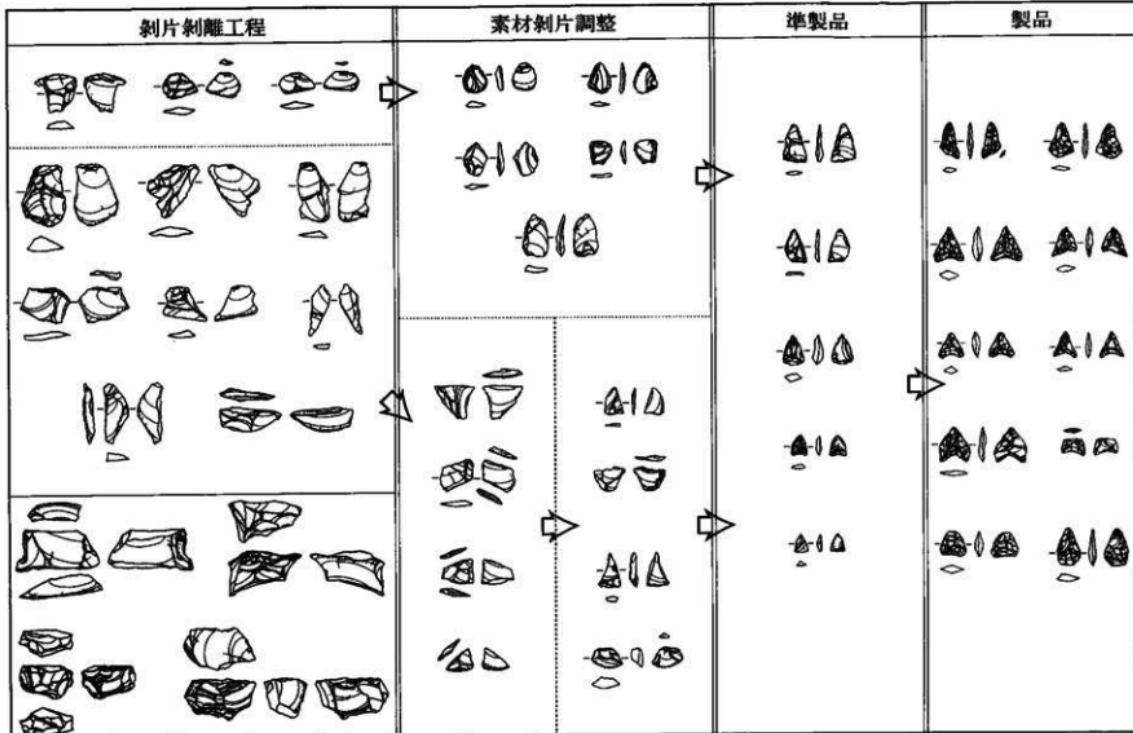
- 渡辺修一「鶴ヶ島台式土器から茅山下層式土器へ」「千葉市地蔵山遺跡(2)」(財)千葉県文化財センター 1993
西川博孝他「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IV-No.7遺跡-」(財)千葉県文化財センター 1984

3. 154号炉穴間連石器製作跡についての一考察

a. 石器製作技術について(第144図)

石器製作跡から出土した石器は、石錐がその組成のほとんどを占めている。石錐以外の定型的な石器の出土は削器1点のみで、その他は調整痕の認められる剝片、剝片、碎片である。このうち素材剝片を折断した剝片、調整痕の施された剝片の割合が、石錐を除く剝片石器の実に3.28%を占める。また、素材剝片の作出時に施された打面再生あるいは頭部調整により作出された碎片ではなく、石器製作に伴う調整碎片と思われる微細な碎片が占める割合も87.9%と、素材剝片の作出のために形成された石器集中地点でのそれの割合とは比べものにならないほど高い。上記の理由によりこの石器製作跡は、石錐の製作により形成されたものであることがほぼ断定できる。

調整痕の施される剝片は事実記載中でも述べたが、調整の施される部位に統一性がみられ、



第144圖 石器製作過程模式圖

しかも調整を施す過程にも規則性がある。これは折断された剝片にも同様のことがいえ、石器製作の過程が明確につかめる。ここで石器製作跡での石器製作の過程をみ直し、岩名第14遺跡での石器製作技術について考えてみたいと思う。

第144図は、岩名第14遺跡の石器製作跡での石器製作過程を、出土した調整痕の認められる剝片、剝片をもとに模式的に表したものである。本文中で未製品として紹介したものは模式的に表すと、素材剝片に調整を加え、製品の形状に近づけようとしたものとして扱うのが無難である。もちろん未製品としての扱いも考えられるが、この石器製作跡では形状は石器のそれであるが、製品としての石器の調整と比較すると調整が全周にのみ加えられ、面的な調整ではないものが受けられる。このためこれらを準製品として扱い、本文中で未製品としたものは素材剝片に調整を加えたものとして両者を区別することとした。

岩名第14遺跡の石器製作跡での製品加工工程は、大きく4つの段階にわけることができる。まず石器の素材剝片を生むる剝片剝離工程があり、模式図で示すと左の区画に相当する。素材剝片には2系統がみられ、素材剝片の形状が小型なものと大型のものとに分けられる。これは製品としての石器の大きさから判断したものである。この大きさの違いがそのまま石器製作工程の系統にわけられ、後の素材剝片調整の過程へと移行する。小型の素材剝片は両側縁あるいは剝片末端部に調整を施し、石器の最終的な形状に近づけていくが、大型の素材剝片は調整を行う全段階に折断により素材剝片の形状を整え、さらに調整を施し石器の形状に近づけていく。石器製作跡の中では素材剝片を折断せずに調整を施すものよりも、折断した後に調整を施すものが多く、明確に過程が理解できるものについては図示したものがすべてであるが、この他にも折断した後に廃棄されたものを含めると、1:3程の割合で折断により形状が整えられる素材剝片が多いことがわかる。

準製品とした過程では、先述したとおり調整は周縁にのみ加えられ、形状が石器とほとんど変わらないものが該当する。ここで剝片剝離工程から2系統に分かれていた製品整形過程がひとつとなる。このままでも製品としての使用が可能ではあるが、狭義での製品としての石器とは形態的に異なり、さらに面的な調整を加えた後に定型的な石器となるものである。

b. 石器に使用される石材について

岩名第14遺跡の石器製作跡で使用される石材はチャートでほぼ占められ、特に石器に関してはチャート以外の石材は使用されない。

チャートは、下総台地に所在する縄文時代早期から前期にかけての遺跡で、一部の地域でみられる直径5cm内外の扁平の川原石を使用しているのではなく、母岩としては大型のチャート礫、あるいはチャート原産地の驚頭から搬入したものを使用している可能性が強い。これは石器製作跡から出土している石器のなかには、原石面を有しているものが全くみられないこと、原石面の代わりに黄土色の節理面が残る石器が含まれることから推測される。

岩名第14遺跡で使用されるチャートの原産地を想定した場合、縄文時代早期の水系が石材入手経路に大きくかかわると思われる。縄文海進直前の地形及び水系は、岩名第14遺跡の西側には荒川水系、東側には鬼怒川水系が位置し、岩名第14遺跡はこの2つの水系に挟まれた台地上に位置している。また、荒川水系には、水源を谷川岳とする現利根川、及び足尾を水源とし、栃木県南部桐生、葛生方面の小河川が流入する渡良瀬川水系を含んでいる。チャートを産出する地質として、荒川上流の秩父地方、栃木県南部の桐生、葛生、そして北茨城の那珂川、久慈川水系の山地があげられる。このうち北茨城方面からの石材の入手経路は考え難く、おのずと荒川、渡良瀬川水系からの石材入手経路を考えざるを得ない。これは岩名第14遺跡で出土している鶴ヶ島台式土器の、南関東地方での分布も充分念頭におかなければならぬが、現時点では荒川、渡良瀬川水系が有力であり、しかも遺跡の所在する西側に荒川水系、利根川水系が作り出した広大な沖積地という大きな障壁を有するため、渡良瀬川水系の入手経路が両者の中でも可能性が高いと考えられる。

第3節 古墳時代

1. 岩名第14遺跡出土の鬼高式土器（第145図）

古墳時代に属する遺構は、竪穴住居跡が3軒検出された。出土した遺物の内容から、いずれも鬼高期に属するものと判断される。501号、503号の両住居跡については、調査区の制約上から完掘されたものではなかったが、比較的まとまった量の遺物が出土している。ここでは、資料の不完全性を考慮しつつ、予察的な若干の私見を述べておきたい。

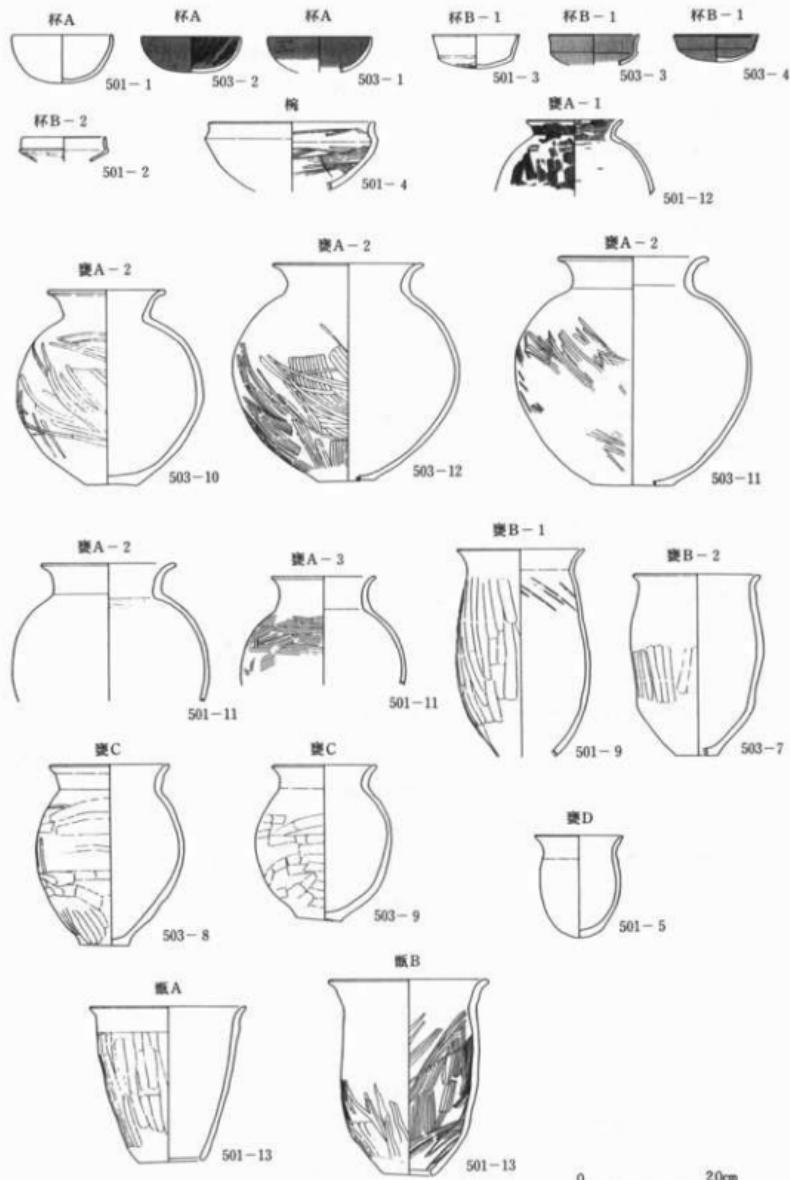
まず、出土した遺物の内容を概観し、501、503号の両住居跡を比較しておく。両跡とも出土遺物はすべて土器類である。内容的には杯が少なく、壺類が多いのが特徴的である。ここでは、それらのうちから器形のわかるものについて概観する。

杯は、半球形の器形を呈し、口縁部がそのまま開くもの（A類）と体部に稜を持つもの（B類）の2種類が存在する。B類はさらに、口縁部が外反して開くもの（B-1）と直立するものの（B-2）に分けられる。A類及びB-1類は、両住居跡にみられるが、両類ともに503号住居のもののみ赤彩が施されている。また、B類の口縁部の立ち上がりは、比較的高いのが特徴的である。

椀は大型のもの1種類が存在するのみである。体部には弱い稜を有している。

高杯は、503号から口縁部が大きく外反する器形のものが出土したが、杯部のみの出土であるので、分類図には掲載していない。杯部の内外面に、赤彩が施されている。

壺は、球胴形を呈するもの（A類）と胴のやや長いもの（B類）、その中间のもの（C類）、小型で丸底を呈するもの（D類）がある。A類は口縁部の形態が、くの字状を呈するもの（A-1）、コの字状を呈するもの（A-2）、緩く外反するもの（A-3）とに分けられる。A-1



第145図 当遺跡出土の鬼高式土器

類は、501号からの出土で、器面にはハケ目による調整が施されている。A-2類は、最も多く出土している。503号出土10~12は、いずれも胴下半部を主体にミガキによる調整を施し、11、12の胎土中には長石・石英・雲母粒等の混入が顕著である。これらは、いわゆる常縫型甕の特徴を持つものであるが、器形的に胴の張り出しが強く、当遺跡から約10km下流に位置する流山市上貝塚遺跡・上貝塚第II遺跡（後者は未報告）でみられる常縫型甕よりも、いっそう球形に近い。A-3類は、501号から出土した1点のみである。胴部には、ハケによる調整の痕跡が残る。B類は、やはり口縁部の形態が、くの字状を呈するもの（B-1）と、短頸のもの（B-2）とに分けられる。B-1類は501号から、B-2類は503号から、それぞれ1点ずつが出土している。501号出土9は、長胴であり、胎土中には多量の小砾粒が含まれる。小砾中に、長石・石英の混入は少なく、常縫型甕の胎土とは区別できるものである。C類は、503号からのみみられた。口縁部の形態は、コの字状に近いものである。D類は、501号から出土した1点である。口唇部が尖り気味となり、口縁部は逆ハの字形に開く。

瓶は、両住居跡から1点ずつが出土した。A類は、501号出土13である。器形は、胴部が直線的に開いて立ち上がり、バケツ状を呈する。B類は、503号出土13である。口縁部が緩く開き、底部はやすぼまる。胴部内面と外面下半部に、ミガキによる調整が施される。

以上のことから両住居間の土器の違いについて、次のことがいえる。杯では、503号にのみ赤彩されたものがみられる。甕・瓶では、やはり503号のものにのみミガキによる調整が施されている。形態的には、両者にほとんど差異は認められず、ほぼ同時期に存在したものとして捉えられそうである。

今回の調査からは須恵器の検出ではなく、相対的な年代を想定する決め手に欠いている。現時点に参考にできるものとして、野田市三ツ堀六畝遺跡7号住居址と、前出の流山市上貝塚遺跡001号住居跡出土の土器があげられる。三ツ堀六畝遺跡は、現利根川に注ぐ三ツ堀支谷に面して位置し、当地域のカマド出現期の状況を表すものと注目される。7号住居からは、当遺跡と同様の形態を持つ甕が出土している。一方、上貝塚001号住居にはTK10併行の須恵器が伴っており、6世紀中葉段階に位置づけられるものである。当遺跡出土の鬼高式土器は、半球形を呈する杯Aの存在と、杯Bの口縁部の立ち上がりが高い点。甕Aの胴部の張り出しが強く、短胴である点等を考慮し、上貝塚001号住居よりも古く、6世紀前半期のものと理解しておきたい。

東葛地方の古墳時代遺跡の立地を概観した場合、前期では現利根川を臨む台地上や、江戸川本流に流れ込む小支流の台地上に多くの遺跡が存在することが知られている。江戸川本流に面する台地上に、多くの集落が営まれるようになるのは後期になってからである。岩名第14遺跡については、岩名遺跡群全体の中で考えることが必要ではあるが、立地的な面から次のような推測を書き加えておこうと思う。岩名第14遺跡の集落は、古墳時代後期の比較的早い段階に江戸川本流近くに台頭している。それだけ他との接触の機会が増えることにもなるだろう。仮に、

岩名遺跡群がこの後、古墳時代後期の集落群に発展していったとするなら、当遺跡（集落）の持つ性格としては、この地域の鬼高郡集落を最初に治めていた人物を含む集団であろうとの推測ができる。いずれにしても現時点では推測の域を脱せないし、岩名遺跡群と岩名第14遺跡の未調査部分について、今後の成果に期待するところが大きい。

参考文献

- 下津谷達夫・飯塚博和 「千葉県野田市三ツ塙六戸遺跡」 野田市遺跡調査会 1987
栗田則久 「古墳時代一小六谷台遺跡の検討」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告IV』 (財) 千葉県文化財センター 1988
郷塚英司 「上貝塙遺跡」「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書V」 (財) 千葉県文化財センター 1986
上野純司 「拡大する集落」「房總考古学ライブラリー6 古墳時代(2)」 (財) 千葉県文化財センター 1992

第4節 平安時代

1. 穫穴状造構出土の古代末期土器 (第146図)

平安時代の遺構は、1か所に検出されたのみである。実際には重複する2基の遺構からなるが、両者の関係は明らかでない。しかし、遺物の出土状況やその内容からみる限り、当遺構が特殊な性格を有するものであることは、十分に考えられる。本文中では、出土遺物をそれぞれの遺構出土に分けて取扱っているが、時期的に違ひではなく、一括資料として捉えられよう。

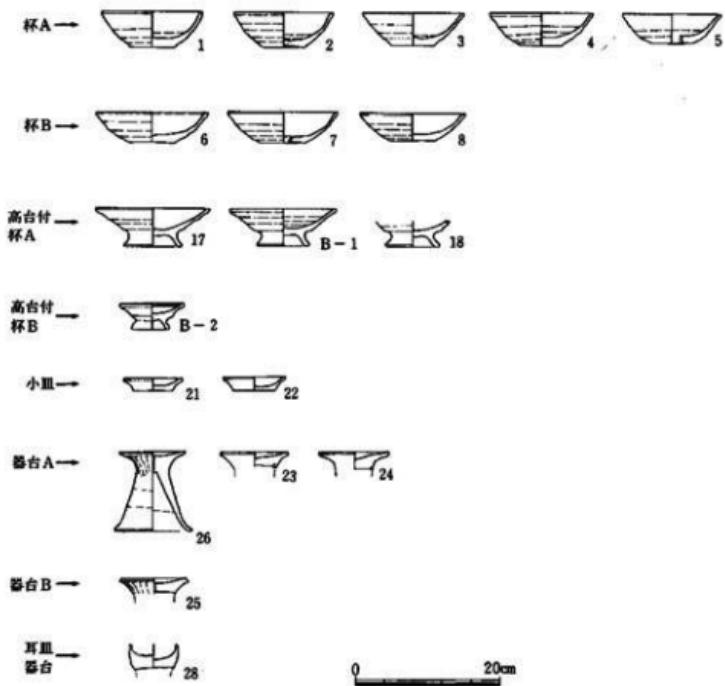
器種には、杯が浅いもの（A類）と深いもの（B類）の2類型、高台付杯が口径15~16.0cmのもの（A類）と、口径8.9cmを測る小型のもの（B類）の2類型、器台が口端部形態の素口縁のもの（A類）と、ヘラによる調整が加えられたもの（B類）の2類型、高杯の他、小皿、耳皿等が出土している。

杯Aは、口径13.7~14.2cm、底径5.5~6.0cmと、比較的均一な法量を示している。底部は、糸切り後未調整のものがほとんどで、ナデによる調整が加わるのは1だけである。杯Bは、口径14.5~15.4cm、底径6.0~6.4cmを測り、口径・底径においては杯Aより法量が大きく、器高は若干低くなっている。また、すべて底部は糸切り後未調整である。容量的には杯A、Bともに差異はないが、5と8は他よりも小振りとなる。

高台付杯Aは、杯部の器形がわかるもの2点が出土している。口径は、17が15.6cm、B-1が14.8cmを測る。体部は直線的に開き、高台部もハの字状に開いた器形を呈する。高台付杯Bは、1点のみの出土である。B-2は、口径8.9cmを測る。体部外面下位に稜を有し、口唇部内面に沈線状の凹みが認められる。単純に、高台付杯Aを小さくしただけではなさうである。

小皿は、口径8.0cm前後を測る。2点を出土したが、器形的にはほぼ同様である。底部は、糸切り後未調整である。

器台Aは、脚部がハの字状に開き長脚となる。器受部は、穿孔されるものと、そうでないものがある。器台Bは、器受部のみ1点が検出されている。胎土中には、少量ではあるが長石・石英粒が含まれ、他のものとは様相を異にする。A・B類とも、器受部の形態は偏平なのが特



第146図 古代末期の土器

微である。また、器台と思われる耳皿の器受部は、1点が出土している。

以上のように、当遺構から出土した土師器は、杯、高台付杯、小皿、器台があり、すべて供膳具であるが、椀の出土はなかった。煮沸具については、大甕の胸部破片が1片出土したが、どのような使われ方をしたかは不明で、いずれにしても当該期の一住居にみられるセットを満たしているとはいえない。また、器台として扱った土器についての類例もなく、当遺構が特殊な性格を持つものであろうという推測も、これらに起因するところが大きい。出土土器の年代的な位置づけについては、現時点では比定できる資料がみあたらないため、いわゆる古代末期の土器として捉え、10世紀以降の年代観を考えておきたい。

参考文献

- 寺内博之・長内美知枝・井口 崇 「下総・上総国における古代末期の土器様相」『神奈川考古』第21号 神奈川考古同人会 1986
 笹生 衛 「房総における中世的土器様相の成立過程－房総における古代末期から中世初期の土器様相－」『史館』第21号 史館同人 1989

報告書抄録

ふりがな	のだし いわな だいじゅうよん いせき								
書名	野田市岩名第14遺跡								
副書名	住宅地開発公共施設等整備促進事業に伴う埋蔵文化財調査報告書								
巻次									
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告								
シリーズ番号	第249集								
編著者名	岡田光広・落合章雄								
編集機関	財団法人千葉県文化財センター								
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811								
発行年月日	西暦1994年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	上りがな 所 在 地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
		市町村	道路番号	---	---				
岩名第14	千葉県野田市岩名	12208	001	35度 57分 06秒	139度 50分 36秒	19920701～ 19921130	5,000	住宅地開発 公共施設等整備促 進事業(排水路 ・排水機場建設) に伴う事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項		
岩名第14	集落跡	先土器時代	石器集中地点 9地点	ナイフ形石器、角盤状石器、帶			先土器時代の石器群は、比		
		縄文時代	早期	竪穴住居跡 8軒	条板文系土器、浮島式土器、石			較的連続する6の文化層から	
			～前期	伊穴 22基	盤、小面打製石斧、磨石、敲石、			検出されている。これらは、	
				土坑 39基	石皿、貝			この地域における先土器時代	
		古墳時代	後期	竪穴住居跡 3基	土師器			研究の基準資料となるもので	
		平安時代		竪穴状造築 1基	土師器			ある。	
中世		竪穴状造築 4基	陶器						
		土坑 19基							
		溝状造築 11条							
	獨立柱建物跡 1棟								

写 真 図 版



航空写真（平成 5 年 1 月撮影）



1. 遺跡遠景（東から）



2. 調査前近景（西から）



1. 第6ブロック石器出土
状況（南から）



2. C 2-32区土層断面
(南から)



3. C 2-34区土層断面
(南から)



1. 第5・第8ブロック北
壁土層断面（南西から）



2. 第5ブロック石器出土
状況（南西から）



3. 第1ブロック石器出土
状況（東から）



1. 第2ブロック南壁土層
断面（北東から）



2. 第2ブロック石器出土
状況（東から）



3. 第9ブロック石器出土
状況（南東から）

1. 第3ブロック石器出土
状況（南から）



2. 標準土層（C 4-31区
・南から）



3. 先土器調査風景（東から）





1. 001号住居跡全景
(南から)



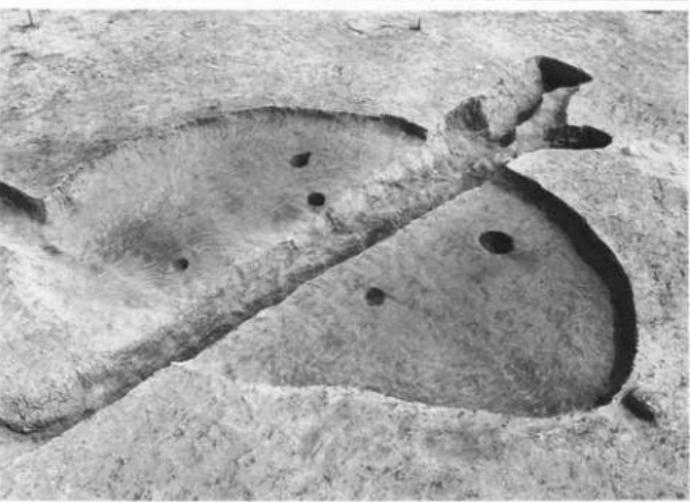
2. 002号住居跡調査風景
(南から)



3. 002号・003号住居跡近景
(東から)



1. 004号住居跡全景
(北から)



2. 006号住居跡全景
(南から)



3. C 2 - 34・44区付近
石器出土状況 (南から)

土坑検出状況(1)



101



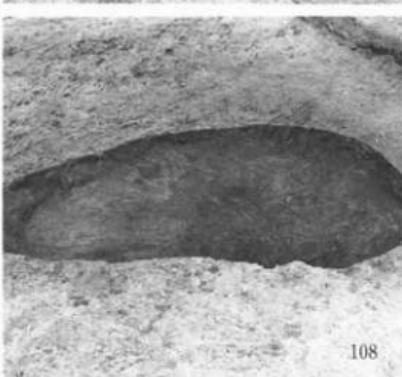
103



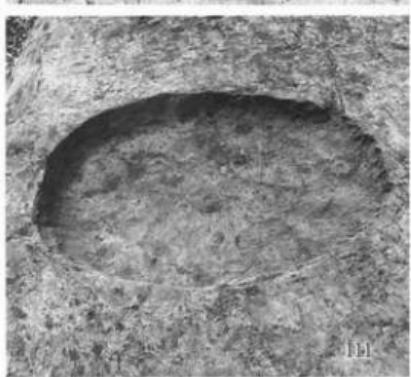
105



107



108



111

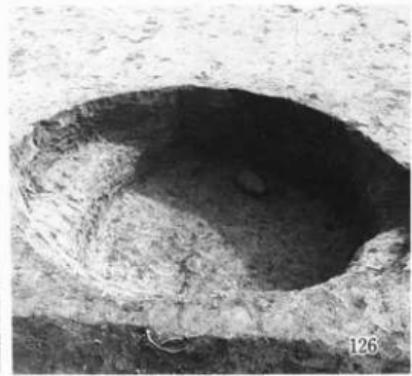
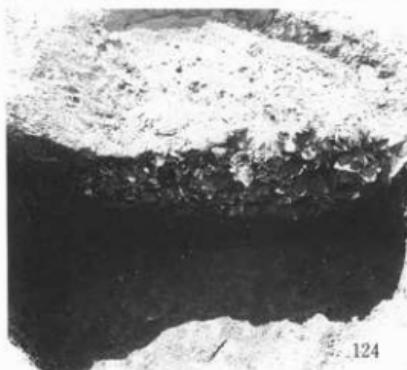
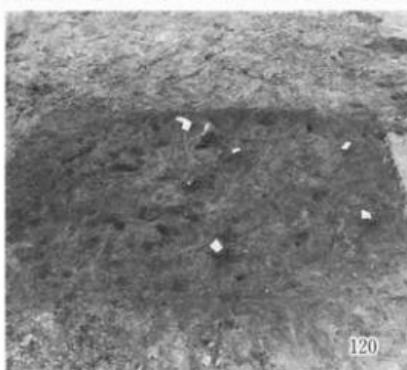
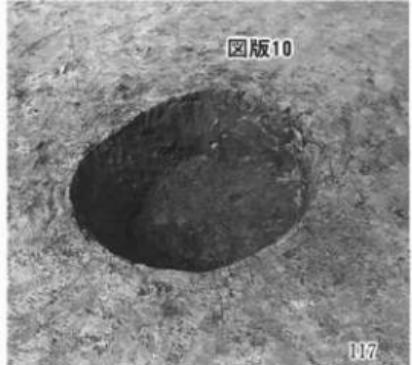


112



113

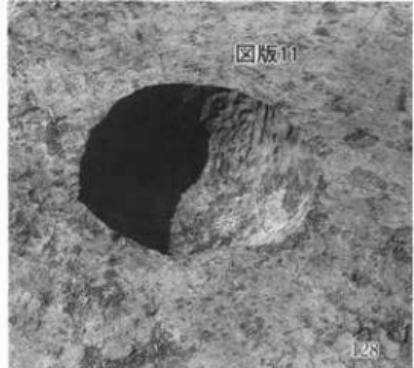
土坑検出状況(2)



土坑検出状況(3)



126



128



131



135



137



138



150



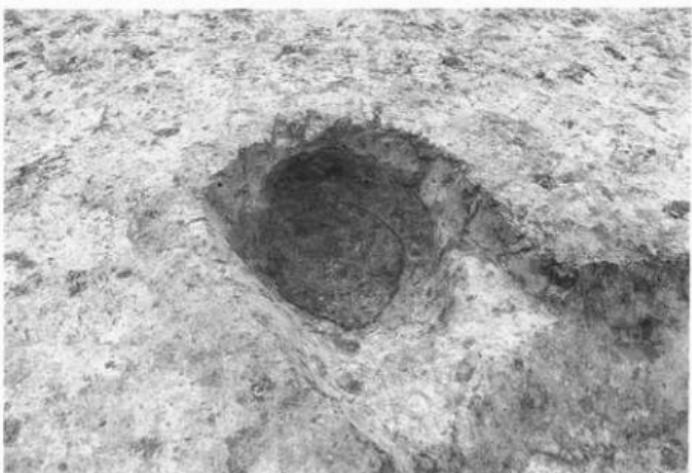
156



1. 116号炉穴遺物出土状況
(南から)



2. 119号炉穴(左)・118号
土坑(西から)



3. 119号炉穴全景(南から)



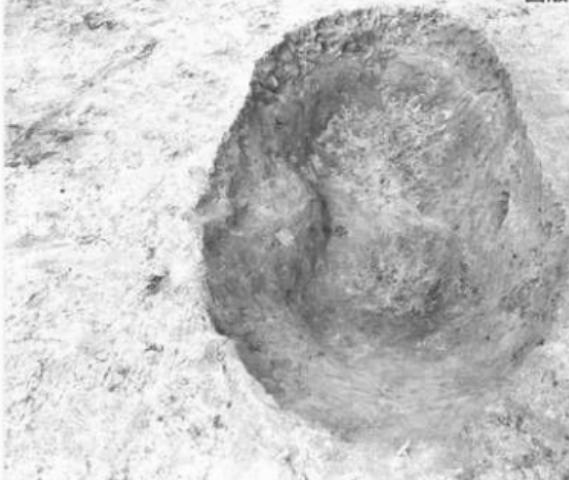
1. 130号炉穴貝層出土状況
(南から)



2. 同全景 (南西から)



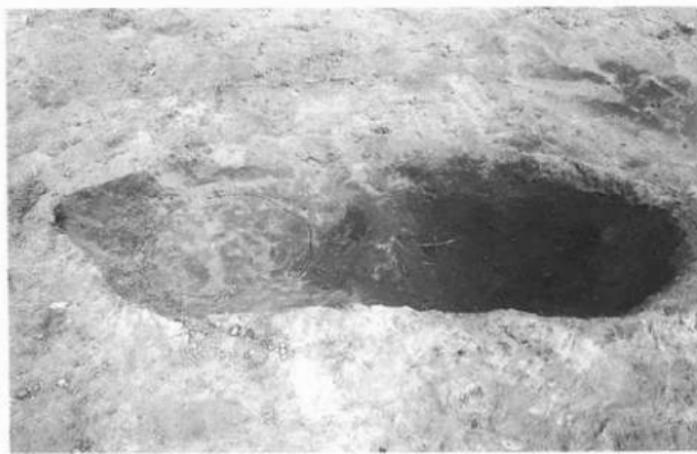
3. 154号炉穴全景 (西から)



1. 205号炉穴全景（南から）



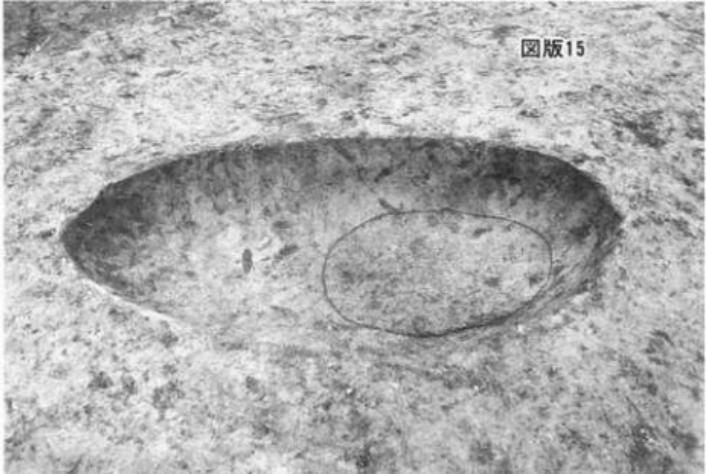
2. 206号炉穴全景（西から）



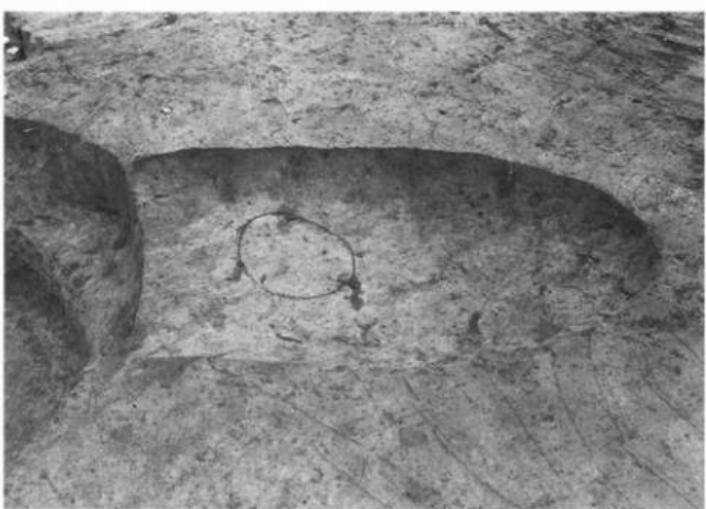
3. 207号炉穴全景（南から）

1. 209号炉穴全景

(北東から)

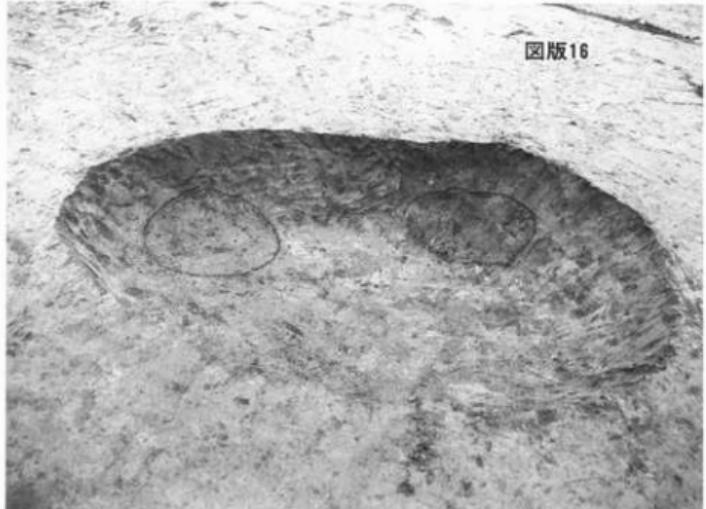


2. 210号炉穴全景 (南から)



3. 211号炉穴全景 (西から)

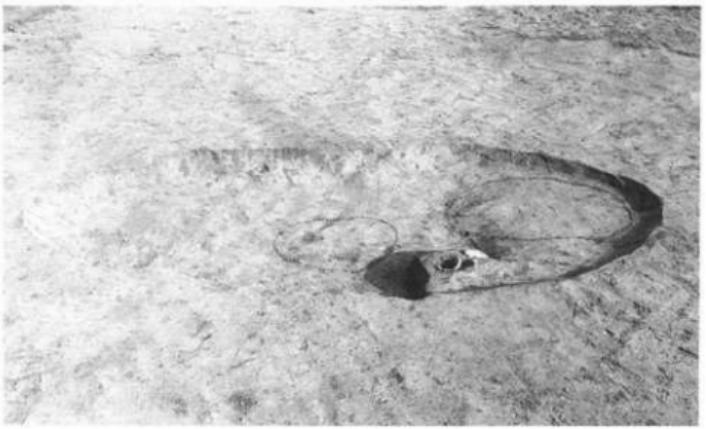




1. 212号炉穴全景（東から）



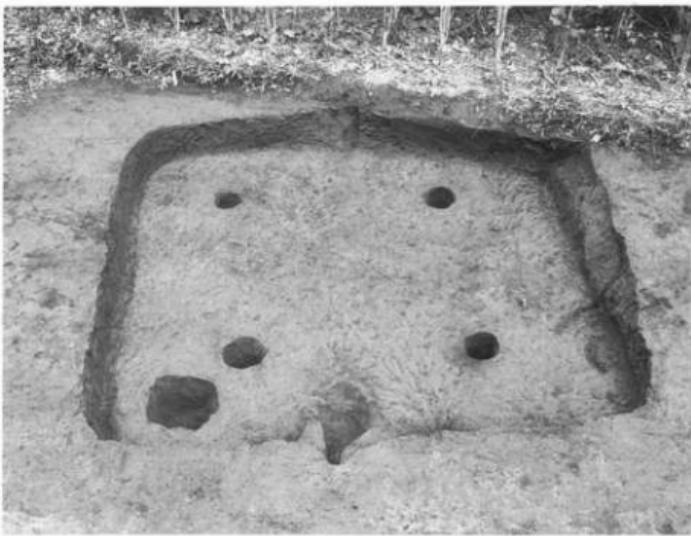
2. 213号炉穴全景（南から）



3. 214号炉穴全景（西から）



1. 501号住居跡カマド
(南から)



2. 501号住居跡全景
(北から)



3. 502号住居跡全景
(北から)

1. 503号住居跡遺物出土
状況（南から）



2. 同貯蔵穴内遺物出土状況
(北から)

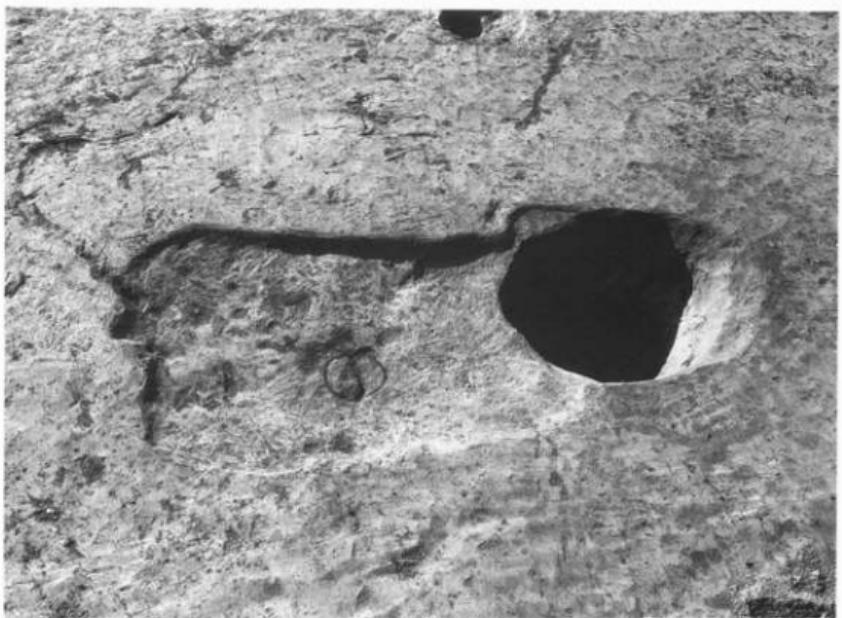


3. 503号住居跡全景
(北から)





1. 405A号竪穴状遺構遺物出土状況（南西から）



2. 405A・B号竪穴状遺構全景（東から）

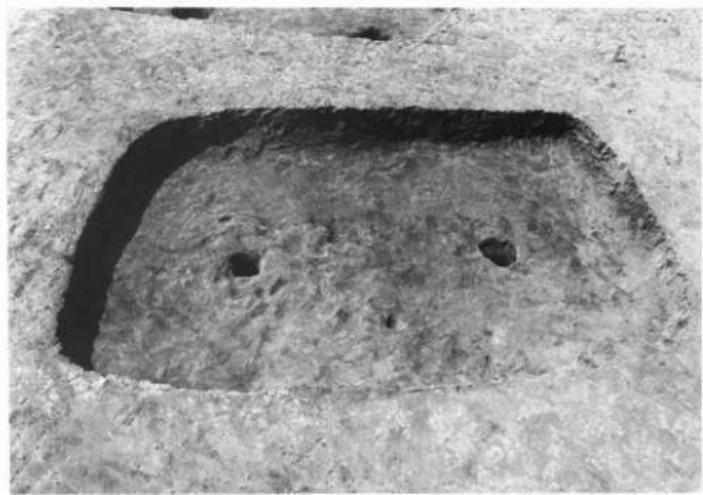
1. 401号竪穴状遺構全景
(南から)



2. 402号竪穴状遺構全景
(西から)



3. 403号竪穴状遺構全景
(東から)





1. 404号竪穴状遺構全景

(西から)



2. 406号土坑馬骨出土状況

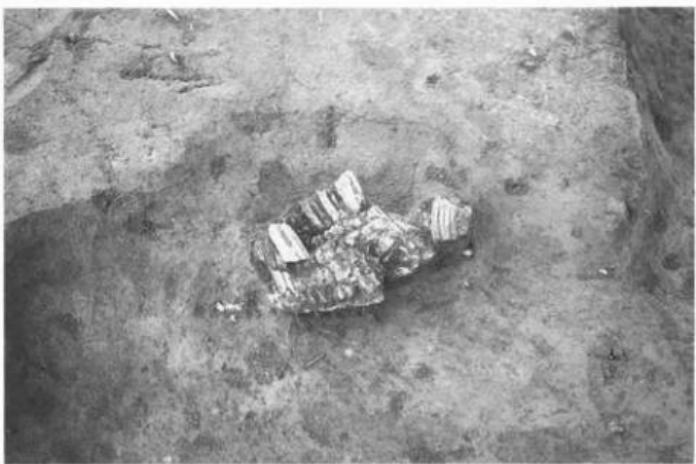
(東から)



3. 409号土坑全景 (東から)



1. 411号(左)・412号土坑
全景(東から)



2. 413号土坑馬具出土状況
(南から)



3. 413号土坑全景
(南西から)

1. 148号(左)・149号土坑
全景(西から)



2. 311号溝遺物出土状況
(東から)



3. 掘立柱建物跡と310号溝
(南から)





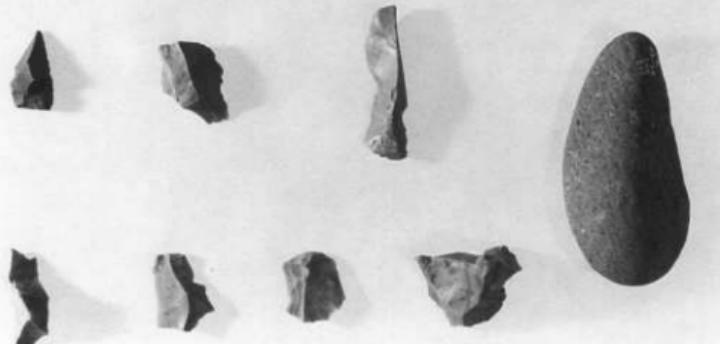
1. 第1ブロック出土石器



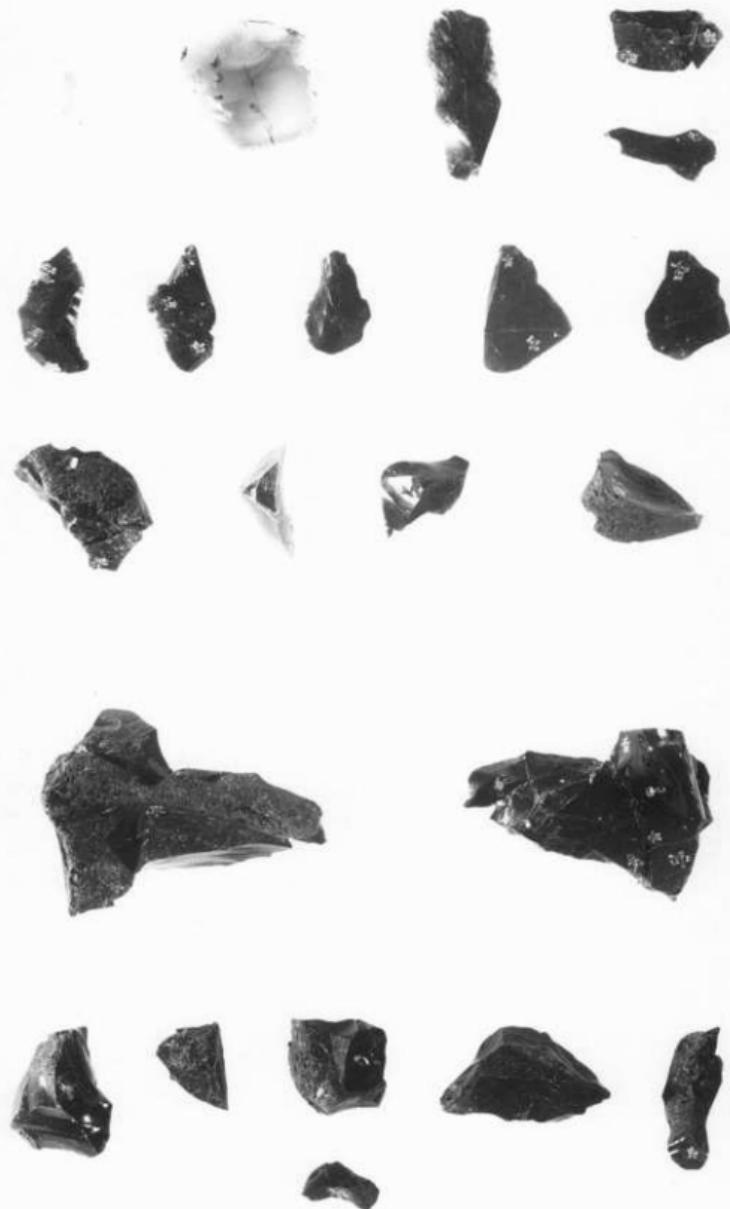
2. 第2ブロック出土石器



3. 第3ブロック出土石器



4. 第4ブロック出土石器



第5ブロック出土石器



第6ブロック出土石器



1. 第7ブロック出土石器



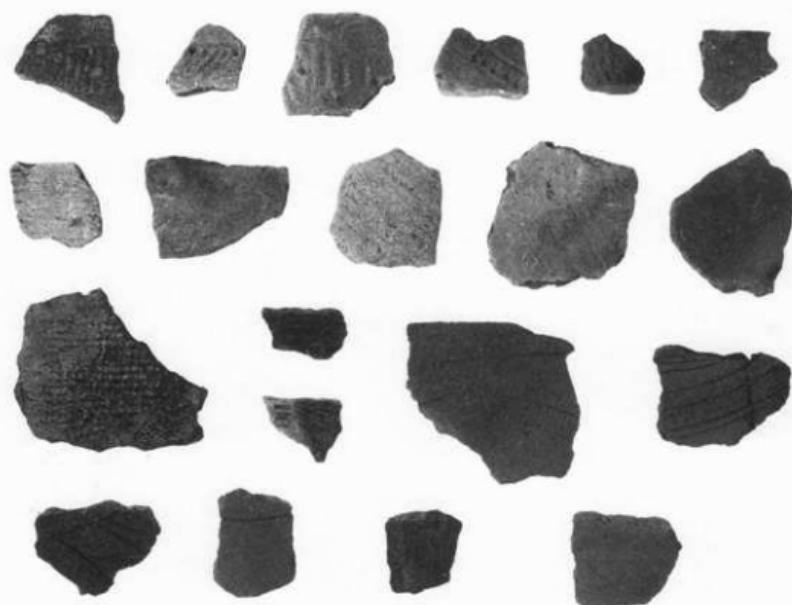
2. 第8ブロック出土石器



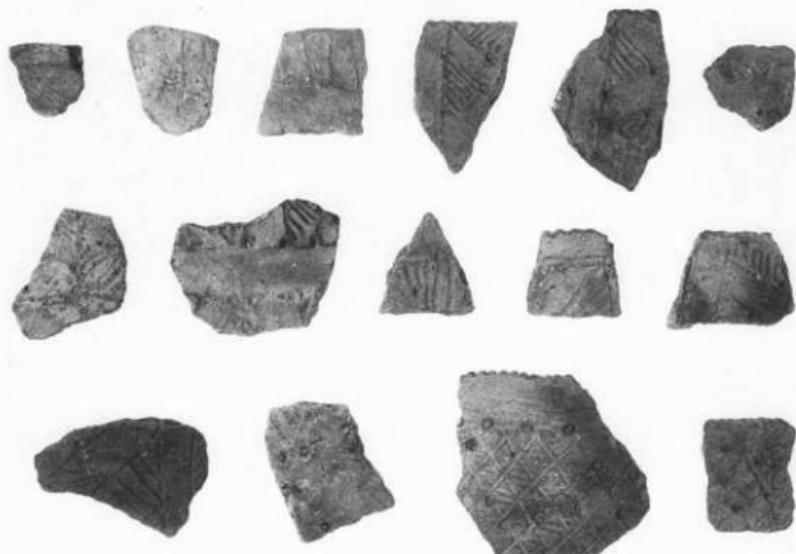
3. 第9ブロック出土石器



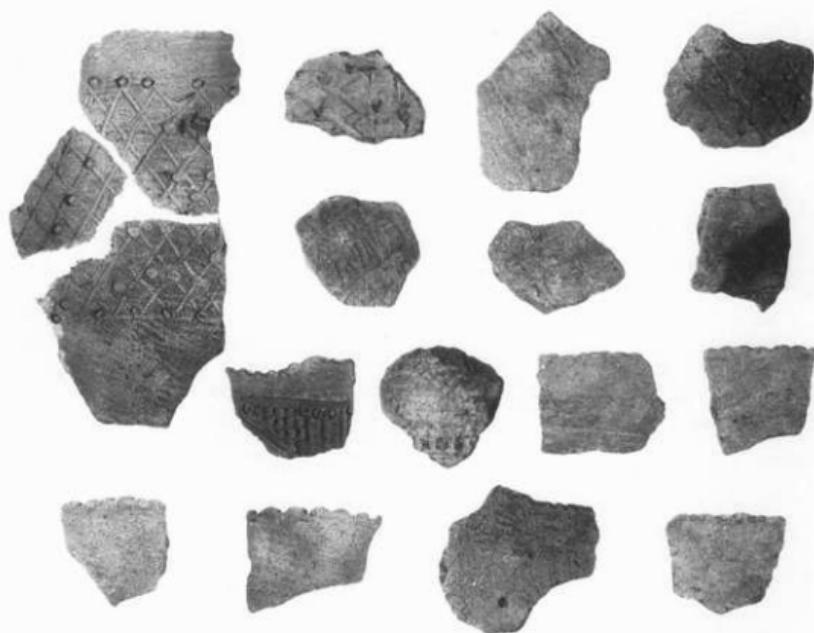
4. ブロック外出土石器



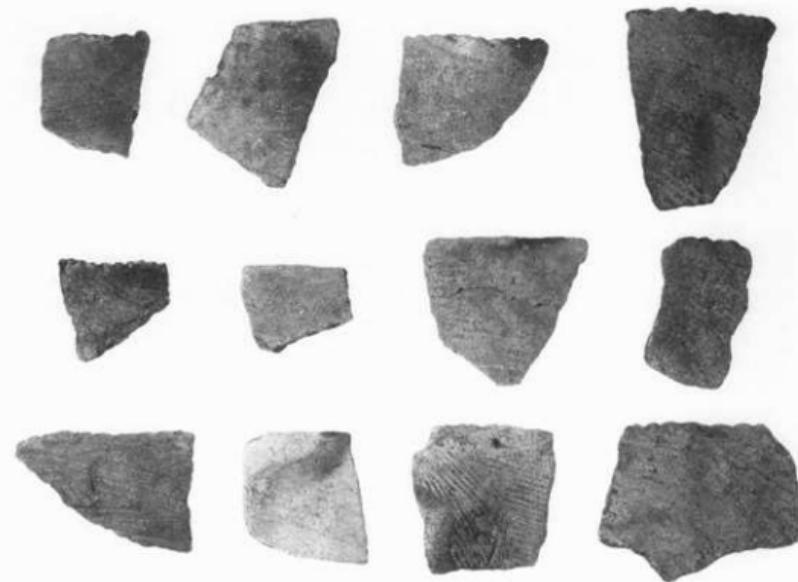
1. 001号住居跡出土土器



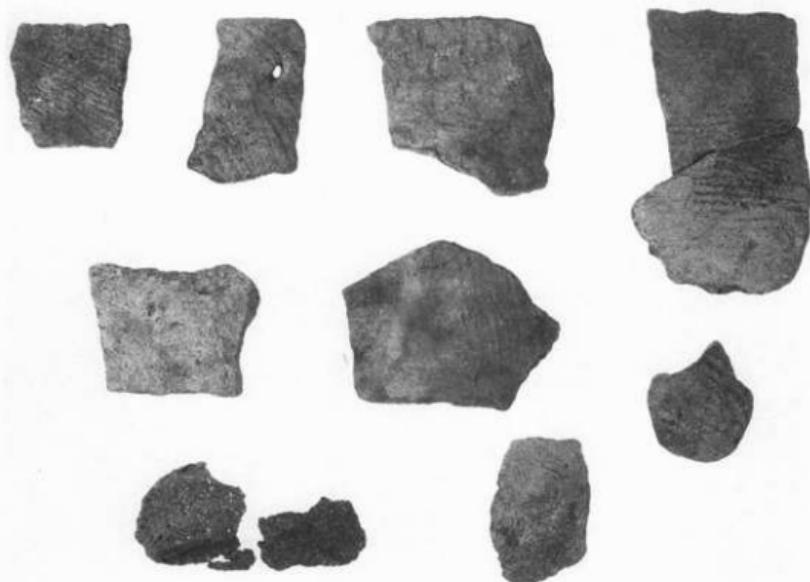
2. 002A号住居跡出土土器 (1) 1~15



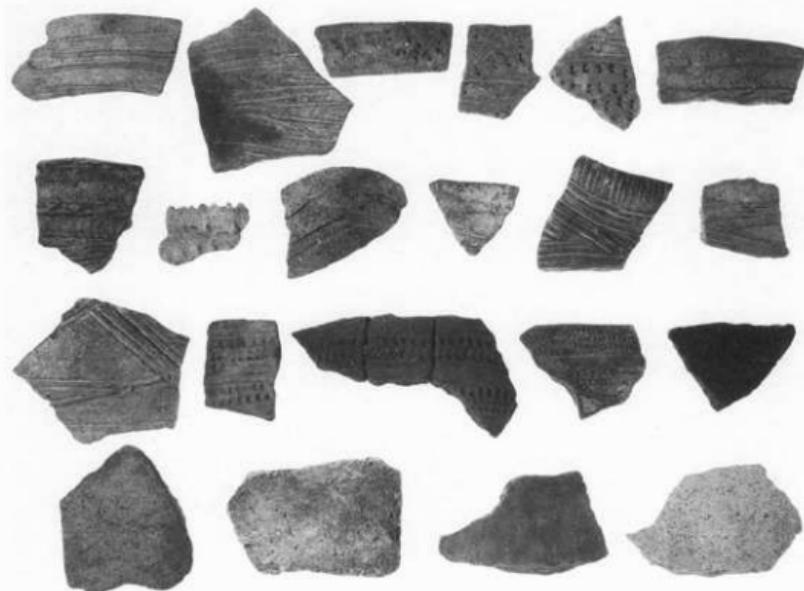
1. 002A号住居跡出土土器(2) 16~30



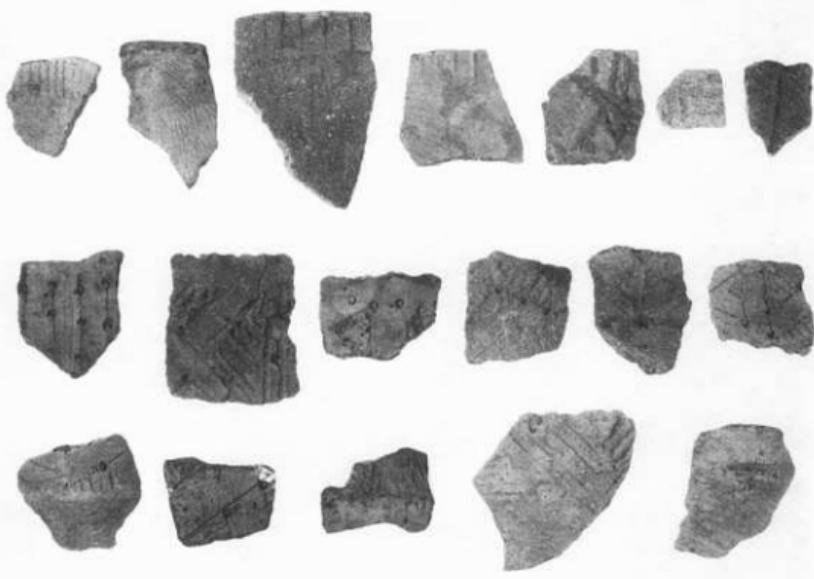
2. 002A号住居跡出土土器(3) 31~42



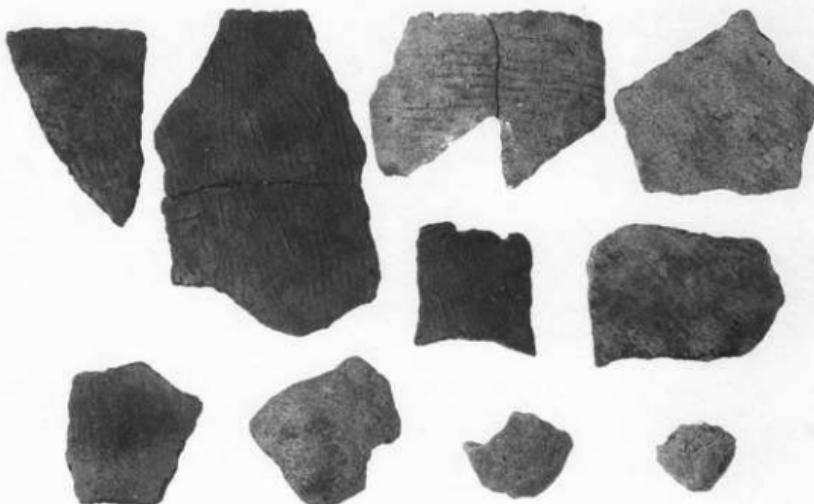
1. 002A号住居跡出土土器 (4) 43~51



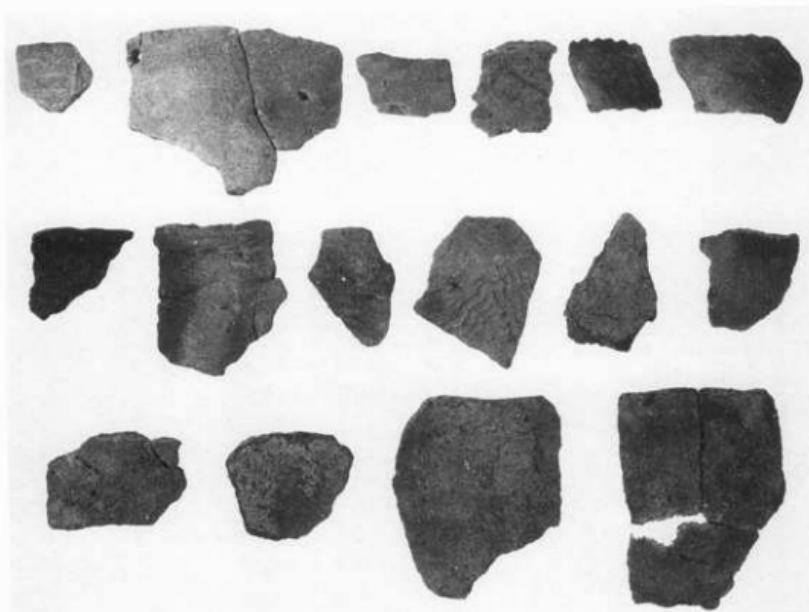
2. 002B号住居跡出土土器



1. 002C号住居跡出土土器 (1) 1~18



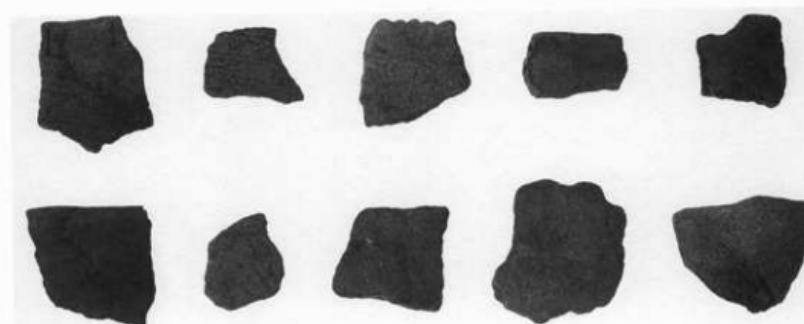
2. 002C号住居跡出土土器 (2) 19~28



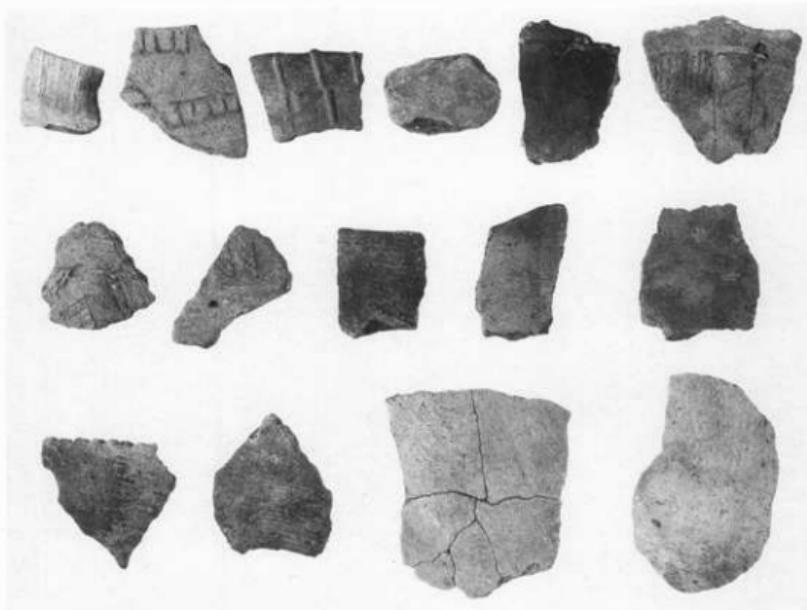
1. 003号住居跡出土土器 (1) 1~16



2. 003号住居跡出土土器 (2) 17~22



3. 006号住居跡出土土器



1. 004号住居跡出土土器



2. 112号土坑出土土器 (1) 23



3. 112号土坑出土土器 (2) 24



1. 112号土坑出土土器 (3) 28



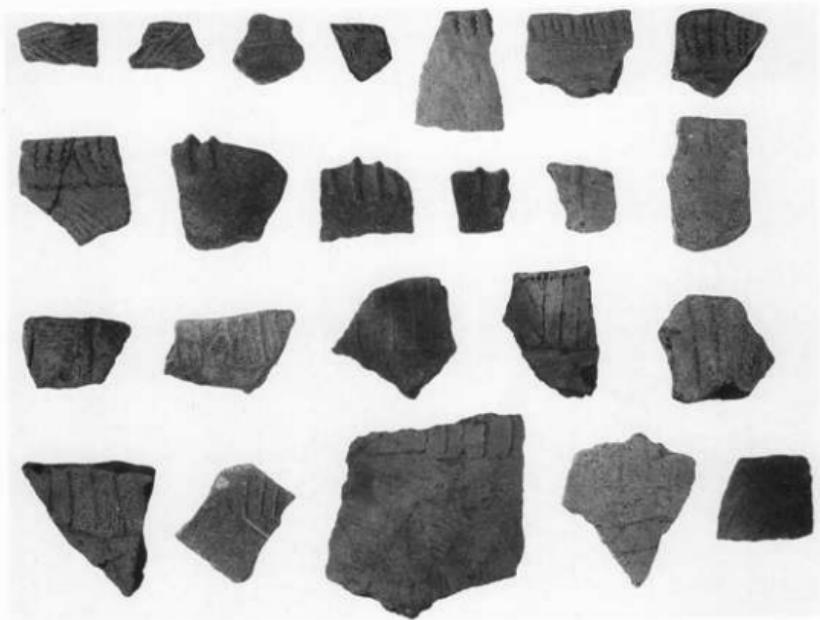
2. 124号土坑出土土器 (1) 56



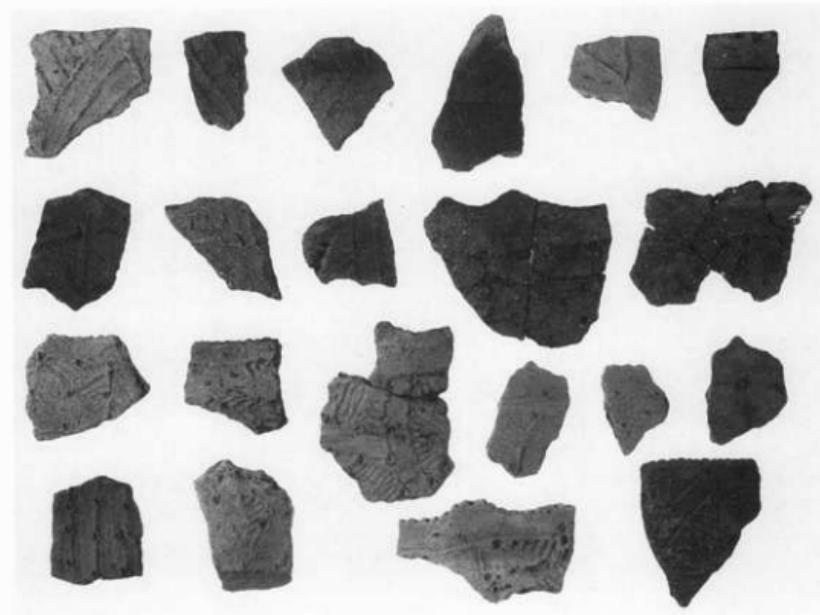
3. 124号土坑出土土器 (2) 69



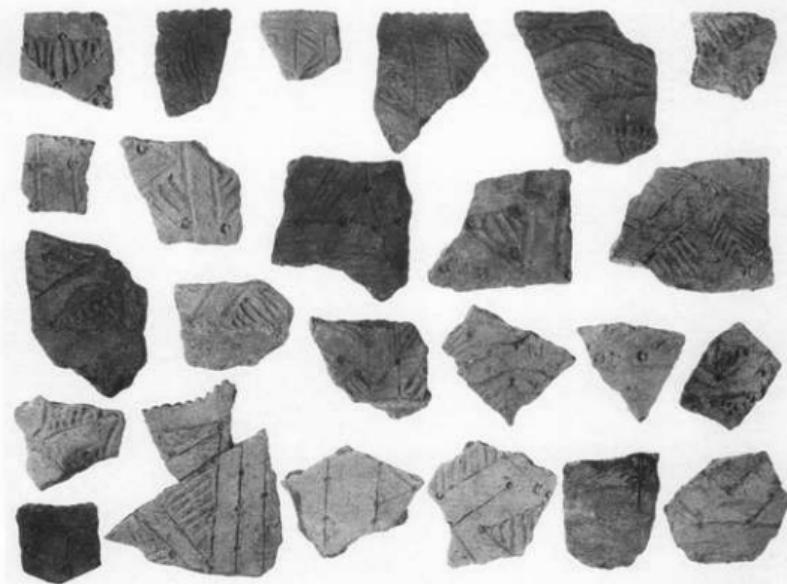
4. 116号炉穴出土土器 1



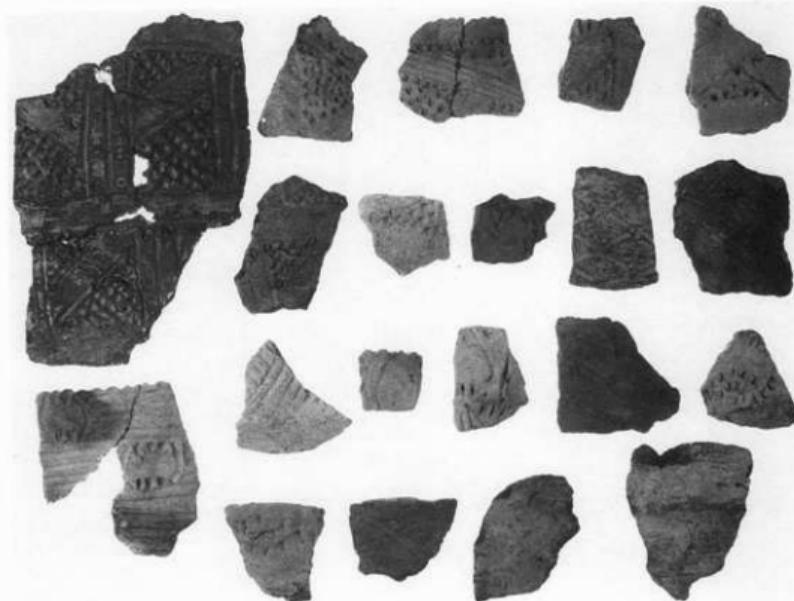
1. グリッド出土土器（1）1～23



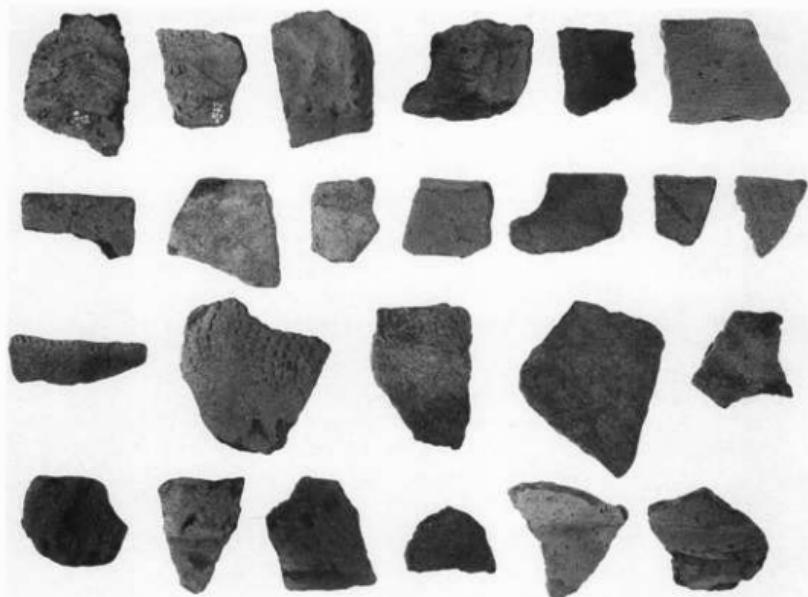
2. グリッド出土土器（2）24～44



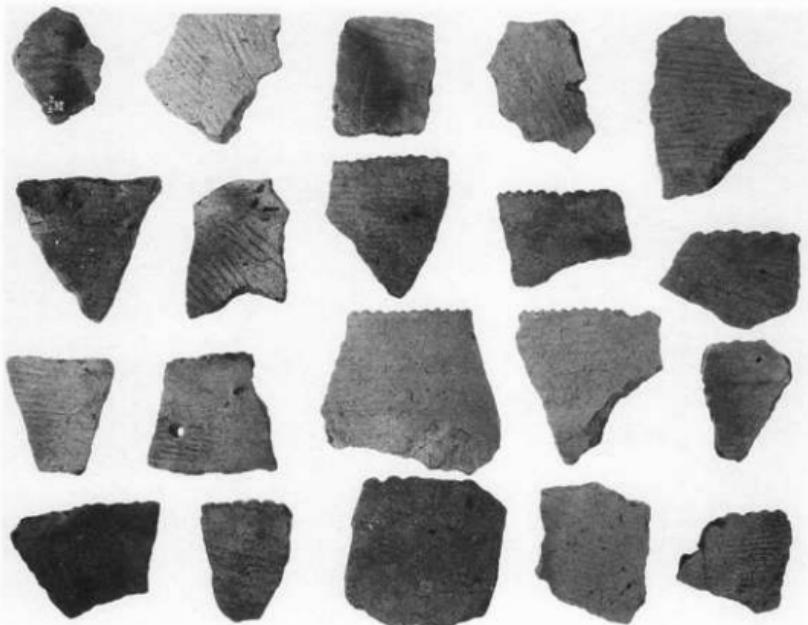
1. グリッド出土土器 (3) 45~68



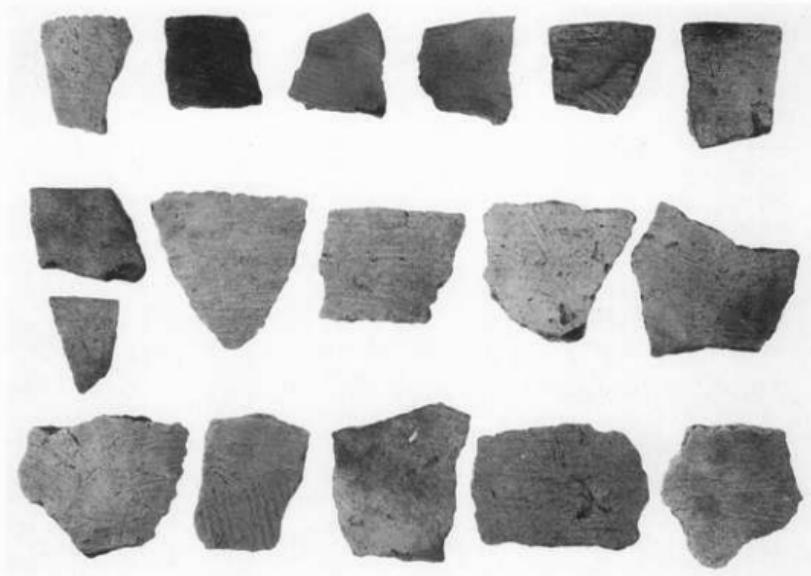
2. グリッド出土土器 (4) 69~88



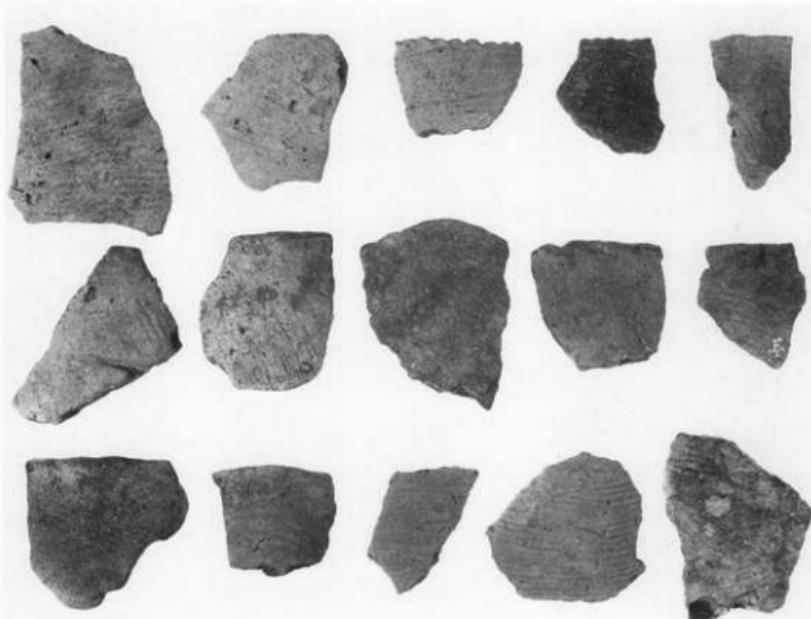
1. グリッド出土土器 (5) 89~112



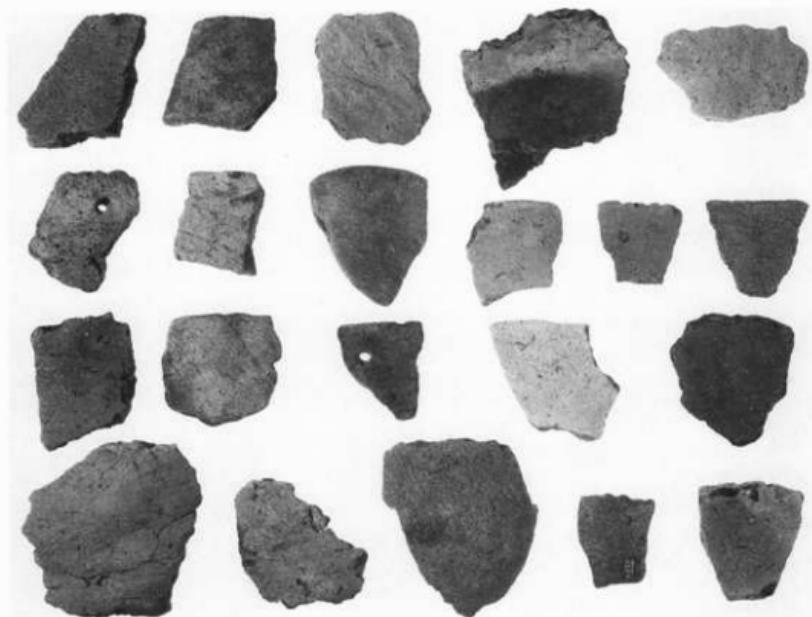
2. グリッド出土土器 (6) 113~132



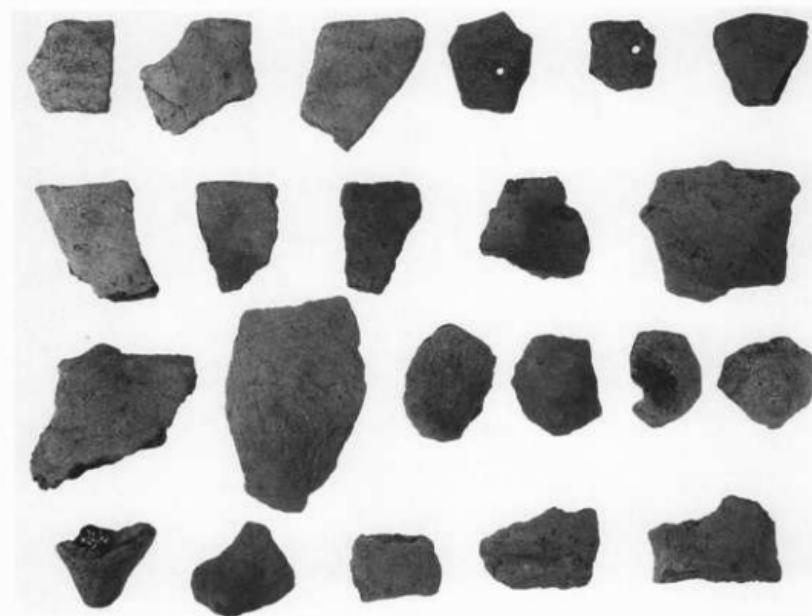
1. グリッド出土土器 (7) 133~149



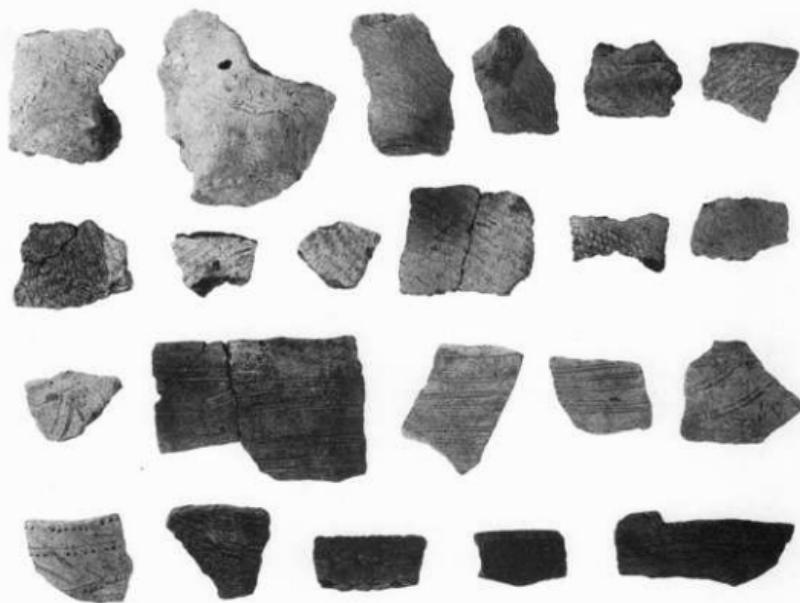
2. グリッド出土土器 (8) 150~164



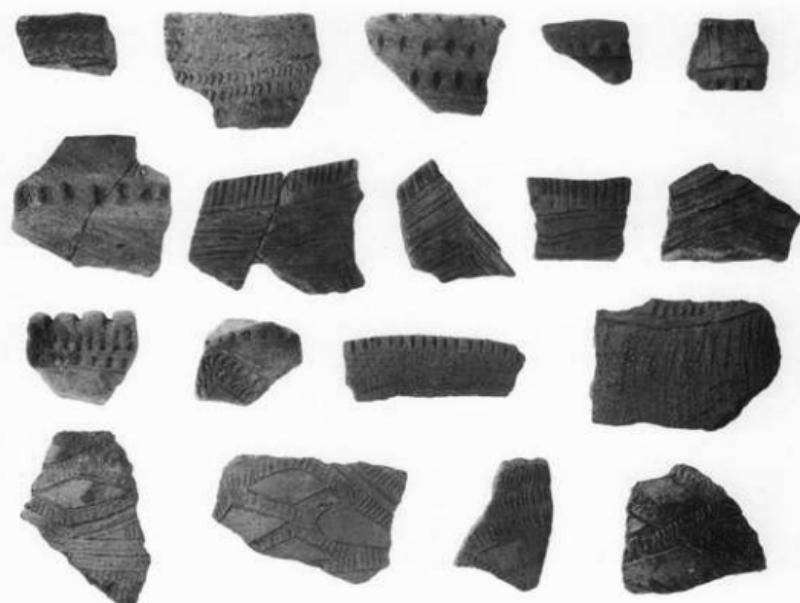
1. グリッド出土土器 (9) 165~185



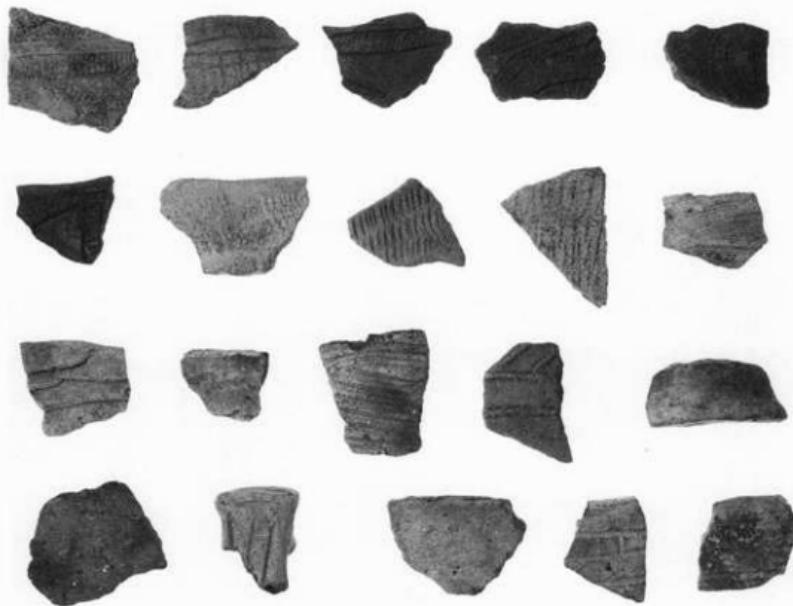
2. グリッド出土土器 (10) 186~207



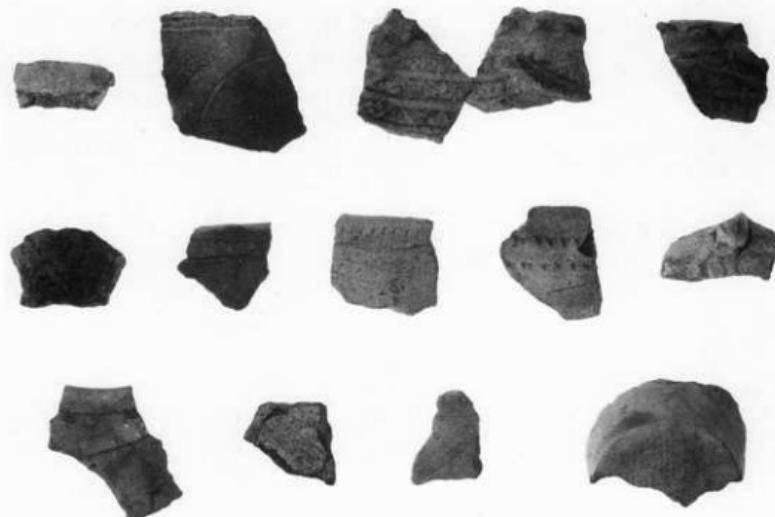
1. グリッド出土土器 (11) 208～229



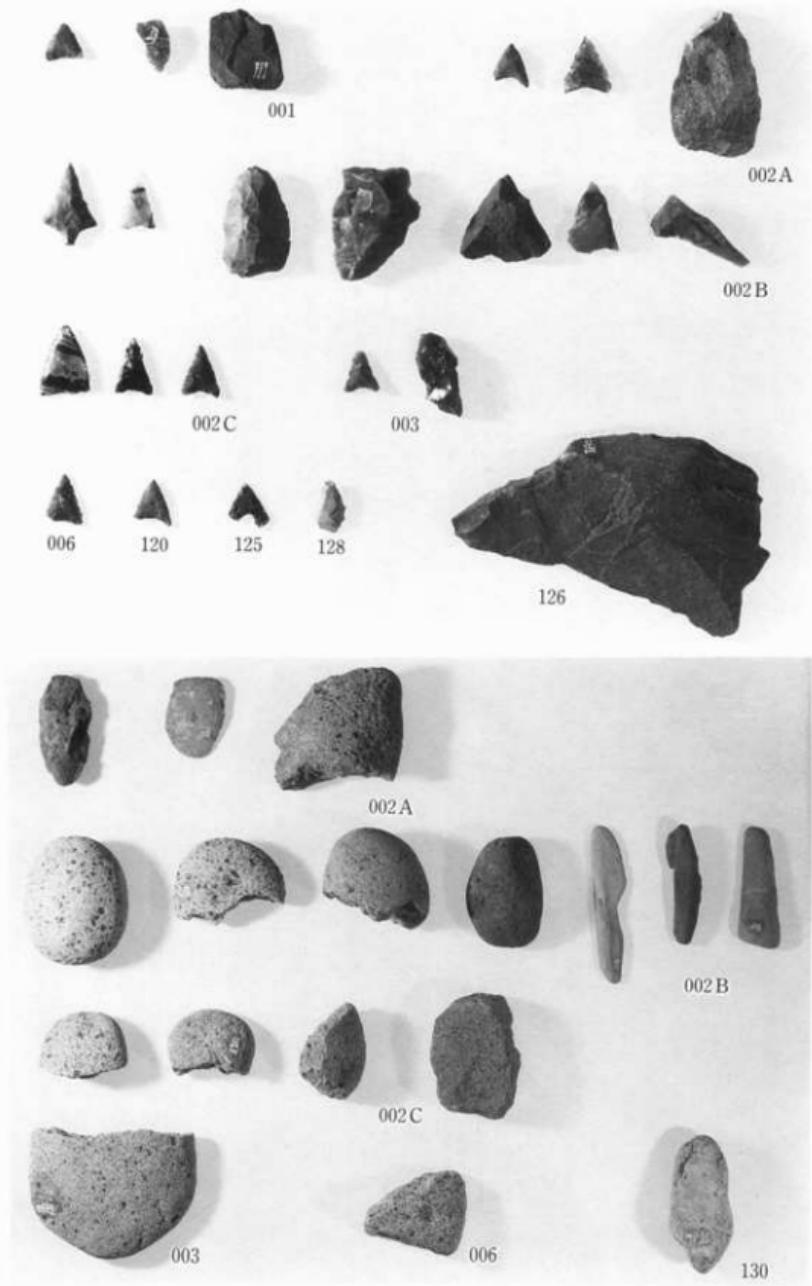
2. グリッド出土土器 (12) 230～247



1. グリッド出土土器 (13) 248~267



2. グリッド出土土器 (14) 268~280



縄文時代遺構出土石器



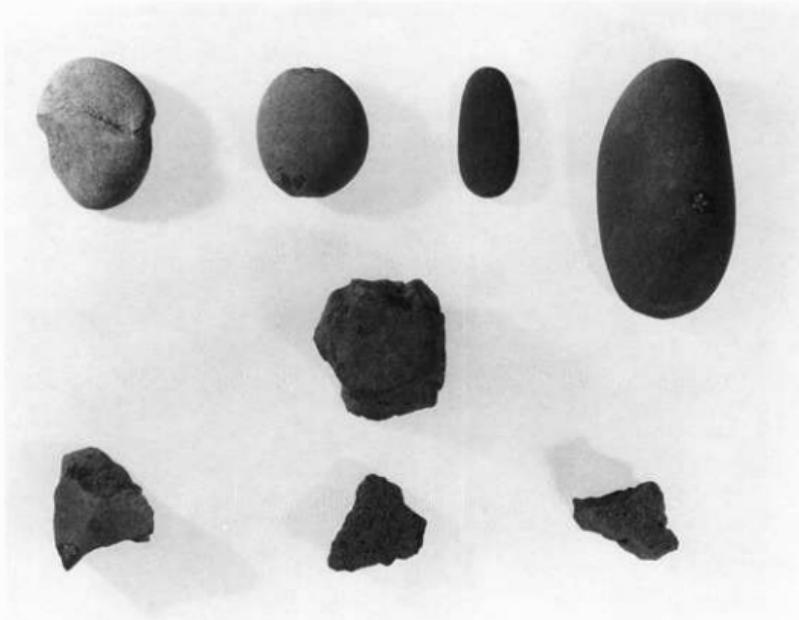
石器製作跡出土石器



縄文時代グリッド出土石器（1）



縄文時代グリッド出土石器（2）



縄文時代グリッド出土石器（3）



501-1



501-3



501-4



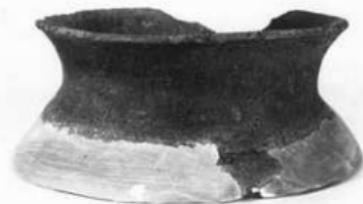
501-5



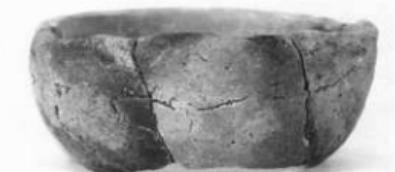
501-6



501-9



501-7





503-7



503-8



503-9



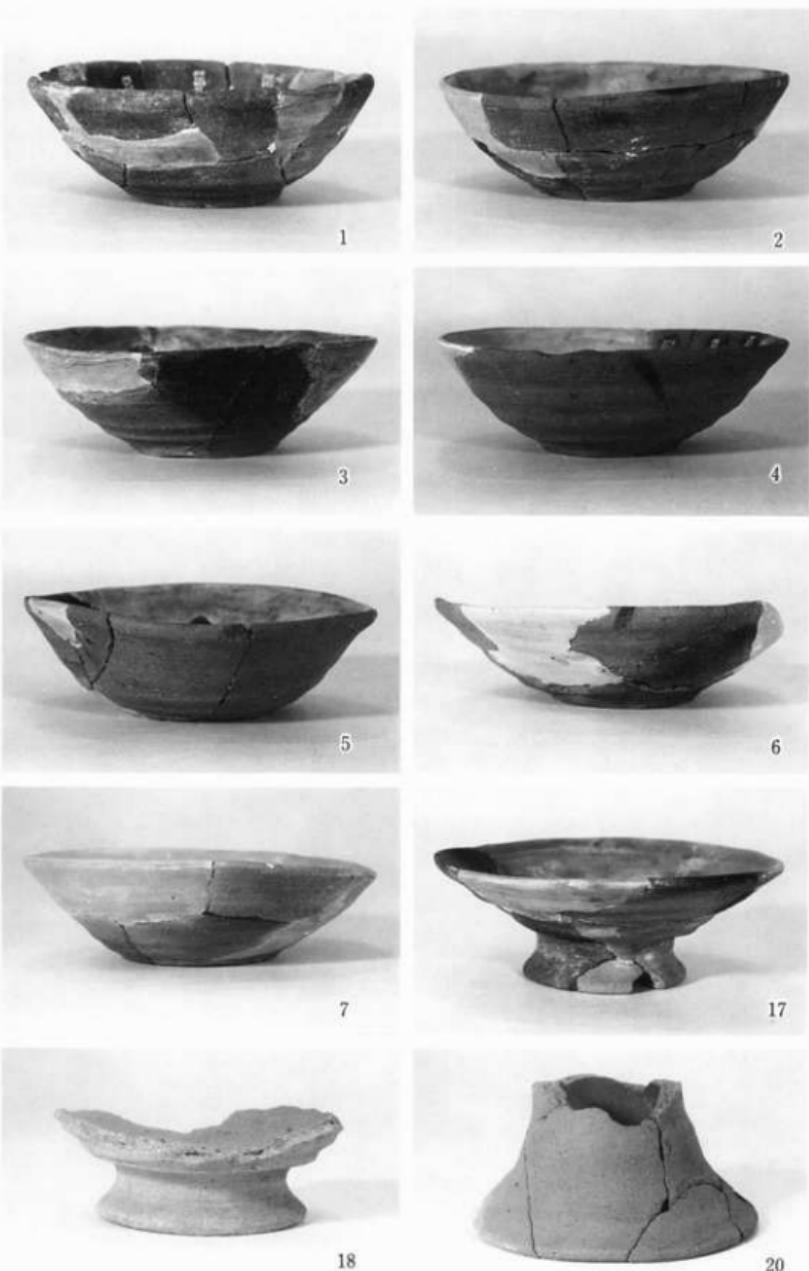
503-10



503-12



503-13



405A号竪穴状遺構出土土器（1）



24



25



28



26



27

1. 405A号竪穴状造構出土土器（2）



1



2

2. 405B号竪穴状造構出土土器

千葉県文化財センター調査報告第249集

野田市岩名第14遺跡

－住宅宅地関連公共施設等整備促進事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－

印 刷 平成6年3月25日

発 行 平成6年3月31日

発 行 千葉県土木部

千葉市市場町1-1 (043) 223-3156

編 集 財團法人 千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809-2 (043) 422-8811

印 刷 株式会社エリート印刷

千葉市中央区中央4-10-7 (043) 225-5881
